の哲学者を見よ

名言でたどる西洋哲学史

ピエトロ・エマヌエーレ 著

泉 典子 訳

中央公論新社

この哲学者を見よ　名言でたどる西洋哲学史

目次

この哲学者を見よ

名言でたどる西洋哲学史

はじめに

私たちは哲学の本は敬遠するけれど、哲学者の思想には魅了される。いつもそうだとは言わないけれど、大方の場合がそうだ。

哲学者の言葉のなかには、街なかでもよく耳にするものがある。誰が言ったのかなど誰も知らない。でもそんなことはどうでもいいのだ。哲学者の最大の業績は、その人が書いた何千ページの本にではなく、比類なく独創的な思想が表現されたほんの数語にある場合が少なくない。それはときには「汝自身を知れ！」という忠告であり、ときには「美徳は中庸にあり」という思想であり、ときには「万物流転」というシンプルな確認である。だから哲学者の言葉をたどることは、何千年にもわたる哲学の歴史をひもとくための、とてもいい方法なのだ。

哲学者の名言に接することは、せっかちな読者にとっては、その人の思想を表面的にでも知るための手っ取り早い方法になる。急がずに読みたい人には、名前だけは聞いていた思想家に親しむためのチャンスになる。哲学の歴史をすでに知っている人には、箴言（しんげん）をたどりながら記憶を新たにし、その言葉の意味を改めて考えるためのきっかけになる。

この本では、哲学の黎明期から今日までの歴史にひと味違うおもむきを与えるために、哲学者たちのよく知られた言葉を二三章に分けて紹介することにした。格言というものは、概念は表現していて

も論文の一部のようではなく、哲学者の生い立ちや人となりにじかに結びついている。だからこの本は、お話のようでありながら架空の物語ではないし、楽しむだけでなく考えることもできる本なのだ。
三〇〇ページを超える本なんか読みたくないという人には、いいことを教えよう。ページをめくって、それぞれの章のはじめのページを出してごらん。そこの冒頭に書かれた哲学者の言葉に興味を覚えたら、その章を読んでごらん。それから気が向いたときにまた本を開き、別の章を眺めてみよう。そうやっているうちに気分が乗ってくる。そして気がついたら全部読み終えていたというわけだ。

1　ヘラクレイトスとパルメニデス——哲学の夜明けの対決

同じ流れに二度入ることはできない。

ヘラクレイトス　断片九一

あるものはあり、あらぬものはあらぬ。

パルメニデス　断片二八六

最初の哲学者たちはふいに地から湧きでてきたわけではない。彼らのもっとまえには、知恵の宝庫みたいないわゆる七賢人がいた。彼らは人生の達人で、その言葉は文学に伝承され、モラルを高める知恵薬の役目を果たしてきた。紀元前三世紀に『哲学者たちの生涯と教説』を著わしたディオゲネス・ラエルティオスによれば、七賢人のなかのキロンは怒りを鎮め無理なことは望むなといさめ、ピッタコスは思慮深く誠実であれと説き、ビアスは逆境はりりしく耐えよと諭したという。

でもこれらの言葉が「哲学者の箴言」とされなかったのは、いったいどうしてなのだろうか。それは、賢人たちには人間を取り巻く現実を把握しようとする意欲が欠けていたからなのだ。その意欲こ

そ、思想家にさらなる探求をうながす原動力になる。七賢人にはお互いに争わなければならない理由がなく、誰かの言葉はほかの誰かの言葉の上に難なく重ねることができた。しかし最初の哲学者たちが生まれるや、対立する思想がたちまちあちこちで芽を吹いた。

最初に対決したふたりのチャンピオンとして、ヘラクレイトスとパルメニデスを挙げてみよう。ヘラクレイトスによれば、どんなものもむかしから絶えず変化している。一方パルメニデスによれば、この世は大むかしからいっこうに変わっていない。ヘラクレイトスにしてみれば、アリストテレスが『天体論』に書いているように、万物流転なのだ。ところがパルメニデスは万物不動だと言った。このふたりの意見が一致したのはただの一点、証明することもできない、世界の不滅性についてだけだった。彼らの考え方は哲学者たちの心を捉え、当時の思想界をまっぷたつに分けたが、それから何千年も経た今日でもまだ、このふたりの対立の余波は消えていない。

貴人ヘラクレイトスは糞尿にまみれて死んだ

言い伝えによれば、ヘラクレイトスという人はかなりの変人だったようだ。王家に生まれながら政治を嫌った。ペルシャ王ダレイオスの勢力下にあった紀元前六世紀から五世紀にかけて生き、生まれ故郷である小アジアの都市エフェソスの王家の後裔だったと言われている。だが彼は王位などほしがりもせず、弟にさっさと譲ってしまった。エフェソスの支配体制は民主的だったが、ヘラクレイトス自身はそうではなく、他人を小ばかにする人嫌いだった。友人で貴族であるヘルモドロスが憎むべき

同国人によって追放されると、すごい剣幕でくってかかった。おまえたちは首でもくくって、町の統治は子どもたちに委せろと。

ヘラクレイトスは調和の感覚には恵まれなかったが、彼の言葉はパンチが効いた。しかも愛想の悪さは抜群だった。これでよくも政治家のえじきにならなかったものだ。大衆のことも根っから嫌い、「やつらはひとりでも一万人でも大差ない」とまで言ってのけた。著名人にも容赦はしなかった。ピタゴラスをペテン師呼ばわりし、ホメロスなど鞭打ちに値すると言い放った。

これも言い伝えだが、彼はペルシャ王さえ屁とも思わなかった。ダレイオス王はヘラクレイトスの著作の噂を耳にして興味をそそられ、彼を宮廷に招こうとした。けれどもヘラクレイトスは、たとえ相手が王であっても、首でもくくれと言ったエフェソスの庶民よりましな待遇はしなかった。招待を断るための口実ひとつ考えずに、華美な宮廷などおもしろくもないと平然として言い放った。

しかし特級品の毒舌は医者のためにとっておかれた。「医者はやたらに切ったり焼いたりしておいて、そのうえ金まで巻きあげる」。ダンテの言葉を借りれば、彼はこの世の中を「ののしりまくった」のである。ディオゲネス・ラエルティオスが言うには、水腫というやっかいな病気を治さなければならなくなったとき、この悪癖がたたった。彼が水腫にかかったのは、山に隠れて暮らしながら、未開人みたいに草ばかり食べていたためらしい。身体に水がたまって抜くこともできなくなったのは草食のためだと思った彼は、何より嫌いな医者を不承不承訪ねた。そして医者相手に冗談を飛ばした。「洪水を干ばつにしてくれないかね」。医者にはさっぱり通じなかった。そこでヘラクレイトスは、医術はあきらめて哲学で治そうとした。彼の考えによれば、何ごともその反対のものに変化するはずな

のだ。それなら身体の水も涸れるだろう。けれども彼が試みたやり方は少しも哲学的ではなかった。まだ生暖かい牛の糞尿に首まで埋めて、そのあと日光浴をしたのだ。しかしあろうことか、そこが彼の死の床になってしまった。ぞっとする言い伝えにまともに耳を貸す必要はないけれど、糞尿にまみれて正体もわからなくなったヘラクレイトスは、しまいに犬に食われてしまったという。

万物流転

ヘラクレイトスはその性格のために、穏やかな世界観をもつことができなかった。哲学仲間と争ってばかりいたから、戦いこそがこの世の法則だと思っていた。食ったり食われたりするのは動物だけではない。無生物の自然だってその成分のあいだでいがみあっている。なかでも手強いのは火で、金属をも別のものに変え、触れるものを焼き尽くし、天からは雷鳴となってとどろく。

しかし一方でヘラクレイトスは、大方の原始人に似て、火の力に魅惑された。神をなだめる儀式や火をかこんでの踊りに胸を躍らせた。けれども彼が火を第一の要素と考えたのは、火に魅惑されたからというより、あらゆるものを変化させてしまうそのきわだった特徴が、変化のシンボルのように思えたからだ。なにしろヘラクレイトスにとっては、変化こそが自然の基本法則だった。

ヘラクレイトスが火に夢中になったきっかけは太陽だった。太陽は変化と生殖をうながし、地球上を生命で満たす。そこで彼は、東洋の神話を土台にしたような宇宙理論を練りあげた。彼によれば、火は冷えるとまず水になり、次に土になり、それからふたたび気体になって、しまいに灼熱の風にな

る。けれどもこんな空想は、彼の思想の中核をなすものではもちろんない。
　彼自身、永遠の変化という考え方をもっとくだいて説明するのに、火とは違うイメージを使おうとした。そのイメージがその後定着し、しまいには、万物流転という彼の思想を端的に表わすものになった。そのイメージとは川である。
　シンボルとしての川は、今日まで残る断片のなかにしばしば登場する。いちばんよく引用される言葉は、「同じ流れに二度入ることはできない」というものだ。二度入れないのは水がたえず流れているからである。これはひとつのたとえで、目の前の現実はたえず手からすり抜けるから、けっしてつかむことはできないというわけだ。
　この世界の様相はまさに川の流れに似ている。ものごとはあるではなくてなると言わなければならない。この説はそれだけ見れば矛盾したところはないが、行きすぎるとパラドックスになる。クラティロスという、プラトンのいままではほとんど忘れられている最初の師で、ヘラクレイトスを崇拝していた哲学者がそれをやった。彼はまず川のイメージを極端に誇張した。ヘラクレイトスは同じ流れには二度と入れないと言った。するとクラティロスは、一度だって入れない！とやりかえした。入ろうとしたときには流れはもう同じではないからだという。だからものを言うときにも気をつけたほうがいい。われわれはどんなものにも名前をつけたがる。これは猫だ、あれはネズミだという具合に。でもそうこうしているうちにネズミが猫に食べられてしまえば、ネズミという言葉にはもう意味がなくなる。だからしぐさで示すほうがいいのだと彼は言った。もしこの話が真実なら、クラティロスはものを示すのに、いつでも指でさしていたのだろうか。

好敵手パルメニデスの定義は早口言葉

こんなヘラクレイトスの思想と最初に対決したのは、彼とは正反対の人物だった。ふたりは同時代に生きたけれど、出会ったことは一度もない。イタリア南部チレントの町エレアで生まれたパルメニデスも高貴な家柄の出だったが、貴族にありがちな思いあがりはみじんもなかった。ピタゴラス学派のアメイニアスのように師を敬い、同国人を愛し、彼らのために法律までつくった。要するにヘラクレイトスのようなへそまがりではなかったから、パルメニデスについての逸話はそれほど多くはない。プラトンは六五歳のとき、同胞の弟子ゼノンをともなってアテナイに来た。そのときにパルメニデスの名をとった対話篇を書いた。それによると、パルメニデスはかなりハンサムだったようだ。

ヘラクレイトスの著述のスタイルはむずかしかったが、パルメニデスも引けをとらなかった。難解な哲学用語を愛用したからだ。だから庶民の耳には、名だたる彼の格言はまるで早口言葉のように響いた。いわく、あるものはあり、あらぬものはあらぬ。

パルメニデスはどうしてこんな結論を出したのだろうか。彼が言うには、何かを考えるときには、その何かはある。あらぬもの、ないものを考えることなどできはしない。でもどうして彼は、自然や現実といったもっと身近なことではなくて、「存在」などを語ったのだろうか。それは、存在とは広範囲な概念であって、自然界だけでなく数学界も、さらにはわれわれの思考や意思までも含んでいるからなのだ。植物学者だったらお金も精力も費やして、自然界にはない黒いランを創りだそうとする

かもしれない。黒いランが地球上で芽を出したためしはない。しかしそれはひとつの存在なのだ。なぜなら植物学者の思考のなかにあるランが彼の財布を傷めるのだから。

だからパルメニデスにとっては、あるものとあらぬものとのあいだには越えられないバリアがあった。ヘラクレイトスとまさに逆である。ヘラクレイトスは、まだ存在しないものもこれから存在するかもしれないし、その反対も起こりえると言った。ところがパルメニデスは、存在しないものが存在するものになるなんて考えることもできないと言う。つまり彼はなることを否定しているのだ。なるということは、いまはないものでも将来はあるかもしれないし、いまはあるものでも将来はなくなるかもしれないということだ。

存在しないものまで認めるという無茶は無知な人のすることで、「私見の道」なのだとパルメニデスは言う。

クラティロスがヘラクレイトスの教義を誇張したように、エレアのゼノンは師であるパルメニデスの、ものごとは不変不動であるとする理論を誇張した。ゼノンは彼のパラドックスによって後世にまで名を残している。運動についてのパラドックスのひとつはこうだ。駿足のアキレウスよりちょっと先を行く亀は、追いかけるアキレウスにはぜったいに追いつかれない。なぜなら、アキレウスが亀に追いつこうとする一瞬まえには、亀はさらに先に進んでいて、また距離を縮めようとしても、さらに先に進んでいるからだ。これではどこまで行ってもきりがない。

はじめに生まれたふたつの学派

パルメニデスの弟子とヘラクレイトスの弟子は仲が悪かった。原因はあらかた出身地にあった。パルメニデスの弟子たちはシチリアの出だったから、その土地に多い神秘主義者らしく不寛容だった。ピタゴラスを敬愛する神秘主義者は、エンペドクレスめいた魔術師の血を引き、来世につながる神秘を信じて、心のなかに宇宙の鍵を宿していると確信していた。

一方ヘラクレイトスの弟子たちは小アジアの多様な世界の出だったから、彼らとは反対に、頑固で不寛容な気持などさらさら持っていなかった。この両派は外見を見ただけでもそれとわかった。前者はプラトンが「おごそかで恐ろしげな」と形容したパルメニデスにそっくりで、僧侶のようにいかめしかった。後者は変人ヘラクレイトスその人のように、不安定で順応することが苦手な人たちだった。この両派はどちらもはじめての哲学学派をつくったが、アテナイの政党に劣らずはげしくぶつかりあった。

けれども哲学は政治ではないから、まじめに考えたりする人はいない。政治が日常の問題に取り組んでいるあいだ、パルメニデスとヘラクレイトスの弟子たちは、お互いにいがみあうだけでなく常識ともぶつかった。街なかの人にしてみれば、すべては変化するというのも、何ひとつ変化しないというのも、どちらもたいして意味のないことだ。あげくには両派の哲学者が道化役者のように見えてきたから、人々は彼らにあだ名をつけた。ヘラクレイトスの弟子たちはたえず動いている指人形みたい

だから「すばしこい人」と呼ばれ、パルメニデスの弟子たちは、あたかも不動の学説で足が利かなくなったかのように、「座っている人」と呼ばれた。

そんなわけで、ついには哲学が芝居小屋にまで登場した。紀元前六世紀から五世紀にシュラクサイのヒエロンの宮廷で活躍した、エピカルモスを筆頭とするシチリアの喜劇作家たちは、このすこぶるおもしろい対立をパロディにするチャンスを逃さなかった。借金を払いたくない奴はどっちの学派に入ればいいか。ヘラクレイトスの学派であることはいうまでもない。なにしろ何もかもお流れになるのだから昨日の借金も帳消しになる。一方貸し方はどうしたってパルメニデスの肩を持ちたい。前日に知人を夕食に招いたが考え直してもう招くのはやめにした人は、もちろんヘラクレイトスの味方だ。それに対して招かれるほうは、招待は不変であると思いたい。

エピカルモスの喜劇に『希望と富』というのがある。希望というのはヘラクレイトスのスローガンで、ものごとはたえず変わるから貧乏であっても悲観するなというわけだ。一方、富のほうはパルメニデスと資本主義者の好物で、彼らは何ごとも変わってほしくない。

しかしヘラクレイトスとパルメニデスが考えたことは、日常の域をはるかに超えたことだった。それは永続と変化の対立という問題で、この問題はその後何千年も生きつづけ、今日にまで至っている。

2 ピタゴラス――すべては数だ

知られているあらゆることに数がある。数がなければ考えることも知ることもまったくできないだろう。

ピタゴラス学派のフィロラオス　断片四

ピタゴラスの名前なら誰でも知っている。ピタゴラスの定理とかピタゴラスの表（九九の計算）とか。けれども、彼が謎の多いカリスマ的な人物であったことを知る人は少ない。彼は哲学にいくつかの概念を導入しただけでなく、哲学の名づけ親にもなったと言われている。じっさい〝哲学（フィロソフィア）〟という言葉を考えついたのはピタゴラスで、この言葉は「知識愛」を意味するそうだ。しかしピタゴラスは、ものごとを知るための道は無鉄砲に歩んではいけないと警告している。酒が好きでも泥酔はよくないということだ。

ピタゴラスは今日の哲学の先生のようではなかった。数学者で、天文学者で、魔術師で、ほかにもいろんなことをかじっていた。当時の哲学者はみなそうだった。

ピタゴラスの最大の業績は、数学はこの世界を解く鍵であると看破したことだ。彼の弟子のひとり

フィロラオスは、「知られているあらゆることに数がある」という有名な言葉を残した。

しかし数がどうやってものごとを説明するのだろうか。数は実体のないシンボルでしかないが、ものには重さも実体もあるではないか。これに対してピタゴラスは、数に物理的具体性が欠けているというのは間違いだ、と反論した。あらゆる数を生みだす一という数は実質的には点である、と彼は言う。そしてほかの数にも実質を付与するために、代数学と幾何学を合体させた。一は点、二は線、三は面、四は立体という具合に。

しかしピタゴラス学派はたんなる「数学者の集まり」ではなくて、神秘主義的な一種の教団でもあった。彼らは、数には科学的意味のほかに別の意味もあるのだと説いた。いわく、一は理性、二は女性性、三は男性性、四は正義である。

ピタゴラス学派の秘密結社

ピタゴラスの出自についてはひとつ定かではない。彼は宝石細工師の息子だったとか、アポロンの子だったとか、はてはアポロン神そのものだったとまでいわれていた。おおよそわかっているところでは、彼は紀元前五七〇年ごろにサモスで生まれ、その地の暴君ポリュクラテスと仲たがいして、四〇歳のころにギリシャの植民地であったイタリア南部のマグナ・グラエキアへ出奔した。クロトンに上陸するまえに、さまざまな国を放浪した。ピタゴラスの秘教好きはエジプトの影響を受けたものらしい。彼自身も、クロトンに秘密結社めいた彼なりの学派を創設したようだ。

教団の内部で何が起こっていたかについてはきびしく伏せられていた。外に漏れた情報はどれも不確かなものだったが、変わったことをしているというのはたんなる噂ではなかったらしい。教団に迎えられた者は自分の財産を共有物として差しだし、学派の制服である白い亜麻の衣服を身につけた。最初の五年間は堅く口を閉じて沈黙を通さねばならず、師に会うことも許されなかった。毎日の生活は苦行僧のそれのようで、一日の行動が分刻みで決められていた。朝には前日の行動をふり返り、夕にはその日一日をどのように過ごしたかを考えた。

食べ物にも制限があった。食べるのは蜂蜜やパンや野菜くらいなもので、飲むのは水だけだった。肉を食べなかったのは、輪廻転生を信じていたからで、うっかり誰か知人を食べてしまいやしないかと恐れたからだ。奇行の極みはソラ豆をけっして食べないことだった。ソラ豆は禁断の実で、他人の嘲笑などものともしなかった過激な連中は、ソラ豆の畑を食い荒らすくらいなら死んだほうがましだと考えていた。かわりにレンズ豆やインゲン豆を食べることも、ピタゴラスがその種の豆を毛嫌いしていたからしなかった。

ほかの規則にもおそらく象徴的な意味があったのだろうが、われわれにはよくわからない。鉄で火をかきまぜるな、パンはちぎるな、軒下にツバメの巣をつくらせるな、ベッドに身体の跡を残すな、灰の上に鍋の形を残すな、とか。身体的欲求についてまで風変わりな規則があった。お日さまのほうを向いて用を足してはいけないとか。ディオゲネス・ラエルティオスによれば、ピタゴラスがおしっこをしたりセックスをしたりするのは、誰も見たためしがなかったそうだ。

言い伝えからは、ピタゴラスをオーラのようなもので包もうと、弟子たちがやっきになっていたこ

とがうかがわれる。彼はとびぬけた好男子で、そのふるまいは人々に敬愛の念を抱かせずにはいなかったと言われている。とりわけ好まれたのは、数回にわたる彼の転生の話だった。彼は四つの生を生き、前世の記憶はけっして失わなかったという。

キリスト教を守る者とけなす者が論争に火花を散らす時代になると、前者はピタゴラスをキリストになぞらえ、彼もまた超自然的な力を持っていたと主張した。そのために彼もさまざまな奇蹟を起こしたと。たとえば西暦三世紀の新プラトン学派の哲学者であったポルフュリオスは、ピタゴラスがクロトンに上陸したときのことを語っている。彼がそこで出会った漁師たちが、魚が捕れないとこぼした。するとピタゴラスは、もういちど網を投げてみるようにと言った。こんどは魚がかかると言い、その数まで予言した。結果は彼の言ったとおりだった。漁師たちは喜んで、恩返しに何をしたらいいかと彼にたずねた。すると彼は、魚を海に帰したらいいとこたえた。

ピタゴラスが死後の世界を旅したという話も伝わっている。ディオゲネス・ラエルティオスによれば、ピタゴラスは地下に住みかをつくり、日々のできごとを書いた小さい板を定期的に届けてほしいと母親に頼んでから、その穴蔵にしばらくのあいだこもった。青白くやせ衰えて穴蔵から出てきた姿を見て、集まった人々は、彼が死者の国から戻ったことを疑わなかった。

ピタゴラスの死についてもいくつかの言い伝えがある。そのひとつによれば、アグリジェントとシュラクサイが衝突したとき、ピタゴラスはアグリジェントの軍に入った。自軍が苦境に陥ったとき、禁忌のソラ豆畑を抜けて逃げるか、それとも差し迫った死を受けいれるか、ふたつにひとつを選ばなければならなくなった。彼はソラ豆の掟を最後まで守り、シュラクサイの軍に討たれたという。

いわく言いがたい数

ピタゴラスの計算は一種のチームゲームだった。違いは人間ではなく点がチームを組むことだ。チームにはまたきびしい決まりがあり、二本のアームが直角をつくって、アームの上に数えるべき点が並ぶ。もっとも単純なのは次のような例だ。

右図の上は五という数の例だ。奇数がすべてそうであるように、この数は同数の点をもった二本のアームで構成される。横に三個、縦に三個で、点のひとつは両方のアームに共有されている。下は四という数の例だが、偶数はすべて、点の数の異なる二本のアームで表現される。点は横に三個、縦に二個で、一個は両方のアームが共有している。

奇数のほうが動きが大きいことは、ちょっと考えただけでわかる。奇数に奇数を加えたら偶数になる。しかし偶数の場合は、偶数をいくら加えても奇数にはならない。

ピタゴラス学派の人たちは男性優位を信じていたから、奇数という豊かな数は男性を表わし、偶数は女性を表わすことにした。音楽についても同じで、力強く重々しい音は男性の音で、弱々しく高い音は女性の音だと考えた。

彼らはまた、多少困惑しながらも、いわゆる「いわく言いがたい数（無理数）」というのを発見した。それはたとえば$\sqrt{2}$で、これはピタゴラスの定理が示すように、直角二等辺三角形の斜辺と直角をはさむ一方の辺との、長さの比を表わしている。この数には、小数点のあとに小数が無限に連なるという特質がある。その連なりに周期があるなら、連なりは前もってつかむことができる。しかし周期はないから、その全体を把握することは誰にもできない。

この数の発見者は、やっかいな数を見つけてしまったことに気がついた。数が無限であること自体じつに困ったことであるうえに、変化の仕方が予測もできないほど多様なのだ。伝説によれば、この数を直感したのは紀元前五世紀の初期のピタゴラス学派に属する、メタポントのヒッパソスだった。彼が自分の発見を周囲に告げたのは、科学を愛するためか、それとも学派が打ちたてた数学理論の崩壊を目の前にして、落胆と憤りをぶちまけたかったためか、それは知るよしもない。彼の発見がどんなにひどい混乱を引き起こしたかは、アリストテレスが語っている。ピタゴラス学派の人たちは、ものごとの関係はすべて算数で解決できると信じていた。ところがなんと、ピタゴラスの定理が誇る直角三角形についての概念が、誰にも解けない謎のなかに沈没してしまったのだ。

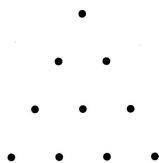
学派の結束は堅かったし国にも思惑があったから、そのスキャンダルは外部にぜったいに漏らさないこと、とヒッパソスはくぎを刺されたにちがいない。ところがヒッパソスは二重のミスを犯したの

だ。いわく言いがたい数を発見しただけでなく、それを周囲にばらしてしまったのだから。この罪深きヒッパソスに神々は腹を立て、罰として彼を海に放りこんだといわれている。

1、2、3、4……！

やっかいな数の騒ぎにもピタゴラス学派はくじけなかった。ピタゴラスの教説はヒッパソスの発見などそっちのけで、その権威を保ちつづけた。それどころか紀元前五世紀の末には、クロトンのフィロラオスというすご腕の宣伝マンを獲得した。彼は数学に通じていただけでなく神秘も好んだから、ピタゴラスを偉大な司祭で数と神秘の支配者であると祭りあげた。

ピタゴラスの卓見は一〇という数にあった。彼はそれを信仰の対象として弟子たちに示した。周知のように、数は遊びの手段にもなり、驚くべき結果を生むこともある。一〇という数にもそんな魔力があった。何よりもまず、一〇ははじめの四つの数の合計であって、その四つの数は幾何学的空間の主要なファクターでもあるのだ。すでに見たように、一は点、二は線、三は面、四は立体なのだから。

けれども優秀な一〇という数にもライバルがいた。それは三で、三は古代のほとんどすべての宗教で聖なる数とされていた。このふたつの数をうまく調和させるにはどうしたらいいだろうか。妙案はいわゆる四要素からなる三角形だった。左の図に見られるように、その三角形の三辺はどれも四つの点からなっている。それらの点と中央の一点を合計すると一〇という運命的な数になるのだ。

フィロラオスは、一〇は万物の創造主であるとまで言った。その根拠はいったい何？　何よりもまず、「あの方が言ったから」なのだ。「あの方」がピタゴラスであるのはいうまでもない。フィロラオスの考察は天文学にも及んだ。宇宙の中心には巨大な火の玉がある。その周囲をほかの天体がまわっているのだが、当時知られていた天体の数は地球を含めて九個だった。一〇というありがたい数に達しないのは大いなる災難だ。そこでフィロラオスはすぐに手を打ち、一〇番目の天体もあることにして、それに対地星（アンティクトーン）という名をつけた。その星が見えないのは、見えないところをまわっているからだそうだった。

これらはフィロラオスの数学と天文学に関する教説の、ほんの中心部にすぎない。彼はそのほかにも数多くの理論を編みだしたが、同時代の人たちの証言をのぞけば、著作の断片がちらほら残っているだけである。ピタゴラスの教団では何もかもが不可解で謎めいていて、学派の教説を書き残すことなど、ほとんど誰も考えなかった。フィロラオスは例外で、自分の理論を断片的にせよ書き残したのだ。そのことは少なからぬ意味をもった。プラトンがのちに彼の本を買ったからだ。彼の著書『ティ

マイオス』はフィロラオスの剽窃だという噂が立ったが、じっさいその内容は、宇宙の起源についてピタゴラスの弟子のひとりが語ったものだった。

音楽も数から生まれた

フィロラオスの説のなかでとりわけ示唆に富んでいるのは「天空の音楽」である。惑星がその運動によって音楽を生みだすという説だ。どんなに静かな夜だってそんな音楽など聞こえたためしがない、などとやり返しても無駄だった。フィロラオスからすれば、われわれの耳は生まれたときからその音を聞いているから気がつかないだけなのだ。

しかしピタゴラス学派の人たちは、音楽よりむしろ「調和」を好んで話題にした。ギリシャや小アジアではおもにフルートが普及していたのに対して、南イタリアでは弦楽器が好まれていた。フルートは一度に一音しか出さないが、弦なら複数の音が同時に出る。調和というのは、多くの音を重ねて快い和合を生むことにほかならない。ギリシャ語の〝調和(ハルモニア)〟という言葉はじっさい、「共存する多くの要素の和合」という意味なのだ。

ピタゴラス学派が生まれるまで、調和の学問はなかった。調和という言葉はあったけれど、それは神話に出てくるだけだった。ハルモニアはアレスとアフロディテの娘で、テーバイの建設者カドモスに与えられた。カドモスはテーバイで、アレスに捧げられた泉を守っていた竜を殺して彼の怒りを買い、七年間奴隷になることでその罪をあがなった。その七年が終わると両者は和解し、それがハルモ

ニアとの結婚によって固められたのだ。
音楽は歌ったり踊ったりするためのほかに、「カタルシス」と呼ばれる、感情の浄化という特異な目的にも使われる。ピタゴラス学派の人々は、ある種の音楽を奏でれば、心を占めている感情も発散できると考えていた。
感情についての音楽理論と数学とのブレンドは、のちの西洋人を魅惑した。ルネサンスが過ぎると、ピタゴラスの学説はとくに天文学と音楽の分野でプロの目を引くようになった。偉大な天文学者のケプラーは天空の音楽の理論に注目し、天体はじっさい、われわれには感知できない調和を生みだしているのだと言った。二〇世紀に入ってからも、オランダのブラウワーをはじめとする数学者たちが、彼らの研究のなかでピタゴラスの神秘主義に言及している。

3　ソクラテス――あらゆる名言の母「汝自身を知れ」

彼ら（七賢人）はみなで集まってデルフォイの神殿に出かけ、アポロンに捧げようと、「汝自身を知れ」と「身の程を超えるな」という、きわめて名高い箴言を書き記させた。

プラトン『プロタゴラス』三四三b

古代ギリシャでは、人々がこぞって足を運ぶ総本山はデルフォイのアポロン神殿だった。海の近くまで山が迫るそのあたりは風光明媚だが、人々のねらいは景色ではなかった。神殿の魅力はいわゆる神託にあった。そこの巫女が訪問者の疑問や質問に神の言葉でこたえてくれるのだ。神殿の入り口にある石碑には、「汝自身を知れ」という言葉が彫ってあった。古代世界では、「身の程を超えるな」「悪者の家には通うな」といったこの種の碑文はめずらしくなかった。けれどもデルフォイの碑文はどこの碑文よりおごそかで難解だった。

いったいどうしろというのだろう？　巡礼者は首を傾げた。自分の能力を見くびるなということなのか、それともむしろ、自分の限界を知れということなのか。あるいは神にお伺いを立てるまえに自

分の考えをはっきりつかめということなのか。いずれにしてもその言葉は、相談をしに来たわけではない人々の心にも深く刻まれた。
けれどもこの言葉の運命を決めたのは神殿の巫女ではなくて哲学者、それもソクラテスという、古代の哲学者のなかではダントツの変わり者だった。彼はアテナイの社会のなかで、紀元前五世紀の最後の二〇年間を突出させた人物だった。政治活動にも精を出し、それも生計の足しにした。しかしアテナイの内部抗争の犠牲になって、しまいに死刑の宣告まで受けた。自分の思想を書き物にしようとはせず、対話による論議だけに頼ったが、その論議はたちまち有名になり、プラトンの著作のなかに不滅の足跡を残すことになった。
ソクラテスは「汝自身を知れ」というモットーを冷たい石版からはぎ取って彼の思想の活性剤にした。そのモットーは、それから何千年にもわたって続く論議の立役者になった。

ソクラテスに勝る人はいないという神託

プラトンの対話篇のひとつ『ソクラテスの弁明』にあるように、デルフォイの神託がソクラテスその人の名を挙げたことがあった。それは、ソクラテスをこよなく愛していた長年の友人カレイフォンが、叡智においてソクラテスに勝る人物がいるだろうかという疑問を解こうと、神託を聞きに行ったときだった。巫女がアポロンに彼の疑問を伝えると、ソクラテスに勝る知恵者はいないという返事が返ってきた。これは今日で言ったら、ノーベル賞の授与を告げられるくらい電撃的なことだった。カ

レイフォンは大喜びでそれを伝えにソクラテスのもとに走った。
ソクラテスは当惑した。その知らせが自尊心をくすぐったのはたしかだが、思いがけないことだったから、真実かどうか確かめたかった。ソクラテス自身は自分がいちばんの賢者だなどとは考えたこともなく、街の人々と話をしながらそんなそぶりを見せたこともなかった。それどころか、自分より知識のある人に会えることを楽しみにしていると好んで触れまわり、おしゃべりの最中も、自分は無知であると繰り返し口にした。けれども神託の言葉を聞いてからは、とまどいを隠せなかった。神の権威を疑っていいものだろうか。アポロンが間違えたり嘘をついたりすることなどあるだろうか。
紀元前四二〇年のその当時、ソクラテスは五十代にさしかかり、軍人と教師を交互にぼちぼちやっていた。彼を尊敬する人は少なくなかった。そうでなければその名声がデルフォイまで届くこともなかっただろう。
将軍あり、詩人あり。あるときソクラテスは哲学問答の相手として、ホメロスの高名な朗読者イオンを選んだ。イオンについてはプラトンが同名の対話篇のなかで伝えている。「しかしあんたはホメロスの詩をほんとうに理解して自分のものにしているのかね?」とソクラテスはたずねた。「自分のものにする必要はなくて、聴衆を感動させればいいのだよ」とイオンはこたえた。「聴衆を泣かせることができれば、実入りがいいのでわたしは笑う、でももし反対に笑われたら、お金を返さなきゃならないから泣くのはわたしだ」と。「それならあんたは自分が朗読しているものを理解しているわけではないのだね?」とソクラテスはやりこめた。
こんな風だったから、ソクラテスと当時の立役者たちの対決はいつでもソクラテスの快勝だった。

けれどもとりわけきびしかったのは将軍や役者との対決ではなくて、知識そのものを武器にしているプロの知識人との対決だった。当時のアテナイでもっとも有名だったのは、「ソフィスト」すなわち「最高の知恵者」と呼ばれる人々で、彼らとの対決はあまくはなかった。なかでも名高いのはヒッピアスで、栄光の絶頂にあった彼は、ある日ソクラテスに鼻をへし折られようとは夢にも思っていなかった。

プラトンの『ヒッピアス大』によれば、ふたりが街なかで出会ったとき、自分の講演会に招こうとするヒッピアスをまえにして、ソクラテスは絶好のチャンスを逃さなかった。「あんたは知らぬものがないそうだが、美とは何だろうか」「そんなのは朝飯前、美とは美女のことだよ」。その言葉に、ソクラテスはひるまなかった。たとえば美行は美人でもなければ美しい彫刻でもない。「わたしが知りたいのは美の例ではなくて、美とは何かということなんだがね」とソクラテスは迫った。けれどもヒッピアスは、美そのものを定義せよというソクラテスの言葉をまじめには受けとれず、かといってソクラテスを自分の田んぼに引き入れることもできなかったので、しまいに癇癪を起こして言った、「いいかげんにしたらどうだ、ソクラテス。たわけたことばかり抜かすな！」と。

それでは軍配はふたたびソクラテスにあがったのだろうか。美を定義することはどちらにもできなかったのだからふたりは互角だった。けれどもソクラテスは少なくとも、できないということは自覚していた。その意味では相手より勝っていたわけで、それを裏づける論議なら豊富にあった。まさにそのために、ソクラテスは人間のなかの最高の知恵者であるという神託が下ったのだ。

ソクラテスはこうした探索を続けながら、自分自身を知る旅をしているのだとよく承知していた。

じっさい彼がしていたことは、ものごとを考えながら、省察や問題を人々に示してみせることだった。少年のころから顕著だった哲学研究へのあこがれがこういう形で花開いたのだ。彼は弱冠一七歳にして彫刻家の父の後を継ぐことをあきらめ、当時アテナイで盛んだった自然研究家の集まりに足繁く通うようになった。

しかしほどなくしてソクラテスは、自然科学の問題よりも人間の心の問題のほうがおもしろいと思いはじめた。しかし彼のライバルたちは、彼がもとは自然観察をしていたことを忘れなかった。人を小ばかにする癖のある喜劇作家のアリストファネスなどは、舞台につくった木の上のかごにソクラテスを乗せ、そうやって彼に天体観察をさせるというおふざけをやってのけた。しかし彼のもくろみが功を奏したのはやっと半分だけだった。喜劇『雲』の初演のとき、観客の一部がソクラテスがいることに気がついて、ひそかに悪口を言いはじめた。しかしソクラテスは隠れるどころか、観衆からよく見えるように立ちあがり、嘲笑など歯牙にもかけないことを理解させた。

ソクラテスには悪びれずにいられる理由があった。そのころにはもう彼の関心が、アリストファネスが冷やかした自然研究から遠いところに移っていたという事情もある。彼はすでに、善、正義、美徳といった言葉の後ろには何が隠れているか、という問題を考えていたのだ。自分の心の問題はまわりの人々のそれと変わらないという確信があったから、他人相手に議論をしてみたくていつもうずうずしていた。それどころか、自分はまさに議論をするために生まれたのだとさえ思っていた。

この使命を果たすために、ソクラテスは驚くほど気軽に相手に近づいた。相手が靴屋だろうが有名人だろうがおかまいなく、まるで旧友にでも出会ったかのように話しかけた。そんなやり方が人々に

うるさがられることは一度や二度でなく、彼の厚かましさや鋭いアイロニーに閉口する人も少なかった。けれどもソクラテスは、座がしらけることなどいっこうに気にしなかった。

アイロニーが好きな人ばかりじゃない

ソクラテスが精を出した「インタヴュー」は無害なものばかりではなかった。一見すると、ソクラテスも相手も無知に見える。美とは何か知らないのかね？　私も知らないのだよ。勇気についてもそんな具合だ。けれどもソクラテスは、自分は相手とは違うのだと言いたかったのだ。相手はしまいには自分の無知をさらけだすが、無知であることを認めたがらない人もいる。一方ソクラテスは無知であることを自分から認め、その点で相手よりましだと言ってのける。あなた方と違って私は自分が無知であることを知っている、つまりあなた方が知らないことを知っているのだよ、と。

ソクラテスが自分は無知であると明言しながら叡智の人であったことは、のちの多くの思想家をうならせた。このパラドックスは「無知の知」という言葉で言い伝えられ、何世紀にもわたってソクラテスの代名詞みたいになっていた。けれどもソクラテスの態度は、当然ながらとまどいも引き起こした。初期のキリスト教徒で思想家であった、二世紀後半の人アテナゴラスも首を傾げた。いったいどうして全能である神が、何も知らないと言うあのソクラテスを最高の知恵者であるなどと言ったのだろうか、知恵者が無知な人であるなら、最高の知恵者とはいちばんのバカのことではないか。

一方ソクラテスの時代の人々は考えた。知らないというのは本心なのか、論法に引っかかった連中

をまごつかせるためのからくりではないのだろうか。ソクラテスのライバルも、友人たちも、弟子のプラトンが対話篇のなかで言及している政界人たちも疑った。実際のところ、ソクラテスはクソマジメであったわけではないのだ。彼はアイロニーというテクニックを使っていた。つまり、真実を明らかにするために数多くの対立する「真実」を突きあわせる、という手である。

けれどもソクラテスはこのテクニックをいつも善意で使っていたわけではなかった。だからなかには腹を立てる者もいた。ディオゲネス・ラエルティオスによれば、押しの強いソクラテスにしてやられたと思って怒りを爆発させた人は少なくなかった。「するとソクラテスにパンチをくらわせ、あるいは髪の毛を引き抜いた」そうだ。しかしそれでもソクラテスは口を閉じなかった。「彼はそんな仕打ちもあまんじて受けた。あるときなど、踏んだり蹴ったりされながらもへこたれないソクラテスの我慢強さに相手がたまげていると、彼は言った。『ロバがわたしを踏みつけたからといって、裁判にかけるかね？』」

その日の勝負が終わって家へ帰っても、一息入れることはできなかった。妻のクサンティッペは、多くの人が言うようにじっさい口やかましい女だったのかもしれない。しかしソクラテスの真のパートナーは哲学だったから、彼女は余計者のように感じていたにちがいない。だから恨みつらみも多かった。でも彼女が不満を吐露するときには、ソクラテスはいつでも返事を用意していた。ディオゲネス・ラエルティオスによれば、あるときクサンティッペが夫の頭にバケツいっぱいの水をぶちまけた。すると夫はしゃあしゃあとして言った。「おれのかみさんが雷を落とせば、あとでかならず雨になる」。

ソクラテスは「汝自身を知れ」をあらゆる知人に広めたかった。しかし政界の権力者にまで手を伸

ばしたことは間違いだった。

時は紀元前五世紀の末、独裁者たちが三十人政権の名のもとにアテナイを脅かしていた時代である。ソクラテスはからかい半分で彼らのやり方に異議を唱えた。それができたのは、彼が五百人評議会と部族会のメンバーであったためと、同じくそのメンバーだったクリティアスが弟子として彼を崇拝していたからだった。しかしクリティアスは、一度権力の座に就いてしまうと哲学問答を毛嫌いするようになった。ソクラテスのほうも非道な暴君たちに背を向けはじめた。アテナイの人口は減り、町は寂しくなっていた。そこでソクラテスはすかさず攻撃に出た。羊の数が減ると羊飼いがいらだつように、市民の数が減って生活の程度が下がると、政治家の質も低下する。

クリティアスは羊のたとえに気を悪くしたが、同僚のカリクレスはなおさらだった。ではソクラテスを闇に葬ってしまおうか？　いやそれはやりすぎだ、それより口を封じるほうがいい。というわけで、「若者相手の議論を禁ず」という命令がソクラテスに下った。

妥協を嫌う反逆者としてどんなに鳴らしていても、ソクラテスはやはり秩序を重んじる男だった。ローマ人が言うように、「どんなにきびしくても法は法だ」というわけだ。しかしソクラテスに口枷をはめることは、いくら法でもできなかった。命令には従うが、とソクラテスは言った、でもそのまえに、法の制作者が法を知っているかどうかを知りたいと。いうまでもなく彼一流の落とし穴だ。立法者の無知などたちまちばれてしまうだろう。

クセノフォンが『ソクラテスの思い出』に書いているように、彼は薄汚れた衣服をまとい、裸足でアテナイの恐るべき支配者たちの前に現れた。「その命令を理解したい。わたしは正しくない議論を

しなければいいのか、それとも正しい議論もしてはいけないのか」。それを聞いたカリクレスは、挑発されていると受けとった。「君は理解できないふりをしている。青年との会話はいっさい禁じるということだ」「しかし青年というのはいったい何歳までのことでしょう」。早々と切りあげたかったカリクレスは三〇歳までだとこたえた。「それでは買い物に行って、店主がまだ三〇に達していなくても、値段をたずねてもいいのでしょうか。それから、あることを知らないかと若者に訊かれたら、返事をしてもいいのでしょうか」。カリクレスはその手には乗らなかった。「そんな愚問は市民をコケにするための芝居でしかない」。彼はそう言っていらいらと会話を打ち切った。

自分を知れば善人になる

ソクラテスが三十人政権に異を唱えたのは、デルフォイの神託が頭にあったからだけではなかった。彼の意図はそれよりはるかに野心的で、政治家と市民の両方を改善しようとしていたのだ。対話はそのための手段だった。彼が自分の使命と考えていたことは、政治家はぼんくらだと明言し、それと同時に市民にも、もっとよい政府をつくらなければならないと教えることだった。

このためにソクラテスは一種の魂の町医者みたいになった。彼は学問そのものには興味がなかった。人々に自分自身を知れとうながしたのは、彼らの鈍った精神に活を入れるためだった。プラトンの同名の対話篇のなかでメノンはソクラテスを、触れるものを感電させるシビレエイにたとえている。

ソクラテスの非難や攻撃は、もとはといえば神託の解釈から出てきたものだった。彼は「汝自身を

知れ」という神託を、自分の内心が読める者は悪者にはなりえない、と解釈した。この世に悪者が存在するのは、彼らは自分が何をしているのかわからないからなのだ。このソクラテスの解釈は、当時一般に流布していた考え方、つまり、極悪非道の犯罪者は箸にも棒にもかからない、という思いこみに逆行するものだった。ソクラテスからすれば、あまのじゃくに見えるかもしれないが、どんな犯罪も無知から生じるのだ。犯罪者が自分の悪行に気がつけば、もうそんなことはしなくなるだろう。だから犯罪者は罰するよりも教育しなければならない。彼はそう言った。

そんなわけでソクラテスは、自分を魂の施療者だと考えていた。自分は処罰するためではなく、論すためにこの世に生まれたのだと。しかし運命の皮肉によってか、その彼が死刑を宣告されるという事態になった。それは何よりも、彼が堂々と政治をこき下ろしたためだった。しかし彼の言行を非難し告発した人々をまえにしたときでさえ、彼が口にしたのは罵言ではなくてアイロニーだった。毒舌を浴びせつづけたクサンティッペが、死をまえにした夫を慰めようとしたときにも、彼はユーモアを忘れなかった。「ああ、無実の罪で死ぬなんて！」と嘆く妻に、ソクラテスは「なに？　お前はおれが有罪で死ぬほうがいいのかね」と返したと、ディオゲネス・ラエルティオスは伝えている。

父親が子どもに「ね、それってもう知ってただろ？」と言うとき、その父親は無意識のうちにソクラテスの弟子をやっている。父親は、子どもがおぼろげながら直感していたことを自覚させているわけだ。同様にして水泳のコーチも、手足を交互に伸ばすという、生徒がすでに自分からやっていたことを教える。ソクラテスの偉大な弟子だったプラトンは、この考え方を解釈して、知識は記憶にほかならない、という結論を出した。ソクラテスがひそかに言わんとしていたことは、まさにこれだった

のではないだろうか。

いずれにしても、ソクラテスが隣人の無知を治すために使った方法は、それぞれの精神に隠れている潜在力を外に引きだすことだった。『メノン』ではこのプロセスが、まるで手品であるかのように描写されている。ソクラテスは手品師のようになり、その腕前を披露するのに、アシスタントとして観客のひとりを引っぱりだす。つまり、メノンの奴隷を舞台に呼びあげるのだが、彼は奴隷だから知的能力など知れたものだと考えられている。その男のまえに黒板を置いて、何か幾何学的な図を描いてみるようにとうながす。すると驚いたことに、奴隷は自分の力だけで、ピタゴラスの定理を示して見せたのだ。誰も教えたことなどないのに、彼はそれをある程度つかんでいたということになる。

奴隷にそんなことができたという事実は、どう説明したらいいのだろう。プラトンは師であるソクラテスとは違って、論理だけでなく物語も好きだったから、この経験をもとにして霊魂不滅のお話を練りあげた。彼が考えるには、霊魂は不滅で、何度も生まれ変わるうちに、ものごとの奥にあるものを見すえては吸収していく。いま挙げた『メノン』には次のような一節がある。「われわれの魂が習得しないものなどひとつとしてない。だから美徳にせよほかのものにせよ、すでに知っていたものごとを思いだすのは、少しも不思議なことではない」。

かなりへそまがりで論争好きなインテリも、自分自身を知れと説くソクラテスにどうこたえたものか苦慮したが、プラトンのほうはそんなわけで、抜け道をつかんだ。インテリたちは言った。人間はすでに知っていることも知らないことも、さらに探りを入れることなどできはしない、知っていることはもう明らかなのだし、知らないことは何を探っていいかもわからないので、道はおのずから閉ざ

されているからだ、と。けれども、知識は記憶であるという理論には反駁の余地がなかった。ソクラテスに言わせれば、人が自分自身を知ろうとすることは、すでに知っているのに意識の上にまだ浮かんでこないことを探ることなのだ。

4 プロタゴラス──人間は万物の尺度である

人間は万物の尺度である。あるものについてはあることの、あらぬものについてはあらぬことの。

アブデラのプロタゴラス『真理』断片一

紀元前五世紀にアテナイの知識人を代表したのはソクラテスだけではなかった。前四八六年か四八五年に生まれたプロタゴラスはソクラテスより一五歳ほど年上で、名声にかけてはソクラテスに引けをとらなかった。しかし人間としても思想家としても、このふたりは正反対だった。ソクラテスは何ひとつ知らないと言ったが、プロタゴラスは自分の教養に自信満々だった。ソクラテスはこじきのようなぼろを着ていたのに、プロタゴラスの服装は貴族のように洗練されていた。ソクラテスは貧乏だったが、プロタゴラスは贅沢な暮らしをしていた。

ソクラテスは知識の力と美徳の尊さを信じて疑わなかった。彼の世界はいわば確信の世界だった。その世界を青天の霹靂のように襲ったのがプロタゴラスだったのだ。知識だって？　万人に通じる真理などないとすれば、知識とはいったい何なのだ？　道徳律？　ある人にとっての善が別の人にとっ

ては悪であるなら、道徳律とはいったい何なのだ？　つまりプロタゴラスは、「人間は万物の尺度である」と言いたかったのだ。真理とはおのずから真理であるのではなくて、真理にしたりしなかったりするのは、われわれひとりひとりの尺度によるのだというわけだ。

プロタゴラスはおそろしく公平な人だったが、そのために運も招き、また毒も吐いた。彼ほど稼いだインテリはいなかったが、彼ほどぼろくそにたたかれたインテリも多くはなかった。

並ぶ者なきカリスマ

プロタゴラスは自分自身の神話をつくりあげる術を心得ていた。キャリア志向のアテナイの若者にとって、彼はカリスマ的な存在だった。トラキア地方アブデラという北方の出だったから、異邦人としての魅力も大いにあった。初等教育はペルシャの魔術師から受けたと言われ、そのために彼の教えには秘教的な雰囲気があった。とりわけ秀でていたのは、どんなテーマでも即座に論じる才覚だった。彼の学派に迎えられることは一種の特権であり、それを得るには金力だけでは足りなくて、有力者の後押しも必要だった。

プロタゴラスは商人のような金銭感覚は持ちあわせていなかったが、大人(たいじん)の度量なら持っていた。彼の名を冠したプラトンの対話篇にある話だが、彼の授業のあと、要求された授業料が高すぎると思ったときには、弟子は神殿に入って誓いを立ててから、いくら払うのがいいか自分で決めることができたという。それでもプロタゴラスは、彫刻家として鳴らしていたフェイディアスより稼いでいた。

それは無理もないことだ。金を返せと迫るのに、のみは役に立たなくても、プロタゴラスに並ぶ者なしといわれていた弁舌なら、最上の武器になるからだ。

しかしプロタゴラスは、授業料がめっぽう高いのに人気抜群の教室で、いったい何を教えていたのだろうか。それは、自分の見地を他人の見地より優位に立たせるテクニックだった。目的を遂げるためのカギは「日和見（ひよりみ）」だ。つまり、常に適切なときに適切な言葉を使うように心せよというわけだ。

でも人はどうして「適切さ」に解決を求めなければならないのだろうか。妥協するか争うか、禁欲するか快楽をむさぼるか、といったジレンマに、人はどうしていつも悩まされるのだろうか。こんな疑問に一度でぴしゃりとこたえを出せると思ったら間違いだ。われわれはそのたびに考え、自分の考えが正しいかどうか、そのたびに確認しなければならない。

人は誰でも自分の考えを守る権利がある、とプロタゴラスは確信していた。なぜなら万人に通じる真理などないからだという。それと同時に彼は、自分の教室に通う者だけが他人をしのぐ能力を習得できると固く信じていた。

良識ある人々はたちまち彼に反発した。もしプロタゴラスが言うように誰の意見も同じように正しいのなら、バカが考えても利口が考えても値打ちは変わらないではないか。そうではない、とプロタゴラスはやり返した。走ったり泳いだりするのを覚えるのと同じで、思考力もはじめは誰でも身につけることができる。けれどもそれがほんとうに身につくのは、訓練を重ねた人だけである。彼はそれに続けて言いたかったことだろう。なかでも優秀なのは存分に授業料を払う連中なのだと。

ソクラテス以上の人気者

ずばり『プロタゴラス』というタイトルがついたプラトンの対話篇を読むと、この大先生が現れたときに、いかに人々が興奮したかがよくわかる。書かれたことによれば、早朝ソクラテスの家のドアを棒ではげしくたたく者があった。それは高貴の出の人ヒッポクラテスで、彼は差し迫った用事で容赦なくソクラテスをたたき起こした。プロタゴラスの来訪を知って、何があっても会いたいと思ったのだ。プロタゴラスのような名高いソフィストがきまって大金持ちのカリアスの家を訪れるということを、ソクラテスはよく知っていた。そこでふたりはそっちへ向かい、カリアスの家の門をたたいた。けれどもソフィスト連中の来訪にうんざりしていた門番は、ふたりの鼻先で門をぴしゃりと閉めてしまった。「われわれはソフィストではない」とふたりは言い返し、やっとなかに入れてもらった。

家のなかはソフィストたちであふれていた。老人も若者も、有名人も無名人も入りまじっている。やがて彼らの群れが左右に分かれると、その中央をプロタゴラスが進んできた。彼の左右と背後には、師の行くところどこへでもついてくる一団がぴたりとついて離れない。見るからにはなばなしいパレードだ。プロタゴラスが話をしながら歩けば、取り巻きたちもぴったりその左右を歩く。師が向きを変えれば、そばをけっして離れない一団は、師の行く手をふさぐまいと道を空けながら、ふたたび周囲にみごとにまとまる。

ふいに静かになると、プロタゴラスが語りはじめた。それは古い神話で、哲学者の役割に尊厳を与

えるための話だ。神々は死すべき者たちを創造してしまうと、それぞれの種の生き物に能力と機能を分配せよと、プロメテウスとエピメテウスに命じた。動物の世話を引き受けたエピメテウスは、ある者には毛を、ある者にはかぎ爪を、またある者には蹄を与えた。エピメテウスがすべてを配り終えたとき、人間には何ひとつなく、はだかで裸足であることに、プロメテウスは気がついた。彼らには何をやったらいいだろう？　彼は火を味方にしてアテナ神の「知恵」を奪いに行き、それを人間に分け与えた。そのために人間は、皮膚やかぎ爪にもまして貴重なものを持つようになった。しかし人間が受けとったものは、生きていくのに必要な知恵でしかなかった。彼らに政治的知恵――プロタゴラスが弟子たちに教えた、正義と人間関係を管理する能力――が欠けていることをすばやく見てとったゼウスは、ヘルメスを送って、あらゆる人間にその知恵を分け与えた。

それでは知恵や正義感は、誰もが生まれつき持っているものなのか。はじめはそうだ、とプロタゴラスは言った。しかし養わなければ、使わない筋肉が萎縮するのと同じで、衰えてしまうのだと。だから知恵のない者は無知であるだけでなく、罪深い者でもある。なぜなら鍛錬をさぼっているのだから。彼の言うことはもっともだったから、彼の教室に通っていたアテナイの富裕階層の若者たちは、すっかり彼の虜になった。

人間はブタとは違う

プロタゴラスもソクラテスに劣らぬアジテーターだったが、アジテーションのタイプは同じではな

かった。ソクラテスは論争好きが昂じてときにはうるさがられたが、他人を閉口させる手口はプロタゴラスのそれとは違った。ソクラテスの言葉は相手の気持をかきまわした。ソクラテスは、わが知恵は何も知らないことにこそあると言い、そんなことを言う彼はたしかに変人ではあったけれど、その言葉に破壊力はなかった。しかしプロタゴラスのほうはそうではなかった。彼は、どんなことについても、ある見方があると同時に逆の見方もあると言った。

めちゃくちゃなのがモラルや政治についての意見であるうちは、名声が手伝って、論争から波風が立つことはなかった。しかし宗教的概念にひびを入れて神の存在を脅かすまでになると、有力な司祭の団体が黙ってはいなかった。プロタゴラスが裁判がはじまるまえに逃亡したのか、それとも判決によってアテナイから追放されたのかについては定かではない。いずれにしても、その後まもなく乗った船が難破して、プロタゴラスは水底に消えた。

ところで彼のライバルたちはどうしたか。プラトンは真実はひとつしかないと信じていたから、もちろん容赦なく攻撃した。彼はその活動の一部を、ソフィストとその破壊的学説を糾弾するのに捧げたほどだ。しかしプラトンは、プロタゴラスの懐疑論には一目置いていたから、彼をつぶそうとまではしなかった。自分の思想の領域から追放したのはたしかだが、彼の教義を衆目にさらして注釈を与え、反論しようとした。しかしプラトンは、ときには目に見えて当惑もした。たとえば『テアイテトス』に彼は書いている。「私には驚きなのだが、どうしてプロタゴラスはその著書『真理』の冒頭に、たとえば『ブタやヒヒは万物の尺度である』とか、そのほか何でもいいが、人間以外の動物のどれか

が尺度であるとは書かなかったのだろう」。どうして人間の感覚がほかの動物の感覚より優れていると考えなくてはならないのか。動物はともかく、人間のひとりひとりがものごとの尺度であるなら、いったいどうしてプロタゴラスにわざわざ授業料を払ってまで何かを学ぶ必要があるだろう。

こうしたことを考えたのはプラトンだけではなかった。しかしプロタゴラスのほうも、攻撃のかわし方なら心得ていた。たしかにブタにだって感覚はある。けれども人間の感覚のほうが優れているのだ。だからといって、真理のまがいものならブタにだって感知できる、と言っているわけではない。

論客よりむしろ科学者として優れていたアリストテレスもプロタゴラスをけなしたが、プロタゴラスが判断は人によって違うという相対論に行き着いた理由は、理解しようとした。プロタゴラスが真理の存在を否定するのは、認識の仕方がそれぞれの人によって異なるからなのだ。アリストテレスはそれはわかったけれど、あらゆる認識に価値があるとは思わなかった。たとえば、と彼は言った、乱視の人にはものがだぶって見えることもあるが、だからといってものがふたつあるわけではない。

プロタゴラスは久しく忘れられていた。彼の支持者たちの声が世間に届きはじめたのはやっと二〇世紀に入ってからで、イギリスの哲学者F・C・S・シラーによるところが大きかった。彼は「人間は万物の尺度である」というプロタゴラスの有名な言葉を、哲学の歴史のなかでもピカイチの洞察だと考えた。ピカイチはちょっと言いすぎかもしれないが、でも理由のないことではなかった。プラトンはイデアが人間の行動をリードすると言ったが、それは間違いではない、しかしイデアは人間の頭とは別のところに存在すると言ったのは間違いだった、とシラーは考えた。プロタゴラスが言うように、実際はその逆で、人間こそがイデアを案出し、発展させ、それを行動に移すのだと。

プラトンとアリストテレスによる反論は、何千年にもわたってプロタゴラスに影を落とした。しかし一八世紀になって実用を重んじる功利主義が思いがけなく流行しはじめたとき、彼はふたたび脚光を浴び、かの有名な言葉もいにしえの輝きを取り戻した。

5 プラトン――すべてはイデアの影にすぎない

（イデアは）原型として自然のなかにあり、ほかのものはイデアに似たその像なのだ。ほかのものがイデアをともにするのは、イデアの像としてにほかならない。

プラトン『パルメニデス』一三二d

プラトンは人類が生んだ最大の哲学者であるという人もいる。彼の作品は読みやすく、ときには物語のようでさえある。けれども当惑する人もいるだろう。なにしろ彼は自分の考えをじかに述べるのではなく、対話の形式を借りて、いろんな登場人物に語らせるのだ。まるで戯曲作家のようでもある。シェイクスピアの代弁者ははたしてマクベスだろうか、ハムレットだろうか、それともリア王？　プラトンの場合は、この質問へのこたえはむずかしくない。なぜなら突出しているのはソクラテスで、彼こそがプラトンのスポークスマンなのだから。いずれにしても、プラトンは映画監督よろしく、彼の対話篇には一度も姿を現さない。

プラトンの飛びぬけた幸運にくらべたら、師のソクラテスを含めて、それまでの哲学者はすべて影

が薄れてしまう。西洋の思想史のなかで生きのびてきた哲学者のなかには、運よくプラトンの本の登場人物のひとりになったから、という人もいる。彼がキャストに加えた人物のなかで、異彩を放つのがパルメニデスである。パルメニデスとはソクラテスに劣らずウマが合った。プラトンに成功をもたらした、ものごとの核心の不変性という観念は、ほかならぬパルメニデスから学んだものなのだ。

プラトンがわれわれを惹きつけるのは、人間の精神が観念を生みだすのではなく、その反対に、人間もものも永遠不滅のイデアの発現なのだとする思想のためだ。影が身体から生まれるのに似ている、と彼は言う。プラトンのこの名高い原則を表わす言葉はいくつかあって、ものごとはイデアのコピーである、イデアの模倣である、イデアの影である、などがそうだ。

イデアを見るのは心の目

プラトンはじつの名をアリストクレスといった。彼をプラトンと呼んだのはスポーツジムのコーチだった。ギリシャ語のプラトンは「肩幅が広い」という意味だが、若き日の彼はじっさいそんな体格をしていた。生まれは前四二八年か前四二七年のアテナイ。家柄はヘラクレイトスのそれよりさらに上だった。なにしろ父は伝説的な王コドロスの子孫で、母は賢者ソロンの後裔なのだ。教育は当然貴族風で、音楽、絵画、体育、詩作に励んだ。はじめは彼も、みんながやるように悲劇や風刺詩を好んで書いた。しかしソクラテスと運命的な出会いをしたとき、それまで書いたものはことごとく火に投じてしまったらしい。かくして二〇歳のとき彼は、哲学に専念しようと心を決める。老師と若い弟子

との熱い交流は八年間続いた。それから前三九九年にソクラテスが没する。師の他界はプラトンに消しがたい刻印を残した。じっさい彼の対話篇の大方が、師の姿を不滅にするべく捧げられている。

師をなくしたプラトンは、ギリシャと南イタリアをめぐる旅に出た。それはたんに悲嘆を癒すための旅ではなく、哲学や政治への情熱に押されたものでもあった。彼は自分の思想で社会を改善できると信じていた。それにはまず、当時の君主たちに彼の思想を吹きこむ必要があった。たまたまシュラクサイに赴くことになった彼は、『第七書簡』という一種の自伝のなかでその旅を語っている。

プラトンがはじめてシチリアに向かったのは前三八八年、彼が四〇歳のころだった。おそらくは、その地で活動していたピタゴラス学派の哲学を学びたいと思ったのだろう。けれどもその旅のあいだに彼は、ある野心的で情熱的な計画を思いたった。シチリアで絶大な権力を持つ老王ディオニュシオスに哲学を教えこもうというのだ。アテナイの哲学は、プロタゴラスにせよソクラテスにせよ、花開いたのはほかならぬ政治という分野においてである。その哲学によれば、美徳の実践なくしてよき政治はありえない。もしプラトンの計画がうまく運べば、ディオニュシオスの宮廷は政治哲学の実験場に変わるかもしれなかった。

しかしそれにはかなりの勇気が必要だった。着いたとたんにプラトンは、そこの環境に度肝を抜かれた。たしかにプラトンは修道院から移ってきたわけではなかった。飲めや歌えはアテナイでも日常茶飯事だった。けれどもシチリアのらんちき騒ぎはその比ではなかった。宴会はやむことなく、夜になってもひとりにはなれない。哲学の実験場どころの話ではなかった。

シチリアでプラトンは、ピタゴラス学派の数学者たちをよく訪ねた。数学こそものごとの物理的側

面から離れた学問だ。四角形をふたつの三角形に分割する方法を考えるとき、何かでその形をつくってみたりすれば、助けになるよりかえってじゃまになる。第一にするべきことは、その図を頭のなかに描いてみることだ。身体の目より先に、心の目に図を浮かべるということだ。

心の目というプラトンの思想を理解するには、幾何学を考えるのがいちばんだ。幾何学では心の目はたんなる比喩ではなくて、認識のための欠かせない手段になる。たとえば六角形を自分の目で見た経験が一度もなくても、頭に思い描くことはできる。どうしてかといえば、幾何学の場合その図形は、物理的イメージと頭のなかのモデルがぴったり重なるからである。

けれども幾何学の外に一歩出ると、心の目はたんなる比喩でしかなくなってしまう。たしかに場合によっては、その比喩が物理的ヴィジョンを鮮やかに映すことはある。人や生き物などの場合がそれだ。動物学者の心の目には典型的な馬のイメージが浮かぶ。しかしそれは、その人が道で見かける馬とどこからどこまでそっくりというわけではない。『パイドロス』には、理想的な馬とは「りりしく、足は速く、うなじはピンと伸び、鼻筋はわずかにカーブを描き、毛並みは白く、目は黒い」とある。

それでは美的価値や道徳的価値の場合はどうだろうか。このようなことは身体の目とはなんの関係もない。けれども古代の人々は、九人のミューズが体現する美のモデルが存在すると信じて疑わなかった。それでは善のイデアのほうは？　こっちは人間が考えだしたものでしかないのだろうか。それともこれもわれわれより前からあって、われわれが精神で見いだしたものなのだろうか。

イデアは天上界にある

しかし心の目だけが見ることのできるこのイデアとは、いったいどこにあるのだろうか。プラトンはそれに対して、心理学的および宗教的な見地からこたえを引きだしている。まず心理学からすれば、われわれの魂の一部はすでにある一定のやり方で準備されて生まれてくる。地球上のあらゆる人々が、天空にはわれわれより力ある神々が住んでいると信じて天を仰ぐのは、いったいどうしてなのだろうか。それはわれわれの魂がそのようにできているからにほかならない。プラトンの時代以前の宗教も、同時代の宗教も、多くはこの天空の神々への信仰を基礎にしたものだった。

次に宗教に目を向けてみれば、古代ギリシャのさまざまな信仰は、おおよそふたつの大きなグループに分かれていた。一方は神々は地中に住むと考えるもので、「地上の」信仰と呼ばれていた。もう一方は神々は天空に住むと考え、そのために「オリュンポスの」信仰と呼ばれていた。オリュンポスの山は天に届くほど高いと考えられていたからだ。ギリシャが公認していた宗教はオリュンポスの信仰で、プラトンの思想もそこから生まれている。だから彼は、イデアは天上界にあると考えたのだ。

太陽が光と影を生じさせるように、イデアものごとの永遠のモデルとその地上の複製をわれわれに示す、とプラトンは考えた。彼は地上の複製をたんなる影になぞらえている。プラトンの原則は複製にもモデルにもあてはまり、それによれば、心の目は身体の目よりよく見える。

地上のものごとについてもプラトンは、感覚では見たり認識したりすることができないものが精神

には見えると確信していた。現代の科学は、彼の直観が正しいことを証明している。ものを見るのは目ではなくて脳であることが、心理学的に確認されているのだ。プラトンは「頭脳」という言葉は使わずに、ときには「精神」と、またときには「魂」と呼んでいる。彼が魂と言うときには、ものごとの永遠のモデルに言及していることが多い。

幾何学の図形はこの地上にまだ片足をつけていて、感覚の世界と永遠のイデアの真の認識との中間くらいに位置している。けれどもイデアの超自然的領域に入るには、この世ときっぱり縁を切らなければならない、とプラトンは言う。ここまで来ると彼の神秘主義もきわまった感じだが、こんな思想を身につけたのは、おそらくシチリアに滞在していたころのことだろう。

シチリアのピタゴラス学派から伝授されたのは数学理論だけではなく、いわゆるオルフェウスの神秘もあった。よそ者でいるかぎり、プラトンはそれについて何も知りえなかったはずだ。音楽の神オルフェウスを祭るから「オルフェウスの」と呼ばれる儀式は秘密にされていて、入門した者しか知ることができなかった。それではプラトンは入門したのだろうか。そう考えても少しも不思議はない。

オルフェウスの秘教にはプラトンが語る精神は出てこないで、人間の不死の部分、すなわち魂がじかに出てくる。オルフェウス教によれば、人間は善と悪とからできていて、善は不死である魂からなり、悪は魂の監獄である身体からなっている。魂の不死性についてオルフェウス教が教えることはじつに変わっている。自然界で季節や時期が定期的に繰り返されることから、世界にもサイクル運動があり、人間も死んだらまた生き返ると考える。人間が死ぬと、身体のほうは朽ちてしまうから、魂はほかの身体に移る。「転生」と定義されたこの魂の移住について、プラトンは『パイドン』のなかで

語っている。

真に知るということは死ぬことだ、と『パイドン』にある。まるで宗教のイニシエーションの聖なる言葉みたいだ。けれどもこれは、人がイデアに到達するためにたどる行程をひとことで言ったもので、プラトンはそれについて、彼のお話のなかでもとりわけ有名な、洞窟の寓話で語っている。

無知は暗い洞穴のようなもの

洞窟の寓話はたとえ話で、一種のシンボルである。何のシンボルかといえば、無知という闇と、認識という光のシンボルなのだ。プラトンの『国家』では、ソクラテスがこれを若いグラウコンに説いている。無知を表わすのは暗い洞窟で、そこには数人の人々が生まれたときから閉じこめられている。彼らは鎖で縛られていて、洞窟の奥しか見ることができない。しかし入り口の向こうで火が燃えているから、まっ暗なわけではない。火と入り口とのあいだには、その人々の影さえ見えない。人々の姿がある。けれども囚人たちには、その人々の影さえ見えない。なぜなら彼らと入り口のあいだに仕切り壁があって、そのために彼らの影が洞窟の奥に映しだされないからだ。映るのは肩に背負った荷物の影だけ。「なんて奇妙な光景だろう!」とグラウコンが言う。するとソクラテスが、「われわれも似たような状況にあることを思えば、それほど奇妙ではない」と返す。

これは奇妙さを浮き彫りにするたとえ話だ。囚人は、イデアをじかに見ることができず、その影しか見ることのできないわれわれ人間のシンボルなのだ。その影こそが存在する唯一の現実である、と

われわれは思いこんでいる。囚人たちは頭が動かせないから、移動する人々の声を影が発する響きだと勘違いしているのだ。
しかしもし囚人のひとりが鎖を解いて牢獄の外に出たらどうなるだろうか。はじめのうちは暗闇に慣れた目に光がまぶしくて、ものの見分けがつかないだろう。けれども洞窟の外の様子がだんだん見えてくると、なかで見ていた影はものの投影にすぎないことがわかってくる。しまいには、その光でものを見せている太陽さえも、じかに見ることができるようになる。
太陽を見ることができた囚人は、それからどうするだろうか。おそらく不運な仲間のもとへ帰って、彼らにも同じ衝撃的な体験をさせようとするだろう。捕らわれているあいだにつかんだものはどれも真実ではなくて、彼が見た世界はまったく別の世界だったと説くことだろう。
それではソクラテスのこのお話は実を結んだであろうか。いや、彼も逃げだした囚人と大差なく、つかんだ真実を他人に信じさせることはむずかしかった。仲間のもとに戻った囚人は、彼らを納得させることなど不可能だっただけでなく、彼らが見るように影を見ることができなくなったために、笑われたかもしれない。ソクラテスの場合も事情は変わらず、真の認識はこの世にはないと人々に信じこませることは、容易なことではなかった。

形而上学から弁証法へ

常識に照らした場合、イデアの理論はかなりショッキングなものだったことは否定できない。数学

的真理は経験の世界には属さない、とプラトンが言っているうちは、大した騒ぎも起こさなかった。正義や美の基準についての理論もそれほど驚くべきものではなかった。けれども「超天上界」とも言うべき天上の世界があって、そこには永遠性にじゃまされることもなくイデアが住みついている、と公然と言ってのけるに至って、やっかいな矛盾が生じた。

矛盾といってもつじつまが合わないということではなくて、「一般の考えに合わない」ということでしかない。けれどもたとえどんな矛盾でも説明がぜひ聞きたい。しかしプラトンのイデアの場合は、説明がはなはだしくむずかしかった。

ものごとは永遠のイデアの目に見えるコピーであって、永遠のイデアはそのモデルである、とはいったいどういうことだろうか。この教義を正確につかむには、超天上界にはいったい何が住んでいるのかをはっきりさせなければならない。それは容易なことではなかった。理想的モデルというのはどんなものにも存在するのだろうか。美や善のモデルだけでなく、髪の毛や泥のモデルまで？　こういう問題に首を突っこむことは、合理的なものとそうでないものとの境界を行くことだ。プラトンはそれに勇んで挑み、のちに「形而上学」という名をもらった新たな学問と向きあった。これは物理的世界を超えたところにあるものを扱う学問だ。

プラトンの言うイデアの世界は詩的な雰囲気にあふれた魅力的な世界だ。けれども哲学者には詩的霊感だけでは足りない。哲学者は示唆するだけではなくて、説明もできなければならない。そして説明するには、魔術や空想だけでは不十分で、まさに哲学的な方法が必要だ。プラトンはそれを探し求めているうちに、「弁証法」にたどり着いた。

プラトンのイデアはけっして変化しないユニークなものだが、その地上の「影」のほうは絶えず変化しているし、数も多い。原型とコピーとのあいだのこれほど大きな違いを埋めるにはどうしたらいいのだろうか。プラトンが自分自身の理論に満足できず、しかも他人からもケチをつけられたとき、解決の糸口をつかもうとしたのが弁証法だった。

しかし彼はここではじめて難問にぶつかった。彼はイデアの世界を構築したとき、日常のなかのものごとから出発している。この世のなかのあらゆるものには、超天上界に理想的なモデルがあるのだと考えたのだ。でもほんとうにあらゆるものに？　美や善だけでなく髪の毛や泥にも？　プラトンは困惑したが、はっきりしたこたえは出せなかった。

アリストテレスはそののち、プラトン学派が考えていたのは人や馬のような自然物のイデアだけで、家のような人工的なものについては考えていなかったのではないかと言った。けれどもこれの反証になるようなことを、プラトンは『国家』のなかに書いている。家具職人がベッドをつくるときには、彼の頭にはベッドの理想的なイメージがあるのだと。つまり超天上界をよく見れば、またそこから問題が生まれるわけだ。

しかし家具職人のような人が、どうしてイデアの世界からヒントなど引きだせようか。彼はまず、家具の一種としてのベッドの一般的イデアを見つけなければならない。たとえばそれは布団とは違うと考えることによって、見つけたとする。でもイデアを見つけたら、こんどはさまざまな形を区別しなければならない。シングルか、ダブルか、それとも子ども用のベッドか。弁証法にはだから、まず普遍的形態をつかむという上昇運動があって、それからあるかぎりのヴァリエーションをつかむとい

う下降運動があるわけだ。

弁証法のこのふたつの運動は、ふだんの世界とイデアの世界のあいだに橋をかけることはまちがいない。けれどもこれだけでは、日々の経験のなかでは出会ったこともないイデアの存在がどうして頭に浮かぶのかを説明することはできない。プラトンはこれを説明するために、弁証法という論理的領域から、神秘的で宗教的な領域へと戻らなければならなかった。つまり、魂は不死で生前からすでに存在するという概念に戻る必要が出てきたのだ。プラトンからすれば、そういう魂が存在するからこそ、のちの人生で潜在的な多量の知識のもととなる、理想的な形を見いだすことができるのだ。

イデアは無限に数を増す

けれども問題はここで終わりではなかった。プラトンもそれは承知していたが、でも彼はおそらく考えていたのだ。「私の説がどんな働きをするかは知らないけれど、やがていつかどこかに反論する奴が生まれるだろう」と。

しかし彼のこの予想はみごとにはずれた。彼の理論を危うくしたのは、彼の足下にいた弟子アリストテレスだったからだ。アリストテレスはプラトンとは大違いだった。天上の世界なんていう空々しい世界は考えずに、自然や人間の本性やその思考法則を研究した。そういう人だったから、言うことも率直だった。もののモデルとしてのイデアがあるなどということは、彼からすれば「絵空事を語り、たんなる詩的イメージを利用すること」以外の何ものでもなかった。要するに、とアリストテレスは

反論した。イデアというのはもののコピーでしかない。ものの数を倍にして天上のモデルなどを考えだし、それでものごとを説明しようなんてばかげている、と。

アリストテレスの批判のなかでもっとも有名なのは、「第三の人間」についての批判だった。アリストテレスは繰り返し第三の人間に触れて、これはプラトンの教義を何よりも損なうものだと言った。このことは、すでに誰かがプラトン攻撃の材料に使っていたかもしれないし、この種の反論の可能性はプラトン自身も気づいていた。反論というのはこうだ。たとえばソクラテスという特定の個人が存在し、人間のイデアが存在するなら、両者をつなぐイデアである第三の人間の存在も考えなければならない。のちにアリストテレス学派に入ったアフロディシアスのアレクサンドロスは、この理論にはきりがないことに気がついた。ソクラテスがいて、人間のイデアがあって、彼らをつなぐイデアがあったら、そこからまた別の関係が生じるから、第四のイデアとしての人間が出てくる。そうやって第五の人間、第六の人間という具合に延々と続いていく。

こんなわけで、第三の人間についてのアリストテレスの批判は、それだけではプラトンの理論をひっくり返すまでには至らなかった。しかし古代世界の人々は無限という観念を嫌っていたから、その意味ではアリストテレスに分があった。けれどもプラトンのイデアの理論は、その功罪はともかく、哲学の歴史のなかでひときわ強い光を放っている。この問題は今日でもまだ生きているのだ。

6　アリストテレス——中庸の教え

もしどんな学問もその仕事を立派に果たすのに正しい方法を心がけているとすれば、もし優秀な職人たちが美徳という道を重んじているとすれば、それは中庸をめざしているということにほかならない。

アリストテレス『ニコマコス倫理学』第二巻、第六章、一一〇六b、九

最良の弟子が師の教える道から遠のくことはたまにある。プラトンのもっとも優秀な弟子は、少なくとも性格から見た場合、師とは正反対だった。プラトンは夢想家で詩人で熱しやすいたちだったが、アリストテレスのほうは学者肌のクールな現実主義者だった。しかしアリストテレスは師の教えをさらに発展させたのだから、その意味ではプラトンにとって申し分ない後継者だった。けれども彼の方法とそれから出た結論は、師が想像さえしないものだった。アリストテレスにアプローチするには、むしろ、プラトン以前の思想家であったプロタゴラスの、「人間は万物の尺度である」という教義を思い起こすほうがいい。

プロタゴラスのこの教義は、プラトンに反駁されたあとも議論の的でありつづけた。ギリシャの

人々は尺度なしにはやっていけなかったのだ。尺度がないとまるで迷子になったような気分になった。言葉や行動や感情をしっかりつなぎ止めるものがなかったら、どんなことになるか予想もつかないではないか。すでに七賢人のひとりクレオブロスが「尺度は何よりいいものだ」と言っている。でも尺度ってどんなものなの？　どんな人でも尺度になれるの？

プロタゴラスも言うように、どんな人でもいいのではなくて、ものごとの尺度になるのは徳のある人だ。偉大なるアリストテレスは、この前提をひっさげてアテナイ人の議論の輪に加わった。では「有徳の人」とはどんな人だろう。家と図書館を往復するような、穏やかで、善良で、思いやりのある人？　いや、アリストテレスが考えていたのはそんなありふれた人ではなかった。美徳はできあいのすばらしい理想のようなものではない。各人がそれを見つけなければならないのだ。美徳とは常に、一方は不足、一方は過剰というふたつの悪徳の中間にある。ほんとうに勇気のある人とはどんな人か。臆病と向こう見ず、不足と過剰という両極端を避けることのできる人だ。

アリストテレスという多才な思想家に目を向けるとき、この「中庸」という概念は、読み解くための最良のカギになる。知識の分野で彼が足を踏み入れなかった領域はほとんどない。だからこそ、彼の理論を読み解くためには、まず観点を定めることが肝心なのだ。

アレクサンドロスの家庭教師になる

ギリシャの哲学者の多くがそうであるように、アリストテレスも裕福で教養のある貴族階級の出だ

った。ヘラクレイトスも、パルメニデスも、プラトンもそうだった。唯一の例外はソクラテスだ。

アリストテレスは前三八四年、カルキディケ半島のスタゲイラに生まれた。父はニコマコスという医者で、マケドニアのアミュンタス王の友人だった。家柄がよかったから、アリストテレスは一七歳にしてプラトンの門下になった。二〇年間師のもとで勉強したが、従順な弟子とはいえなくて、仲間からは「頭でっかち」というあだ名をもらった。プラトンは前三四七年に他界したが、そのあともアリストテレスが路頭に迷うことはなかった。マケドニアの王ピリッポスが、やがてアレクサンドロス大王となる息子の家庭教師として、彼を王宮に招いたからだ。こうして彼はギリシャの知識人としては特権的なポストを手に入れた。

アリストテレスはそんなわけで、のちに偉大なリーダーになるアレクサンドロスを教育するという運命を担うことになった。比類なき思想家とそれに劣らぬリーダーが出会ったらどんなことになるか。当時の記録を見るかぎり、とりたてて言うほどのことはない。アレクサンドロスがアリストテレスを精神的な父と考えていたことは間違いないだろう。しかしだからといって、彼が精神的にとくにすぐれたものを会得したわけでもない。アリストテレスのほうは、アレクサンドロスからペルシャの文化を吹きこまれ、たとえばファッションなどに興味をもったかもしれない。けれどもアリストテレスがどんなにエレガンスを好む人だったにせよ、ペルシャの服まで着るようになったとは思えない。彼にとってギリシャのスタイルは捨てがたいものだった。

お互いに相容れないところはあったけれど、ふたりは常によき友人だった。しかしアリストテレスが自分の道を開いたのは、アレクサンドロスとの友情を頼りにしてではなかった。大王が師に対して

した援助といえば、彼がリュケイオンに開いた学校を金銭的に助けたくらいだが、大王は三三歳でこの世を去ってしまったのだから、それも長いあいだではなかった。哲学の歴史から見ても、アレクサンドロスとの関係はアリストテレスにとって貴重なものであったとはいえないし、一方ギリシャの歴史にも、アリストテレスがアレクサンドロスを教育したことはほとんど出てこない。

アレクサンドロスと中庸の美徳

アレクサンドロスは、勇気という中庸の美徳についてのアリストテレスの教えを、少年のころからすでにみずから実践していたようだ。プルタルコスによれば、ピリッポス王が馬を一頭買った。しかしそれはたいそうな暴れ馬で、調教などできそうもなかった。ピリッポスはうんざりして、その馬を捨ててしまえと命じた。するとその場にいたアレクサンドロスが声を張りあげた。「経験も能力もなくて使い方がわからないからと言って、こんないい馬を放りだすなんて」。するとピリッポスがこたえた。「おまえは馬の調教なら自分のほうが知っているといわんばかりに、経験ある者をけなすのか」「もちろん」とアレクサンドロスはやり返した。「私ならうまくできます」「ではもししくじったら、その無鉄砲の代償はどうやって払うのだ」「馬の代金で払います」。

アレクサンドロスは成功を疑わなかった。なぜなら馬は自分の影におびえているだけであることを知っていたからだ。そこで彼は馬を陽のほうに向けて、愛撫しながらしばらく一緒に走った。それから馬の背に乗り、馬が走りたがっていることを見てとると、走るようにけしかけた。アレクサンドロ

スが馬の向きを変えてそこに居あわせた人々のもとに戻ったときには、いっせいに賛嘆の声があがった。ピリッポスは感動して、息子に口づけしながら言った。「マケドニアはおまえには小さすぎる」。
アレクサンドロスはこのように、アリストテレスに中庸をまだ教わっていない少年のころ、すでにその理論を実践していた。自分より経験を積んだ大人をまえにして、勇気の模範を示していた。ほかの者が馬を調教できないのを目のあたりにしても、失敗を恐れなかった。けれども同時に、臆病の反対の無鉄砲という行きすぎもしなかった。馬の行動をよく観察して、うまくできると確信したからだ。
美徳は中庸にありとは言っても、机上の計算だけでそこに達することはできない。中庸というのを二と一〇のまんなかは六であるというような、数のうえでの比較として理解してもらっては困る、知性を使わなければならないのだ、とアリストテレスは言った。食べ物の最大量と最小量とのあいだのちょうど中間の量は、誰にでも等しく勧められるものではない。運動選手には中くらいの量では足りないだろう。古代オリンピックの有名なチャンピオンであったクロトンのミロンは、一日に牛一頭を平らげたという。一方で中くらいの量は、一日中座って仕事をしている人には多すぎる。中庸というのはだから、場合に応じて決めるもので、日々たゆまぬ努力をすることによって、身についていくものなのだ。
勇気もその場だけの行動ではなく、習慣にしなければいけなくて、そのためには、プルタルコスが語るアレクサンドロスが示したような、思慮深さが欠かせない。アリストテレスが若きアレクサンドロスに喝采を送ったことは容易に想像できる。「すごい！　君は勇敢だった。でも気をつけたまえ。ツバメ一羽を見たからって、春だと決まるわけじゃない」。

アリストテレスは自分の教えを守ったか

　というわけで中庸とはたんなる計算から出るものではない。これを確認したアリストテレスは、こんどは自分の教義が硬直化するのを避けようとした。中庸は固定した概念ではなくて、ひとりひとりで異なるはずだ。けれども各人が時と場合で何が中庸かを理解するのは容易なことではない。それは円の中心を探るようなものでもある。「ほどほど」の範囲が広すぎたり狭すぎたりするのを避けるには、まず各人が自分と自分の性格に合わせて範囲を調整し、その作業が終わったらこんどはそれを、万人に通じるものに調整しなければならない。

　ではアリストテレス自身はその私生活で、中庸という観点からしてどのようにふるまったであろうか。見たところは申し分なかった。彼が人の行動について言うことも叡智のきわみだった。「極端を避けよ！」は彼の頭に最初に浮かんだ概念だ。ケチをしすぎる人は、永遠に生きるつもりでいるかのようだ。その反対にお金を湯水のように使う人は、明日死んでもいいと思っているかのようだ。こんな行きすぎはどうしたって避けるべきなのだ。友達の数が多すぎる人に、ほんとうの友達はいない。

　しかしアリストテレスはほんとうに完璧な人だったのだろうか。ディオゲネス・ラエルティオスは、彼についての信じられないような話を伝えている。彼は油桶(あぶらおけ)を風呂に使っていて、あとでその桶を人に売ったのだという。買った人がせめてそれをキッチンでは使わずに、掃除用に使ったことを願いたい。

アリストテレスは自分の倫理的教義に合わせて行動しようとしたが、それは彼が厳格な道徳論者だったからではなく、幸福になるにはそうするのがいいと考えていたからだ。幸福になるのに美徳だけでは足りないのはまちがいないが、悪徳のほうは不幸になるには十分な条件だ。徳が高くても、ふところに一銭もなければ幸せではなかろうが、ケチをすることにあくせくしている人は、たとえ大金持ちでも幸せではない。

アリストテレスはしたがって、徳さえあれば幸福な人生を送れるとするプラトニックな禁欲主義からは遠かった。美徳は精神的な財産としては持っているほうがいいけれど、健康や力や美といった、それほど高貴でもない身体的財産も同じように必要なのだ。それに第三の財産として、資産、家柄の良さ、名声といった外的なものも加えるべきだと彼は言った。キニク学派のディオゲネスは樽のなかで暮らしたことで有名になったが、これほどアリストテレスの趣味に合わないことはなかった。またディオゲネスは棍棒を手に、よれよれの粗末なマントをはおって町をうろついていたが、アリストテレスは粋で優雅な銀のステッキを手にアカデメイアに出入りした。アリストテレスの発音は舌足らずで語尾が不明瞭だったらしいが、その欠点さえも彼はスノビズムに見せかけていたようだ。

何もかもほどほどがいい

中庸についての考え方をアリストテレスは自分の哲学研究の支えにしたが、ときには生物学や政治学、論理学などの学問にも応用している。

愉快なことに、アリストテレスは彼の概念を、肉体的特色と心理的特色の関係を研究する人相学にまで応用している。エジプト人のように黒すぎたり、女性のように白すぎたりするのは臆病者で、中間色の人は勇気のある人だそうだ。体毛にも適量があり、多すぎたり少なすぎたりしてはよくない。それは美的観点から見た場合だけではない。「量が偏ったものは意地が悪く、ほどほどの者は公平で勇気もある」という。

アリストテレスの考え方がみごとに反映されているのは政治学の分野においてである。どこの国にも金持ちがいて貧乏人がいて、その中間の人たちがいる。最良なのは財産がほどほどの階層だ。過ぎたるはなんとかと言うではないか。金持ちは横柄で、貧乏人は底意地が悪い。だから最良の政治は中産階級による政治なのだ。アテナイの偉大なる立法者ソロンが中産階級の出であったのは偶然ではない。

こうした自説を強化するのに、アリストテレスは古代の歴史や神話なども引きあいに出した。そのむかし民主的な国々は、裕福すぎる、あるいは有力すぎる市民を追いだすのが常だった。巨船アルゴーにまつわるこんな逸話もあるではないか。金の羊毛を求めて出港したとき、ヘラクレスだけはほかの船乗りにくらべて抜群の体力があったために、遠征のメンバーからはずされたと。

アリストテレスは倫理学とはほとんど縁のない論理学の分野でも、かの有名な三段論法を取り入れることによって、中庸の法則をあてはめることに成功している。三段論法というのは、ふたつの前提から出発して結論に達するというものだ。たとえば次のような結論を考察してみよう。「すべてのイタリア人は死すべきものである」。これは真実か否か。それを考えるには、主部と結論となる述部の

あいだに中間語をひとつ入れる必要がある。主語である「イタリア人」のなかに含まれる個人の合計は、述部に含まれるものの合計ほど多くはない。述部には動物まで入るのだ。つまり主語は述語より「小さい」言葉であるわけだ。それなら「イタリア人」と「死すべきもの」のあいだに入れるべき言葉はあるか。それはある。それは「人間」という言葉で、これが「中間」語の役目を果たす。その結果次のようになる。「すべての人間は死すべきものである」「すべてのイタリア人は人間である」だから「すべてのイタリア人は死すべきものである」。

三段論法にはお定まりの反論がある。結論ははじめからわかっているではないか、というものだ。アリストテレスの返事はこうだった。もちろん！　でも知ることと確信することは同じではない。この彼の返事を裏づけるように、論理学の中庸（中間語）は倫理学の中庸と違って、規則さえ守っていればしくじることはない。

7　ゼノンとエピクロス——柱廊の哲学と庭園の哲学

自然に適応して生きよ。

ストベウス『自然・倫理詞華集』第二巻、第七章、ｂａ

ひそかに生きよ。

エピクロス　断片その二、八六

アリストテレスのあと紀元前四世紀から三世紀にかけて、哲学の最大学派であったストア学派が誕生した。この学派の創始者は、見たところごく平凡な男だった。ゼノンというその男はフェニキア人で、キプロス島のキティオンに生まれた。フェニキア人は小アジアの住民と違って、アテナイ人から見たら未開人に毛が生えたぐらいの程度である。ゼノンは外見や言葉からしてまさに未開人で、やせっぽちの色黒で、プラトンの「ジムで鍛えた」仲間たちとは正反対だった。ギリシャ語の単語やアクセントはいつまで経っても身につかず、聴衆は耳を傾けるどころか背を向けた。

それなのにこの冴えない男は、しまいにはアテナイの人々を魅了し、エピクロスと並ぶ当時の哲学

者のエースになってしまった。そして、「ひそかに生きよ」をモットーとし自然に従って生きよと教えたエピクロスを、長年にわたって脅かした。

ストア学派から見れば人間の本性は理性にあるから、ゼノンの教えは、合理的な習慣や行動を身につけよというものだった。彼は苦痛や死まで合理的に考えよと言い、人間性全体を考えに入れた。自然を重んじることではエピクロスも負けなかったが、彼はゼノンとは反対に、人間の本性を抽象的な理性に帰そうとはしなかった。エピクロスによれば、人間の真の特質はその内面にある。だから、内面を大事にしてそこに喜びを見いだしたければ、ふだんの生活がもたらす気苦労は避けなければならない。

ゼノンはよそ者だったから、アテナイで土地を手に入れることはできなかったが、市は彼に、大広場の脇の彩色柱廊を好きなように使わせた。柱廊はギリシャ語で言えば「ストア」である。そこで彼の学派には「ストア学派」という名がついた。広い場所で教えることは、ゼノンの普遍主義的な観念によくマッチした。一方エピクロスがめざしたのはゼノンとは逆に、都会の雑踏を離れ、少数の仲間とひっそり暮らすことだった。彼は花の咲く庭を隠れ家としたから、彼の学派は「庭園学派」と呼ばれた。

難破して哲学に出会う

キティオンのゼノンはフェニキアの染料商人だったが、三〇歳を超えたころ、乗っていた船がアテ

ナイの港の手前で難破した。そこで彼は、アテナイに一時避難した。ところがそこでたまたま入った本屋で『ソクラテスの思い出』をぱらぱらめくっているうちに、その本に夢中になってしまった。作者はソクラテスの高弟で歴史学者のクセノフォンだという。「ソクラテスのような賢人はどこへ行ったら見つかるだろうか」と彼は本屋の親父に訊いた。「ちょうど来たよ」。偶然そこを通りかかった哲学者、キニク学派のクラテスをさして親父が言った。ゼノンはクラテスの後を追った。偉大なる思想家が集まる町アテナイでの彼のチャレンジが、こうしてはじまった。

キニク学派の学者たちは、ソクラテスの反俗主義を極端なほど実践していた。スキャンダルによって衆目を集めようと、みずから「反俗主義者」と名乗ってはばからなかった。衣服のかわりにぼろをまとい、痛烈な言葉をふてぶてしく口にし、非暴力を訴えた。ゼノンははたしてそんな変人になれるだろうか。クラテスはそれを試してみることにした。

レンズ豆のいっぱい入った鍋を肩にのせて、人でごった返す街を、他人に笑われながら通れるかね？　それを受けたゼノンは、小心なうえに不器用だったから、なるべく人目につかずに通り抜けようとしたけれど、肩にのせた鍋を誰かに棒でこっぴどくつつかれた。犯人はクラテスで、彼はこそこそしたゼノンに活を入れたのだ。ゼノンは気の毒に、レンズ豆を頭からかぶって、恥ずかしさにその場を逃げだそうとした。するとクラテスが笑いながら言った。「フェニキアの兄さんよ、なんで逃げるの？　こんなの序の口だよ」。

この先輩面のエピソードは、キニク学派のイニシエーションの通例だった。この洗礼を受けたゼノンは、同じ流儀をストア学派に持ちこんだ。犠牲者のひとりに、弟子入りを志願したロードス島の金

持ちの子息がいた。彼はまず、ほこりだらけの階段に座らされ、洗ったばかりの優雅な衣服を台なしにしてしまった。次にはシラミだらけの物乞いの横に座らされた。若者はしまいに哲学をあきらめてしまったが、ゼノンは後悔などさらさらしなかった。

当時の哲学者は君主からも厚遇を受けていた。しかしなかには高慢にも、ヘラクレイトスよろしく、君主の申し出さえ突っぱねる者がいた。ゼノンもそのひとりで、「ノー、サンキュー」と気どってこたえた。正確に言えば、相手はマケドニア王のアンティゴノスで、彼はゼノンに、人民の教育係になってほしいと言ってきたのだ。ゼノンは王の頼みに、自分はもう齢八十で、年老いて身体も弱くなったので、マケドニアまでの長旅などとてもできないと返事をした。そのうえで、「かわりに弟子をふたり送るというのはどうでしょう。ふたりとも賢さは私に劣らず、しかも身体は壮健な者たちです」とつけ加えた。

ゼノンが言ったことになっている言葉の多くは、彼の伝記作家たちの創作だと言えなくもない。けれどもそのうちのいくつかはじつにおもしろいので、記憶しておいてもいい。ぬかるみを渡ることを渋っていた見栄っ張りに彼は言った。「そりゃぬかるみはお嫌いでしょうね、鏡にはならないのだから」。おしゃべりな奴にはこう言った。「われわれは耳はふたつ、口はひとつなのだから、話すより聞くほうがいいんですよ」。

ゼノンは横柄だったがケチではなかった。授業料は受けとらなかった。群衆が嫌いで、一度に会うのはせいぜい数人だった。古代の哲学者の多くがそうだったように、彼も女は苦手だった。無駄なおしゃべりはしないようにして、舌をすべらせるくらいなら足をすべらせるほうがいいとさえ言ってい

た。死ぬときの話は悲話というより逸話めいている。もはや一〇〇歳になろうとするあるとき、学舎から出ようとしてうっかり転んだ。指をけがしたが、痛さに悲鳴をあげるかわりに地面に向かってどなった。「わざわざ呼ばなくてもいいよ、いま行くから」。それからまもなく、ほんとうにあの世に行ってしまった。

人情など必要ない

哲学の学派のなかには、ちまたの日常用語のなかにもその足跡を残しているものがある。「プラトニック」といえば、肉体関係のない純粋に精神的な関係ということだ。「ストイック」という言葉には、どんな苦悩にも屈しないという意味がある。しかしどんな哲学用語も日常語になるわけではなくて、われわれの気持をとくに揺さぶる言葉だけだ。こういう言葉を使うとき、もとの意味からはずれた使い方をすることはまずない。プラトニックな人と言ったら、行動より観念を重んじる人だと思うし、ストイックな人と言ったら、運命の波に翻弄されない人だと考える。

当時の人々も、ストア学派の学者は倫理にかけてはピカイチだと考えていた。賢人はいかなるときにも、理性が人間に授けた本性からはずれてはならない。彼らはこの基本原則を鉄より固く守っていた。その原則には誰もがうなずいて、誰もがすなおに受けいれた。けれども「いかなるときにも」それを守らなければならない、となると無理が生じるし、しまいには矛盾まで生じてしまう。しかしストア学派の哲人たちは、矛盾を日々の糧にすることをためらわなかった。そんなユニークな性格のた

めに、彼らは哲学の歴史のなかでも特異な位置を占めている。
ストア学派はピタゴラス学派のような教団をつくらず、メンバーの出身地も多様だった。ゼノンは染料の商人で、弟子のクレアンテスはもとボクサーだったらしいし、学派の創設者のひとりクリュシッポスは地主だった。平均的なアテナイ人に似た人はひとりもいなかった。なかでもゼノンは冷淡で人づきあいの悪い男だった。それなのに彼は人を惹きつけたが、その魅力は、アレクサンドロスによる遠征のあと浸透した東洋文化の魅力でもあった。
アテナイ人の目から見ると、ゼノンには一風変わったところがあった。ほとばしる情熱という、アテナイ人の思想や演劇を長いこと支えてきた情動には、いっこうに関心を示さない。彼は自分から関心がないと断言した。彼以前には、人間生活につきものの喜びや悲しみといった感情を否定する哲人はひとりもいなかった。それらは悲劇では大事な役目を果たしていたから、哲学者でさえせいぜいのところ制御しようとするくらいで、真っ向から拒みはしなかった。プラトンは感情に冷ややかな目を向けたが、アリストテレスは、どんな雄弁家でも感情抜きでは聴衆の気持を動かすことはできないと言った。
ギリシャの哲学史のなかで、感情に背を向けたのはストア学派がはじめてだった。彼らは感情を、理性の第一の敵と見た。世界も人間も、理性が支配しなければならない。理性に忠実でありたかったら、感情は拒否するべきだ。理性は安定しているし必要なものでもあるが、感情のほうはいつも揺れ動いている。この無感動には、のちに有名になった「アパシー」という名がついた。ギリシャ語のアパテイアという言葉にはじっさい、「感情の欠如」という意味がある。無感動なのが賢人で、そうで

ない者はバカだというわけだ。

無感動はいいが非社会的なのはいけない。ストア学派の人々は、人里離れた寂しいところでただひたすら瞑想するインドの行者とはまったく別だった。それどころか、公的生活の雑事のなかにも、機会さえあれば進んで入った。けれども公的生活を送ることと無感動を通すことは、両立がむずかしい。無感動は修行の一形態だが、修行は社会生活とは相容れない。この矛盾に気がついてから、ストア学派は独特の処世術を誇らしげに広めはじめた。彼らの処世術はソフィストのそれとは正反対だった。ソフィストと違ってストア学派は、人間の本性においても生き方においても、理性が幸福な設計図を描いてくれると信じていた。そして生きるためのテクニックとは、自分がいま生きている状況を、たとえどんなにひどいものでも、幸福な状況に変える能力だと考えた。

ストア学派は合理主義者の集まりだったが、彼らのライフスタイルには、ソクラテス流の奇抜さとキニク学派のシニカルなメンタリティーが混在していた。シニカルというのはわれわれがふだん使っている意味においてであって、つまり、他人の苦しみを見ても「知らぬ顔をしている」ということだ。それは彼らの根性が悪かったからではなく、彼らはごく自然に、身内の死にも自分自身の死にも動揺すべからず、と考えていたからだ。彼らにとっては同情など役立たずで、悲嘆など嘲笑するべきしろものだった。

死や拷問をまえにしたストア学派の哲人たちの勇気は話の種になるほどだった。彼らはそういったことを恐れるどころか、ぞっとするような光景にもたじろがなかった。アレクサンドロスの遠征のあと、インドの行者は焼身自殺をするという話が伝わった。誰もが耳を疑ったが、ゼノンは、そんなこ

とは記事で読むより自分の目でじかに見るほうがいいと言った。ゼノンも彼の忠実な弟子クレアンテスも、それほど恐ろしいことを進んでやろうとはしなかったが、のちに弟子入りしたプロテオスはそれをやってのけた。

ストア学派の哲人にすれば、自殺は筋の通った賞賛すべき行為だった。合理的な幸せをつかむことが不可能なら、死に急ぐことは自然の成りゆきだった。死ぬことは生きる者が最後にする行為にすぎず、死ねば生命は解体されて、新たに自然な形態が生じるはずなのだ。

ストア学派の死の典型として、ローマ時代の学者のなかでも傑出していたセネカの例がよく挙げられる。ローマ帝国に生きた彼は、悪名高い皇帝ネロの教師として彼の寵愛を受けていた。しかしあるとき、陰謀に巻きこまれるという災難に遭った。血管を切れというネロの命令をセネカがいかに平然と受けいれたかを、歴史家で『年代記』の著者であるタキトゥスが書き残している。

セネカは、弟子たちやそこに居あわせた人々に泣くなと言い、運命は避けられないものだと考えよと諭してから、次のような行為に出た。「彼の身体は老齢のために弱くなっていたから、血はゆっくりとしか出てこなかった。そこで彼はすねと膝の血管も切った。長引く苦痛にだんだんつらくなってきたので、友人で名高い医者であったスタティウス・アンナエウスに、アテナイの死刑囚を殺すのに使う例の毒を飲ませてほしいと頼んだ。セネカはその毒薬を飲んだが、効き目は現れなかった。身体がすでに冷えきっていて、毒に反応しなかったからだ。彼はしまいに湯を張った浴槽に入り、その湯を解放者ユピテルに捧げたいと言った。それから蒸し風呂に運ばれ、そこでついに窒息して死んだ」。

セネカの死はストア学派式自殺のきわだったケースである。けれども死と向きあうよりむずかしい

のが拷問にも動じないことだ。当時拷問はありふれた習慣だったが、その肉体的苦痛に耐えることは誰もができることではなかった。しかしエピクテトスは果敢に耐えた。

奴隷だった彼の残酷な主人がある日、過酷な攻めを与えれば、ものに動じないと言われるストア学派の哲人も形なしだろうと考えて、彼を苦しめることにした。主人は彼の片足を足かせで締めつけた。エピクテトスはうめき声をあげるどころか、そんなことをしたら足が使えなくなると主人に忠告した。長引く拷問によって骨を折られ、じっさい足が使えなくなったとき、エピクテトスが口にしたのは「言わんこっちゃない」のひとことだけだった。

ストア学派の人たちは、できごとは定まったコースをたどりながら、ものごとや人間の運命を決めていくと確信していた。運命というのは神の裁きではなくて、われわれが関知しない原因が重なって出てくる結果なのだ。逆境に陥ったときには、エピクテトスの教訓を守るしかない。彼は、逆境には逆らわずに潔く立ち向かうのがいいと教えている。

けれども一方に、むかしからの運命論がある。吉凶を考える迷信深い人たちが唱える運命論だ。ストア学派の運命論はこれとは違って合理的なものだった。今日雨が降るのは運命なのだが、それは昨日までの気象条件が連鎖的に作用した結果、どうしても雨が降ることになったからだ。しかし、傘をさすかそれともレインコートを着るかの選択は、われわれが自由にできる。ストア学派によれば、雨は気象上の運命的なできごとだが、レインコートを着るかどうかは、その運命に一部だけ結びついていることにすぎない。つまり「運命に付随する」事柄なのだ。

そんなわけでストア学派流の運命論は、それでも人間は少なくともある程度は自由である、という

信念と折りあいがついた。しかし彼らにとって、感情のほうは無意味だった。喜びには価値がなく、悲嘆にはなおさら価値がなかった。けれども彼らは、本性に従い理性に従って生きよ、とまるでこのふたつが同じものであるかのように説いている。それなら、感情を抜きにした本性など本性とは言えない、とやり返したらどうだろう。人間の本性がほかの動物のそれとは違うことは、エピクテトスも認めていた。人間も動物にはちがいないが、でも知性があるのだと。だからほかの動物に負けないほど身体を清潔にしなければならないのだと彼は言った。「身体をよく洗い、毎朝歯を磨くことをしない者はブタと同じだ。身体を清潔にしたがる犬や馬より劣悪だ」。

感情には意味がないとするこの不自然な考え方からは、どうしても一連の矛盾が生じてしまう。その第一は、この不自然さを、本性に従って生きるということと両立させなければならないことだ。反対派はストア学派のパラドックスを喜んで拾い集めたが、キケロの書いた『ストア学派のパラドックス』はさておいて、ローマ時代にみんながやり玉に挙げたパラドックスは、いまだに話の種になっている。なかでも人の口に上るのは、賢さの問題だ。賢者とはいかなる者か。美しい者だ。ではその人が醜い人だったら？　そんなことは問題ではない、賢いということは美しいということだからだ。ではもし捕らえられて拷問を受けたら賢者はどうなる？　拷問の最中だって幸せを感じる。

ストア学派が矛盾を生じさせたのは、ものごとを白か黒かにはっきり分けたためでもある。美徳があり、悪徳があるが、どちらにしても程度はない。罪はどんなに重くても軽くても、どちらにしても等しく罪である。この図式に入らないものは考えなくてよい。そんなのは「どうでもいいこと」だからだ。

けれども矛盾の最たるものは、すべてを理性でがんじがらめにし、日常生活まできびしく監視しようとしたことだった。その結果彼らは、何でも悲観的な目で見て、いつでも最悪のことしか考えないようになった。たとえ悪いことが起こらなくても、それでもストア学派の人々は、自分を不幸だと考えた。なぜならその体験ができなかったからなのだ。「災難に遭ったためしのない人ほど不幸な人はない」と、セネカは『摂理について』のなかで言っている。

そんなわけで、ストア学派のライバルたちは、彼らを笑いものにしては楽しむことができた。その点で他を抜きんでていたのはキケロで、彼は有名な演説集のなかの一篇「ムレナ弁護」で、ストア学派に傾倒した小カトーの「超人的な資質」をねらい撃ちにしている。しかし彼は手はじめとして、まずストア学派の秀でた始祖ゼノンをやっつけている。「あるとき抜群の天才児ゼノンという男がいて、彼の弟子たちはストア学者と呼ばれていた。彼らの教えはこんな風だ。賢者なら他人に好感を抱くことなどまったくないし、人の罪を赦すこともさらさらない。人情にほだされるのは愚か者か軽薄な者のすることだ。他人の頼みに折れるなど愚の骨頂だ。身体が不自由でも美しく、奴隷になっても自由でいられるのは、賢者をおいてほかにない。つまり、ストア学者のような賢者でないわれわれは、山賊か、はては気の触れた連中だというわけだ。彼らからすればどんな罪も程度は同じで、いかなる過ちも神聖さを汚すものになる。鶏の首を絞めるほうが父親の首を絞めるよりはましだ、とはならないのである。賢者は気まぐれで判断することなどまったくなく、何ごとについても後悔せず、間違えることもいっさいなく、意見を変えるなどということはありえないというわけなのだ」。

ストア学派のパラドックスはともかく、当時、彼らほど徹底してはいなかったが、自分は賢者であ

ると考える人たちならほかにもいた。彼らにそれを説いたのはエピクロスという、ゼノンにとっての目の上のたんこぶであり、偉大なるライバルだった。エピクロス派から見れば、魂の平安のほうが、精神のきびしさや不屈さよりはるかに貴重なことだった。彼らが何より大事にしたのは快楽と友情と私生活であって、ストア学派が唱える抗しがたい運命などは苦笑の種でしかなかった。

快楽を求めよ

ゼノンと同時代の人エピクロスの人間形成に決定的な役割を果たしたのは、唯物論者のデモクリトスだった。デモクリトスはエピクロスより一世紀ほど前の、前四六〇年から前三七〇年にかけての人だ。彼はトラキアのアブデラに生まれ、エピクロスはサモス島に生まれたから、ふたりの出身地はそれほど遠くはなかった。若きエピクロスはよき師を探していた。なぜなら、学校で出会う教師たちは、宇宙の起源に関する詩人ヘシオドスの概念も説明できないような連中だったからだ。

エピクロスは、まだ年若い青年だったころから、宇宙について彼なりの解釈を試みようとした。こうして彼は、物理的世界が原子でできていること、論理的思考は感覚を基礎にすること、道徳にも法則があるがそれは歴史法則とは異なることなどを説いた。物理学、論理学、倫理学を哲学の三分野とする点では、エピクロスもストア学派と変わらなかったが、なかでも彼がもっとも力を注いだのは倫理学の分野だった。

エピクロスは特異な人物だったが、その特異さはストア学派のそれとはかなり違った。エピクロス

を毛嫌いする人は、彼が奴隷や娼婦と親しくしていると非難した。エピクロスは庭園で教えを説いたので庭園学派と呼ばれたが、その哲学はさまざまなものの寄せ集めのようだったから、良識派の人々は眉をひそめた。エピクロスの共同体とはどんなもので、そこではいったい何をしているのだろうか？

しかしアテナイという土地は、庭園学派にとっては居心地がよかった。哲学の分野だけを見ても、アテナイはじつに多彩だったからだ。目立ちたがり屋のソクラテス、集会の好きなソフィストたち、扇動屋のキニク学派、自殺したがるストア学派など、さまざまな人が集まっていた。「アテナイ良識派軍団」はそんなわけで、庭園の主とその教説をせっせと攻撃しはじめた。攻撃はいとも簡単だった。なぜなら、エピクロスは快楽を彼の思想の核にしていたからだ。モラリストはそこを的にして、俗悪な快楽主義者のレッテルをやすやすと貼ることができた。

世間はエピクロスの質素な生活もうさんくさいと考えた。彼のもと弟子のティモクラテスがのちに語ったところでは、エピクロスの暮らしが質素だったというのはまっ赤な嘘で、それどころか大食いが過ぎて日に二回は吐いていた。これもまたたんなる誹謗だったのだろうか。しかり。エピクロスの弟子たちの言葉を信じるかぎり誹謗でしかなかった。それにエピクロスは人好きのする男だった。ゼノンとは逆に、彼の人柄は穏やかで優しくて、人なつこかった。かといって、彼のライバルが言いたてるような頼りない男ではなかった。

エピクロスは身体的には恵まれなかった。病気がちで、立っているより横になっているほうが多かった。だから当然セックスのほうも留守がちだった。ストア学派のように感情の抑制を説くことこそ

しなかったが、いざ死ぬことになったときには、膀胱の恐ろしい痛みにもじっと耐えた。しかし彼自身は、人間は楽を求め苦を避けるようにできているという、揺るぎない信念から出発していた。生まれつきの本能に従うことは、理にかなうことだと考えていた。政治などの混乱から遠く離れて私生活を大事にしたのは、ほかでもないそのためだった。

隠れ家にこそ住むべし

公的生活から遠のくようにと弟子に勧めたのは、ギリシャの哲学者ではエピクロスがはじめてだった。アリストテレスは、全体のほうが部分より先だという考えから、国家が先で個人はあとだとした。ところがエピクロスにとっては、大事なのは個人であって、国家は二の次だった。

だからといって、エピクロスの言う個人がエゴイストだったり人間嫌いだったりするわけではない。それどころかエピクロスは、友情は人生の恵みのひとつであると考えた。弟子たちには仲良くせよと言い、それと同時に、政界というごった世界には近づくなと警告した。彼の有名な言葉「ひそかに生きよ」の意味はそこにあった。隠者になれというわけではなくて、哲人が政治家に気に入られたり、政治家が哲人と意気投合したりするなどということはありえないと言いたかったのだ。

エピクロスの唱えた理想的生活は、長いこと人々を魅了しつづけた。ストア学派のセネカでさえ、公にはストア学派の哲人としての立場を守りながら、エピクロスの言うことにうなずいた。哲学者の願いを叶える国家がはたしてあるだろうか、と彼は自問した。よくよく考えてみれば、そんな国家は

ひとつとしてない。それなら、哲学者にとっては隠れた暮らしが不都合であるはずがない。公的生活を送っている哲人だって、さまざまな国の実情を考えてみれば、エピクロスのように暮らしたくなるにちがいない。公的生活という、危険な海を渡る船になど、何の価値もないからだ。

エピクロスによれば、隠遁生活というのは人間性を抑圧する無理なものではなくて、その反対に、人間が持って生まれた本能を満たすものだった。

エピクロスはセラピスト

建前からすれば、エピクロスの庭園学派は、彼の言う「人込みを離れた晴朗な生活」によって平穏をもたらしてくれるはずだった。しかしそんな学派のなかでも、ときには病気になったり、憂鬱になったり、不安に駆られたりすることは避けられない。そこでそうした事態に備えて、エピクロスは彼なりに対処法を考えていた。喜びの園がその役目をじゅうぶんに果たすためには、そこのあるじが、みじめな状態にいる仲間を救ってやるべきなのだ。というわけで、誰かが不安になったりすると、「抗不安剤」に代わるエピクロスの格言がただちに提供された。

エピクロスによれば、魂の病はどれも、死ぬことへの恐怖、神々への畏れ、苦痛への不安、将来への心配、という四つの基本的原因から起こる。それにはいろんな薬などいらず、エピクロスの哲学さえあれば足りる。病気はとにかく四つしかないのだから、「四病薬」とかいう呼び方をすればいい。この薬は病気の種類にしたがって作用の仕方が違うのだ。

第一の治療は死への恐怖を取り除くものだ。エピクロスの弟子たちは、ライバルであるストア学派の人々とは違って、死を軽んじたりはしなかったから、世間並みに死を恐れていた。エピクロスは唯物論者のデモクリトスに感化されて、魂の不滅などは信じていなかった。そこで死の恐怖を払いのけるためにこう言った。「死はわれわれにとって何ほどのことでもない。なぜならわれわれが生きているかぎり死は存在しないのであり、死が存在するときにはわれわれはもはや生きてはいないからだ」。だからわれわれはいつ死に見舞われても、その運命を静かに受けいれればいいのだし、彼の言葉を借りれば、防御壁のない街に住んでいて死の危険に常にさらされていても、その運命と平静に向きあえばいいわけなのだ。

第二の病気は神々の怒りへの畏れだった。これに対してエピクロスは言った。怖がらなくていい、神々はいるが、忙しすぎて人間のことまでかまってはいられないから。

第三の病気にも特効薬があった。苦痛が怖い？　苦痛はどんなときでも耐えられる。ストア学派の連中のように勇敢でなくてもかまわない。病気のなかには苦痛より快感を生むものだってある。たしかに苦痛にもいろいろあって、きわめてはげしいのもある。しかしそんな苦痛も長くは続かない。いずれ気絶してしまうのだから。

四つの病気のうちの最後は将来への心配だ。これと戦うには、あらゆる望みを叶えようなどとはしないで、必要で当然な望みだけを考えればいい。われわれに喜びをもたらすのはそういう望みの実現なのだ。エピクロスが言う喜びとは、肉体的苦痛と心の動揺がないという、「ない」ための純粋な喜びのことだった。たとえばよく晴れた日にマラソンをして汗をかけば、グラス一杯の冷たい水が喜び

になる。なぜなら身体の苦痛を取り除いてくれるからだ。

快適な人生を送るためにエピクロスがおこなったセラピーはこういうことだった。隠れて生きよという教えのなかには、すでに予防薬的な意味あいがあったが、隠れて暮らしていてもまぎれこむ病気には、四病薬が用意された。

しかし「哲学的な薬」さえあれば幸福でいられるというわけではない。幸福な人生を送るには、もっと積極的なこともしなければならないとエピクロスは考えた。それは友達をつくることで、彼にとっては友情ほど貴重な財産はなかった。哲学が不滅の財産だとすれば、寿命ある財産でもっとも大事なのは友情なのだ。哀れみの感情を廃したストア学派と違って、賢者なら友人のために死ぬ覚悟がなければならない、とエピクロスは口癖のように言っていた。このように友情を賢さの一指標と考えたことは、エピクロス哲学のひとつの成果だった。

8　アウグスティヌス——天国を考える哲学者

時間が過去と現在と未来であるとするのは正確ではない。時間は過去の現在、現在の現在、未来の現在なのだ。そしてこれらは三つとも魂のなかにあり、ほかには見あたらない。

アウグスティヌス『告白』第一一巻、第二〇章

キリスト教の出現によって、それまでの世界とは根本的に異なる世界が生まれた。初期のキリスト教徒は、ただ社会の秩序を乱すくらいの存在だった。たとえば、皇帝ネロは六四年にローマが灰燼に帰した大火を、キリスト教徒のしわざだとしている。しかしそれから一世紀もするころには、キリスト教の思想や教義に大きな価値が付与された。教義はローマ帝国の広い範囲に浸透したが、迫害が大きかったために信者は自己防衛的になった。じっさい彼らは、いかなる布教も阻止しようとする政治家や哲学者の攻撃をかわすだけで精いっぱいだったのだ。

けれども身をかわしながら布教を続けたおかげで次第に教義も整備され、やがてリーダー格の人々が「教父」と呼ばれるようにまでなった。なかでも秀でていたのはギリシャ語を話す教父たちで、彼

らは古典哲学の素養を高く積んでいた。しかしラテン語を話す教父たちも、古典哲学との折りあいは考えなければならなかった。

そうしているうちに、それまでの哲学の知識がキリスト教の教義に場所を譲るようになった。こうして哲学的思考のなかに、「天使」「創造」「罪」「恵み」といった、それまでになかったニューフェイスが登場した。

キリスト教の思想家を哲学者と定義することはちょっとむずかしい。なにしろ彼らは信仰という、理屈の領域には入らない、本質が哲学に反するようなところから出発しているのだ。しかし教父のなかでもとりわけ抜きんでていたアウグスティヌスは、信仰は理性を拒否するという考え方に抵抗し、信仰とは目に見えないものを信じることだと主張した。わかりやすく言えば、彼もプラトンと同じように、「心の目」を考えていたのだ。彼はその目で見た天上の世界を説いた。彼は天からインスピレーションのすべてを引きだしたから、天界の哲人、あるいは天界の信徒と呼ぶにふさわしい。

アウグスティヌスの功績は軽んじることができない。キリスト教と哲学との融合は生やさしいことではなかったからだ。彼のあげた成果は、ヨーロッパのキリスト教世界で何世紀にもわたって重んじられた。アウグスティヌスの寸言のなかには、古典哲学の名残をとどめているものがいくつかある。たとえば「真理はわれらのなかにあり」という言葉からは、ソクラテスの「汝自身を知れ」が感じとれる。「悪とは善の不在なり」という言葉も、彼が元祖なのではない。彼より二世紀前に栄えていた、「新プラトン主義」と呼ばれるキリスト教的プラトン主義の学派がすでに、同じことを唱えていた。

少年時代は悪ガキだった

西暦三五四年にアフリカのタガステに生まれたアウグスティヌスは、西洋の教父たちのなかではとびぬけて重要な人物である。彼はキリスト教を、ことのほか愛したプラトン主義の方向に導きながら、ほぼ一千年にわたって、キリスト教思想に影響を及ぼしつづけた。その影響力は、のちに同じく聖人になったトマス・アクィナスが出て、キリスト教がプラトン主義と相対するアリストテレスの合理主義に向かうまで存続した。

アウグスティヌスは多才な人だったが、彼の多才ぶりは著書にも如実に現れている。なかでも『告白』は、多くの文人や伝記作家だけでなく、哲学者や宗教家、ちまたの人々をも魅了した。『告白』はいまでは古典のうちに数えられているが、この本のおかげで、アウグスティヌスが改心するまでの苦悩の跡が、多くの人々の知るところとなった。

アウグスティヌスは初期キリスト教徒のきびしい精神風土を引き継いだが、回心に至るまでの苦悩の思い出が加わって、その遍歴はいっそうドラマティックになっている。彼は若き日の精神の逸脱をことのほか気にかけていたようだ。『告白』を読むと、つまらないことでも熱心に神の赦しを請うている。子どものころナシの木から実をもいだこと、遊技や見せ物にうつつを抜かしたこと。「それは悪いことだったけれど、私にはおもしろかった」。

けれども彼の心をもっとも苦しめたのは、肉欲との戦いだった。少年期に入ると、彼の内部に消し

がたい火が点いた。制御しがたい欲望に従え、と彼の気質がけしかけた。彼はある女との長い関係によって、その燃えさかる情念と折りあいをつけた。そのあいだにも彼は、肉体の誘惑のかたわらに神の呼び声を聞いていた。しかし神への希求が強まったときにも、ふたつの衝動のせめぎ合いは鎮まらなかった。「主よ、私に貞潔と禁欲を与えたまえ、しかしいますぐにではなく」。

彼のこんな葛藤は三二歳まで続いた。それから意を決して回心し、結婚はあきらめた。そのかわりに、キケロの著作を読んで啓発された真理の探究を楽しむことにした。こうして「信仰が求め、知性が見いだす」という、信仰の喜びと知性の楽しみの、ふたつの道が同時に開けたのである。

アウグスティヌスは三九一年に司祭になり、修道士の道を歩んでいたが、三九六年にヌミディア州の都市ヒッポの教会の司教になった。

時間は魂の延長

『告白』の第一一巻でアウグスティヌスは、とりわけ気になっていた時間というテーマに取り組んでいる。「時間とは何だろう。誰にも聞かれないときにはわかっている。しかしいざ誰かに説明する段になると、もうわからなくなる」。しかしひとつだけはたしかだ、と彼は言う。時間とは、自分自身と自分の産物をしだいに壊してしまう何かなのだ。

しかしこう考えたのはアウグスティヌスが最初ではない。ギリシャ神話のなかに時間の神クロノスの話がある。彼は自分の子どもたちを食い殺すというよからぬ癖を持っていた。どうしてそんなに残

酷なことをしたのだろうか。それは父親のウラノスのせいだった。ウラノスは子どもたちに地位を奪われるのを恐れて、彼らを地中深く埋めてしまった。クロノスは復讐しようと父親の四肢を切り落とし、玉座から追い払った。するとウラノスは息子に、おまえも子どもたちから同じ目に遭わされるだろうと予言した。その予言が実現しないように、クロノスは子どもが生まれるたびに呑みこんでしまったのだ。

何が言いたいかは明瞭だ。時間はできごとをつぎつぎと生みだすけれど、ひとつが生まれる寸前に、そのまえのできごとは葬ってしまう。時間とはなんぞやと自問するたびにアウグスティヌスが味わった敗北は、クロノスの恐るべき神話を哲学が引き継いだものにほかならないのだ。しかしアウグスティヌスはくじけなかった。それどころか彼は『告白』のなかの何章かで、この問題にあらゆる角度から迫っている。彼のそんな努力はまったく無駄だったわけではない。彼の考え方は、何世紀ものあいだ尊重されつづけたのだから。

たしかに時間というのはウナギに似ていて、なかなか捕まらない。過去はもうないし、現在は逃げるし、未来はまだない。空間とは大違いだ。空間なら逃げられる心配なしに、眺めたり、測ったり、計算したりすることができる。アウグスティヌスはそこで、時間も「空間化」すればつかめるだろうと考えた。時間はたえず逃げてしまうのだから、存在しないと言うべきではないのか。いや違う、とアウグスティヌスは言った。少なくとも過去という時間は、記憶という客観的なものを生みだすではないか。記憶のおかげでわれわれは、時間をある程度「空間的に捉える」ことができるのだ。なぜなら測ることができるからだ。この出来事は一〇年前に起こったとか、半年間続いたとか。つまり時間

にそれなりの延長を与えることができるわけだ。
しかしじっさいに延長するものはいったいなんだろうか。もちろん目に見えるものではない。アウグスティヌスは自分の仮説をさらに進めた。「時間とは延長以外のものではないだろう。では何の延長かといえば、魂そのものの延長以外に、私は知らない」。これは時間についての有名な概念で、通常アウグスティヌスが考えたとされている。彼は時間が存在するのは、記憶によって過去にまでさかのぼり、期待によって未来にまで引き延ばせる、われわれの能力のおかげなのだとした。彼の名高い言葉が意味するのはこのことで、彼からすれば、時間とはすなわち魂の延長なのだ。
時間についてのこの新たな概念をまえにして、アウグスティヌスは、信者なら当然考えることを考えた。神は創造するまえはいったい何をしていたのだろうか？　神さまは怠け者ではないから、好奇心旺盛な人々のために地獄を用意していた、と当時はまことしやかに言われた。しかし時間についての心理学的理論を編みあげたアウグスティヌスには、もっと手応えのあるこたえが浮かんだ。時間はわれわれの心理的現象にすぎないとすれば、神は世界と人間とともに時間も創造していて、時間は人間の魂を住みかにしているのだ。だから世界が存在しない時代はないし、時間のない世界もない。神は永遠の現在なのだから、前や後の概念を神のものであるとして神に時間の観念をあてはめることは、もともと不可能であるわけだ。
こんな風だったから、アウグスティヌスの書物は定義であふれかえることになった。神とは？　神とは永遠の現在である。真理とは？　真理は人間の内面を住みかとする。悪とは？　悪とは善の欠如にすぎない。

しかし哲学的に見てとりわけオリジナリティーに富んでいたのは時間についての概念で、これはまさに発見と呼ぶにふさわしいものだった。アウグスティヌスは言った。時間が測れるのは、測るのがわれわれの精神であるからだ。時間が存在するのは人間の魂のなかであり、よく言われるような、過去現在未来という次元のなかではない。

近代哲学はこのアウグスティヌスの発想をふたつの基本的原則に移しかえた。ひとつは時間は人間の精神にあるというもので、もうひとつは時間は観察者と相対的な関係にあるというものだ。前者はカント哲学の基本的前提になった。カントによれば、われわれの精神には生まれつき格子窓がはまっていて、現実を見るのに、時間という格子窓を抜きにしては見ることができない。つまりカラーつきのコンタクトレンズをつけて生まれたようなもので、色つきの現実しか見ることができないというわけだ。

一方、時間は観察者と相対的な関係にあるという原則は、アインシュタインの相対性理論の基本になった。有名な双子のパラドックスはこの原則から生まれている。ふたりのうちの一方が地球に留まっているあいだに、もう一方がSF的な速度で宇宙船の旅をしたら、という話だ。結果はどうなるか。地球に留まったほうが一〇歳になるあいだに、宇宙船に乗ったほうは一〇分しか経過しないというのだ。

アウグスティヌスの想像力がどんなに豊かでも、時間は延長であるという自分の理論がこれほど驚くべき発展をとげようとは、夢にも思わなかったことだろう。

9　トマス・アクィナスとオッカム――中世の哲学者

われわれは信仰への入り口として、哲学を役立てるのがよい。
トマス・アクィナス『ボエティウス三位一体論注解』第三項

必要もないのに存在の数を増やしてはいけない。
ウィリアム・オッカム『論理学大全』第一巻、第一二章

西暦四一〇年にアラリック王の率いる西ゴート族がローマを占拠し、古都を見る影もないほど荒廃させてしまった。この事件は人々の想像をはるかに超えたものだった。アウグスティヌスはこの事件にひどいショックを受け、中世キリスト教の全時代を通して基本的な書物となった『神国論』を書くに至った。異教徒による侵略の時代がすでにはじまっていたわけで、多くのキリスト教徒はこの機を捉えて、これこそ神罰の現れだと声高に唱えた。

こんな時代が終わりを告げると、哲学の分野では、ほぼ一千年という長きにわたる「神学の時代」がはじまった。中世の思想家はすべて、実質的にどこかの宗教団体に属し、おもに神学を研究した。

聖人になった人も少なくなかった。

中世哲学の論争では、ふたつのテーマがとくに目を引いた。ひとつは「人間の思考と神の思考」についてであり、もうひとつはかの有名な「普遍的なるもの」についてであった。

一番目の論点について人々は考えた。われわれの論理にかなうものは神の論理にもかなうのか、さもなければ神は神だけの論理に従って考えるのか？　二番目の論点では、「人」とか「家」などの言葉の裏にあるものが問題になった。それらはたんなる言葉なのか、それとも確固としてあるものなのか？

年月が経つにつれて、神学や哲学などの学校は、ますます哲学思想の本拠のようになっていった。一三世紀から一四世紀に移ると、「学校（スコラ）の哲学」という言葉が哲学そのものをさすようになった。スコラ哲学という名をもらった哲学は、信仰に縛られ制約されてはいたが、理性をないがしろにはしなかった。

思考の論理性の問題は重要な課題で、その解決には知性が必要だったが、それはもっぱら信者のあいだの問題として考えられた。一方普遍的なるものの問題は、教会内部の学者連中を大いに刺激したが、神学の範疇に収まりきれるものではなかった。しかしここでも、主役は神学であることには変わりなかった。何を考えるにも神学に頼った思想家たちには、こたえがすでに用意されていた。普遍的なるものとは神のなかにあるものにほかならず、神がそれをわれわれの精神に移しかえるのだ。

しかし教会のなかにも、きわめて公平な立場からものを考える人々がいた。彼らは毎日の生活でわれわれが経験しているものごとを、もともとは神のものだとすることに抵抗した。毎日われわれがか

かわっているからには、それがたんなるものの名前でも、あるいは概念でも、隅から隅まで人間のものであると考えるのが当たり前ではないかと。

一四世紀の哲学者で、スコラ哲学末期の思想家のなかでもすぐれて近代的だと考えられていたウィリアム・オッカムは、普遍とはたんなる名前にすぎないと言い切った。名前が多すぎるから学説がどれも複雑になってしまうのだ。だから多すぎる哲学用語はどんどん削るといい。そこで彼は、あらゆる余計な言葉を排除して単純化する方策を思いついた。それは血しぶきこそあげなかったが、「オッカムのカミソリ」という恐ろしい名称で呼ばれるようになった。彼が打ちたてた原則は、あるものを表現するのにひとつの言葉で足りるなら、ほかの言葉はもう使うな、というものだった。

天使のような博士

スコラ哲学を代表する思想家はトマス・アクィナスである。彼はアリストテレスの理論と聖書の教義とをうまくマッチさせたことで知られている。異教の徒であるアリストテレスがカトリック教徒のあいだで優秀な哲学者として認められたのは、ほかならぬトマスのおかげだった。しかしすべての信者がアリストテレスを受けいれたわけではなかった。彼の教義のなかには、ほどよく手を加えなければキリスト教の教えと対立しそうなものもあったからだ。アリストテレスをよく思わない連中がそれを反駁の道具にすることは、だから、むずかしいことではなかった。そのために一三世紀の後半には、はげしい論戦が繰りひろげられた。

トマスはパリ大学で、アリストテレス哲学の普及に力を入れた。彼の性格ははげしくはなく、それどころか静かに思索にふけるタイプだった。彼は一二七四年に没し、それから五〇年もしないうちに聖人に列せられた。それは何よりも彼の才能と学説のためだったが、たたずまいが「天使のようだ」という評判によるところも大きかった。じっさいの彼は子羊みたいな男ではなかったけれど、子どもっぽい容貌が助けになったのはまちがいない。彼は肌の浅黒い、頭がいくらかはげあがった大男だった。家柄がよかったから、振るまいが洗練されていた。万事につけて控えめなのも出身のせいだっただろう。彼はいつもひとりで黙りこくっていたから、パリの学者仲間は彼に「口の利けない牛」というあだ名をつけた。

伝記を読むと、彼がときには風変わりなこともやってのけたことがうかがえる。いつもうわの空なのはソクラテスと同じで、無口なのはゼノンと同じだった。それを物語る逸話もいくつか残っている。ルイ九世に食事に招かれたときのこと、会話には加わらないでいた彼が、あるとき突然テーブルを拳固でたたいて大声をあげた。「これだよ！」彼はそのとき、長いこと頭に引っかかっていた異論を破る考えを思いついたのだ。

これなどは、彼がいかに変人であったかを物語るいい例だ。彼は食事の最中でもかまわず思索に没頭していたらしい。周囲のことなど頭になく、目の前の料理にも興味がなかった。ときには食べ物を見もしないで食べていたから、何を食べているのかも知らなかった。給仕係はだから、いつお皿を下げてつぎの料理を出していいやら、ことさら気をもんだ。

食事のことは、いうまでもなく、彼の人生のほんの一端にすぎない。しかしこれもまた尋常でない

彼の神秘体験のほうは、ほんの一端とは言いがたい。彼は使徒ペテロとパウロに啓示を受けたと言われている。そのうえ超自然的な誰かの声から、自分のしていることに同意をもらったそうだ。彼は四九歳の若さで没してしまったが、その後まもなく列聖のための手続きがはじめられ、一三二三年には早くも聖人の仲間入りをはたした。

トマスの最期には現実離れしたお話がある。病に倒れたとき、彼は治療のためにローマに近いフォッサノーヴァにあるシトー会の修道院に移された。人生に別れを告げるにはそこがいちばんいいと、彼自身も考えていた節があり、同じことをフォッサノーヴァの修道士たちも考えていたらしい。彼らはトマスが死んだとき、貴重きわまりない彼の亡骸が行方不明になってしまうことを恐れた。用心深い修道士たちはそこで、恐るべきワザをやってのけた。当時の資料によれば、「彼らはかけがえのない聖なる遺物を失うことを恐れるあまり、気高い師の身体を切り刻んで釜ゆでにした」という。

理性は信仰の入り口

トマスは、信仰に対して理性が果たす役割は「入り口」であり、欠くことのできないものであると考えた。建物の場合、中心部まで達するにはかならず玄関を通らなければならない。信仰もそれと同じで、神髄をつかむにはまず理性という入り口を通らなければならないのだ。神への道はひとつしかない。しかし理性をうまく使えば、神への信仰に達することができる。神への信仰に至る道は正確に言えばひとつではなくて、五つある。しかしそれぞれの道は違っても、目的はただひとつ、神の存在

を受けいれることなのだ。

第一の道は陳腐と言ってもいいほどのことからスタートする。この世のなかには動くものがあるが、動くものはどれも何かほかのものに動かされている。たとえばステッキは手によって動かされる。けれども運動を起こすものもまた何かほかのものに動かされている。そしてそれもまた何かほかのものに、といった具合だ。ここでトマスは議論を呼びそうな飛躍をした。これではどこまで行ってもきりがないと言って、神という第一発動者がいると結論したのだ。

第二の道は第一の道に似ているが、どんな結果にもそれをもたらした原因があり、その原因にはまた原因がある、と連綿と続いていく。しかし、あることがそのことの原因でもある、ということはありえないだろうか。そんなことはありえない、とトマスは言う。なぜなら、原因は常に結果に先行するのだから、あることがそのことの原因であるなら、それ自体に先行することになるが、そんなことは不合理だ。これは明らかで、しかも無限に後退するわけにもいかないなら、第一発動者を認めなければならない。その第一発動者が神なのだ。

トマスは第三の道も提案した。これも前の二通りの考え方に似ているが、いくらか不明瞭な感じはする。人生に起こる出来事のなかには、「かならず起こるもの」と「起こる可能性のあるもの」とがある。人間はかならず死ぬけれど、病気で死ぬか事故で死ぬかはわからない。必然的なことはお互いにつながっている。人が死ぬのは、人は生き物で、その寿命にはかぎりがあるからだ。その寿命はこんどは、地上のことならかならず繰り返されるということにつながっている。自然界でも同じことが言える。今日雨が降るかどうかは可能性の問題だが、季節が入れ替わるのは必然性による。ここでも

また無限の繰り返しなどありえないのだから、それ自体必然的で、ほかの必然性に左右されない究極の何かを考えなければならない。いうまでもなく、この何かとは神以外にはありえない。

カトリックのような位階を重んじる社会では、完全かどうかということが重要な問題となる。そこでトマスは四番目の道を考えた。あるものがほかのものより熱いのは、そちらのほうが最高度の熱さに近いからだ。同じようにして、あることがほかのことより高貴なのは、そちらのほうがもっとも高貴なものに近いからだ。熱さという点で最高度である火は、ほかのすべての熱の原因になっている。同様にして、あらゆるものに、その完全性の程度を決めるひとつの原因、つまり最高に完全な存在があるはずだ。

この四つの道に共通した特徴は、どれも後戻りの繰り返しの上に成りたっていて、後戻りが無限に続くことはありえないから究極の存在である神を考えなければならないというものだ。ところが五番目の道はこの四つとは逆で、先へ進む道だった。自然界では、矢が射手から的にまっすぐ向かっていくように、あらゆるものがある目的に向かって前進しているかに見える。しかし知性をもたない自然物がみんなある目標をめざすのなら、それらを導く、それらより優れた知性がなければならない。それこそが神の知性なのだ。

これら五つの道は信者からもそうでない人々からもくそみそにやっつけられた。信仰を持つ人は、神をいっさいの経験なしに認識できるア・プリオリな存在と捉えたかったし、そうでない人は、神学にくらべてトマスが理性や哲学に補助的な役割しか与えなかったことに不満だった。しかし、トマスの肩を持って言えば、彼が理性に与えた役割はたしかに補助的ではあったけれど、ただのアクセサリ

ーではけっしてなかった。彼からすれば、理性には信仰が必要であったが、信仰にとっても理性は欠かせなかったのだ。

オッカムはペンで、皇帝は剣で

中世哲学の最後を飾るのは、フランチェスコ修道会の修道士でイギリスの優れた思想家であった、ウィリアム・オッカムである。彼は卓越した論証家であったから、同時代の哲学者仲間は彼を「無敵博士」と呼び、ものごとの考え方が近代的だったから、「概念の君子」とも呼んだ。生まれたのは一二八五年ごろで、オックスフォードのフランチェスコ修道会で研究をはじめ、大学教授への道を歩みはじめた。

しかしその後、頑固なトマス主義者だった大学の学長に阻まれて、とうとう教授にはなれなかった。そして四〇歳にして早くも教会側からの攻撃の的になった。そのころはまだ、教会が自由な精神を迫害するために設けた異端裁判所というのはなかった。しかしライバルであったドミニコ派は警戒を強め、オッカムの多くの教義が正当な教えに背くことを見逃さなかった。

こうして一三二四年、オッカムは教皇ヨハネス二二世によってアヴィニョンに呼ばれ、ドミニコ会士であるオックスフォード大学学長をメンバーに含む委員会の審判を受けた。審判は四年もかかり、そのあげく、オッカムの著作のなかの命題でパスしたのはたったの三つだけ、という結果に終わった。七つは異端、三二は偽りとされ、四つは分類不可能ということだった。

オッカムは声望が高かったから戒告だけでその場は済んだが、フランチェスコ会総長チェゼーナのミケーレに従ってアヴィニョンを離れ、ピサに逃れて、バイエルンの皇帝ルートヴィヒの庇護を受けた。皇帝はオッカムを大歓迎したという。言い伝えによれば、ふたりは一目見たときから気が合い、オッカムは皇帝に力強く言った。「陛下、私を剣で守ってください。私は陛下をペンで守ります」。

そんなわけでオッカムは、哲学者も政治に無関心でないほうがいいことを経験から学んだ。だからさっそくそっちの方面も研究しはじめた。それまでの彼の著作はほとんどすべてが神学と論理学に関するもので、とくに論理学の分野では並はずれた才能を発揮していた。政治の分野にも手を染めてからは、当時の教会勢力に対抗して、フランチェスコ会の唱える清貧主義を擁護した。しかしルートヴィヒとの友情が深まるにつれて、皇帝と教皇との関係のほうに興味の中心が移り、皇帝の権力を教皇権から守ることに腐心した。ルートヴィヒはやがて、イタリアを離れてミュンヘンに移らなければならなくなった。彼はオッカムをミュンヘンに伴い、彼が死ぬまで面倒を見た。オッカムは二年にわたってヨーロッパを震撼させた黒死病のために、ミュンヘンで世を去った。

カミソリの原理「よけいな思想は削ってしまおう」

オッカムの名はカミソリのイメージとともに歴史に残ることになった。無敵博士は、スコラ哲学が盛んになるとともに哲学の概念が無数にふえたことに頭を痛めていた。

オッカムすなわちカミソリ、という公式に異論を唱える人はいない。けれども彼のカミソリの理論

の表現には、ちょっとあいまいなところがある。彼の原理を有名にした言葉は、著作のなかには出てこないのだ。「必要もないのに存在の数を増やしてはいけない」と言えばじつにわかりやすいのだが、彼の著作のなかにこれに似た定義はあっても、それほど明快ではない。いわく、「少ない手段でできることを多くの手段でするのはばかげている」、あるいは、「必要でなければ、多数を導入するべきではない」。

オッカムが哲学界の理髪師になったことを、誰もが喜んだわけではない。スコラ哲学の思想家たちはオッカムとは逆に、微細な区別にあくせくしていたからだ。形而上学では質料と形相の区別に、論理学の分野では普遍なるものの分類に、学者たちは精を出した。区別や分類に長じていればいるほど、エキスパートをうならせ、名誉ある肩書きをもらった。だから自分の教義を「床屋へ行って」そり落としてもらおうなどと考える学者はひとりもいなかった。

オッカムの最初のお客は、いうまでもなく、当時ダントツの哲学者と考えられていたアリストテレスだった。中世哲学の豊富な概念や用語は、もっぱら彼の著作から引きだされたものであったからだ。アリストテレスには、プラトンの空想的なイデアに対抗するものとして、個々の存在だけでは足りず、類や種まで必要だった。第一の存在として個があり、第二の存在として類と種があるというわけだ。彼はハーメルンの笛吹きよろしく、その複雑な理論で中世の大方の哲学者をさらってしまった。

オッカムはただそり落としただけではなく、そのたびに、複雑きわまりない理論を簡単な理論と置き換えようとした。そのやり方を代表するのは、質料と形相の区別を考えたときのものだ。アリストテレスがおこなった質料と形相の分割は「個体化の原理」という名で有名になった。たとえばこんな

風だ。ソクラテスもプラトンも質料と形相から成っているとすれば、この両者を区別するものは何か。質料か、それとも形相か？　トマス・アクィナスはどちらとも言えないとして、マテリア・シグナータ（限定質料）なる第三のものをひねりだした。これは個物を別の個物から区別する何かを持つ質料なのだそうだ。

しかし、どうして単純な存在をわざわざ複雑にする必要があるのか、とオッカムはかみついた。ソクラテスにもプラトンにも人類という共通した種の概念があるのに、それをさらに区別する概念をつけ加えようとするなんて。こうしてオッカムは、アリストテレスの質料も形相も、トマスの限定質料も、みんなそり落としてしまった。それぞれの特殊性をもった個物だけあれば十分で、そのほかの概念など無用の長物でしかないと。

では普遍の問題は？　それも削ってしまえばいい。普遍的なものなどなくて、あるのは特殊なものばかりだ、とオッカムは言う。しかし哲学者のなかには、普遍的なるものは万物のなかにある、と主張する人たちもいた。でもそうなると、普遍的なるものはものの数だけあることになり、それでは個々の存在と区別できなくなる。つまり普遍的なるものではなくなってしまうではないか。

普遍的なるものを削ってしまうと、残るのはそれを表現する言葉だけになる。それぞれの言葉は、ある多数のものをさすのに好都合なサインではある。しかしいずれにしても、それは実体ではない。

オッカムのしたことは、中世哲学の核心を直撃する革命だった。オッカムはためらわずにそれをやった。なぜなら哲学に激震を起こすことは、彼の闘争的性格にぴったりだったからだ。政治の分野で皇帝と手を結び教皇の権威を揺さぶったのも、やはりこの闘争好きな性格だった。

10　フィチーノとエラスムス――人文主義の双璧

第三の本質（霊魂）は、最高のものをつかみながら最低のものも放さない。なぜなら、どちらかを放してしまうと、どちらかに傾いてしまうからだ。そうなったらもう万物の真のつなぎ目ではなくなってしまう。

マルシリオ・フィチーノ『プラトン的神学』第三巻、第二章

人間の生きざまというものは、狂気の戯れ以外の何ものでもない。

デシデリウス・エラスムス『痴愚神礼讃』二七

一五世紀になると、普遍の問題はもはや哲学者の興味を引かなくなった。中世の論争はもはや風前の灯火だった。思想界に新風を送るために人々は古代に目を向けはじめ、わけても名高い箴言、ソクラテスの「汝自身を知れ」に立ち返ろうとした。人文主義者は、この言葉こそ人間とその精神を理解するためのカギだと考えた。われわれの心を考えるとき、どんなことが見えてくるだろうか。そのこたえは考える人ひとりひとりによって異なる。

中世の形而上学の域をまだ脱していなかったのがマルシリオ・フィチーノだった。「霊魂は万物のリンクである」という彼の有名な言葉のなかには、新たな人間讃歌とともに、人間を普遍のヒエラルキーのなかに位置づけようとする伝統的姿勢も読みとれる。

しかし人文主義者の興味の向かうところには、平凡な精神だけでなく、風変わりな精神もあった。その点で群を抜いたのは、かの有名な『痴愚神礼讃』を書いたロッテルダムのエラスムスである。彼の箴言は変わっていて、人生は狂気の沙汰だというのだ。けれどもこの言葉は、一読して感じるほど異様ではない。じっさい、どこから見ても理にかなった行為が陳腐なまやかしであることは少なくないのだ。その反対に、ちょっと奇抜な行為が日々の生活を豊かにし、味わいを深めることも少なくない。

哲学者から宗教家へ

マルシリオ・フィチーノは一四三三年、フィレンツェにほど近いフィリーネ・ヴァルダルノに生まれた。彼の出現を機にして、教会は俗界にバトンを渡すことになった。キリスト教からすれば、古代の哲学はまさに世俗の哲学なのだ。古代哲学をキリスト教と融合するためにフィチーノはまず、宗教的な傾向のある哲学者プラトンからはじめた。フィチーノがフィレンツェに創設したサークルは「プラトン・アカデメイア」と呼ばれ、そこには哲人や文人だけでなく、彼のパトロンだったコジモ・デ・メディチやロレンツォ大公までもが足繁く出入りした。

古代の哲学に熱をあげていたフィチーノは、ギリシャ哲学とキリスト教哲学をつなぐ一本の道をつくりたかった。彼は、神の啓示はキリスト教が生まれるまえからあり、それは過去の賢者たちの足跡を追えばつかめると確信していた。ピタゴラス、ヘラクレイトス、プラトン、アリストテレス、新プラトン主義者、アウグスティヌス、アラブの賢人たちという風に。彼らを追っていけば、「敬虔な哲学」と「学識ある信仰」という、哲学のふたつの傾向をつかむことができるはずなのだ。当時まで、哲学には不信心という欠点が、信仰には無知という欠点があった。しかし哲学と信仰が結びつく時代がいよいよ到来したのだ。

フィチーノは何よりも哲学を宗教の圧力から解放したかった。しかし一四七四年に、重病にかかるという災難に遭った。ギリシャ哲学の本を読んでも治らなかったその病気が、聖母マリアにお祈りをしたらすぐ治ってしまった。もともと魔術や天文学が大好きだった彼は、これを機に司祭になる決心をした。こうして彼の哲学は、しだいに世俗を離れて宗教色を強めていった。

フィチーノは坊さんとして新たな生活をはじめると、若いころ執着していたテーマを捨ててしまった。彼は若いころ、『快楽論』などの論文を書いていたのだ。司祭になってからはキリスト教を深めることに専心し、哲学と信仰との融和を実現させようと、大著『プラトン的神学』を書きあげた。彼の意図するところは、やがてはじめたプラトンの対話篇の翻訳と注釈という作業を通して、ますます明確に見えてきた。彼の『饗宴』の翻訳は、それまでにないほど高い評価を受けた。

フィチーノはやせっぽちの小男で、アリストテレスのようにいくらかどもり、ふいに憂鬱になることもあった。性格は穏和で、静かな場所で本を相手に過ごすのが好きだった。偉大なパトロンに恵ま

れるという幸運な時代に生きたため、研究に没頭する夢を叶えることができた。フィチーノはコジモ・デ・メディチからカレッジの別荘を提供され、そこに「哲学の参謀本部」を置いた。彼は性格はおとなしかったが才気煥発で、その力強い著作は、人間を宇宙の中心におくという思想の真の記念碑になった。

霊魂は万物のリンクである

フィチーノは宇宙への感嘆と人間であることの誇りという、人文主義者たちがとりわけ好む感情をテーマにしたから、彼らのあいだでの評判は上々だった。過去の哲学者でこのようなテーマを好んだのはプラトンであり、ことに彼の学説を進展させた新プラトン主義者たちだった。彼らはプラトンの哲学を、キリスト教の精神よりユダヤ教の精神で広めようとした。彼らの見る宇宙は、たえず活気があり階層的な秩序のある巨大なシステムだった。

新プラトン主義者たちよりまえに、アリストテレスも宇宙の階層的構造には目を奪われていた。しかし彼はもっぱら科学的な冷めた目でその構造を研究し表現した。ところがフィチーノは、プラトンの仲間の熱狂を受け継いだ。宇宙の階層構造をまえにして彼は、目を丸くしてうなってしまった。

しかしフィチーノが何より感心したのは人間だった。人間が賛嘆するべきものであるのは、霊魂という活力あふれるエッセンスのためだ。霊魂のおかげで人間はほかの動物とは格段に違うのであり、泣いたり笑ったりすることができるのだ。顔の表情から心の状態が読みとれるのは人間しかいない。

「エッチな奴、臆病者、怒った人、うれしい人、悲しい人など、どんな人間でもただちに見分けられるではないか」。

霊魂の何より驚く特質はいろんな能力を持っていることだ。身体を養うときには植物のようになり、感覚に身を委せるときには動物のようになる。ものごとの本性を探りたいときには情熱的になり、数の持つ魔力を駆使したいときには貪欲になり、神の神秘に触れようとすれば天使のようになる。このマルチタレントぶりを見てフィチーノは、人間は「あらゆる生物の生命を生きることによって、どんなものにもなれる」と断言するようになった。

霊魂のこのずば抜けた能力を表現するのに、フィチーノはイメージとメタファーを考えだした。霊魂は自然界の要であり、万物をつなぐ鎖であり顔であり、宇宙の交点である。しかしメタファーのなかでもピカイチなのが「万物のリンク（コプラ・ムンディ）」だった。ラテン語のコプラ（copula）には、カップルという意味と、ふたつ以上のものを結ぶもの、という意味がある。フィチーノがメタファーで言いたかったのはこの後者のほうだった。

じっさいどんな文章も、主語と述語と、それから結合部という三つの部分から成っている。たとえば「人間は死すべきものだ」という文章では、リンクである「……は……だ」は「人間」という主語と「死すべきもの」という述語を結ぶ働きをしている。いうまでもなくフィチーノは、現実を支配する論理は言葉の論理と同じものであると考えていた。したがって彼にとっては、人間の、というよりその霊魂の役割は、高等下等を問わずあらゆる段階にあるものを結ぶことにあった。

霊魂は身体とその資質よりは上だが、天の知性や神よりは下だから、宇宙の真ん中あたりに位置す

る。だから、霊魂は万物のリンクであるというのは、空間的にも間違いではない。そこでフィチーノは、人間を世界の中心におくだけではなく、人間の核である霊魂を宇宙の中心においた。そして霊魂を表わすのにギリシャ語を語源とするプシケー（psiche）が使われていくうちに、フィチーノの哲学はあたかも偉大な「心理学」のような感じになった。もちろんここで言う心理学は、科学や医学の分野からはまだほど遠い。経験心理学が誕生するには、一九世紀の後半まで待たなければならないのだ。

人生とは狂気の沙汰だ

ルネサンスの思想家のなかには、当時の思潮に疑問を抱き冷笑する者もいた。そのひとりはロッテルダム生まれのオランダ人で、一四六六年から一五三六年にかけて生きた男だった。本名はまるで言葉遊びみたいで、ゲール・ゲールルツという。しかし彼は自分の名前をラテン風にデシデリウス・エラスムスに変えたから、エラスムスとして知られるようになった。ルネサンス期には、辛辣さにおいて彼の右に出る者はなかった。そこで「一六世紀のヴォルテール」という異名を頂戴した。

彼の著書『痴愚神礼讃』はほとんどすべての言語に翻訳されている。書き方はいやみたっぷりで、狂気の沙汰を礼讃するのはたんに皮肉のつもりでなのか、それともじっさい理性より狂気のほうがよほどいいと思っていたのか、はっきりしないほどだ。この無情な本を信じるなら、狂気の沙汰でないものはひとつもなくなってしまうので、つまるところ、人生とは狂気の沙汰でしかない、ということになる。それではエラスムスは、狂気の対極にある理性に軍配をあげるつもりでいたのか、と思った

らそれは間違いだ。それどころか彼は、理性は人間の相談役のなかでも最悪だと考えていた。ソクラテスが毒ニンジンを飲んだのは理性のためだし、ローマ時代の戸口調査官だったカトーが告発を重ねることによって国の平和を脅かしたのも理性のためだった。

『痴愚神礼讃』がおもしろいのは、エラスムスが得意になってする提言のためではなくて、彼一流の攻撃のためだ。エラスムスはその破壊的精神で文章を元気溌剌にしただけでなく、当時の社会や文化のなかに居座っていた情けないリーダーたちへのけなし方に、冴えた腕を発揮した。

エラスムスが何よりも威勢よくこきおろしたのは、自分の出所でもある教会世界だった。司祭の息子であった彼は、二〇歳を少し出たころ修道士になるための誓いを立て、アウグスティノ修道会に入った。それから二九年間、いやいやながら教会に留まったが、いろんなことに嫌気がさして、『痴愚神礼讃』のなかで述べているように、長年我慢していた修道院に別れを告げた。

エラスムスの鋭い牙にかかった生け贄のなかで、クレージーなのは神学者であり、教皇や枢機卿たちであり、はては信心深い浮浪者たちだった。なかでもひどいのは神学者である。彼らは頭がおかしいうえに恐ろしい存在でもある。なにしろ異端の告発という人殺しをやってのけるのだ。彼らは信仰の不可解な部分もためらわずに大衆に説く。離れ業がどうしてもやりたくなると、かなり微妙な問題にまであえて触れる。「神は女や悪魔やロバやカボチャや石のかっこうもできただろうか。そうなったら十字架はいったいどうなっただろうか」という具合だ。

宮廷での狂態のこととなるといっそうひどい。とりわけ目立つのは宮廷人だ。彼らは奴隷根性というウイルスにやられている。「彼らがこのうえなく幸せなのは、王を『わが君』と呼ぶときであり、

短いほめ言葉でこびへつらうことを覚えて、『陛下』や『殿下』や『閣下』といった言葉をぽんぽん口にできるときだ」。彼らが日ごろやっていることをエラスムスはあげつらう。「連中は昼ごろまで寝ている。そのうちに金で雇われた補助司祭がベッドの足下であたふたとミサを挙げる。それからやっと朝食になり、終わったかと思うまもなく昼食だ。そのあとはさいころ遊び、チェス、道化芝居、高級娼婦、くだらないゲームや暇つぶし」。

しかしどうしてこの本には、『痴愚糾弾』ではなくて『痴愚神礼讃』というタイトルがついたのだろうか。それは、本の大方を占めるけなしたりたたいたりする部分が、ただひとつの目的のために、すなわち、人間のすることの多くはまったく理屈に合わないものだと言いたいがために書かれたものであるからなのだ。

エラスムスはじつは、理屈に合わないことがすなわち人生や幸福を損なうものではないと言いたかった。それどころか、人生の味わいは情熱やその常軌をはずれたほとばしりから生まれることが少なくない。それを疑わなかった古代の人々は、ゼウスが人間をつくるときに、多くの部分を理性にではなく情熱に割りあてたのだと考えた。「ゼウスは理性を頭という片隅に追いやり、身体のほかの部分はすべて、無秩序な情熱に委せた。そして理性という孤軍には、凶暴きわまりない暴君として、生命の源である心を占める怒りと、帝国の勢力を下方のセックスにまで伸ばす色欲という、ふたつの敵を与えた」。

しかし懐疑論者のエラスムスはいつも楽しいわけではなかった。社会の狂態を暴いて見せたが、本心では、もう少しまともであればいいと思っていたにちがいない。それを物語るように、多くのペー

ジに憂鬱な気分が漂っている。人生の意味を宗教や哲学に見いだそうとしたのもエラスムスにとっては失敗だった。結局のところ死にぎわには司祭への罪の告白すら拒否したという。

11 ジョルダーノ・ブルーノ――ルネサンス期の反逆者

宇宙の広さは無限であり、世界も無数にある。なぜなら、神の卓越性は有限のもののなかより、無数のもののなかにはるかによく現れるからだ。

ジョルダーノ・ブルーノ『無限、宇宙、諸世界』第一巻

異端、魔術師、危険分子。教会はルネサンス期のもっとも公平な哲学者たちをそう見ていた。しかし彼らは、当時の哲学史のなかではけっこう長い航跡を残している。なかでも有名なのは、ともに南イタリア出身のジョルダーノ・ブルーノとトンマーゾ・カンパネッラだった。とりわけ異端としてマークされたのはブルーノの思想であり、魔術師で政治的危険分子と見なされたのはカンパネッラだった。

今日から見れば、カンパネッラよりブルーノのほうが近代的だ。宇宙の無限性の問題を、哲学の純粋に形而上学的な問題としてではなく、具体的な問題として扱ったのは、ほかならぬブルーノだった。しかし、宇宙は無限であるという彼の考え方はまちがいなく異端だった。この考え方を含めた彼の概念のいくつかは、今日でもまだ注目されている。現代に至るまでのあいだに、科学、それもとくに物

理学が長足の進歩を遂げたのは事実だが、それでもまだ彼の仮説が価値をなくしたわけではない。そのうちのひとつはSFめいているけれど、ほら話と考えて笑い飛ばせるものではない。それは、この宇宙には多くの世界（天体）があって、どれも自然法にかなっており、いくつかの世界には生物がいて、思考力のある生物までいるというものだ。

しかしこれは、当時としてはかなり勇気のいる仮説だった。教会はもちろんこの仮説を異端とした。なぜならそれでは、天啓の現れる場所であり、考える生物を住まわせる「特権」を神が与えた場所としての地球が、存在理由を失ってしまうからである。当時公認されていた科学も、そんな仮説は想像すらしていなかったので、不合理の刻印を押しつづけた。同時代のイギリスを代表する学者フランシスコ・ベーコンでさえ、若いころロンドンでブルーノの口からじかにその説を聞いてはいたが、耳を傾ける価値などないと考えていた。ところが今日では、SFがさかんに彼の仮説をテーマにしているだけでなく、信頼できる科学自体が、仮説の正当性を否定していない。

放浪の人生

ルネサンス期イタリアの哲学の雄ジョルダーノ・ブルーノは、筋金入りの異端として一六〇〇年にローマのカンポ・デイ・フィオーリで火あぶりになった。しかしそのとき以来、彼は自由思想家のシンボルにもなった。同じ程度の重刑をくらった人として、はるかむかしにはソクラテスがいる。両人ともその時代には罰せられて当然の罪を犯したわけだが、罪の中身は同じではない。ソクラテスは政

治的復讐の的になり、ブルーノのほうは教会の不寛容の犠牲になったのだ。

ブルーノの赦しがたい罪とはどんなものだったのだろうか。彼が説いたのは、教会に背けとかモラルなど忘れろといったことではなかった。彼はただ、宇宙は聖書に書かれたようなものではないと言いたかったのだ。宇宙は無限であり、そこには無数の世界があるのだと。しかし一六世紀に唯一認められていた自然科学は聖書が容認する科学であって、それからすれば宇宙は無限ではなく、この地球が、存在する唯一の世界であった。

ブルーノはルネサンス期の典型的な反逆思想家だった。一五四八年にイタリア南部カンパーニアのノーラに生まれたが、一五歳にして故郷を離れ、ドミニコ会に入る。そこでまれに見る天分と記憶力を発揮した彼は、神童と言われるようになった。しかし彼はまもなく、ドミニコ会の教義を恐ろしい重荷と感じはじめた。彼からすればその教義は理性に反するだけでなく、自然にも反するものなのだ。ブルーノは情熱的で、そのうえ妥協が大嫌いだった。そこでさっさと僧衣を脱ぎ捨て、これ見よがしに教会にたてつくようになった。

これを皮切りにして、大胆不敵な反抗の埋めあわせのように、長年の逃亡生活がはじまった。どこへ行っても遭うのは敵意と迫害ばかり。イタリアからはじまった放浪は、ジュネーヴ、トゥールーズ、リヨン、パリと移っていった。フランスはほかの国より寛容だったから、彼がミサに出ることさえ拒まなければ、大学教授にもなれるところだった。けれども彼はイギリスへ、ドイツへと放浪を続けた。それは敵から逃れるためだけでなく、彼のウルトラ級に刺激的な著作を出版してくれる、出版界の勇者を探すためでもあった。

ブルーノはドイツもあきらめると、チューリッヒに向かったが、ここで宿命的な招待状を受けとった。ヴェネツィアの貴族ジョヴァンニ・モチェニーゴが、彼を客人として迎えると言ってきたのだ。モチェニーゴは彼に記憶術と、それからおそらく魔術も教えてもらおうとした。当時は魔術が流行っていたから、ブルーノもためらわずにやっていたのだ。

けれどもエピローグは悲劇だった。モチェニーゴがブルーノに失望したのか、それとも彼のはげしい冒瀆に恐れをなしたのか、そこのところはわからない。とにかくブルーノはモチェニーゴによってヴェネツィアの異端裁判所に告発されてしまった。しかしこれだけならまだ救いようがあった。ヴェネツィアの異端裁判所はローマにあるもう一方の異端裁判所ほどきびしくはなかったからだ。サン・マルコ広場で火あぶりにされた人はひとりもいなかった。

しかしブルーノは気の毒にローマに送られ、それから八年も牢獄で暮らした。裁判はいつまで経っても終わらなかった。自説を捨てよと何度迫られてもブルーノは、後悔するべきことはないし、何を後悔するのかさっぱりわからないと、がんとして突っぱねた。ベッラルミーノ枢機卿でさえ、彼の意を翻させることはできなかった。枢機卿は教皇クレメンス八世にも助力を願ったが、ブルーノはとにかく早く刑を宣告しろと言うばかりだった。そこで教皇庁はおきまりの文句で判決を下した。いわく「最大の寛容心をもって無血の罰を与えよ」。嘘みたいだが、宣告の文句はまさにこうなのだ。じっさい生きたまま火あぶりになったとき、血は一滴も流れなかった。

ブルーノは死刑の判決が下されたとき、裁判官たちに向かって言ったという。「判決を受けたわたしより、判決を下したあなた方のほうが震えている」。いざ死ぬことになったとき、司祭が彼に十字

架を示し、和解するようにうながしたが、ブルーノは目を背けた。

宇宙は有限ではない

ブルーノはコペルニクスには感服していたが、彼の学説の全部を納得したわけではなかった。地球が太陽のまわりをまわっていることはうなずけたが、太陽が宇宙の中心であるとは思えなかった。彼はコペルニクスを崇敬しながらも、一方では確信していた。宇宙は無限であるという説を、天文学者としても神学者としても、コペルニクスは受けいれないだろうと。

すでにコペルニクスが、唯一公認されていたギリシャのトロメオスの天文学とは異なる学説を唱える際に、かなり用心していた。地球が宇宙の中心ではないと主張することは、教会へのまぎれもない挑戦であったからだ。

コペルニクスはその主著『天体の回転について』で、アリストテレスやトロメオスが与えた特権的な地位から地球を引きずりおろし、おまけに宇宙空間を極端に押しひろげていた。一方で彼は、宇宙は有限で、動かない星々の散らばる動かない球体のなかに収まっていると思いこんでいた。つまり革新的でありながら保守的でもあったのだ。

だからブルーノは、コペルニクスを尊敬しながら、けなしてもいた。彼はアリストテレスの物理学を蹴っとばす勇気はあったのに、権力には逆らえなかったのだと。アリストテレスは、完全なるものとは限定されたものであると考えていた。宇宙は完全なるものにちがいないから、巨大だが有限の球

体という、閉ざされた場所であるはずだと考えたのだ。この根深い思いこみを覆すために、ブルーノは思考力や直観力や空想力を総動員して、ありったけのエネルギーをそそいだ。

しかし宇宙が無限なら、われわれのいる宇宙は存在する唯一の世界ではありえない、とブルーノは考えた。目に見える天体のほかに天体はないと考えることは、わが家の窓から見える鳥のほかには鳥はいないと考えるようなものではないか。

宇宙の構造を表現するのにブルーノは、推理力だけでなく空想力もフルに使い、無限の宇宙を思い描く困難を克服した。われわれがいま、宇宙のどこかにいると想像してみよう。われわれの前や後ろは無限の空間である。つまり宇宙の中心はどこにでもあるわけなのだ。一方その周縁はといえば、どこにもない。ということは、この無限の宇宙には高低もないし天地もないわけだ。こうして彼は、アリストテレスの考えた、地球上にあるものの本質とほかのさまざまな天体にあるものの本質とを分ける深い溝を、さっぱり取り払ってしまった。

さらにブルーノは神学までやり玉に挙げた。トマス・アクィナスが聞いたらさぞ怒るだろうが、ブルーノは、もし神が世界の無限の原因であるなら、世界は神の無限性に適ったものでなければならないと言った。ベッラルミーノ枢機卿がこの学説に異端を感じとったのは無理もない。この種の異端は新プラトン主義者をはじめとする哲学者のあいだに広まっていた。「汎神論」という、すべては神なりという意味のギリシャ語から出た言葉で呼ばれるものがそれだった。この考え方からすれば、神は世界の第一原因であるばかりか、万物に内在する原則にさえなってしまう。

ブルーノは自然にも魅了されたが、自然の魅力は、人間も含めて、たえまなく変化するところにあ

った。人間の気持がもっとも高揚するのは、自然への探究欲に燃えるときだという。この情熱をブルーノは、有名になった「英雄的な狂気」という言葉で呼んだ。「英雄的」という言葉には今日のような意味はなく、ギリシャ語のエロス（eros）が表わす、至高の美への希求というプラトン的な愛を示している。これはブルーノからすれば、無限と結びついたものにほかならなかった。

精神と感情のこの種の熱狂は、いうまでもなく、教会の許容するところではなかった。このために、ブルーノと彼の修道士仲間とのあいだには、深い亀裂ができてしまった。この一件だけを見ても、宇宙は無限であるというブルーノの説を教会がいかに毛嫌いしたかがよくわかる。彼の説を異端としたのは、それが聖書の教えに反していただけでなく、教会から見れば逸脱でしかないヒロイックな狂気へ人々を駆りたてるものであったからなのだ。

12　ベーコン、ガリレオ、ホッブス――科学の三ヴィジョン

知識とはすなわち人間の力である。

フランシス・ベーコン『ノウム・オルガヌム』第一巻、三

哲学は、宇宙という常に目のまえに開かれている偉大な書物に書かれている。その書物は数学という言語で書かれていて、文字は三角形や円やそのほかの幾何学図形である。

ガリレオ・ガリレイ『贋金鑑定官』六

人は他人にとってはオオカミである。

トーマス・ホッブス『市民論』一

一七世紀になると、哲学者兼科学者というニュータイプの思想家が出現した。ガリレオのようにおもに科学の分野で活躍した人もいるし、ホッブスのように、哲学とともに倫理学や政治学にまで目を

向けた人もいる。その真ん中あたりに位置するのがベーコンで、彼の場合、方法はきわめて科学的だが、数学にはほとんど縁がなかった。

ベーコン、ガリレオ、ホッブスは、それぞれに違いはあっても、表現の仕方はまさに科学的で、言葉もじつに明快である。ベーコンは「知識はすなわち力である」と言い、ガリレオは「宇宙とは数学という言葉で書かれた書物である」と言い、ホッブスは「人は他人にとってはオオカミである」と言った。これらの言葉には普遍性があり、しかも科学の公理のようにきっぱりしている。そのうえ人間の興味が向かう全域を網羅している。ベーコンの言葉は科学者の目標を明らかにし、ガリレオの言葉は自然の構造を明確に述べ、ホッブスのそれは人間の本性を鋭く突いている。

この三人の言葉から、科学についての三つのヴィジョンが引きだせる。ベーコンの科学はテクニックであり、ガリレオのそれは数学であり、ホッブスのそれは予測の道具なのだ。しかしこの三つのヴィジョンは、それぞれ異質のもの、あるいは矛盾したものではなかった。それどころか、三つのヴィジョンの共存から新しいテクノロジー文明が生まれ、一七世紀の後半に花開いた。

皮肉屋なのか悪党なのか

フランシス・ベーコンはイギリス文化の華であった。彼はそのアヴァンギャルド的思想のために、モーセにたとえられている。モーセは約束の地に民を導いたが、ベーコンは近代的テクノロジーの時代に人々を導いた。しかしベーコンは偉大な哲学者である一方で、すこぶる野心的で、しかも遠慮を

知らない男でもあった。一五六一年にロンドンで生まれた彼は、生涯を通して、科学研究と同時に政治活動にも精を出した。全体的に見てどんな男だったか判断するのは容易でないが、一八世紀イギリスの詩人ポープによれば、「教養と才気にかけては抜群だが、誰よりも下劣な男」だったという。この手きびしい人格批評は、ベルラムの男爵になり、ついでオールバンズの子爵になったベーコンの華やかな称号とは、みごとなコントラストをなしている。

しかし当時の年代記を信じるかぎり、この批評にうなずかないわけにはいかない。ベーコンは君主への絶対服従に疑問を示した教会人を拷問にかけた。ピーチャムというその司祭はその後獄死している。さらに悪いことにベーコンは、友人であるエセックス伯を有罪とするのに誰よりも熱心だった。王室顧問官だったとき、伯に大いに持ちあげてもらっていたのにである。

ベーコンは冷酷な皮肉屋であったばかりでなく、不正直でもあった。一六二一年に国会は、裁判官としての汚職で彼を告訴した。ジェームズ一世のもとで法務長官になって三年目、まさに全盛期の彼を襲った青天の霹靂だった。

かくしてベーコンの権力は砂上の楼閣のごとく崩壊した。彼は自分の罪を認めることを余儀なくされ、悪名高いロンドン塔に幽閉されることになった。そのうえ重い財産刑、宮廷からの追放、それに公務停止が言いわたされた。しかしそのあと、ミステリーまがいの大転換が起こった。四日もしないうちに王が彼をロンドン塔から解放し、おまけに財産刑も免除したのだ。ベーコンはじっさいには、彼より上位の誰かをかばおうとしただけなのだという噂が宮廷に広まったが、数年あとに王がベーコンを宮廷や上院に呼び戻したことを考えると、それは嘘ではなかったようだ。

しかしそんなわけで、ベーコンはほんとうは潔白なのだという連中と、そうではないと主張する連中とのあいだに論争がはじまった。ベーコンはやましいところはなかったのに、政治的陰謀に巻きこまれたのだろうか。そうだとすれば白黒の判断は容易には出ない。そうこうするうちに彼本人は、政界には戻らずに田舎に引きこもってしまった。

ベーコンは無罪だとする人々は、彼の裁判は政治的色彩が強いと言い張った。ベーコンは悪党でないどころか、むしろ犠牲者なのだと。一七世紀イギリスの俗悪な政界にうごめく政敵たちの生け贄になったのだと。

ベーコンがお金と贅沢を好んだことは事実らしい。しかしその行動には、いつもどこかしら気品があった。彼の肖像画を見ると、どの顔も気高く立派に見える。だから彼の弁明も嘘ではなかろうと思えてくる。告訴人から金品をもらったのは裁判官としてではなくて、贈呈品は受けとるのが当然という世の習慣に従ったまでだ、と彼は言った。無罪を主張する人たちによれば、受けとった贈り物に目の色を変えたりしなければ、誉れある裁判官の名は汚されないのだ。いずれにしても、彼がいかに天分に恵まれていようと、悪党という汚名を帳消しにできるほどではなかったことは、残念ながら認めなければならない。

ベーコンほど自分の言葉に忠実だった哲学者はいない。彼の原則は「知識は力なり」だったが、彼はこの原則を、何よりも政治的キャリアを積むのに利用した。自然科学者としての実験にも第一原則とした。自然科学者としての彼は、人間の使命は自然を支配することであると確信していた。

しかし自然科学者であるなら、まず自分の学説をあてはめての、ときにはやりたくもない実験や試

行をしなければならない。彼はそんな実験の最中に死んでしまったのだが、あまりかっこいい死に方ではなかった。そのころにはまだ冷蔵庫がなかった。そこで彼は鶏に氷を詰めて冷蔵しようとしたのだが、毎日毎日そんなことをやっているうちに、とうとう重い肺炎にやられて命を落としてしまったのだ。

机上の空論はやめにしよう

ベーコンを読んでいると、いたるところで格言みたいなのに出くわす。議論の余地のない神託みたいなのもあれば、初心者向けの教訓や励ましみたいなのもある。ベーコンはだから、自分の本を流布させるのもうまかった。当時本を流布させるには、まずラテン語で書くことだった。ラテン語なら教養人であるかぎり誰でも読める。そのうえに明快さ、優雅さ、簡潔さ。格言で語る真骨頂がここにある。

しかしじっさいには、格言というスタイルにも難点はある。多くの格言が反対の格言を生じさせてしまうのだ。「人間はもっとも理性的な動物である」と言えば、「人間はもっともけんか好きな動物である」とやり返される。なかにはあいまいな格言もある。「おのおのは自分の運命の作り手である」という有名な格言に、文句なしにうなずくことはむずかしい。ベートーヴェンの耳が聞こえなくなり、作曲中の曲さえ聴くことができなかったのは、彼のせいではないのだ。けれどもベーコンは、まずい格言でも改良は可能だと考えた。たとえば「おのおのは自分の運命の作り手ではないが、自分の才能

の作り手ではある」と言いかえるとか。
しかしこの新たなヴァージョンも完璧ではない。母なる自然がケチで、知性を与え渋っていたら、哀れな奴は自分の才能の作り手にさえなれないだろう。ベーコンはそんなことは百も承知で、それとは別のことを考えていた。知性さえあれば誰でも、創造性を発揮しようと心に決めれば非凡になれるのだと。つまり、頭は活動そのものを目的にした活動に使うのではなく、自然を支配するための知識を身につけるのに使えばいいのだと。
ベーコンは、エリザベス女王の時代であった当時は、科学と技術が長足の進歩を遂げる時代なのだと信じていた。彼は間違っていなかった。その前の何世紀かには、火薬、印刷術、羅針盤という三大発明があったのだ。ここから彼のもうひとつの言葉、男性優位の感じがしないでもない「男が出産する時代」というのが生まれた。
新しい科学の男っぽさについて、ベーコンははっきりしたヴィジョンを持っていた。権威へのへつらいはもうたくさんだ、役立たずになってしまった過去の哲学者たちの学説ももううんざりだ。科学の正しい基準を説いた主著『ノウム・オルガヌム』で彼は、人間に有為な成熟した科学の誕生をさまたげる偏見、すなわち「先入観」を追放することが、科学者が第一にしなければならないことだと説いた。
われわれはみな自分の偏見を持っている。これは「洞窟の偏見」とでも呼ぶべきもので、われわれは万人に共通する客観的見地に立っているのではなく、ときには信用もできないような各自の領域から出られないでいるのだ。それから人類に特有の「種族の偏見」もある。この偏見は、この世界は

人間の考えるイメージにマッチするようにできているというものだ。この偏見を持っていると、ものごとの見方にゆがみが生じてしまう。伝統的な哲学者像を頭に描きながらベーコンは、「劇場の偏見」というのも考えた。彼いわく、「生みだされ受けいれられてきた哲学はどれも、舞台の上で演じられるお話のようなものだ。それらが説いているのは芝居小屋向けの架空の世界にすぎない」。

この劇場のメタファーは偶然の発想ではない。当時ロンドンでは劇場が大にぎわいだった。私設劇場あり、野外劇場ありで、芝居小屋の数はごまんとあり、劇団は宮廷から保護を受けていた。シェイクスピアもベーコンと同時代の人だが、それほど有名でもなかったから、『ハムレット』などの作者はじつは法務官のベーコンなのではなかろうかと勘ぐる連中までいた。ベーコンが毎夜書類をそっちのけにして、『ロミオとジュリエット』をひそかに書いていたと想像するのも楽しいではないか。まあこれは冗談としても、ベーコンが、哲学者はただ瞑想していればいいのではなく、じっさいに役に立つ思索をしなければならないのだと考えていたのはまちがいない。

ベーコンがとりわけ好んだ格言に「勇気を持って経験せよ」というのがある。彼は、学問と力はひとつである、われわれは知識の分だけの力を持つ、と固く信じていた。人間の精神はゆがんだ鏡のようなもので、ものごとのイメージを変形して見えにくくしてしまう。捉えたイメージは、感覚的なものにせよ理性的なものにせよ、たえず実証しなければならない。こう考えてベーコンは、「広場の偏見」という四番目の偏見を加えた。人は他人と話しているうちに現実をゆがめてしまうというものだ。

実証というテクニックは経験的方法としてのちに有名になったが、ベーコンはまさにその発案者のひとりだった。この方法は、イタリアルネサンス期の魔術と錬金術に基づいたものとは正反対だ。べ

ーコンは常にきびしく自然を探究せよと説いた。獲物を追う猟師の執念をもってすべしと。

自然を手なずけるテクニック

自然を知ることはなんの役に立つのだろうか。ベーコンはこの疑問をもとにして、一六二三年に『学問の尊厳と進歩』を書いた。この疑問にはすでに多くのこたえがあったが、ベーコンはそれに飽き足らなかった。ある人は、自然への知識は研究の疲れを癒すために一息入れるソファであると言った。またある人は、それは自然現象の変化を堪能できる見晴らしのいいテラスであると言った。はてはお金を稼ぐのに都合のいい店だと言う人までいた。

ベーコンはといえば、科学の使命は人間を改良することだと考えていた。虫についての彼のメタファーは有名になった。知識を積むことだけに腐心する科学者は、ただせっせと貯めてばかりいるアリのようなもので、そのなかのどれだけが役に立つかも考えない。反対に、自分が考えだした問題にこだわるばかりで自然を見ようとしない者は、自分が紡ぎだした糸を織りつづけるクモのようなものだ。これからの科学者はミツバチを見習わなければならない。自然にある材料を大いに利用しながら、それを貯めるだけでなく、必要に応じて磨きあげなければならないのだ。

このメタファーのおかげでベーコンは、俗悪な功利主義者であるというレッテルを貼られてしまった。彼の学問はプラトンのそれのように天上を仰ぐものではなく、地上を眺めながらそれを意のまま

にしようとするものであると。しかし、瞑想より活動を好んだから俗悪である、などとは言えない。要するに、ものごとの捉え方が違うだけで、ベーコンはきっぱりと活動のほうを選んだわけだ。

ベーコンは自然を支配するという観点から、のちに人気抜群になったある種の方法論にたどり着いた。そのおもなものは「帰納法」という名で広まった。帰納というのは、個々の現象の観察からそれらを支配する法則を導きだすということだ。人間にはいわゆる完璧な帰納はどうしたってできない。沸騰という現象ひとつ研究しようとしても、現在起こっているあらゆる沸騰、過去に起こったあらゆる沸騰、加えて将来起こるあらゆる沸騰までひっくるめて研究するわけにはいかない。だから一部分の現象をもとに推論することによって、完璧な推論、ひいては申し分ない帰納にたどり着くことが必要なのだ。

この目的でベーコンは、「表」という有名なテクニックを考えだした。たとえば熱とは何かを知りたいとする。そんなときは「現存表」というリストに、熱が現れるケースを集める。それと同時に「欠如表」もつくって、熱が現れないケースも同様に集める。たとえば月の光がこの例で、月光は太陽光と違って熱は出さない。しかしこれだけでは足りない。熱の出方の強さが状況によって異なる場合がある。この強度の違いは「程度表」に書きこめばいい。こうすれば猟師が獲物を捕らえるときのように、自然がたくみに操れる。

ベーコンはここで狩りのメタファーをブドウのメタファーに変え、科学者を励まして、収穫を急げと言った。しかし研究はそう簡単にはいかない。ある自然現象をつかんだと確信するまでには、確証も反証も無数に出てくるのだ。いずれにしても、ベーコンはそのテクニックによって自然を支配し、

人間の要求にすなおに従わせようとまでしたのだ。

望遠鏡は悪魔の道具

近代科学はイタリア人のガリレオ・ガリレイからはじまった。一七世紀になるまで、物理学にも天文学にももはや不明なところはないと人々は信じていた。なにしろアリストテレスが何もかも解明してくれたのだから。ところが一七世紀が明けるとまもなくガリレオが出現し、アリストテレスの解明は理論上のことでしかないことを証明した。

ガリレオが使った恐るべき道具は望遠鏡だった。彼は一六〇九年に望遠鏡を完成させ、天空をじかに探ることのできる道具として利用した。おかげでコペルニクスの説が、たとえ聖書の教えとは異なっていても正しいことが判明した。こうして、何世紀にもわたって異論のない知識に守られていた、科学と教会の権威が地に落ちたのである。

その結果は待つまでもなかった。ガリレオは一六一六年にベッラルミーノ枢機卿によってローマに呼ばれ、自説を広めてはならぬとくぎを刺された。ガリレオはそれに屈せず、一六三二年に、プトレマイオス体系とコペルニクス体系を論じた『天文対話』を出版した。出版に都合がいいように、いちおう中立の立場はとったが、彼がコペルニクスの肩を持っているのは目に見えていた。

教会はそれを見逃さず、齢七十を超えていた老科学者をふたたびローマに呼んだ。その間ガリレオには、望遠鏡は悪魔の道具だから覗くなと言いわたしておいた。しかし今回は裁判を受け、刑を宣告

されるはめになった。死刑を逃れるためには、自説を放棄するという屈辱に耐えなければならない。しかもひざまずいて宣誓せよと言う。そうすれば終身刑にしてやると言われたが、教皇ウルバヌス八世の助力のおかげで自宅軟禁で収まった。こうしてガリレオは、フィレンツェ近郊のアルチェトリにひっこんで晩年を過ごすことになった。

ガリレオは一五六四年ピサの生まれ。彼はまず医学を勉強した。しかし振り子運動の規則性を発見してからは、数学と物理学の方面で名を知られるようになった。パドヴァの大学で数学を講義しながら、小さな作業場を用意し、そこでいろんな道具を作りはじめた。道具のなかのピカイチが望遠鏡だった。彼が望遠鏡で空を眺めたために、アリストテレス物理学が転覆するはめになった。

自分の発明に舞いあがったガリレオは、夜ごとにせっせと空を覗いた。健康にも頓着しなかったおかげで、それまでにないほどの発見をした。木星に衛星があることに気づいた彼は、宣伝効果を高めるために、それらにメディチ家の名を冠して「メディチ星」と呼んだ。月も望遠鏡で見ると肉眼で見た様相とは違って、地球と同じような谷もあれば山もある。銀河は驚いたことに、単一体ではなくて無数の星の集まりだった。しかし何よりも驚いたのは太陽で、その眺めは肉眼ではけっして見ることのできないものだった。ガリレオは、太陽には黒点があることを発見した。この発見はアリストテレスにとっては災難だった。彼は太陽は地球と違って穢れのない完璧な天体であると考えていたからだ。

ガリレオの驚くべき発見に、教授連中は腰を抜かした。彼らは太陽の表面を傷つけることなく黒点を正当化するために、ほかの天体が太陽の前を通過しているのだと説明した。しかしじっさいはガリレオがその望遠鏡で、ブルーノがすでに明らかにしていた事柄に、ついに科学的根拠を与えたという

ことだった。地球という汚点のある天体を太陽という完璧な天体と対置させたアリストテレスは、間違っていたということなのだ。

望遠鏡は自然観察という目的からすれば、けたはずれにありがたい発明だった。しかし、数学という強力な助っ人がいなければ、その価値も大幅に下がってしまう。ガリレオはそんなことは百も承知していた。

自然は数学で書かれた本

ガリレオは発見を重ねながら、同時にアリストテレスとその物理学に異を唱えていった。彼の異論のおもなものは、近代科学の礎(いしずえ)になるほどのものだった。

異論の第一は、自然の場についての理論という、アリストテレス物理学の核心を突くものだった。アリストテレスは、軽い物体は上方へ、重い物体は下方へ動き、天体は円軌道を描いて動くと言った。ガリレオは慣性の法則を発見することによって、これが間違いであることを証明した。その法則によれば、物体は外からの力が加わって速さや方向が変化しないかぎり、静止状態あるいは均一な直線運動を続ける。物体が重いか軽いかはまったく関係ないのだ。

第二の異論も、重要さにかけては第一の異論に引けをとらない。これは物体の落下に関するものだ。ガリレオの発見に人々は肝をつぶした。なぜなら、それはアリストテレスの理論に反するだけでなく、常識にも反していたからだ。物理学に疎い人は今日でもまだアリストテレスと同様に、重い物体は軽

い物体より速く落ちると信じている。しかしこれは誤りだ。どんな物体でも、重さに関係なく同じ速度で落下するのだ。

伝記によれば、ガリレオがこの法則を発見したのは、学生たちを連れてピサの塔に登り、そこから重さの異なる球を落としたときだった。ふたつの球は、一方は他方の一〇〇分の一の重さしかないのに、上から同時に落としてみると、ほとんど同時に地面に着いた。

アリストテレスに言わせれば、軽い球のほうがはるかに遅く着地するはずだ。世の人々には、ガリレオの言うことなんかもちろん信じられなかった。羽より石のほうがよっぽど速く落ちるにきまってる。しかしその原因はもっぱら風の抵抗にあるわけで、これは落下する物体の形によって違うのだ。抵抗を起こす空気のない空間では、羽も、重い鉛の球も、同じ速度で落下するはずだ。このガリレオの法則を証明するのにうってつけのできごとがあった。一六五四年にエアポンプが発明され、真空のなかを物体が落ちていくありさまがじっさいに観察されたのだ。

こうしてガリレオの役割は、アリストテレスから弾劾される者どころか、彼を弾劾する者に変わった。近代科学はまさに、アリストテレスの科学を覆すところからはじまったのだ。科学に大転換をもたらしたガリレオの強力な武器は、実験と数学のふたつだった。

ガリレオは近代のピタゴラスだという人もいる。しかしピタゴラスの数学は机上の理論で、じっさいに応用されることはまれだった。一方ガリレオは、自然は数学という言葉で書かれた本であると確信していたから、数学の法則をじっさいに試して確かめることを怠らなかった。

ガリレオは実験と数学という貴重な道具を操る天才であっただけでなく、このふたつを結びつける

工夫の才にも恵まれていた。計算と実験を結ぶ方法を考えついたのは、彼の飛びぬけた空想力のたまものだった。

しかし彼がもたらした大転換は、教会だけでなく哲学者のほうからもはげしい抵抗に遭った。彼への反感はコペルニクスと地動説への反感と同じ性格のものだった。ガリレオへの反論のなかには、常識に味方されてなおさらつけあがるものもあった。地球が太陽のまわりをまわっているなら、人間や動物を含めたその表面にあるものが、どうして遠心力で吹き飛ばされてしまわないのだ？　ガリレオはこたえて言った。吹き飛ばされないのは、回転の遠心力より重力のほうが強いから、遠心力がチャラにされてしまうからなのだと。

またこういう反論もあった。地球自体が動いているなら、地球の回転で渦巻き状にされた空気が、どうして何もかも渦のなかに巻きこんでしまわないのだ？　それは、空気も地球と一緒に回転しているからだ。船が水を切って走っていても、乗客はその上にいられるのと同じ理屈だ。ガリレオはそう返した。

さらにはこんな難問もあった。地球が西から東に向かって回転しているのなら、塔の上から落とした石はどうして塔の西側に落ちないで真下に落ちるのか？　これに対してガリレオは、二番目の反論への返事を応用した。空気が地球の回転に合わせてまわるように、石も地球と一緒にまわる。塔のてっぺんにあるときも落下しているあいだも同じようにまわっている。走っている船のマストから落ちた石だって、まるで船が静止しているかのように、マストの真下に落ちるではないか。

ガリレオは死んだとき、もらって当然の名誉をもらえなかった。ウルバヌス八世はガリレオに反感

を抱くばかりではなかったが、サンタ・クローチェ聖堂に彼の像を建てることは許さなかった。そんな不公平の大方が回復されたのはやっと二〇世紀になってからのことだった。教会が彼への不当な審判を撤回するという重大な決議をしたのだ。こうしてガリレオには、科学からも哲学からも、本来与えらるべき地位がついに与えられた。しかし少なくとも哲学の分野では、誰もがそれに納得したわけではなかった。二〇世紀という遠い将来になってからもガリレオは、哲学者のエドモンド・フッサールという、新たなベッラルミーノ枢機卿に遭遇しなければならなかった。

一九三六年に書かれ、死後の一九五四年に世に出た著作『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』のなかでフッサールは、ガリレオは近代思想史をけがす大嘘つきだとこき下ろした。彼はわれわれをだまして、世界を数学的に、さらには科学的に解釈することで、世界の構造や意味を解きあかしたような気分にさせた。これはまるで、あるひとりの人間の臓器やその働きを尺度にして、その人を理解できたと錯覚させるようなものではないか。重力の法則がわかったからといって、この世の意味が解明されたことにはならない。フッサールはそう言った。

この非難はガリレオだけでなく、科学一般に向けられるべきものだ。しかしながら、フッサールの思想がいかに優れたものであっても、科学にこのような反感を示す哲学者はもはや多くはない。

考えることは計算すること

ガリレオを敬愛する人々のなかに、一七世紀イギリス思想界のホープになった男がいた。トーマ

ス・ホッブス。彼とベーコンとガリレオのおかげで、一七世紀は哲学史のなかでも輝かしい一時期となった。

ホッブスは恐怖の落とし子だった。彼は一五八八年に早産でこの世に出てきたが、早産になったのは、母親がスペインのフェリペ二世のイギリス侵攻に驚いたためだったのだ。だから彼は、おれは恐怖のかたわれなのだと、口癖のように言っていた。九〇歳という長寿をまっとうするあいだに、恐怖は政界だけでもかなりの数を味わった。彼の生まれた時代はイギリス史上まれに見るドラマティックな時代で、クロムウェルの革命、チャールズ一世の処刑など、悲惨なできごとが目白押しだった。

そんな時代では独裁政治も君主政治も似たようなものだったが、それでもホッブスは君主制のほうがましだと考えていた。彼は政争がはげしくなるとイギリスを避け、一時はクロムウェルに迎合しそうな態度を見せながらも、結局フランスに落ち着いた。しかしそれから一〇年ほどが過ぎたとき、恐怖に駆られてまた逃げだした。主著の『リヴァイアサン』が教会の反感を買ったためだった。

ホッブスの考える神はいささかユニークなものだった。唯物論者だったから、神にも天使にも身体があるはずだと考えた。しかし教会の教義にたてつく気はさらさらなかった。彼は言った。たてつくなんてばかげてる、なぜなら教義とは薬みたいなもので、かまずに呑みこまないと苦い思いをさせられるから。

ホッブスは本物の教養人だった。弱冠一四歳にしてエウリピデスの『メディア』をラテン語に翻訳し、四〇歳にしてギリシャの歴史家トゥキディデスを訳している。トゥキディデスからは、民主制は疫病だと教わったそうだ。八七歳でホメロスの翻訳にも挑んだ。しかし彼の本領は数学にあった。

ホッブスは計算という道具を具体的な目的に使おうとした。それだけでなく、頭のなかでの操作に計算を用いるための理論まで編みだした。計算はたんなる思考方法であるどころか、思考のプロセスそのものだ。彼はそう信じて疑わなかった。言いかえれば、考えることは計算することだというわけだ。こうして概念間の計算という、のちに多くの実を結んだ試みがはじまった。

たとえば人間とは何だろうか。それは人間を構成するふたつの概念の合計である。つまり動物＋考える＝人間。それでは動物とは何だろうか。それは足し算を引き算に変えてみればわかる。人間－考える＝動物。

ホッブスは『物体論』のなかで言っている。「計算が、すなわち思考が、数を数えることだけを通して行われると考えてはならない。それではまるで、ピタゴラスが考えたと言われるように、人間がほかの動物と違うのはもっぱら数を数える能力があるからだというかのようではないか。実際はそうではなくて、物体と物体、行為と行為、概念と概念のあいだで足し引きをすることもできるのだ。……いかなるたぐいの哲学もこれによって成りたっている」。

彼はそれから例として言っている。何かを遠くから見て、物体として見分けられたとしよう。近づくにつれて動いているのが見えると、生きていることがわかる。つまり生きた物体だ。それから目の前まで行ったときにその物体が話しはじめれば、思考力もあると考えられる。思考力のある生き物、すなわち人間ということだ。

しかしホッブスの計算はまだ止まらない。計算するのは数や概念だけでなく、政治も計算で成りたっていると言う。政治について書く人は「人間の義務を論じるのに事実の足し算をする」し、弁護士

は誰が正しくて誰が間違っているかを考えるために、法律や事実を足してみる。ホッブスはここから、足し算も引き算もできないところでは「思考はまったく成りたたない」という結論を出した。

人は他人にとってはオオカミである

ホッブスはまた、国家とはまさに計算のたまものだと考えた。国家とは、それまで手に負えなかった自然にかわって、権利のある状態を生みだそうという目的でつくられたものだ。自然な状態では、人はみな他人の敵になってしまう。一方権利がきちんと定まれば、約束が守られ平和が保たれる。

ホッブスは、人間は友好的な生き物であるどころか、「他人にとってはオオカミでしかない」と信じて疑わなかった。有名になったこの言葉は、政治が介入する以前の人間関係がいかにひどいものであったかを示している。管理する者がなかった時代、持って生まれた平等の観念から生まれたのは協力関係ではなくて、たえまないいがみ合いだった。法がないから、誰もが他人を自由にでき、他人の生命さえ自由にできた。対立が支配するこうした自然状態は、ホッブスに言わせれば、嵐みたいな状態だ。人間関係はまさに嵐で、しかもその嵐は、「雹(ひょう)が数個降ってくるといった程度のものではなく、何日も暴風が吹きまくる」ほどのものなのだ。

こんなオオカミを羊に変えるにはどうしたらいいだろうか。言いかえれば、イギリスの社会や政治をもっと穏やかにするにはどうしたらいいのだろうか。何より頼りになるのは、ここでもやはり思考力で、思考力は誰もが持っていなければならない。しかしこれは、自然だけに委せていては持てない

ものだ。自然界には暴力や裏切りがはびこり、強い者に生命が脅かされるために、常にびくびくしていなければならない。こんな状態は願い下げだ。知らない場所を旅するには武器を持たねばならず、泥棒が怖いから玄関の戸締まりは厳重にしなければならないような人生とは、いったいどんな人生だろうか。

こんな状態から救いだしてくれるのが思考力、すなわち計算なのだ。計算はわれわれに、他人を搾取するのをやめて平和を求めよと迫り、契約を結べと忠告する。この種の契約から生まれたのが国家なのだ。あなたもあなたの権利をこの人に預け、その行動を信頼するなら、私も自分自身を管理する権利をこの人に、あるいはこの一団の人々に預けようというわけだ。

このように解釈された国家は、人間という自然物に似せてつくられた人工的な物体みたいなものだ。ホッブスはこれを「人工的人間」と定義し、自然の人間より強大で、人間に保護を委されるものと考えた。彼はこのような国家を、聖書に出てくる恐るべき怪獣リヴァイアサンになぞらえている。ホッブスによればリヴァイアサンである国家は「死すべき神」であり、平和も防衛も彼次第であって、「恐怖のあまりあらゆるものが服従してしまうほどの力」を備えた存在である。

何がよいか何が悪いかを決めるのは国家で、国家は不当な命令にも従わせる特権を持っている。しかも国家のほうは自分の作った法に従わなくてもいい。じっさい、従わせることなどいったい誰にできようか。一方的な契約を押しつけられている国民にはそんなことはできないし、国家自体が自分を従わせるなんてことはなおさらできない。

それではリヴァイアサンはすべてを一手に握っているのだろうか。ホッブスはそうではないと言い、

限界を設けて自由への小窓をいくらか開いている。リヴァイアサンといえども、あらゆる市民権を侵すことはできないのだ。たとえば、ネロ皇帝がセネカにしたように、市民に自殺を強要することはできない。国家の目的は国民を守ることなのだから、そんなことは矛盾している。個人に自分を傷つけたり近親者を傷つけたりせよと命令することもできない。自分を守ったり、ものを食べたり、はては新鮮な空気を吸ったりすることまで禁止することもできない。

そんなことは当たり前だと言われるかもしれない。しかしホッブスは、個人の自由の尊重というイギリス特有の考え方にも触れている。すなわち、国家は国民に罪の告白を強いてはならない、何人にも自白を強要してはならないのだと。

ホッブスはあいにく、彼が唱えた合理性からはほど遠い時代に生きた。チャールズ一世が彼の教説に従って行動していたら、内戦などまったく起こらなかっただろうし、クロムウェルに首を切られることもなかっただろう。ホッブスはそう信じていたから、君主の誰かに彼の『リヴァイアサン』を読んでほしいと思っていた。ぜひそうしてほしかったから、その本は楽しくておもしろい本だとさかんに宣伝した。しかしあいにく、彼のコマーシャルは一人芝居に終わったようだ。

13 デカルト――名言のスーパースター「われ思う、ゆえにわれあり」

われ思う、ゆえにわれあり、というこの真理が頭に浮かんだとき、これはあまりにも確実なしっかりした真理だから、懐疑主義者のどんなにへそまがりな言い分でも、これを揺るがすことはできないだろうと思った。

ルネ・デカルト『方法序説』第四部

哲学の専門家はもとより、哲学などほとんど知らない人でも、デカルトの名前を聞いたら、「われ思う、ゆえにわれあり」という彼の有名な言葉がたちまち頭に浮かぶだろう。哲学者の言葉のなかで、これほど有名になったものはほかにない。

しかしいったいどうしてこの言葉はこんなに飛びぬけて有名になったのだろう。デカルト以前の哲学者は誰ひとりとして、自分が存在することを疑うなんて考えもしなかったし、ましてや街なかの人々が自分の存在を疑うなんてありえなかったからだろうか？

もしこの言葉がただの風変わりな発想でしかなかったら、これほどの人気を集めることはなかっただろう。ところが一見奇妙なこの言葉が、西洋哲学に根本的な転換をもたらしたのだ。それまで哲学

が究極の目的にしていたのは、真理を見つけることだった。しかし真理は、確実なものにならなければ意味がない。確実なものとは真理に勝る何かであり、疑問という試練をパスした真理だと言ってもいい。

けれどもあらゆる疑問を解消することは容易なことではない。毎日周囲のいろんなものを見ていても、それがたんなる幻覚ではないのだと、誰に保証できようか。人生そのものだって夢かもしれない。そんなことを考えはじめたら、自分が存在することすら疑わしくなってくる。しかしまさにそのことがじつは、哲学者がまず取り組むべき根本的な問題だったのだ。

デカルトは数学、とくに幾何学の天分にも恵まれ、彼の数々の発見は幾何学に革命をもたらした。今日でも高校生はみな、いわゆるデカルト座標を使って多くの問題を解くことを学んでいる。しかしデカルトの数学方面の業績がいかに貴重でも、「われ思う」に端を発した大転換にくらべたらものの数ではない。

デカルトの思想はひとことでいって、理性の勝利を告げるものだった。その功績はきわめて大きく、彼は近代哲学の父と考えられるまでになった。しかし彼の理論はすべての人々に支持されたわけではない。まず経験主義がその道をふさいだ。のちにはロマンティシズムや実証主義が立ちはだかった。それでも「われ思う」の栄光は、デカルトの名とともに不滅になった。

引きこもりの大先輩

この世に疑わないでもいいことがあるだろうか？　この根元的な問いを発した一七世紀フランスの思想家ルネ・デカルトのおかげで、哲学は再出発のテープを切った。哲学はまるで、それまでこの疑問に向きあうことを妨げてきた眠りから、にわかに目覚めたかのようだった。デカルトは理性だけを支えにしてこの問いにたどり着いた。彼が近代合理主義の父とされているのはまさにそのためなのだ。じっさいデカルトは、いかなる哲学者にもまして疑問に苦しんだ。周囲を眺めるほどに疑問は深まったから、しまいには、誰か意地悪な奴がおれをおもちゃにして楽しんでいるにちがいないなどと、支離滅裂なことまで考えるようになった。しかしあるとき彼は、外界に目を向けることはやめにして、意識の奥深くを覗きはじめた。真理を発見したと思ったのはそのときだった。

デカルトの生まれは一五九六年。父親はフランス中西部トゥレーヌ州ラ・エーの小貴族だった。イエズス会のエリート校で教育を受けたが、そこでの教えはほとんど身につかず、数学の知識だけがしっかり根づいた。学才に恵まれていたためか、家族に押されて入った軍隊にはまもなく嫌気がさした。そこでまず二年のあいだサン・ジェルマンの村里に隠れ、それからオランダの軍隊に入って二年間を難なく暮らした。おかげで大好きな数学の勉強に励むことができた。一六一八年に三十年戦争が起きてバイエルンの軍隊に入隊しても、研究はやめなかった。この時期に忘れられない思い出になったことがひとつある。耐えがたい寒さに閉口して長いことサウナ風呂に入っているうちに、哲学的な思索

がフル回転しはじめたのだ。
デカルトはソクラテスとは反対に身体には自信がなかった。ソクラテスは震えあがるような野営地でも、半分はだかで歩きまわって仲間を驚かせたことで有名だ。デカルトも当時の貴族の例にもれず、たしかに剣は身につけていた。けれども剣など抜きたくなかったから、一六二八年、当時では比較的平穏だったオランダに移ることにした。
デカルトは居場所を見つけられないように、二四回も引っ越しをした。最後にたどり着いた隠れ家は修道院の貯蔵庫だった。不承不承つきあった唯一の相手は、当時の知識人にはパトロンとして欠かせなかった君主だった。君主として好んだのは女性で、もとボヘミアの女性君主や、その娘であるプファルツのエリーザベトなどだった。彼の『情念論』はエリーザベトとの往復書簡から生まれている。
しかし不本意にもデカルトを死に追いやったのは、ほかでもない女性君主のひとりだった。デカルトは彼の教説を異端視して起こされた論争から逃れるためもあって、彼を敬愛するスウェーデンのクリスティーナ女王からの、宮廷に来てほしいという願いを受け入れた。ところがあいにく女王には、夜が明けそめたころにデカルトをだだっ広い冷え冷えした謁見室に呼び寄せるという、困った癖がついてしまった。のどかなつきあいだったのははじめのうちだけだった。デカルトは一臣下にはふさわしくない思いを女王に抱き、女王のほうも彼を海軍士官に抜擢した。そのうちにデカルトのひ弱な身体がもたなくなった。もともと冷え性だったデカルトは、きびしい気候に耐えられず、まだ五四歳の若さで肺炎のために客死した。

疑問の渦のなかで

哲学者は誰でも疑問に追いまわされ、確証をつかむことによって、生じた疑問を解消しようとする。学問はそうした過程のなかでつぎつぎと新たなゴールに達してきた。デカルトがほかの哲学者と異なるところは、疑問から確信へ至る道から、哲学研究の「プロとしての」方法を編みだしたことだ。だから彼の疑問は「方法としての疑問」と呼ばれた。その方法をじっさいに使うにあたってデカルトは、ベーコンやガリレオのように自然についての実験からはじめることはしなかった。なぜならその種の実験は、常に偶然に左右される不確実なものだからだ。デカルトは自分の意識から出発した。意識は真に確実なものがつかめる唯一の研究領域だと考えたのだ。

かくしてデカルトは部屋着姿で暖炉の前に陣取り、紙を手にして省察をはじめた。まったくひとりぼっちで、「すべてを根本から再構築してみよう」と思ったのだ。この孤独癖が彼の本の書き方に大きな変化をもたらした。一人称で書くことにしたために、主著『省察』や『方法序説』が知的な自伝のおもむきをもつようになったのだ。

『省察』第一部では、たしかだとは思われないものを何もかも系統的に疑ってみるという、野心的な計画の実現が試みられた。「いま私は、感覚はときとしてわれわれを欺くこと、感覚を信頼するのは無謀であることを確認した」と彼は書いている。しかし、手や胴体が自分のものであることはどうして否定できようか。それなら、手足や目のような誰にも共通したものは真に存在するのだと考えるべ

きなのだろうか。しかしあてにならない五感で捉えるしかない存在を、当然あるものと考えてもいいのだろうか？

五感はひとまずおくとして、イエズス会の学校で学んだいろんなことはどうなのだろう。そこにはたしかなものなどひとつもない。幾何学も代数学もたしかなものではない。でも2＋3のこたえは夢のなかでも5だし、四角形の辺は常に四つではないか！

しかし疑問はそこで解消するどころかますます深まった。全能の神がいるとして、その神はほんとうは大地も空も物体も創っていないのに、それらがあるように感じさせているだけだなんて、いったい誰に言えるだろうか。神は誰にも劣らず善良なはずだが、ほんとうにそうだなんて、誰にわかるだろうか。

ここまで来るとデカルトはにっちもさっちもいかなくなって、何ひとつ否定することも肯定することもできなくなってしまった。「きっとすごく意地悪で頭の切れる奴がいて、そいつは強いうえに悪賢くて人をだますのもうまいから、全力でこのおれのじゃまをしているのだ。空も陸も色も形も音も、外界の何もかもがただの錯覚にすぎないのに、ものを信じやすいおれを欺くために、そいつはそれを利用しているのだ。おれには手も目も肉も血もなくて、感覚器官だってひとつもないのだと思えばいいのだ」。

状況は最悪だった。デカルトは、水に落ちて足が底に届かないのに助けてくれる人もいないような気分だった。いったいいつになったら助かるのだろう。省察を何カ月も、何年も重ねなければならないということなのだろうか……。しかしそれは思いすごしだった。デカルトは翌日にはもう大発見を

していたのだ。

これだけは疑いようがない

ハプニングは翌日の省察のさなかに起こった。デカルトは書いている。「昨日の省察から頭を離れない疑問が生まれた。この世界にはたしかなものは何もない。しかしながら、少なくともこの私は何かであるはずだ。それとも私も存在しないと確信したのか。しかしいかなることを納得したにせよ、そのとき私は存在していた。たとえ意地悪な神にだまされていても、私は存在している。存在しないものをだますことなど、できるはずがないのだから」。

前の晩さんざん悩んだあと、確信はスピーディーにやってきた。この確信はデカルトのほかの作品にも多かれ少なかれ出てくる。これは彼の十八番になったのだ。たとえば『哲学原理』のなかでは、次のように冷静に分析されている。「神も空も物体もないと仮定してみよう。そしてわれわれ自身も、手足はないし、身体はまったくないのだと考えてみよう。でもそう考えたって、そんなことを考えるわれわれは存在しないわけではない。考えている最中に、考えている本人がいないなんて矛盾しているではないか。われ思う、ゆえにわれあり、というこの認識は、ある方法で哲学しようとする者に提示される、もっとも確実な第一級の認識なのだ」。

しかし最初の確信がいかに重大なものであっても、それがすべてなのではない。そこで第二の省察は、私とは誰なのか、というきびしい疑問に向けられた。私が存在することはわかったから、つぎに

はその私が誰なのかを考えてみようというわけだ。

デカルトが出した結論はこうだった。「私とは、疑い、思いつき、確信し、否定し、欲し、欲せず、想像し、感じるあるものだ」。こんないろんなことをするものとはいったいどんなものだろう。デカルトは広がりや形といった物理的特性はすべて排除した。なぜならそれはたしかなものではないからだ。彼が考えたのは非物質的なもので、精神と呼ばれるわれわれの頭だ。あるものの様相をつぶさに表現できるとすれば、それは、感覚で捉えるのではなく思考力で把握するからなのだ。思考力は外界のあれこれとはまったく性格を異にする。それは広がりをもたない精神的なものだ。思考力を使ってはじめて、五感では捉えにくいものを理解することができる。

しかしこれについては、デカルトは結論を急ぎすぎたようだ。私とは疑ったり欲したり感じたりするものであるからといって、だから非物質的なものだとストレートに考えることには無理がある。彼の性急な結論は疑問を呼んだ。少なくとも唯物論を唱えるイギリスの哲学者ホッブスは、考えるものすなわち非物質的なもの、などという無邪気な結論にはうなずけなかった。考えるという行為があるのだから考える何か（人）があるのはわかるが、だからといってその考えるものが非物質的な精神でなければならないというのはちょっと変だ。

ホッブスはデカルトの『省察』への『反論』のなかで述べている。「私は考えるものである、ということから『われあり』が出てくるのはうなずける。なぜなら考えるものは無ではないからだ。しかしながら、私は精神だ魂だとなると、首を傾げたくなる。私は考えるものである、だから私は思考だ、というのはなるほどとは思えない。それなら、私は散歩するものである、だから私は散歩だ、という

ことになってしまうではないか」。
デカルトはホッブスにこたえて、考えることは散歩することとは違うと言った。散歩は行為だが、思考は行為であると同時に能力なのだ。では有形のものより信頼がおける精神とは、なんと呼ぶべきものなのだろうか。デカルトはそれをラテン語で「考えるもの（レス・コギタンス）」と呼び、あらゆる有形のものを表わす「広がるもの（レス・エクステンサ）」に対置させた。
デカルトは考えるものを有形のものより明らかにすぐれていると解釈したが、だからといって、彼があらゆる面で精神主義を貫いたと考えるべきではない。それどころか、実生活ではむしろ、精神が上だとむやみに考えてはいけないし、そこから得た確信をむやみに使ってもいけない、と言った。そうしたいときには、たしかだと思えそうなこと、信じてもよさそうなことで満足するべきなのだと。
これに関してデカルトが友人のピエール・シャニュに語ったことは、ちょっと小話めいている。シャニュはデカルトにたずねた。ある人には惹かれないのに、ある人には魅力を感じるのはいったいどうしてなのだろう。するとデカルトは、それは大方の場合、たんなるルックスの問題なのだとこたえた。そして言うには、彼は小さいころ、やぶにらみっぽい同い年の女の子に熱をあげた。その子のねじれた目つきを見るたびに、愛の炎がぱっと燃えた。斜視よりもふつうの目のほうが健全なのだと気がつくまでには、長い時間がかかった。彼は書いている。「ずっとあとになってからも、やぶにらみの人を見るたびに、その人がやぶにらみだからというただそれだけで、好きになってしまいそうな気がした。けれどもよく考えた末に、それはアブノーマルな状態なのだと納得してからは、気持をそそられることはなくなった」。

形而上学的な腺の発見

誰にも心と身体があることは、宗教や哲学が何千年も前から教えている。しかしデカルトは、それらの教えの弱点を指摘した。弱点はどこにあるといえば、心と身体が同居しているということにではなく、双方のコミュニケーションの取り方にある。身体が傷を負ったとき、痛みを感じるのは意識なのだ。このことは、感覚が麻痺していると傷は痛くもかゆくもないことからもわかる。それでは身体は、どうやって痛みを意識に伝えるのだろうか。またそれとは逆に、たとえば何かを拾おうとして意識が腕を動かそうとしたとき、身体はその意図を即座に実現する。頭はいったいどうやって腕に気持を伝えるのだろうか。

デカルトの考えはあまりにもアバウトで、ちょっと聞いただけでは滑稽なほどだ。しかし近年になって神経学が発達すると、それほど滑稽でもなくなった。脳の内部に松果体と呼ばれているひとつの腺があって、眠りと目覚めのサイクルを管理していることが、今日ではわかっている。けれどもすでにデカルトの時代に、身体のしくみと意識のしくみをつなぐなんらかの役目をこの松果体が果たしているのではないかと考えられていた。そんなときデカルトがきわめて大胆かつ明確に、意識と身体の諸機能の連絡役はこの腺であると言ってのけたのだ。

彼の考え方はたしかに荒っぽかったが、松果体の理論は、ルネサンス期から受け継がれてきた頭と身体の関係についての考え方より優れていた。それまでは、頭は身体を、船乗りが船を操るように操

るが、船と船乗りは別ものだと考えられていた。ところがデカルトは、頭と身体は密接に結びついていて、松果体の一部は頭で一部は身体なのだと言ったのだ。

この松果体の説はまじめに受けとられるどころか笑いものになった。けれどもこれがきっかけになって、頭と身体の関係が多くの人の興味をさらった。それどころかこれは、少なからぬ思想家が本気で取り組むきわめて哲学的な課題にまでなった。解決のむずかしさに、哲学者の多くはしまいに神に助けを求めた。ライプニッツは考えた。神は頭と身体を同調するふたつの時計のように創り、一方の時計の針の動きがもう一方の時計の針の動きとぴったり一致するようにしたのだと。彼はこの理論のために、予定調和というのちに有名になった説を考えだした。

二〇世紀の後半になると、頭と身体の関係についてのより根本的な考え方が広まった。まずはじめに、頭は身体からは切り離せないと説く人々がいた。もっとも名高いのはイギリスの哲学者ギルバート・ライルで、彼のデカルト批判は「機械のなかの幽霊」という言葉で有名になった。彼によれば、身体のなかにやっきになって心を見つけようとしたデカルトは、動く自動車をはじめて目にした原始人のようなものだという。エンジンの存在を知らないから、動く車のなかには幽霊が隠れていると思うのだ。

今日では「心身問題」というれっきとした名称をもつこの問題は、もとを質せばデカルトの発想に端を発しているわけだ。じじつ、この問題を哲学の本質的なテーマのひとつとして後世に伝えたのは、ほかならぬデカルトなのだから。

14　スピノザ――孤独な形而上学者

神への精神の知的愛は、神が自分自身を愛する無限の愛の一部である。

バルフ・スピノザ『エチカ』第五部、定理三六

思想史のなかでも無神論の傾向の強い啓蒙主義が広まりはじめたころ、神学はその最後を飾る非凡な思想家として、ほぼ同時代のふたり、スピノザとニュートンを世に出した。このふたりのどちらにとっても、神は中心的テーマでありつづけた。彼らの方法はどちらも卓越していたけれど、根本的なところで異なっていた。ユダヤ教に背いたスピノザはキリスト教的な人格神を否定して、神と自然は同じものだと言った。ニュートンのほうは数学の計算と慎重な経験主義に頼り、研究の過程で解決できなかった問題は、必要なときには神に助けを求めることで乗り越えた。

スピノザは神を彼の思想の中心に置いて、いかなる哲学の問題も、その発端や解決は神なる自然にあるとした。たとえばデカルトが悩んだ精神と物質の関係についてスピノザは、無形の精神と有形のものとはお互いに異なったものではなくて、神という唯一のもののふたつの属性にすぎないのだと言った。

ユダヤ社会から追放される

誰も故郷では預言者などやってられない、という有名な言葉がある。生まれ故郷の人にとっては、誰だって洟たれ小僧でしかないからだ。バルフ・スピノザもそのいい例だった。オランダで生まれた彼は、人の輪には入れなかった。デカルトのようにひとりでいるのが好きだったわけではない。自著を出版するにも少なからず骨を折った。生前に日の目を見たのは一作だけで、それも匿名の出版であり、しかもそれによって起こった騒ぎは国のなかでは収まらなかった。神は自然なりと言ったばかりに、愚かな無神論者呼ばわりされ、さんざんコケにされた。一六七七年に結核でこの世を去ったが、それから一世紀以上も、スピノザの名は人の口に上らなかった。

スピノザは一六三二年にアムステルダムのユダヤ人家庭に生まれた。彼の両親は宗教上の理由から、迫害を逃れてポルトガルから移住した人たちだった。当初スピノザは典型的なユダヤの教育を受けた。しかし知性豊かな人によくあるように、生まれた社会の文化を窮屈に感じるようになった。そこでギリシャ・ラテンの古典から同時代の哲学まで、手あたりしだいにむさぼり読んだ。

スピノザはラビになるのが筋だった。しかし、周囲にどんなに説得されても、読書によって広い世界を知ってからは、伝統的なユダヤ文化を捨てる気でいた。その決心は固かったから、異端の罪でシナゴーグを追放され、社会からものけ者にされた。ユダヤ人社会はそこを捨てた者を容赦しなかった。仲間には追放者に話をすることも手紙を書くことも禁じ、同じ屋根の下には入れるなと命じ、その者

の著作を読むことはもとより、近づくことも厳禁した。

やがて狂信的な男がスピノザを暗殺しようとした事件があってから、彼はアムステルダムを出るのが賢明だと判断した。しかしここで助けになったのはラビの教えだった。誰でも手に職をつけよとラビは説いていた。スピノザはそこでレンズ磨きを身につけたが、腕がよかったから哲学者としてより眼鏡屋として名をあげた。だからといって金持ちになったわけではなく、稼ぎは日々を暮らすのにやっとだった。援助を申し出る友人は少なくなかったが、プライドがじゃまして断った。彼が受けとったのは、金持ちの弟子が毎年くれたわずかなお金だけだった。

スピノザはいわゆる自由思想家で、インテリの常として公的な文化には染まらなかった。しかし一貫した思想を持っていなかったわけではなくて、むしろその反対だった。彼の思想のユニークさは、それの表現方法を見ただけでもわかる。彼は自分の哲学をもったいぶった幾何学の定義のように表わし、主著『エチカ』（邦題）のタイトルを、『幾何学用語で表示された倫理』とした。この著書ではモラルが主要な位置を占めているけれど、倫理だけをテーマにしているわけではない。そしてほかの著書に劣らず幾何学的だ。スピノザは感覚世界にも2＋2＝4があてはまると考えたが、彼自身の行動がきびしかったのも、こういう考えの現れだったのだろう。

彼の伝記には、これを物語るエピソードがふたつある。スピノザは父方の財産の相続問題で異母妹のレベッカに勝訴すると、自分は経済的に困窮していたのに、全財産を彼女に譲ってしまった。もうひとつのエピソードはなおさら変わっている。ユダヤ人社会から追放されるまえに彼は、借金を払わない男を逮捕させたが、その男が監獄から出られるように、すぐにまたお金を貸してやったという。

神は頭で愛せ

スピノザは哲学者だったのか、それとも神学者だったのかと問うなら、彼はそのどちらでもあったというのがこたえだ。哲学の理論には神の居場所などない、とは言えない。それどころか、哲学でも神学でも神は常に主役のひとりなのだ。すべては神をどう見るかにかかっている。

しかし神の愛は合理的思考と両立するだろうか。スピノザはまさにここで彼のオリジナリティーを発揮した。彼は勇敢にも、真の宗教性とは自然を理解し愛することだと言ったのだ。彼にとって神と自然のあいだに違いはなかった。それを彼は、「神の知的愛」という言葉で表現している。スピノザの考える神とは、自然のあらゆる現象を支える理性的存在なのだ。デカルトは物質と精神をふたつの異なるものとして捉えたが、スピノザは、それらは神という唯一者が無数に持つ属性のうちのふたつにすぎないと考えた。

しかし彼の言う「神の知的愛」はプラトン流のエロスとはなんの関係もない。スピノザはものごとを二元論的に捉えようとはしなかった。だから彼にとっては、プラトンの、愛とはこの世のものより尊いものを希求することだ、という言葉はまったく無意味だった。スピノザの考えはそれとは正反対で、彼の学説は同時代人たちには大いに煙たがられた。彼にとっては実在はひとつしかなく、それは神とも自然とも呼べるものだった。プラトンが言うあの世はないし、デカルトが考えたような精神と物質の違いもなかった。

スピノザは神の存在を、ほかから生まれたものではないもの、ラテン語で言うカウサ・スイ（自己原因）であると解釈した。彼の考える唯一の存在は神の存在だったから、自己原因ではない精神や物質は存在とは言えない。三角形の特質がその定義から引きだされるように、神以外のものはすべて、神という唯一の存在から引きだされるのだ。

こんな推論は、中世的な考え方にとってはまったく青天の霹靂だった。自然を考えるうちに神に行き着くのが筋ではないか。そんなわけでスピノザは、伝統を重んじる神学者からは異端と見なされた。自然と神のあいだには超えがたい深淵がなくてはならないのだ。ところがスピノザはその深淵に橋をかけて、自然界にあるものすべてを神の現れにしてしまったのだ。

人は自由だという錯覚

スピノザは自然界のなかで人間に軽からぬポストを与えることにも心を砕いた。精神と身体という神のふたつの属性は、スピノザが「様態」と呼ぶ無数の現れ方をする。たとえばソクラテスの精神は、思考の属性といわれるものの一様態である。精神は人間ひとりひとりに与えられた不死の形態なのだ。私が普遍的思考の一様態であるなら、その不死性は、私にもいくばくかの不死を約束してくれる。

知性ある人間はこのようにして、不死の欲求がかなえられたと気づいたとき、自然すなわち神を愛することができるようになる。神の知的愛という言葉は、そういう意味で理解しなければならない。神がわれわれを創造してくれたから神を愛するのではない。また神がわれわれを愛してくれるからで

もない。なぜなら神はいかなる感情にも支配されないからだ。神はただ自身を愛するだけであり、哲学者が知的に神を愛することは、神が自分を愛することの一部分でしかない。スピノザは言う。「神は自分を愛するように人間を愛する。人間への神の愛と、神への知的愛とは同じものである」。

このようにしてスピノザは、神は人間のためにあらゆることをするし、人間も神のためにあらゆることをするというような、究極目的論的で人間中心的な考え方を克服した。神すなわち自然には何ひとつ欠けていないから、おのれに目的を課したりはしないのだ。

彼のラディカルな考え方から出た結論は、当時の人々の気持を少なからず騒がしただけでなく、今日のわれわれをも揺さぶっている。それはいわゆる自由意志の問題だ。人間は何かをするとき、ほんとうに自由意志でそうしているのだろうか。

そうではない、とこたえたのはスピノザが最初ではない。一六世紀初頭に、新教の生みの親ルターが『奴隷意志論』のなかですでに否定している。しかしルターの意図するところはスピノザのそれとは大違いだった。ルターは、人間は神の意志によって創られたものだから自由ではない、神の恵みが与えられなければ、人間は善行をなすこともできない、と言ったのだ。

スピノザのほうは純粋に科学的な見地から自由意志を否定した。ある人がある性格を持っていて、ある刺激にはげしく反応したとすれば、それは、その性格を持っているうえにその刺激を受けたという、ただそれだけのためなのだ。そういう意味で、人間の行動は石の動きに似ている。石は落ちながら、自分が落ちるのは自分の意志がそうさせているからだと思っているなんて、考えるだけでばかばかしい。

しかし人間が自由でないとしたら、そのことは神の知的愛と両立するのだろうか。これはその愛の知的性格を考えれば問題ない。その愛は、数学者がある問題の全容をつかんだときの満足感に似ているのだ。だから哲学者は、自由ではないことを自覚しても、気持が動揺することなどないし、ある種の永遠の必然性から自身も神もものごとも自覚しているので、「心が常に満たされている」のである。

このようにしてスピノザは、合理主義を究極まで推し進めた。するときわめて非人間的な展望が生まれた。個人は生きのびることも自由に選ぶことも望めないからだ。しかしもし永遠なる自然という見地からものを見ることができるなら、ものごとのありようについても納得することができるだろう。このようなスピノザの考え方は、ヘーゲルのような合理主義者やニーチェのようなニヒリストの気持をはげしく燃えたたせたのだった。

15 ロックとバークリー——知性より感覚

観察とは、考えるためのあらゆる材料を知性に提供することである。
ジョン・ロック『人間知性論』第二巻、第一章、二

存在するとは、知覚されるということである。
ジョージ・バークリー『人智原理論』三

ソクラテスからデカルトに至るまで、知識のぬしは常に精神だった。しかし精神は、感覚がしかける罠から、たえず身を守っていなければならない。

感覚と理性がせめぎあったとき、哲学者はためらわずに理性の肩を持ってきた。デカルトは言った。われわれがロウとは何かを知るのは感覚を通してではない。なぜなら、感覚はロウが溶けたらほかのものに形を変えると教えるのに対して、理性のほうは、溶けてもロウであることにかわりはないと教えるからだ。

しかし一七世紀末にイギリスの哲学者ジョン・ロックが、また一八世紀初頭にはアイルランドのジ

ョージ・バークリーが、当時イギリスで起こった政治革命に負けないほど意義深い、思想界の革命を成し遂げた。クロムウェルのように威勢よく、感覚が知性を王座から引きずり下ろしたのだ。しかしこの革命の立役者ロックとバークリーは、考え方をいささか異にしていた。

ロックは知性を感覚のあとにおいた。それは彼が、われわれが持つ観念は生まれつき精神のなかにあるのではなく、経験によって獲得していくものだと考えたからだ。バークリーの考えはもっと過激で、彼は、問題なのはわれわれが形成する観念ではなく、われわれが捉えるもの自体のほうなのだと言った。理性はものの存在を疑ったためしがなかった。しかし実際には、ものが存在するかどうかもたしかではないのだ。

ロックとバークリーは哲学史のなかでも人気抜群の寸言を生んだ。知性より感覚のほうが先だとするロックは言った。「知性が考えるための材料はすべて、まず感覚のなかにある」。一方バークリーの言葉はまるでへりくつのようだ。「ものがあるということは、知覚されるということだ」。しかしそれでは、この地上から生き物が消滅して知覚する者がいなくなったら、この地球も消えてしまうということだろうか。この難問をまえに、司教であったバークリーは神に頼ることにした。ものを知覚する者がいっさいいなくなってしまっても、神の認識はいつまでも残るだろう。

誰にでもわかる哲学を

ロックの哲学者としての足跡をたどるまえに、覚えておきたいことがある。彼は誰にでもわかる哲

学を心がけ、哲学は難解だという思いこみを破った最初の人であったことだ。すでにアリストテレスが、演説では何よりもわかりやすさを念頭に置かなければならないと言ったが、ロックはこれこそが要であるとした。

わかりやすく語るために、ロックは知識の成りたちまで説いた。知識とは何かを明らかにするだけでなく、知識はどのようにして得られるかも明らかにしようとした。それまでは、そんなことは不可能だと思われていた。それはまるで、何かを見ながら、見ている目を見ようとするようなものではないか。しかし彼の展望はみごとに開け、一世紀あとには、カントにインスピレーションを与えるまでになった。ロックはまず第一に、頭には生まれつきの観念がつまっているという錯覚を取り除こうとした。彼によれば、生まれたばかりの人間の頭は白紙のようなもので、その後の経験がそこを知識で埋めていくのだ。

この時代になってもまだ、良家に生まれたら選ぶ道はかぎられていて、坊主になるか高度な職業に就くかだった。一六三二年にブリストル近郊に生まれたロックは医学を選んだが、博士にはなれなかった。けれども友人たちは、親しみを込めて彼をドクター・ロックと呼んだ。彼はその呼び名にこたえるかのように、ある貴人に危険な外科手術を施して、その人を死の淵から救いあげた。その人はアシュリー卿といい、のちにシャフツベリー伯になった人だった。ロックは彼の命を助けたおかげで、自分の人生まで助かった。伯爵は彼を侍医にし、子どもたちの家庭教師にもしたからだ。

それ以来ロックの運命は、パトロンの運命を追いかけることになる。パトロンが落ち目になるとロックもフランスに逃げ、そこで四年を暮らした。シャフツベリー伯が返り咲くとロックのほうも帰国

したが、それもつかの間のことだった。重い背信の廉で伯が告訴されオランダに逃亡すると、ロックも同じ嫌疑をかけられて伯のあとを追った。しかしこんな追いかけっこはそこまでだった。オランダでロックは将来のイギリス王、オレンジ公ウィリアムを知り、一六八八年の名誉革命のあと、故国に戻ることができた。その間自由思想家として名をあげ、新たな政治思潮のシンボルとして仰がれるようになった。

しかしロックはなにしろ哲学がやりたかった。彼は人間には生まれつきの観念があるというそれまでの考え方にまず反発した。ロックによれば、精神は無垢のままこの世に生まれ、そこに知識が積まれるのはもっぱら経験のためである。われわれの精神は平らなロウ板のようなもので、そこに感覚が経験を刻みこんでいくのだ。まず感覚がそこに跡を残さなければ、知性は何ひとつ生産できない。知性のなかには、まず感覚が把握しなかったものなどひとつもないというわけだ。

生まれつきの思想はない

ロックはどのようにして彼のわかりやすいスタイルを築いたのだろうか。彼よりまえには、個人の読者にじかに向かってひとりひとりが納得するように書こうなどと、本気で考える哲学者はいなかった。誰もが意識していたのは、一般人ではなくてエキスパートの集団だった。一般大衆を意識したのはロックが最初で、彼は、本を書きながら味わう喜びを少しでも読者と分かちあいたいと願い、お金を払ったことを後悔しないでほしいと思った。

ロックは真理を見つけるのに知性を懸ける研究を狩りにたとえている。狩りでも獲物を追跡することそのものが大きな喜びなのだ。その喜びの大きさは獲物の質にかかっている。ロックがねらっていたのは知性というもっとも高貴な獲物だった。彼の主著のタイトルが『人間知性論』となったのはそのためだ。

こんな大仕事にロックを駆りたてたのはまったく偶然のできごとだった。彼はある文化的サロンのために友人を数人自宅に招いた。しかし、インテリが集まったときによくあるように、ふたりとして意見が一致しなかった。そこでロックははたと膝を打った。問題を解決するには、何よりもまず、われわれに解決できる能力があるかどうかをはっきりさせなければならないのだ。ロックの著書はこの確信から生まれている。

ロックはデカルトと違って、人間は生まれつき多くの観念を持ちあわせているとは考えなかった。新生児を考えてみよう。その子がいったいどんな観念を持っているというのだ。母親の胎内にいたとき、空腹や温かさは感じとることができたから、生まれたときにそういった感覚をある程度知っていたというなら、十分うなずける。しかしその子が生まれつき観念を持っているなんて、どうして考えられようか。

生まれつきの観念にこだわる人々は、いわゆる万人の一致のことを考えていた。つまり、ある原則をみんなが「その通りだ」というなら、その原則はわれわれの頭に生まれつきあったものであるはずなのだ。しかしそれなら、とロックは反論した。赤ん坊も能なしもその原則を知っているはずではないか。たとえば、あることが同時にイエスでありノーであるということはありえない、という矛盾律

を考えてみよう。この法則を知っている赤ん坊やぼんくらがいるだろうか。こういうことはものを考える年齢になってはじめて意識のうえに浮かぶのだ、などというのも理屈に合わない。無教養な人や未開人のなかには、ものを考える年齢になっても、そんなことは考えもしないで日々を送る連中もいるではないか。

こんな考え方はじつに珍しかった。自分の理論を展開するのに、赤ん坊や能なしから出発する人などなかった。しかしロックは、それはさほど変わったことでもないと言った。幼児や未開人は習慣や他人の意見といったものの影響をほとんど受けていない。だから、もし生まれつきの観念があるとすれば、彼らの頭にこそあるはずではないかと。

ロックにははっきりした目的があった。彼が未開人を例にとったのは、生まれつきのモラルの原則などはないと言いたかったからだ。幼児を例に挙げたのは、生まれつき認識されている観念などはないと言いたかったからなのだ。母親の乳を吸っている乳児が矛盾律を知っているなどと、誰が考えるだろうか。乳を飲ませてくれているのが猫ではないとか、鈴はリンゴではないとか、そういうことを赤ん坊に理解させるのは論理ではないのだ。

しかし万人に共通のモラルの原則があることを否定するには、赤ん坊や未開人の例を挙げても意味がない。それでは犯罪人の行動を考えてみよう。彼らは仲間同士の掟はしっかり守りながら、正直者を傷つけたり殺したりする。つまり正義の観念は打算から生まれたものであって、生来持っているものではないということだ。

しかし原則のなかにはこれよりまだ扱いにくいのがある。たとえばむかしからの格言に、「してほ

しくないことは他人にもするな」というのがある。この原則が生まれつきのものだなんて、考えるだけでばかげている。この言葉を一度も耳にしたことのない人が、なるほどもっともだなどと言うのはたやすいことではないのだ。
しかしともかく人間の頭には無数の観念があって、「白」とは何か、「運動」とは何か、「軍隊」とは何かを知っている。それならばそういった無数の観念はどんな風に形成されるのだろうか。

観念はすべて感覚から生まれる

ロックによれば、精神のなかで観念が育つのは感覚のおかげなのだ。ロックはそのありさまを、何もない部屋に家具がひとつひとつおかれていくプロセスにたとえている。もちろんはじめに生まれる観念はやさしいもので、それからだんだんむずかしいものに移っていく。大人なら18＋19＝37は1＋2＝3と同じくらいたやすく理解できる。しかし幼児はそうではない。まずいちばん小さい数字の観念からはじめ、18や19という数字もそのうちに覚えていく。
正直者のロックは、宇宙のほかの領域には生まれつきの観念を持った生物がいるかもしれない、とはっきり述べている。けれども食器棚にいる虫に人間の精神力が測れないのと同じように、そんなことはわれわれには知りようがない。しかし人間の場合は、なんらかの感覚がありさえすれば、観念を持つことができるのだ。
生まれたとき、われわれの頭は何も書かれていない白紙のようなものだ。それから感覚を通して経

験を積んでいくうちに、その紙が少しずつ、観念という文字で埋められていく。感覚のおかげで、白い、熱い、硬い、あまいといった観念を覚えていくのだ。しかしそういうことを少しでも知覚しないかぎり、観念を持つことはできない。新生児を白と黒しか色のない場所に閉じこめておけば、赤や緑という観念は身につけようがない。蠣を一度も食べたことのない人には蠣の味はわからない。知性のなかにあるもので、まず感覚がつかまえなかったものは何もない、というロックの経験主義の原則がここにある。

しかし人間の観念はそれですべてだろうか。外界から入ってくる観念のほかには持ちあわせがないのだろうか。たとえば欲望、信念、判断といったものは？　しかしそういうものが生まれつきの観念であるとは言えない。それらはわれわれの反省から生まれたものだ。この反省をロックは、五感に対置して一種の内的感覚であると定義した。このいささか強引な定義のおかげでロックは、内的感覚は感受性の一形態であるという彼の主張を守ることができた。

こうしてロックは、知性をまず裸の王様にしておいてから、ついには王座から追放した。知識のふたつの土台は、感覚と反省という、どちらも感覚的なものなのだ。それらによって人は、簡潔で明快なゆえにロックが「単純観念」と呼んだ基本的観念を得ることができる。たとえば氷のかたまりに触れれば、冷たいとはどういうことかがただちにわかる。同じことは内的感覚についても言える。痛みも単純明快にただちに感知されるのだ。

それでは知性とはいったい何なのだろう。知性は自然の鏡でしかない。知性による認識はすべて、感覚と反省を通して得られる単純観念から出てくるのだから、常に受け身のものだ。知性は単純観念

を拒否することも、消し去ることもできないし、ましてや新たに生みだすこともできない。知性にできるのは、単純観念を結びあわせて複合観念をつくることだけだ。たとえば石の観念は、色という単純観念と、硬いという単純観念と、丸いという単純観念が結びあわさってできている。

それではこうした単純な感得の裏には何もないのだろうか。ここまで来るとロックは当惑した。そして、われわれにはものの質を捉えることしかできないから、それの本質を知ることは不可能なのだと言った。たとえばサクランボの本質とは何だろうか。それはわからない。わかっているのは、サクランボは赤くて軟らかくてあまいということだけだ。それらの質を通して実体が見えると考えるのは独断なのだ。無理にそう考えようとすれば、話に出てくるインド人みたいになってしまう。その男は、この世界は大きな象に乗っていると言った。ではその象は何に乗っているのかと訊かれて男は、「大きな亀に乗っている」とこたえた。では亀は何に乗っているのか、という問いに男は、「そんなことは知らない」と言った。

ロックが唱えたこんな風変わりな理論に、彼と同時代の思想家ライプニッツが『新人間知性論』を書いて反撃に出た。ライプニッツいわく、「親愛なる読者よ、私はロックほど冴えてもいないし人気もない。しかし観念はすべて感覚から引きだされるなどというのはいかさまだ。知性のほうが先に立つにきまってる。したがって、認識についての公式はじっさいは次のようになるべきなのだ。知性のなかには感覚から引きだされないものはない。ただし知性そのものは例外である。私は2＋2＝4になることを知るのに、感覚の助けなど借りはしない」。

ものはそれ自体では存在しない

一八世紀前半にアイルランドの思想家ジョージ・バークリーが、腰を抜かしそうなほど突拍子もない哲学の新説を発表した。彼は言った。「天空も、地上にある諸々のものも、世界の力強い機構を支えるどんなものも、精神がなければ存在しない」。つまりものが存在するためには、少なくともそれを知覚する精神がなければならないというわけだ。それを見る目がなければ色はありえないし、誰かがそれに触ってみるのでなければ、硬くもないし軟らかくもない。なんらかの仕方で知覚できないかぎり、どんなものも語れない。誰にも知覚されないものは、まったく存在しないのだ。

こんな珍奇な学説に人々は総出でかみつき、バークリーはいかれてると言う人も少なくなかった。物理学者のなかには、彼は精神病だから治療する必要があると言う人までいた。しかしそこまで興奮しなくても、ものはわれわれが知覚しなくても存在するのだと、誰だって言いたくなる。地球がまわっているところなど見えなくたって、科学が立派に証明しているではないか。地平線の向こうが見えないからといって、そっちには何もないと考える人などいない。

しかしバークリーの分析は念が入っていた。それではものとはいったい何だろうか？　それはたんなる知覚である。リンゴはある種の匂いであり、ある種の味であり、ある種の形なのだ。いってみれば、印象の総合以外の何ものでもない。われわれは、ふつう考えられているような具合に物質を知覚するのではなく、感じとれる質だけを知覚するのだ。感じとれる質の下に感じとれない物質があるの

だと考えるのはアホのすることだ。

しかしバークリーの人生のほうは、彼の学説ほど突拍子のないものではなかった。突出したできごとといえば、二回のイタリア旅行を含む国外旅行と、アイルランドのクロインの司教に任ぜられたことくらいだ。一六八五年に生まれた彼は、幼いころから神童と噂された。学校に上がるとたちまち教師たちの目を引いた。二〇歳そこそこで、彼を有名にした原則に到達したが、その原則を仲間うちに広めるために、わざわざクラブまでつくってそのリーダーに納まった。頭の切れること比類なかったから、まもなくダブリンのトリニティー・カレッジの教師になった。

バークリーは二八歳のとき、『ガリヴァー旅行記』の著者ジョナサン・スウィフトを通して上流社会に入り、アン女王にも紹介された。英国国教会の司教の息子の家庭教師になり、司教とイタリアに旅をしたが、物質の存在を疑っていたにしては、目に入ったものをじつによく見ていた。

三年間アメリカで過ごしたあいだにバークリーは、バーミューダ諸島の先住民の解放を試み、彼らを教育するためのカレッジまでつくろうとした。しかし約束の資金が届かなかったため、この企ては頓挫した。まるでその埋めあわせのように、先住民のほうが彼を魔術的信仰に誘い入れた。その結果彼は、タールには治癒力があると信じるようになった。信じただけでなく、故国にもタールの力を広めようと、小冊子まで書いた。しかしアメリカ人もまた彼に影響されずにはいなかった。一八六八年には、サン・フランシスコ近郊に建設中の町に彼の名がついた。今日その地は名高い大学の本拠地になっている。

存在するのは知覚できるものだけ

バークリーの哲学にはいろんな名前がついた。物質の存在を否定したから「非物質論」。唯一彼が認めたのは精神的なものだったから「精神主義」。存在を精神的現象、つまり知覚によって生じる観念であるとしたから「現象論」あるいは「観念論」。しかしバークリーにもっともふさわしいのは「精神主義者」というレッテルだろう。彼は司祭になり、最後の二〇年間は司教としての日々を送ったのだから。

バークリーは物質の存在を危うくしたあと、人間は精神的な存在なのだから、唯一存在するものと考えられるとした。この確信から彼は、精神の内容についての法則である「esse est percipi（存在することは知覚されること）」のかたわらに、もうひとつの補足的な法則「esse est percipere（存在することは知覚すること）」をつけ加えた。つまり知覚することはそれなりに存在の一様式であると考えたのだ。

バークリーのような変人が、凡人でも一生に一度は抱く疑問から出発しているのはおもしろい。われわれが一度も見たことがない町や人物は、はたしてほんとうに存在しているのだろうか。こんな疑問は、一度くらいは誰でも持つ。カエサルはほんとうにいたのだろうか？　古代ローマとは実在したのだろうか？　いままで寝ていた部屋を出たあとも、ベッドはまだそこにあるのだろうか？　常識で考えれば、見たこともないし将来も見るとは思えないものは無数に存在する。一方で、見たこともな

いものがほんとうにあるなんて考えていいのだろうか、とも思う。
バークリーはある日書斎を出ながら、そのようなことを考えていた。ついさっきまで書き物机はたしかにあった。しかしいまはもうないかもしれない。もう机を見ても触れてもいないのだから、言えることは、書斎に行ったらそれを知覚できるだろうと推測することだけだ。机についてそんなことを考えていたバークリーは、ある結論に達した。ものは絶対的に存在するのではなく、それを知覚する者がいるから存在するのだ。

それなら山や川も、誰かがそれを見たときしか存在しないのだろうか。こんなパートタイムみたいな考え方に納得する人などいないだろう。しかしバークリーは、それは常識に反するのではなく、解釈の仕方なのだと言った。ものはわれわれが五感で感知するものでなかったらいったい何だろうか。そしてわれわれは、観念や感覚をのぞけば、いったい何を把握しているだろうか。そして観念や感覚のなかに、把握されないのに存在するものなどありえるだろうか。こんな風に表現してみると、バークリーの学説はそれほど逆説的には思えなくなる。知覚されないものなど、その存在をどうして認識できようか。

こんなわけでバークリーはきわめてスキャンダラスな哲学者になり、逸話にはこと欠かなかった。たとえばバークリーが高熱を出して倒れたときに、ある医者は、ただのインフルエンザだと診断してから、バークリーの学説を知っていたがゆえに、「司教さまはインフルエンザにかかっておられるのではなく、その観念にかかっておられるだけなのでしょう」とコメントをつけた。啓蒙主義者のヴォルテールも彼をからかって、それなら戦死するのは人間ではなくて人間の観念のほうなのだろうと言

った。

なかにはバークリーに皮肉をぶつけて楽しむ人もいた。たとえばこんなやりとりがある。ある生意気な男が言った。木はバカだから誰にも見られなくても存在しつづける。そのことを神が知ったら、さぞかしびっくりするだろう。すると神が彼をたしなめて言った。「そんなことにびっくりするなんて、バカなのはおまえのほうだ。その木が常に存在するのは、私が見ているからだということを知らないのか」。

この言葉はただのジョークではない。それどころかこれは、バークリーが非物質論の問題に与えた最終的解答そのものだった。人々の反論はこうだった。ものは知覚されるときだけ存在するのなら、知覚する者がいたりいなかったりするのに応じて、消えたり現れたりしなければならないではないか。バークリーが司教だったことを考えれば、彼がなんとこたえたかは想像できる。彼は言った。神がその無限の精神であらゆるものを常に知覚しているから、だからこそものは存在しつづけるのだ。

しかしそれでもバークリーに逆らう人は次から次へと現れた。なかでもはげしかったのは、バークリーはこの世を空想の産物にすぎないと考えている、という人々の反論だった。それでは太陽や月や星はいったいどうなるのだ？　それらも空想が生んだ錯覚でしかないというのか？　バークリーは首を振った。私が否定するのは自然の存在ではない、否定するのは哲学者が「質料」と呼ぶものの存在だけである。彼らは質料を、ものごとの質の目に見えない論拠にしているのだ。

バークリーのそんな言葉に、万人がうんとは言わなかった。反対派は彼に、われわれが食べたり飲

んだりしているのは観念にすぎないのかと質した。いや、とバークリーはこたえた。われわれは感覚が捉えたものを食べたり飲んだりしているが、それは精神が把握したもの以外ではありえないのだ。

バークリーの理論は、言葉の使い方についても人々を敏感にした。たとえばものの言い方にうるさい人なら、水が気分をさわやかにするとは言わないだろう。水を知覚するから気分がさわやかになるのであって、さわやかにするのはあくまでも精神の作用なのだ、と。けれどもバークリーはそんなことまでは考えていなかった。肝心なのは明確な観念を持つことで、世間のあいまいな言葉遣いを借りるのは仕方がないことなのだ。バークリーは彼のマニュアルをひとことで表現した。いわく、「考えるのは識者と、話すのは庶民と」。コペルニクスの発見のあとだってわれわれは言っているではないか。「太陽が昇る」とか「太陽が沈む」とか。

16　ライプニッツ――この世ほどいいところはない

もしこの世界に悪がなかったら、それはもはやこの世界ではない。
ゴットフリート・ライプニッツ『弁神論』第一部、九

ロックやバークリーが感覚を重んじたのに対して、一七世紀末のヨーロッパでは、知性を重んじるゴットフリート・ライプニッツの思想がもてはやされた。ライプニッツは数学を愛し、論理学を愛し、理性の哲学を愛した。こうした好みが手伝って、彼は筋金入りの楽天家になった。もしこの世を支配しているのが理性なら、その理性は意地悪な理性でも支離滅裂な理性でもない。この世もまた、そんな理性に導かれているからには、意地悪でも支離滅裂でもありえない。ライプニッツがこんな風に考えたのは、彼が生まれたのが恵まれた時代だったからだろうか。とんでもない。三十年戦争のあとで、疫病あり、宗教的対立ありの世の中だった。しかし聞きたくない人には聞こえないものだ。ライプニッツに聞こえたのは理性の声だけだった。

あるときプロシアの王妃ソフィア・シャルロッテがライプニッツに、この世はどんなところかとたずねた。ライプニッツはためらいもせずに、この世はありうるかぎりの最良の世界ですとこたえた。

彼自身だって、自分の言葉を根っから信じていたわけではないだろう。それなのにこの文句は、当時の哲学者のあいだで人気抜群の格言になってしまった。

政界を泳ぐマルチタレント

アリストテレスを別にすれば、ライプニッツほどのマルチタレントはいない。とくに数学に冴えていて、微積分まで発見した。しかし彼がいちばん夢中になったのは法律と哲学だった。神童と謳われながら、一五歳にしてすでに、スコラ哲学的な微妙な問題のいくつかを、まったくオリジナルな方法で解いた。まだ年若いうちに大学から法学の講座を委されたほどだから、大学人として生きることもできただろう。しかし彼は学問でメシを食おうとは思わなかった。宮廷や外交が大好きで、太陽王ルイ一四世やピョートル大帝といった権力者や名高い姫君とのつきあいにうつつを抜かした。

当時、政界でキャリアを積む近道は、薔薇十字会というフリーメーソン的な秘密結社に入ることだった。そのメンバーは魔術の研究に没頭し、世界の改革を夢見ていた。ライプニッツにとって、ユートピア的改革なら願ってもないことだった。彼は文化も政治も宗教も改革する必要があると思っていたからだ。けれども薔薇十字会のメンバーになるには、まず錬金術師として認められなければならなかったから、ひとまずその秘密結社の秘書になった。

人柄がキャリアをつくる、とはよく言われることだ。ライプニッツはその点で申し分なかった。まもなくある有力な男爵と知りあったが、男爵は彼をマインツの選帝侯に引きあわせた。それからほど

なくライプニッツが選帝侯の顧問官になったことはいうまでもない。こうして薔薇十字会に忍びこんで五年目の一六七二年、彼は結社の外交使節としてフランス王に謁見するまでになった。思ったほどの成果はあがらなかったが、とにかく彼にしてみれば大した出世だった。外交使節としての役割は、オランダをねらうルイ一四世の意欲をそいでエジプトのほうに目を向けさせることだった。しかし一枚上手だった王はその手には乗らず、十字軍の時代はもう終わったのだとにべもなく言った。しかしライプニッツには、好きなだけパリに留まるようにと言ってくれた。

ライプニッツは成果が乏しかったことで落ちこんだりはしなかった。知識人たちを足繁く訪問することを楽しみながら、四年のあいだパリ生活をむさぼった。ドイツに戻るとハノーヴァー公の図書館長になったが、その前にまずオランダに立ち寄った。目的は政治ではなく哲学だった。ライプニッツは思想の弾圧を受けていたスピノザを訪ね、精神的な力になりたいと申しでた。しかしスピノザは自分の思想がライプニッツのそれとはまさに反対だったから、それほど乗り気にはならなかった。無神論者のスピノザは、神をしっかり信じているライプニッツの順応主義にはうなずけなかったのだ。

残りの日々をライプニッツはハノーヴァー公のために働き、公の修史官にもなった。知識は百科事典並みだったから就いた職務は数えきれず、もらった報酬もハンパじゃなかった。自分を売りこむことにかけてはすこぶる熱心だったが、学問もけっしてなおざりにしなかった。フリードリヒ一世を説得して学士院を創設し、その初代終身院長に納まった。

ライプニッツの学識は相当なものだったけれど、ものを書くのは気が向いたときだけで、しかも君子や公女に頼まれてちらほらと書く程度だった。彼は君子や公女の頼みならどんなくだらないことで

もほいほいと引き受けた。しかしライプニッツには読み手への思いやりなどなく、書いたものを解説するマニュアルひとつつくらなかったから、評判はさっぱりだった。

奇妙な話だが、彼の場合は体系的な論文より気まぐれな断片のほうが読みにくかった。しかし彼はトップモードには敏感で、流行の文化を追うことに熱をあげ、学問的に価値のある研究成果は引きだしにしまってカビの種にしておいた。唯一の例外が微積分で、論文は一六八四年に発表された。

この世界は考えつくあらゆる世界のなかでベストだという、きわめて楽天的なことを述べている作品も、気まぐれな書き物のなかのひとつだ。『弁神論』というタイトルのついたこの論文は、プロシアの王妃シャルロッテのために書かれた。シャルロッテは娘のソフィア・シャルロッテとともに、ライプニッツの熱烈なファンでパトロンになっていた。

しかし彼女たちがこの世を去ると、ライプニッツの輝かしい人生は一気にどん底まで墜落した。目を見張るようなキャリアが突然終わりを告げただけでなく、彼はニュートンの猿まねだという非難がロンドンから押しよせた。彼はほどなく世間から忘れられてしまい、あとには寂しい晩年が待っていた。一七一六年に死去したとき、彼のそばにいたのは秘書ひとりだった。遠くにいた身よりはまともに埋葬しようともせず、おかげで彼の墓がどこにあるのかは、いまもってわからない。

ライプニッツの人柄については意見が分かれる。彼は高貴な精神の持ち主だったという人もいる。しかし哲学の論争では紳士的だったかもしれないが、日常生活でもそうだったとは言えないようだ。たとえばハノーヴァーの宮廷で結婚式があったときには、彼はいつも一銭もお金のかからないもの、すなわち自分の哲学的格言を結婚祝いにしたそうだ。その格言とやらは、健康についてのアドバイス

で締めくくられているのが常だったという。それってはたしてほんとうのことだろうか。疑いたくなるのは、こんな逸話を伝えているのがバートランド・ラッセルで、彼はイギリス人の例に漏れず、ニュートンの一件でライプニッツをあまり快く思っていなかったからだ。

この世はうまくできている

ライプニッツが一七一〇年に発した言葉は哲学界を二分した。一方は大ばか者だと言い、一方はほら吹きだと言った。ライプニッツは間抜けだから、この世には悪がわんさとあることに気がつかないのだと言う人と、奴は見えないふりをしているだけなのだと言う人がいた。しかしライプニッツ自身はといえば、彼の宣言がいかに奇抜であろうとも、筋の通ったことなのだと信じて疑わなかった。

ライプニッツのライバルたちがこれ見よがしに挙げたこの世の悪は、彼にしてみれば小麦の腐敗のようなものだった。腐敗がなければパンもできない。彼には農業の経験はなかったけれど、小麦が芽を出すにはまず腐敗が起こらなければならないことは、農家の人から聞いていた。この話を彼は、悪の効用についてのいい例だと考えた。悪はそのうえ、善を味わうための絶好の味つけにもなる。一週間もものが食べられなかった人には硬いパンでもとびきりのごちそうだし、あやうく足を麻痺しかけた人には、足が動くだけでもじつにうれしいのだ。

けれどもなにしろタイミングが悪かった。三十年戦争のあとの類を見ない飢餓の時代に、たとえ一週間にせよ、空腹がいいことだなんてどうして言えようか。ドイツでなくたって、またその時代でな

くたって、餓死した人があの世からエールを送るなんてことはありえない。

だがライプニッツには奥の手があった。彼は自分の矛盾をはらんだ理論を守るのに、神を引きあいに出したのだ。そしてさほどためらいもせずに、さも神から秘密を打ち明けられたような顔をした。彼は神の善性はもちろん受けいれながら、悪の存在だって正当化できると考えたのだ。

ライプニッツはそこで、可能性の概念を持ちだして神の擁護者の役にまわった。彼いわく、いくら神だってどんな世界も創れるわけではない。それでは神は全能ではないということか？　彼のこたえはじつに巧妙だった。神がどんな世界も創れるわけではないのは、神が全能でないからではなくて、支離滅裂な世界を創ったら恥になるからなのだ。だから筋の通った世界しか創れないわけで、そういう世界を創るには悪が不可欠なのだ。

しかし彼のこんな考え方は苦しんでいる人にはあまりにも無情だった。この世界は最良であるという理論に納得できないのは、人間は常になんらかの苦悩を抱えているからなのだ。だから哲学者よりむしろ庶民のほうが、ライプニッツの説に強烈に反発した。ライプニッツは袋小路に追いこまれたかに見えた。

悪の存在を正当化するなどというのは生やさしいワザではない。さすがのライプニッツも頭を抱えたあげく、いつもの彼らしからぬことをやりはじめた。異教の神話をヒントにして、空想的な話をこしらえたのだ。

ギリシャの哲学者である若きテオドロスが運命の宮殿に導かれる。そこはゼウスが、自分が創造した傑作を愛でるためにときおり訪れる場所だった。主室には分厚い書物があって、運命の書というそ

の書物には、この世の歴史が明かされている。訪問者は自分が知っている人の名がある行に指をのせれば、たちまちその人の人生がことごとく目の前に現れる。
この話が言わんとすることは、世界中を統(す)べる建物があるということだ。しかしこれもまた、「ありえる最善の世界」に負けないほど人騒がせな説だった。ライプニッツはこの説に「予定調和」という名をつけた。これは古きストア学派の狂信的思想の焼き直しだったが、同時にそれ以上のものでもあった。ライプニッツはこの概念を使って、デカルトが言った心と身体の関係の問題を解こうとした。
非物質的存在である意志が身体の一部である腕を動かすなんて、そんなことがどうして起こるのか。すでに見たように、デカルトが出したこたえはかなり怪しげな解剖学的でっちあげだった。それは、脳の松果体という腺には精神と物質を兼ね備えた特質があって、そのために連絡役を果たしているという説だ。
ライプニッツの出したこたえはこれほど空想的ではなかった。彼は、神はたえず動いているこの世の見張り番として、心と身体をつなぐためにときどき奇蹟を起こしているのだと考えた。こんなことを考えたのは、かの予定調和の説を思い浮かべたからだった。神はこの世を創造したときから、心と身体が完璧にシンクロするようにしたのだ。あたかもひとつの時計が多くの時計を管理して、それぞれは別なのに常に同じ時間を刻ませるかのように。
ライプニッツはこの発想にご満悦だった。『単子論(モナド)』のなかで彼は、この発見の効用を宣伝している。この発見のおかげで、三つの驚くべきことが手品のようにわかった。身体は心などないかのようにふるまい、心は身体などないかのようにふるまいながら、この両者はあたかもお互いに影響しあっ

ているような動きをするということだ。

ちょっと詭弁めいたこんな手の込んだ説明によって、ライプニッツはこの世界を、完璧に機能するシステムとして示すことができたと自負していた。これならこの世が悪の存在によって揺さぶられることもないだろうと。この世界では人は自由ではないが、それと同時に、悪をなすこともできなければ自由ではない。こんな怪しげな論理でライプニッツは、悪も神の正義のなかにきちんと収まると説明できたような気になった。そこで神の正義をギリシャ風に表わした『弁神論』という言葉を、予定調和説を含む著作のタイトルにした。

ライプニッツはいろんな格言の作り手としてより、微積分学の創始者としての功績のほうがはるかに大きい。しかし彼を一躍人気者にしたのは格言のほうだった。なにしろ彼の言うことは挑発的で刺激的で人目を引いたのだ。すなおにうなずける言葉などひとつもなくてもである。

けれどもライプニッツの言うことは、少なくともそのなかの目立ったものは、考えさせるほど深い内容を持ち、しかも彼の哲学を超える要素まで持っていた。たとえば「見分けがつかないものについての」原則とのちに言われた言葉もそのひとつである。ふたつのものはお互いにどんなに似ていても、まったく同じものではなく、したがって入れ替えることなど不可能だ、とライプニッツは言った。「自然界には完全に同じものはふたつとしてない」と。見分けがつかないのは、同じように見えるふたつのもののあいだにある差異なのだ。

彼のこの言葉には有名になったエピソードがある。ある日、ライプニッツの友人でプファルツ選定侯の選挙人であった女性が、彼を公園の散歩に誘った。彼女は落ち葉を集めて楽しんでいたが、それ

を見ているうちにライプニッツは、彼女を試してみたくなった。そこで彼は彼女に、まったく同じ葉っぱが二枚見つかるかと訊いた。結果は思ったとおりで、そんな葉っぱは見つからなかった。

しかしこの世の中のあらゆるものを試してみることなどできっこない。だから「見分けがつかないものの原理」の普遍性を証明することなど不可能だ。けれどもこの原理はどこから見ても真実らしく見えたので、真理と認められて評判になった。

しかしこの説は、二〇世紀になって物理学がめざましい発展をしてからは、真実ではなくなった。ふたつの電子はお互いに区別できないことがわかったのだ。しかしながら、ライプニッツの原則が二世紀以上にわたって人々をうならせてきたことは真実である。

17 ヴォルテールとルソー――パラドックスは活性剤

なんの宗教も持たないよりは、たとえいかさまでも宗教を持っているほうがはるかにいい。

ヴォルテール『哲学辞典』「無神論者、無神論」

原初の状態にある人間ほど穏和なものはない。彼らは、動物的な愚かさからも文明人の忌むべき光からも遠いところにいる。

ジャン＝ジャック・ルソー『人間不平等起源論』第二部

一八世紀は、いわゆる文化が学界や図書館から脱出しようとした時代で、百科全書、辞典、哲学小説などはすべて、この新しい傾向の現れだった。それなのに、肝心の本の著者たちは大衆のなかに分け入ろうとはしなかった。彼らが好んで通ったのは閉鎖的なサロンであり、書き物を広めたのはもっぱら貴族の屋敷においてだった。当時、真理の逆を行くパラドックスが市民の間で人気を呼んだ背景には、こんなアンバランスな状況があった。

パラドックスは問答の形をとるから、とりわけ派手で人目を引く。しかし内容のほうはあまり受けない。というのもその名が表わすように、パラドックスは往々にして世論に背いているからだ。たとえばヴォルテールは「人々は神の存在を疑ってはいないだろうか？」という問いに対して、「神がいないなら発明すればいい」と言って騒ぎを起こした。ルソーは「人々は人類の進歩を確信しているか？」という問いに対して、「進歩などどろくな結果を生まない」と言ってのけた。

哲学者たちのこうした言葉は彼らの思想の要約にはならなかったが、社会に対する刺激的なカンフルに放った。それでは啓蒙的なパラドックスが的にしたのは何だったか？　それは当時のモラルやデカルトの精神主義といった、伝統に毒された思想であり思想家だった。しかし啓蒙思想家同士がいがみあうこともあって、なかでも有名なのはヴォルテールとルソーの対決だった。このふたりはお互いに逆の立場を守り抜いたが、運命の皮肉か、世を去ったのはたったの一カ月違いだった。

ヴォルテールは才気豊かで偏見のない啓蒙主義者として名をとどろかせていた。彼が好んで刃を向けたのは、倫理や宗教の偏見だった。一方のルソーはヴォルテールほどの目立ちたがり屋ではなかったが、人間性豊かだったからファンが多かった。ヴォルテールは鋭い皮肉をじゃんじゃん飛ばし、ルソーのほうは情に訴えて心の琴線をふるわせた。

笑うヴォルテール

ロックは明晰な哲学の種をまいたとき、それがどんなに驚くべき芽を出すか、予見してはいなかっ

た。その芽は「啓蒙の時代」と呼ばれた次の一八世紀に実をつけた。啓蒙という言葉には、理性の新しい考え方がかいま見える。それは、理性は人間の精神の影の部分も残さずに照らしだしながら、問題を解決しなければならないという考え方だ。このために新しい思潮はふつう「合理主義」とは呼ばれずに、「啓蒙主義」と呼ばれている。

啓蒙主義がとりわけ豊かな実を結んだのはフランスだった。この思想をみずから示したヴォルテールはほかならぬフランス人なのだ。彼の哲学は精神的支柱であったふたりの先輩ロックとニュートンの哲学にある程度似ていた。だから独創的な理論はそう多くはないが、その名声たるや大したものだった。彼がその時代に及ぼした影響は他に類を見ないほどで、大衆向けのカリスマ性でも他に抜きんでていた。

しかし身体のほうは頑健ではなく、病人のようにやせて、顔は天然痘のあばただらけだった。それでも華美や奢侈を愛したが、裕福であるうえに宮廷にしょっちゅう出入りしていたので、この好みは存分に満たされた。彼はフランス王の修史官になったり、プロシアのフリードリヒ二世の侍従になったりしている。

一六九四年にパリに生まれたヴォルテールの本名はフランソワ＝マリ・アルーエ。運命の皮肉か、フランスの教権反対者の代表格であった彼が教育を受けたのは、公証人であった父親に入れられたイエズス会の学校だった。イエズス会は学問の進歩を止めてしまうと啓蒙主義者は言っていたが、ヴォルテールの才能はそんなことで息を止められはしなかった。二〇歳を過ぎたばかりで早くも文学的成功を収め、華々しく世に出たが、それと同時にトラブルも起こした。摂政のオルレアン公を風刺する

詩を書いたために、バスティーユに投獄されたのだ。

しかしそれから八年ののち、こんどはローアンの権力者を侮辱した罪でふたたびバスティーユに送られた。その貴人はヴォルテールをまず棒で打ちのめさせてから、次には監獄送りにした。この事件がトラウマになってか、彼は名声の絶頂にいるときでも、もはや宮廷生活を心から楽しむことはできなくなった。しまいには哲人王で彼を学者以上に遇してくれたフリードリヒ二世とも仲たがいした。しかしヴォルテールを客人として歓待する人はたえずいて、パリでは愛人のシャトレ夫人が世話をしてくれた。彼は自分の助けになることと愉しみとをひとつにする才に恵まれていた。

ヴォルテールは喜劇、小話、悲劇、哲学作品などなんでも書いた。文学作品のなかでとくに秀逸なのは『カンディード』で、彼はこのなかで、この世はありえる世界のなかで最良だというライプニッツの言葉を笑いぐさにしている。七年戦争やリスボンの大地震を考えてみたらどうかと。

哲学作品のなかの珠玉は『哲学辞典』で、ここでもまじめな論調に並べて、戦争から迷信までの人間の恥ずべき諸行について、鋭い皮肉を飛ばしている。宗教の狂信や社会の不正を告発する一方で、形而上学の難解さをからかうことも忘れていない。

優れた著作を書きながら一方ではハチャメチャな行動もするヴォルテールを、軽薄なおっちょこちょいと評する輩も少なくなかった。しかしじっさいには、ほかの第一級の哲学者とくらべてとくに目立つほどでもない。変わったところといえば、彼がモラルの面で筋を通そうなどとは考えなかったことだ。しかし頭脳競争で相手をやりこめようと思ったときには容赦しなかった。たとえば彼は、ライバルでモラリストのルソーのぼろを引っぱりだして、彼はわが子をひとり残らず孤児院に放りこんだ

鬼のような父親だ、とすっぱぬいた。

神がいないなら創らねばならぬ

啓蒙主義者がこぞって攻撃の的にしたのは権威ある原則、すなわち因習的な思想だった。哲学の分野では人は生まれつきの観念を持たないとし、政治の分野では絶対主義に対抗して自由主義を唱え、宗教では教条主義をやり玉に挙げた。だからといって啓蒙主義者がすべて無神論者であったわけではない。なかには無神論者もいたけれど、むしろ少数派だった。しかし人間のイメージを持った人格神には大方が背を向けた。

神についての彼らの考え方は「理神論」と呼ばれた。理神論者が考える神は人格ではないし、われわれの世話もしてくれないから、それに頼ることなどできない。迷信への揶揄はヴォルテールの本を開けばいつでも出てくる。たとえば『哲学辞典』をぱらぱらとめくってみよう。信仰とは？ われらが理性から見て真実と思えることではなく、偽りと思えることを信じることである。神父とは？ 人々の悩みを聞き心の世話をしているかぎり、ケチをつける必要はない。しかし「信じないなら火あぶりだ」と言うのなら人殺しだ。これならいいという宗教がひとつぐらいはあるだろうか？ ヴォルテールの返事はきっぱりしている。それは教義はそっちのけにして道徳を大いに説く宗教だ。

ヴォルテールは信仰に凝り固まった人が大嫌いだった。しかしだから無神論を広めようとした、というわけではない。無神論は人を苦しめたりはしないが、神がいなければモラルに反することがやり

やすくなるかもしれない。正義とか寛容といった道徳はやはり必要だ。そこで彼は、「神がいないなら創らねばならぬ」という有名な言葉を発した。

しかし創られた神とはどんな神だろうか。それは宗教の教義が教えるような神ではない。スピノザが言うような、起こることはすべて神自身なのだから何が起ころうと頓着しない神でもない。もし神がそういうものなら、われわれの身体や精神は何をするためにあるのだろう。「目は見るために、耳は聞くために、足は歩くために、羽は飛ぶためにつくられているのか？　そうした疑問をスピノザはまったく持たなかった。世界の流れを支配している深い目的について、彼は考えなかったのだ」とヴォルテールは書いている。

けれども摂理としての神をヴォルテールが考えたのはそのためではなかった。悪が四方からわれわれに降りかかるとき、神がそれを見て助けてくれる、などと考えるのは愚かなことだ。それならどう考えるべきか？　神とは不在のぬしみたいなミステリアスな存在で、われわれには思いもよらない方法で善行をほめ悪行を罰するのだと考えるしかない。しかしだからといって絶望する必要はない。絶望するのは神のすることにばかげた希望を託す者だけだ。日々の現実に適応し、『カンディード』の最後に書かれているようなモラルを身につけた者は絶望などしない。つまり、あまり考えすぎないで働くことが、人生を楽に過ごす唯一の秘訣だというわけだ。

泣くルソー

啓蒙主義のもうひとつの顔はルソーである。名声はヴォルテール並みだったが、ルソーは気質も性格も正反対だった。哲学を扱うとき、ヴォルテールは切れ味のいい皮肉を得意としたが、ルソーのほうは感情に訴えた。思想を語るときヴォルテールは人を笑わせ、ルソーは泣かせた。

ルソーが成功を手にしたいきさつはちょっとしたエピソードのようだ。まもなく四〇歳になろうとする一七五〇年のある日、ディジョンのアカデミーが「進歩は風俗の改善に寄与したか」というテーマで懸賞論文を募集していることを知った。ルソーはそのテーマに、啓蒙主義者としてよりも、憂鬱と郷愁の念にとりつかれた未来の夢想家のようにして向きあった。彼はこたえがノーであることをただの一瞬も疑わなかった。幸福な時代というのは感情が人間をぐんぐんまえへ押していく時代だ。けれどもそんな時代は、進歩が風俗を腐敗させたおかげですでに過去のものになってしまった。

こんな悲観的な思いに胸がふさいで、論文を書き終えたルソーは落ちこんでしまった。まるで酔っぱらいみたいに木の根っこにひっくり返り、そこを半時間ばかり動けなかった。立ちあがったときには頬が涙で濡れていた。しかしそのあと栄光がやってきた。彼の執筆した『学問芸術論』がアカデミーから賞を受け、同時に大いなる声望にもありつけたのだ。

ルソーの人生は貧しい生まれの男が幸運をつかむサクセスストーリーそのままだ。一七一二年、母親は彼を産み落とすとすぐにこの世を去り、父親とも彼が一〇歳のときに別れた。しかし苦労は長く

は続かなかった。彫刻師をしばらくやったあと、音楽の才能を使って音楽教師になり、教養をもとでに家庭教師にもなった。何でもやってやろうという精神の持ち主だったから、たちまち好都合なパトロンを見つけた。パトロンは女性のほうがよかったが、女性関係はおおむねうまくいかなかった。相手は貴族やお針子や娼婦などいろいろだ。彼が一六歳のとき恋の手ほどきをしたのは、ある神父が彼に母親がわりにあてがったヴァランス夫人だった。サルデーニャ王のスパイでもあった彼女は、ルソーがいい若者に成長すると、愛人の役にまわろうとした。しかし母恋しのルソーは彼女をママと呼びつづけたという。

ルソーはヴァランス夫人に別れを告げ、次には一転庶民の女に手を出した。小間使いとできて五人の子どもをもうけたが、ひとり残らず孤児院送りにした。相手の女はあばずれで不実で、酒をあおると若造の尻を追いまわした。それでもルソーは彼女が好きだったと見え、二〇年後には結婚している。子どもを捨てたことについては後悔などさらさらしなかった。捨てることにしたのは、子どもたちは「母親が育てたらくずになってしまうし、彼女の家族が育てたらモンスターになってしまう」からだった。

人間ルソーのなかでは、精神のふたつの要素が常にぶつかりあっていた。彼は感じやすく情熱的だったが、好きな女といるときでも常にもう一方の知的で冷静な要素が頭をもたげ、あげくに女に逃げられることも多かった。あるときなどは肉体的な欠陥のことで娼婦を質問攻めにしたために、たちまち愛想をつかされてお払い箱になった。ルソーはこんなハプニングをたえず悔やみ、そのために人生から永遠に見捨てられたような気がしていた。彼の自伝の最後の何ページかには、学問上や私生活で

味わった失望がひしめいている。
彼の回想記のもっとも憂鬱なページを埋めるペシミズムの種はこんなところにあった。苦悩を生んだのは教養だった。「私は失意の二〇年に悲しむべき学問を身につけた。こんなことなら無知でいるほうがよかったといまでも思う」。

人間は進歩するほど悪くなる

人間は人づきあいがうまくなればなるほど意地悪になる。このパラドックスはルソーを有名にしたが、彼はこれを宣伝してはばからなかった。人間は進歩すればするほど、善良で幸福な存在から、悪行によって自分も他人もダメにしてしまう存在に変わってしまう。ルソーはこのパラドックスで売りだしたが、啓蒙主義者のあいだでは煙たがられた。なにしろ当時は啓蒙主義が幅をきかせていた時代で、啓蒙主義というのは、ルソーが毛嫌いしていた進歩への信仰から生まれたものなのだ。
当時は科学の進歩が実を結びはじめ、テクノロジー方面の諸発見が科学のありがたみを実証していた。そこへルソーが、そんなことは役には立たぬと意外なことを言いだしたのだ。あげくに『学問芸術論』のなかで、科学が興ったのは人間の進歩と改善にハッパをかけようという願望からではなく、悪い意図からだと言い切った。天文学は迷信に、雄弁術はおべっかに端を発したのだと言い、幾何学に至っては、自分の所有地を測って境界をはっきりさせたいという、ケチな欲望から出たのだとぬかした。もっともらしい理由が見つからないときには「くだらない好奇心」を理由にした。

要するに学問は人間の悪癖から生まれ、悪癖を長持ちさせるものでしかない。ルソーが学問嫌いになった原因として、カトリックに転向するまえはプロテスタントだったという事情を抜きにはできない。プロテスタントの精神からすれば、純粋な学問よりむしろ実際的な活動こそが肝要なのだ。ルソーはこのプロテスタント的な価値観に押されて、人間はもとは善良だったのに文明の進歩につれてだんだん悪くなったと確信した。彼はのどかだった人間が堕落の一途をたどるありさまを、じつにリアルに描写している。

原初の人間はホッブスが考えたような人間とはまったく違って、涙もろく無邪気で、自分の利益を図ろうとしながらも、他人を敵にはしなかった。しかしあまり利口とはいえなかった。知性は欠点なのだ。頭が働きすぎる奴は他人の干し草をぶんどり、他人の育てた果物をもぎとる。土地を垣根でかこっては自分のものだと言い張る。しかしもし誰かが最初のうちに、土地を自分のものにした奴はペテン師だとはっきり言っていたら、人類は破滅から救われただろう。ルソーはそう言って嘆いた。

原初の人間ののどかな風景がいかにユートピアめいていても、原初の時代に帰ることの大切さをルソーは信じて疑わなかった。彼は自分の立場を強めるために、当時インテリとして右に出る者のなかったヴォルテールに意見を仰いだ。ルソーはヴォルテールの卓越した才能にうなっていたから、彼からもらった返事にはがっくりした。

私はもう老人なので、いまさらふたたび四つ足で歩くことなど願い下げです。私の病気は祈禱師ではなく進歩した医術にしか治せないから、原始的な療法に頼るわけにはいかないのです。ルソーはヴォルテールからのそんな返事に悔し泣きをし、そのときの恨みから、ふたりの仲は壊れてしまった。

進歩こそよけれという啓蒙の時代に進歩を呪うルソーの学説が受けたとは、驚くべきことだ。理由として考えられるのは、当時流行っていたヨーロッパの外への旅行が、人々に「素朴な暮らしのよさ」を思わせたということだ。むかしの人はやかましい都会ではなくちっぽけな小屋に住み、動物の毛皮を敷いてやすらかに眠り、自然界でとれるものを材料にして食べたり衣服をつくったりし、狩りや敵の追跡のために長い時間歩きまわった。そんな生活はすばらしいにちがいない！　われわれフランス人は大きな家でマットレスや絹のシーツを敷き、パイやこってりした料理を食べ、水をはじく皮ではなくて、滑稽なほど薄い変な布をまとっているのだ！

これは彼の本のじつにいい宣伝材料になった。ルソーには動物の皮を着るつもりもマットレスを手放すつもりもなかった。本がもたらす版権料をはじめとして、彼もみんなと同じように、文明によって生まれる利益は享受していた。素朴な生活へのあこがれを人々に抱かせはしたけれど、そんな生活などあったためしがないことは承知していた。彼はただ、自然からの呼び声をまったく無視してはいけないのだと、人々にそう訴えたかったのだ。

18　カント――人間は自然界の立法者

ものごとはわれわれが認識するようにある。

イマヌエル・カント『純粋理性批判』第二版序言（一七八七年）

啓蒙主義の全盛期が過ぎると、哲学は本来の威厳を取り戻した。その立役者は「哲人のなかの哲人」カントだった。西洋哲学の全史を通して、彼と優劣を競う人はせいぜい数人しかいない。カントは偉大なる思索家で、われわれは何を知りえるか、われわれの行動はどう判断するべきか、自然や生命には目的があるのか、といった根本的な疑問に天才的なこたえを与えた。

しかしカントは啓蒙主義と対立したのではなかった。それどころか、主要な著作のなかで、「啓蒙主義は精神的未成熟を脱する出口である」という有名な定義をしている。この精神解放の貴重な成果として、批判精神が生まれた。カントは批判主義をモットーにしてその精神を受け継ぎ、そのあかしとして理性を審判にかけた。理性の審判役は理性自身なのだ。理性は一種のチェックアップを通して、その力量と限界を明らかにしていく。

カントを読みはじめるとふいに光が差したように感じる、と書いた人がいる。光が差したように感

じるのは、ほれぼれするとは言いがたいカントの文章のためではなく、そこに示された概念のためなのだ。彼の本を読んでいると、「まったくその通りだ！」と思わずため息が出る箇所にしばしばぶつかる。そんなときには、読むのに苦労したことも忘れて、これこそ哲学だと感服してしまう。

カントは思想界に革命をもたらしたが、その革命とともに、哲学用語や定理の新たなレパートリーも生んだ。たとえばその代表格として、「われわれは自然の立法者であり、われわれに発見できない自然界の法則はない」というのがある。

これはそれまでの哲学の根本的な転換だった。だからカントがこれを「コペルニクス的転換」と称したのは思いあがりとは言えない。コペルニクスは、太陽が地球の周囲をまわっているのではなく、じっさいはその逆であることを証明した。カントもそれと同じように、自然の法則がわれわれの精神を管理しているのではなく、その反対に、われわれの精神の法則が自然に秩序を与えているのだと説いた。

このコペルニクス的転換を果たすためにカントは、人間の精神にX線をかけた。彼の主著『純粋理性批判』はまさにこのレントゲン写真にほかならない。

時計がわりの先生

カントの人生には、プラトン、アリストテレス、ヘーゲルといった哲学界の大物の人生にくらべると、目立ったできごとはない。一七二四年に東プロシアの小都市ケーニヒスベルク（現在ロシア共

和国のカリーニングラード）に生まれた彼は、そこの大学でほとんど一生涯を過ごした。正教授になったのは五〇歳になろうとするころで、それまでのほぼ一五年間は、フリーの教員として数学や倫理学などいろんなことを教えていた。近代思想家のなかではダントツの国際的有名人なのに、彼自身はほとんど田舎町を出なかった。それでも彼の残した逸話にはおもしろいものが少なくない。

なかでも有名なのがカントは時計がわりだったというもので、じっさい彼は「ケーニヒスベルクの時計」というあだ名をもらっていた。几帳面なことははなはだしく、一日をいくつかに分けて、起床、朝食、授業、昼食と、毎日同じ時間に同じことをした。散歩時間の正確さも驚くべきもので、町の人の目に映る先生は毎日三時半きっかりに家を出ると、いまでは「哲学者の小道」として有名な、樹木の生い茂った通りを散歩した。その道を先生は、まるでアスリートが決められた訓練のプログラムをこなすように、毎日八回往復した。そんなわけで、ケーニヒスベルクの時計としてのカントの名は高まり、人々は彼が家を出るのを見て時計の針を調節した。

しかし少なくとも二回は、町の人ががっかりすることがあった。ひとつはカントのもと教え子だった貴族の散歩のお供をしなければならないとき。それからルソーの『エミール』を読みふけっているとき。どちらの場合にも、ケーニヒスベルクの時計はお休みだった。

カントは感心するほど腰の重い哲学者だった。故郷を出たことは一度もなく、旅は本と想像力でした。この意味で、港町ケーニヒスベルクは理想的な町だった。カントはよく港のそばの居酒屋へ足を向けては、遠くの国々の噂話や冒険譚に耳を傾けたという。船乗りたちの話は、人類学の知識をふやすのに格好の材料になった。

カントが批判精神を養うのにもっとも力になった哲学者は、スコットランドのデイヴィッド・ヒュームだった。カントは、ヒュームが彼を独断の眠りから覚ましてくれたと言っている。カントにも偶然スコットランドの血が流れているが、彼の書くものは、ヒュームやフランス啓蒙思想家たちの才気あふれる書物にくらべると重苦しい。しかし書き方は重苦しくても、使う言葉には軽妙洒脱な味があった。

晩年のカントはしだいに記憶と言葉を失っていき、一八〇四年にこの世を去った。偉大な思想家にしては皮肉で哀れな晩年だった。彼の墓には、宇宙の美と人間の尊厳を高らかに謳った彼の有名な文句、「わが上に星空、わが内に道徳律」が彫りこまれている。

コペルニクス的転換

カントはけっして神童ではなかった。彼の著作には鋭い観察があふれているが、天才の爆発を感じさせるものではない。

カントの哲学的才能を開花させたのはほかならぬヒュームだった。カントをそれほど揺さぶったヒュームという哲学者はいったいどんな人物だったのだろう。カントよりわずかに年上だったデイヴィッド・ヒュームは、ロックやバークリーが当時流布させた刺激的なイギリス流経験主義をカントに伝えた。しかしヒュームはロックやバークリーよりラディカルだった。彼はわれわれの認識経験を分析するだけでなく、経験という概念そのものを解剖し研究しようとした。

ヒュームは考えた。ある現象を経験するとはどういうことだろうか。たとえばビリヤードのふたつの球がどんな動きをするか見てみよう。球Aが球Bにぶつかると、目が知覚した結果が得られる。つまり、ぶつけられた球Bが動くことを目が知覚するのだ。この場合ふつうは、球Aが球Bの運動を起こしたと言う。しかしそれをたしかだと言える人があるだろうか。私が実験したのは原因ではなくて、連続したふたつの動きにすぎない。その動きは何度も繰り返して起こるから、われわれは習慣から、そこには因果関係があるのだと信じて疑わない。けれどもそんな確信は根拠のないものだ。なぜなら球がぶつかるたびにそんな運動が起こるなんて、前もって保証してくれるものなどないからだ。

カントがこんなヒュームを読んで衝撃を受けるベースはすでにじゅうぶんできていた。齢はすでに五〇歳。認識の諸相の研究にはすでに二〇年以上を費やしていた。カントの根本問題はわれわれの感覚や知覚を表現することではなくて、いかにしたら学問がそれらをもとにして必要な法則を引きだすことができるかを解明することだった。ここでヒュームが彼の目を覚ました。ヒュームは経験には必然的なものなどひとつもないと言ったのだ。つい昨日までH_2Oが水だったからといって、明日はワインにならない保証など何もないのだと。ここまで来ると懐疑論もきわめつきだ。

しかしながらカントはヒュームと違って科学者でもあり、物理学や天文学にも通じていた。だからヒュームの懐疑論にはどうしてもうなずけなかった。しかし同時に、ヒュームの批判の重大さも理解していた。そこで、その批判にこたえるための新たな観念を見つけることが必要だと考えた。

彼の新たな観念とは、学問はわれわれがすでに知っていること以上の知識を与えてくれなければ無意味だ、というものだった。われわれの認識は、古い新しいを問わず、いかなる形をもつだろうか。

カントは、すべての認識は、たとえば「地球は球である」とか「人間は死すべきものだ」というような断定にあると確信していた。論理学では断定は「判断」と呼ばれ、判断は主語と述語が結びついたものだ。

新たな認識を得たときには、それまでになかった結びつきが生まれる。つまり、それまでは離ればなれであった要素が結びつくわけだ。この結びつきを総合という。総合の反対は分析で、これはたんに、すでに存在する結びつきを切り分けて、より正確に理解しようとするものだ。たとえばあるリキュールを飲んで、「このリキュールは苦い」という総合的判断を得たとする。しかしそれだけでは「リキュールとは苦いものだ」ということにはならない。なぜならそれは必然的なものではなく、味わってみて苦いという経験をする必要があるからだ。これはカントの用語を使えば「ア・ポステリオリ（後天的）」な判断になる。一方、「三角形には三つの頂点がある」という判断は「ア・プリオリ（先天的）」なものだ。なぜなら三角形が三つあることを知るにはいちいち数えてみなくてもいいからだ。どんな三角形だって、たとえそれが一度も見たことのないものだとしても、頂点は三つ以外にはありえない。

しかし「三角形には三つの頂点がある」という判断は分析的なものでしかない。なぜならお互いに離れているふたつのデータを結びあわせるものではないからだ。「三角形」と言うときわれわれは、自然に三つの頂点をもつものを考えている。学問上の多くの判断はこのように、ア・プリオリだが分析的なものなのだ。しかしもしこのような分析的判断しかなかったら、われわれの認識に進歩はないだろう。認識の断定はたしかに疑えない真理の断定だが、ともかくすでに知っていることの再認識で

しかないのだから。

日常生活では、この種の分析的判断は無意味であるだけでなく滑稽でもある。「スウェーデンの女性は女性である」などとは誰も言わないだろう。しかし、「スウェーデンの女性はスペインの女性より背が高い」という総合的判断ならちっとも無意味ではない。しかしこれは試してみなければ言えないことなので、ア・ポステリオリな判断ということになる。

ここでカントのジレンマが生まれた。学問には、確実ではあるがわれわれの認識を広げはしない分析的判断だけで足りるのか。学問が価値あるものであるためには、総合的判断も必要であることはいうまでもない。けれどもその判断とは、スウェーデンの女性の背の高さについての判断のような、ア・ポステリオリなものでもなければならない。判断が学問的であるためには、総合的であるだけでなく、ア・プリオリなものでもなければならない。そうしてはじめて学問の判断は確固としたものになるのだ。

しかし総合的でア・プリオリな判断など、実際にあるのだろうか。ここでヒュームが耳打ちした。判断がいくら総合的であっても、その信憑性を保証するものなど何もないではないかと。しかしほかでもないこのサイレントな警鐘がカントに、彼自身がコペルニクス的転換だと言った天才的な発想をひらめかせたのだ。

人間は自然の鏡だとロックは言った。しかしもしその逆だったら？　つまり自然がわれわれの精神を映しているのだとしたら？　ものごとはわれわれが認識するようにあるのだとしたら？　そうだとしたら、これまで常識だった精神と現実との関係はひっくり返ることになるではないか。

カントの理論をひとことで表わせば、「われわれはものごとについて、われわれがすでに与えてお

いた属性以外には、ア・プリオリな認識をしない」ということだ。この新たな展望をカントは「超越論的」と呼んだが、この場合の超越という言葉には、「通常を超えた」という一般的な意味はない。超越という概念をカントは、それまでとは別な風に考えたのだ。つまり、学問がする断定はありえる経験すべてにあてはまるから個々の経験は超越しているが、その断定が価値を持つのは、われわれの精神の経験の範囲に限られる、ということだ。言いかえれば、学問の断定は経験より前にあるが、経験の外にあるものではない、ということになる。

学問の命題は人間の精神に管理されている。だから命題はア・プリオリでも、生まれつきの観念とはなんの関係もない。なぜならわれわれの経験の範囲を超えたところではなんの意味もないからだ。宇宙人ならわれわれとはまったく別の精神構造を持っているかもしれない。しかし人間はものごとに人間の精神構造をあてはめるようにできているのだ。ではその精神構造とはいったいどんなものだろうか。

時間と空間は色めがね

カントは、認識とはわれわれと世界との協力のたまものであると考えた。われわれは「形式」によって、世界は「質料」によって認識を手助けするのだと。認識すべき何かがあり、われわれの感覚器官がそれをつかむための系統だった原則がなければならないのだと。カントもまた、認識はまず感覚を通してなされ、知性はそのあとだと考えた。しかしカントはほかの哲学者が誰も言わなかったこと

を言った。質量の法則の認識でさえ、感覚による認識を基礎にするのだと言ったのだ。それまでは誰もが、質量の法則の認識は知性と論理がするものだと考えていた。彼はそれをひっくり返したのだ。

カントはこのことについて、『純粋理性批判』の出だしの部分で触れている。第一部「超越論的感性論」で語られていることは度肝を抜くようなことだ。それまでは「ものごとは空間的にはお互いに隣りあい、同時に時間的には一方はもう一方のあとにくる」というのはものごとのもつ特質であるとされていた。ところがカントはこの常識を覆した。時間と空間はものごと自体の特質ではなく、ものごとの現れ方の特質なのだと言ったのだ。

かくして、われわれが知覚するものは「ものそのもの」であるという従来の観念が地に落ちた。カントによれば、われわれが知覚するものはものの「現れ」でしかなく、「現象」でしかない。ものごとそのものが時間や空間のなかにあるのではなくて、時間や空間のなかにあるものはものごとの現れ、つまり現象であるというわけだ。

それまで時間と空間は、ものごとがそこにある、一種の舞台だと考えられていた。しかしカントの考えはそれとは逆で、時間と空間はそれだけ独立して存在する絶対的なものではなく、われわれのなかにあるものだという。これはばかげたパラドックスではないと彼は言った。時間と空間はわれわれの精神の形相で、それがわれわれの感覚に、それらの格子戸を通して知覚せよと命じるのだ。人間は生まれつき、時間と空間の色めがねを持っているようなものだ。だからあるものが現れるということと、われわれがそれを時間と空間のなかで知覚するということは、同じことなのである。

物理学に神はいらない

カントが科学と向きあうときのやり方には目を見張ってしまう。数学はふつうもっとも抽象的な学問だとされているが、カントはその土台は感覚による認識にあると考えた。一方、物理学のほうは常識からすればもっとも具体的な学問だ。けれどもカントはその根っこを知性においた。これはカントが認識のプロセスを頭に描くときのやり方を考えれば、奇妙なことではない。

われわれの精神をコントロールセンターだと考えてみよう。そこは一種の中枢で、感覚からあらゆる情報が押しよせてくる。そこを管理しているのは知性で、知性はあちこちのボタンを押して精神を操作する。たとえば何かが遠くから近づいてくる。それが何だかはまだわからない。わがコントロールセンターで、知性によって「実体」のボタンが押されると、「それは人間だ」とスムーズに把握される。続いてほかのボタンも押される。量のボタンは人間がふたりではなくひとりだと教える。質のボタンはその存在の性格を教える。統一体、実在、実体。感じとられた材料を知性がボタンで操作すると、この三つが出てくるわけだ。

カントは「ボタン」とは呼ばずに「カテゴリー」という言葉を使った。カテゴリーは全部で一二あり、それは感覚を通して入ってくるこまごましたものをひとつにまとめる。物理学という自然科学にとって、カテゴリーのなかで肝心なのは「原因」である。カントは原因を精神の一形式にすることによって、ヒュームの批判を克服したと考えた。ヒュームは原因の心理学的性格に目をつけて、原因に

は価値がないとしていたのだ。カントは、ほかならぬその精神的性格のために、原因には価値があるのだと反論した。原因の持つこの性格はたんなる心理学的アクシデントと理解するべきではなく、精神のしっかりした構造と解釈するべきなのだと。

しかしカテゴリーの数はほんとうに一二なのだろうか。どうして一一や一三ではないのか。ここにカントの理論の弱点があり、そのために独断だと決めつけられた。しかしカントは一二を撤回するどころか、それは四つの基本的なレパートリー――量、質、関係、様式――に分けられると言い、この四つのレパートリーこそが、われわれの思考を方向づける四つの軸なのだと主張した。

カントは言う。われわれは何についても少なくとも四つの観点を持たなければならない。量については、ひとつであるか多数であるか。質については、現実のものか想像上のものか。関係については、本質であるか属性であるか。様式については、必然的なものか、それともただの可能性なのか。要するに、カントから見ればわれわれの精神の支柱は四本で、この四本の足がなければ歩くこともできないというわけだ。

ショーペンハウアーなら、とんでもない、と即座に否定しただろう。カントは現実に対して、本来ないはずの格子戸をつけたのだと。それではまるで、生来はない幾何学的な形を与えようとして、植木屋が木の枝を刈りこむようなものだと。それにわれわれは、いかなる場合にも妥当なカテゴリーをあてはめていると、自信を持って言えるだろうか。そのむずかしさなら、カントも意識していないわけではなかった。今日は雷鳴が原因で雷光が結果だとしたのに、明日には雷光が原因で雷鳴が結果だと言ったら、認識は混乱してしまう。したがって知覚の順序はひとつの主体が決めなければならない。

しかしあるカテゴリーがイギリスにあてはまったらドイツにもあてはまるというのでなければ、人間の認識とはいったい何になるのだろうか。カントの出したこたえはまるでSFみたいだ。個人ひとりひとりの認識のプロセスは、万人の背後にあって万人に共通するある主体によってリードされながら進むものでなければならない。この主体が、すべての考える個人に共通の考え方を与えるのだ。そこでカントはこの主体に「私は考える（Ich denke）」という名前をつけ、それを秩序ある認識の保証書にした。カントの用語を使えば、「私」は「自然の立法者」であるというわけだ。

けれども「私は考える」を万人に共通するものだとすることにはどうしても無理がある。それぞれの個人には自意識があって、だからこそ「私」と言えるのだ。私は自分が誰だか知っているし、どこに住み、なんの仕事をし、どんな趣味があって、どんな友達を持ち、どんな能力があるか知っている。もしそうでなかったら精神が分裂しているようで、いつも同じ私ではなくなってしまう。しかし「個人」は誰でもその人なりの偶然と結びついているので、その私が自然の立法者になどなれるはずがない。そこでカントは区別するためにこの私を「単純な私」と呼んだ。

だがこれでは形而上学へ戻ってしまうではないか。「単純な私」など見た人がいるだろうか。けれどもアラビアの哲学者たちはこの「私」の存在を信じていて、個々の知性を超えた普遍的知性があると考えていた。それではわれわれ近代人は？　カントは、「単純な私」を形而上学的に捉えて個人を超えたものであるとするか、それともたんなる普遍的認識のメタファーと考えるか、どちらにするか決めかねている。いずれにしても、個人が死んだからといって、その人がいかに天才的な人であろうとも、学問の終わりにはならない。そして学問が生き残るということは、カントの言う自然の立法者

である「私」が生き残るということなのだ。しかしこの「私」には、目には見えない「私」の言葉を伝えてくれる、学問の書を通してしか出会うことができない。
　ここまで来ると、近代における最大の科学者ニュートンとカントとの違いが鮮明になる。カントは、ニュートンが立法者としての「私」の役目を理解したのはいいが、この世を超えた立法者を神の人格のなかに求める必要はなかったのだと考えた。カントのきわだった近代性がここにある。彼は神学を、独断的な形而上学の現れであるとこき下ろしたと言われている。そのために神の存在を明かすいかなる根拠も否定したと。じっさい彼は『純粋理性批判』のなかで、「私」を神のポストに据えている。
　しかしカントは敬虔派という、ドイツの信仰心篤い環境のなかで育っている。おそらくこのためだろうが、彼は反形而上学的な立場をきびしく守ることはしなかった。形而上学を玄関からたたき出したが、そのあと窓から入れてやっている。

きびしすぎる道徳律

『純粋理性批判』は形而上学がふたたび頭をもたげることへの予防薬だった。しかし形而上学とはいつでも病気でしかないのか。しかり。感性と知性による認識に取って代わろうとするかぎり病気なのだ。形而上学がひそかに忍びこもうとするときに使うトリックは「理性」と呼ばれる。カントは感性と悟性（知性）のほかに、これこそが認識できないものを認識しようとする第三の能力だと考えた。哲学は何世紀にもわたって理性を持ちあげてきた。しかしその本質だけを、つまり純粋理性を考えて

みれば、それは空中に楼閣を描くことしかしない。そこでカントはその主要な著書のなかで、系統的な「純粋理性批判」を展開しようとした。

しかし理性が認識を大いに損なわせているなら、その道具になってきた弁証法はさらに悪い。そこで弁証法は、カントの出現とともに落ち目になった。プラトンにとっては認識の力強い味方であった弁証法も、カントにとってはウイルスでしかなかった。それではどうしてそのウイルスが認識のプロセスを損なうのだろうか。それは人間がうぬぼれ屋で短気なためなのだ。

この世界がたとえば大きな城なのだと考えてみよう。それぞれの部屋の構造を知っている者だけが、さまざまなタイプの天然素材を使ってそれぞれの部屋に見合った家具を調えることができる。学問は進歩するうちに常に新しい部屋を認識し、そこに家具をそろえていく。しかし部屋の数は無限と言ってもいいほどなので、全部にきちんと家具を調えることはできない。

学問の悟性ほど気配りの利かない理性は、辛抱も足りないために、家具の入っていない部屋がまだたくさんあると思うとうんざりしてしまう。そこでどの部屋も同じように画一的なプラスティックの家具で埋めてしまおうとする。それぞれの部屋の構造など知らなくても気にしない。こうしてあらゆる部屋に家具はそろうが、そろったと思うのはむなしい錯覚みたいなものだ。理性のする仕事といったらこんな思いあがった仕事でしかない。理性は高慢だから、われわれが知らないことでも知っているようなつもりにさせるのだ。

悟性には無限に連なる現象を追うことなど不可能だって？　理性はそんなことには頓着しない。それは「世界」という総合体がまとめて考えてくれるからだ。悟性には万人に共通する「私は考える」

を正当化することなどできないって？　理性なら人間の不死の魂の存在を考えだす。学問には、人間という主体が自然の立法者になれると説明することは困難だって？　理性ならなんの問題もない。世界の真の立法者である至高の存在があるからだ。

しかし、世界、魂、神といった、理性が生みだした観念には、認識という意味ではなんの価値もないとカントは考えた。なぜならそれらは認識不可能な領域にあり、現象にはなんのかかわりもないからだ。したがって、理性による認識は錯覚でしかない。カントの言葉を借りれば、理性は経験という家の隣に広大な館を建てている。そこは理性の産物でいっぱいなのだが、理性は自分が自分を正当に使っていないことを知らないのだ。

それでは形而上学はとにかく追いだすべきものなのか。いや、ひとつだけ長所がある。形而上学は、悟性には満たすことのできない要求を満たしてくれるのだ。学問は実在するものの法則は説いても、われわれを取り巻く自然をひっくるめて表わす観念を持たない。そこで、認識が文句を言いそうな、「世界についての観念」がその空白を満たしてくれる。また学問は真理のメカニズムは教えても、死後どうなるかについては何ひとつ教えてくれない。そこで不死の魂という観念が、証明不可能ではあっても、われわれを助けてくれる。あるいは学問は「現象は原因と結果の連鎖だ」というだけで、包括的な意味を教えてはくれない。そこで神の観念が駆けつけて、一連の現象に意味を与えてくれるのだ。こういったことは錯覚かもしれないが、でもまったく役に立たないわけではない。

こうしたことが役に立つということは、学問は非情なものだと理解すればばうなずける。カントはそう考えた。人はものを知れば知るほど希望をなくす。それではもうあきらめるしかないのだろうか。

ここでカントは逃げ道をふたつ考えだした。ふたつとも人間を絶望から救う方策だ。

カントが示した第一の救済の道は、日々の暮らしからヒントを得た、「かのように」という考え方だ。ふつうわれわれは、太陽が昇る、あるいは沈むと言う。じっさいはそうではないのだが、でもまるでそうである「かのように」話す。それでは同じことを神にあてはめてみよう。つまりこの世界は神の知性の産物である「かのように」考えるのだ。神は認識できない、なんていうことは気にしない。ともかく、世界と神との関係は時計とそれをつくった時計屋との関係のようなものだとは言えるだろう。

第二の道はカントが誇りにする道だ。なにしろ『実践理性批判』に述べられた道徳理論の大半がこれを土台にしているからだ。この著作のなかでカントは、行為という観点から見て、人間を自分自身の立法者にしようとした。人は何をなすべきか。ある行為が道徳的なのは、その行為があることをねらったものではないときだ。善人はある行為をするとき、その行為が報いられることを願ってするのではない。いかなる道徳的行為も、それ自体が目的でなければならないのだ。それでは道徳律には、目的らしい目的はまったく存在しないのか。いや目的はあるがただひとつだけで、それは「あなたの行為の規則が万人の法則になるような行動をせよ」という命令で表現できる。ほかの人がみな見習えるような行動をせよ、ということだ。たとえばカントにとって、自殺は非道徳的な行為だった。なぜならみんなが自殺してしまったら、人類は絶滅してしまうからだ。

いま挙げた命令をカントは「定言的命令」と定義した。なぜならいかなる条件にも左右されないからだ。つまり道徳的行為は外的環境に影響されてはならないということだ。「代議士に選ばれたかっ

たらよいおこないをせよ」というのは定言的命令ではなく、「仮言的命令」だという。なぜなら代議士になりたいときにしか役に立たないからだ。

しかしカントは気づいていた。道徳的行為になんの報いもなければ、人は道徳的にふるまおうとはしないだろう。人生の意味などつかめないという絶望への、第二の逃げ道がここで出番になる。つまり、もちろん人生の意味などつかめないが、でも道徳的生活はその代用になってくれる、というわけだ。さらに正確にいえば、代用品は三つある。

その第一は個人の自由で、自由がなければ道徳的にふるまうこともできない。第二は魂の不滅で、それがなければ人はむなしく消滅するだけだ。第三は神の存在で、それがなければこの世の道徳になど、なんの重みもなくなるだろう。というわけで、倫理の領域でも形而上学の出番はあるということなのだ。

しかしカントのような偉大な哲学者でもたまにはこけた。道徳の分野では彼の厳格主義が足にからんだ。道徳的命令をまえにしたとき、人はけっして妥協してはならないし、筋を通そうと思ったら嘘をついてもいけない、とカントは言った。しかしある男がある人を追いかけて喉を掻き切ろうとし、別の人がその光景を目にしたとしよう。もし追いかけられている人がどこかに隠れて、目撃者がそれを見ていたら、カントからすれば、目撃者は人殺しに乞われれば、そいつが喉を切り裂くことがわかっていても、隠れた場所を教えなければならない。そんなのは理屈に合わないと誰でも腹を立てるだろう。しかしこれはカント自身が考えた例で、彼はこんな場合でも、嘘をつくなという命令は犯してはならぬと言い張ったのだ。

天才的な思想家のなかには、論議の多いカントの学説にとりわけ愛着を覚える向きが少なくない。認識の分野ではコペルニクスだったカントも、倫理の分野では人を納得させるより首を傾げさせるほうが多かった。彼の倫理は「頑迷な道徳」という名をもらったほどだ。カントは善行をした者にけっして満足感を覚えさせず、うれしいと感じることさえ嫌った。しかしカント自身は、自分がつくった道徳理念がたいそう気に入っていた。「人を判断するときの基礎になる、行動の道徳的価値についての考察ほど、人の関心を呼んだり仲間を沸かせたりしたものはほかにない」とまで彼は書いている。こう書いたカントにも少しは理があるかもしれない。しかしそれと人殺しの話とは、いったいどう折りあいがつくのだろうか。

19　ヘーゲル――理性探究のエース

理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である。

フリードリヒ・ヘーゲル『法哲学』序文

カントは「私」を自然のあるじにした。けれどもこのあるじの権限はかぎられている。意識のなかに収まりきれない現実には手がまわらないのだ。そういう現実をまえにしたときわれわれは、あたかも支配している「かのような」気分になるだけだ。

しかしヘーゲルの考える人間のほうはおそろしくうぬぼれが強い。現実を支配するのはたんなる私ではなくて、理性の産物のなかでもとりわけ秀でた「哲学」だという。おまけにその支配は平和的なものではなく、しだいにおのれの力を自覚していった理性の側からのドラマティックな征服と言ってもいいほどだ。

ヘーゲルは哲学を、知恵の神ミネルヴァの聖鳥であるフクロウになぞらえた。フクロウは夜も深まるころになって、つまり一日の混乱や苦労がすべて鎮まるころになってはじめて飛びたつ。哲学もそういうときになってはじめて、自分が森羅万象を解くカギであることを自覚するのだ。

ヘーゲルが考える現実には不可解なところなどなかった。なにしろ理性的なものが現実的であり、現実的なものが理性的だというのだ。ヘーゲルはこの有名な言葉によって、啓蒙主義とフランス革命を支えた理性の女神をよみがえらせた。この女神は一八世紀末から一九世紀の初めにかけての何十年か、心と感情を祭りあげるロマンティシズムの尻にずっと敷かれていたのだ。

しかしだからといってヘーゲルが情熱の人でなかったというわけではない。それどころか彼の『精神現象学』の何ページかには、思想史上まれに見るほどの情熱があふれている。しかしその情熱も理性の軌道をはずれたら悲惨なことになる。だから彼のドラマはすべてハッピーエンドのお話ばかりだ。ヘーゲルからすれば、われわれとこの世界はどちらもそろって幸福な道を歩むようにできているのだ。

偶然はないと言ったのに

ヘーゲルは現実を理性で解こうとしただけでなく、現実は理性そのものであると言いたかった。彼にとっては理性がすべてで、理性の手を逃れるものなど何ひとつなかった。そこで当然のことながら、ライバルの数はハンパでなく、彼らのやり方もハンパじゃなかった。クルークという名の、ある高校教師も底意地が悪かった。君は現実のなかのいかなる現象も理性で説明できると言うが、それならこの鉛筆の存在を理性で解いてみたまえ。

ヘーゲルも負けずに言った。クルーク先生の鉛筆より重要な現象をすべて解明し終えたら、鉛筆の問題を取りあげましょう。アリストテレスならクルーク先生の鉛筆を非本質的なもの、あるいは偶然

的なものと解釈しただろう。つまり必然的現実であるいわゆる本質とは逆の、あってもなくてもいいものだと。人間にとって心臓は本質だが、体毛のほうは付随的（偶然的）なものだ。しかしヘーゲルはもっと徹底していて、「偶然的なものとはほこりみたいなもので、田舎にも町にも舞っているが、田舎や町を本質に変えはしない」と言ってのけた。

運命の皮肉か、いくつかの偶発的な事件が、ヘーゲルの人生のなかでも決定的な役割を果たした。一八〇七年には、大学で最初にありついた教職を捨ててイエナへ移るはめになり、それから後年ベルリン大学の教授になるまでに、さまざまな浮沈を経験した。そして運命の一八三一年、ついに最悪の出来事が起こった。コレラが蔓延していたさなか、ヘーゲルはブドウを洗わずに食べたのだ。おかげでコレラ菌にやられ、あっけなくあの世へ旅立った。

一七七〇年にシュトゥットガルトに生まれたヘーゲルは、まさに自宅の窓の下にナポレオンの侵攻を目撃した。ナポレオンがイエナを制圧した一八〇六年の末、ヘーゲルが『精神現象学』を仕上げようとしていた窓の下を、ナポレオン軍の戦勝パレードが通ったのだ。ヘーゲルは諸手をあげて喜んだ。ナポレオンの勝利に彼は、その時代のシンボルそのものを見る思いがした。「馬にまたがって世界を制覇し支配する人物の姿はじつに晴れがましい」と彼は書いている。

さまざまな政治的事件はしかし、いちいち巻きこまれはしなかったけれど、ヘーゲルにとっては災難でもあった。イエナのあと、バンベルクの小さな新聞の編集をしばらく手伝っていたが、一八〇八年になると、ニュルンベルクの高校の校長という、いくらかましなポストに就いた。しかしすでに名が高まっていた彼は、もっと上の地位を得たいとうずうずしていた。競走馬なのに馬車馬と間違われ

ているような気分だった。

そしてついに一八一六年、哲学の町として名高いハイデルベルクで大学教授のポストを手に入れた。その二年後には、ベルリン大学教授という最高峰にまで上り詰めた。プロシアはヘーゲルの哲学を国家の哲学にし、あまたのライバルから守ろうとした。もともと偏狭な傾向のあったヘーゲルは、それに乗じてためらわずにドイツ文化のボスになり、自分の思想と相容れない思想は片っ端から蹴落とした。おごり高ぶるだけの理由はあったにしても、謙遜の気持など毛ほども見せようとしなかった。

彼は確信していたのだ。世界の思想史は自分の学説をもって頂点に達したので、これからはどんな学説を唱えても無意味であると。こんなうぬぼれは哲学に留まらず芸術にまで及び、芸術は彼の学説に押しつぶされて遠からず消え去るだろうと考えた。しかし芸術が死に絶えるはずがなく、それどころかヘーゲルは、ベートーヴェンの天才にも気づかないぼんくらだったのだ。

ヘーゲルは現実をすべて理解していると豪語していた。しかし自然を愛そうとはけっしてしなかった。どんなに崇高な光景にも心を動かされることは皆無だった。カントを感動させた山々や雷雨も、ヘーゲルには死ぬほど退屈な光景だった。たしかに彼は優れた著作『美学』を書いたけれど、彼が分析したのは人間の手になる芸術だけで、自然の美などはないも同然だった。人間が生みだしたいかに貧弱な観念でも、彼からすれば、自然の産物よりはよほどましなのだ。

理論と現実は水と油？

理論と現実は相容れない。それまでのどんな哲学者もそう信じて疑わなかった。アリストテレスやスピノザは現実から出発して理論を説いた。デカルトやカントはその反対に、理論をもとにして現実を説いた。ところがヘーゲルはこの対立関係を根こそぎにしてしまったのだ。彼は、現実と理論には何らの相違もない、このふたつは同じものだ、と言った。この転換はカントのコペルニクス的転換に勝るとも劣らないものだった。理論と現実は水と油のように溶けあわないのではなくて、同じものの異なった現れ方にすぎないというのだ。かくして思想は現実の隅々まで照らせることになり、思想の力はそれまでになく強まった。

このパラドックスは、「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である」という彼の言葉に隠れたパラドックスのなかでもダントツだった。有名になったこの言葉は、ヘーゲル精神の核であるとも考えられた。なにしろ彼はこの言葉を、最後に出版された作品『法哲学』のなかで発したのだ。ここに隠れたパラドックスを理解することが、ヘーゲル哲学の理解には欠かせない。

この言葉の前半で彼は、理性的なものは現実的だと言っている。この方程式にはすなおにはうなずけない。高度な方程式を解くために使われるいわゆる虚数は、代数学には欠かせない理性的なものだ。しかしそれが虚数と言われるのは、まさに現実にないものだからなのだ。

この言葉の後半では、現実的なものは理性的だとされている。こんな言葉に反論するのは簡単だ。

血で血を洗う戦争も、つまらない原因で起こることがある。トロイの戦いは姦通が原因だったが、ここには理性などかけらもない。原子爆弾による惨害などは、どう考えたって理性の産物とは思えない。しかしよくよく考えているうちに、ヘーゲルの言葉はばかげているとは思えなくなってくる。数は頭が考えだしたものだということは誰ひとり疑わない。けれども、あらゆる法則のなかでもっとも現実的な物理学の法則は、ほかならぬ数字をもとにしていることも否定できないのだ。日々の生活に目を移せば、混乱に巻きこまれたときにわれわれが唯一頼りにするのは、ほかならぬ理性なのだ。その意味で、理性とは「渦中のバラのようなもの」だと言ったヘーゲルのメタファーには説得力がある。

あらゆる現実は理性的なものであるという言葉に人々は、そのむかしプラトンがライバルからぶつけられた、それでは泥にも汚れにも理性があるのかという反論を蒸し返した。そんな反論にヘーゲルは、偶然や偶然性など屁でもないという顔をした。泥や汚れがあることは否定しないが、そんなものは現実のなかでも思想のなかでも、吹けば飛ぶような存在なのだと。

ロックは単純観念を追いかけた。しかしヘーゲルは、単純観念になど価値はないとした。そんなものは全体から切り離された断片であり、手や身体から切り落とされた一本の指でしかないと。ヘーゲルから見れば、カントの言うことも奇妙だった。カントは、悟性は完結したものを対象にするが理性は無限な対象を追いかける、として理性を非難したのだ。ヘーゲルは、終わったもの、つまり全体から切り離されてしまったものは、もとの文章から離れた言葉と同じで、機能も意味ももはやないと考えた。

ヘーゲルはまた、歴史上の出来事はどれも起こってよかったことだと考えた。こうした考え方は

「歴史主義」と呼ばれている。歴史は常にある方向に向かって進んでいて、その流れに乗るものはすべて好ましく、逆行するものは好ましくない。ヘーゲルはこの歴史主義の考え方を哲学史にもあてはめた。ふたつの哲学があるとすると、あとの哲学のほうが、まえの哲学より価値がある場合が多いのだと。なぜなら哲学者は誰でも先人たちの学説によって知識を深めていくからだと。ヘーゲルもそのひとりで、彼より少しだけ早く世に出た哲学者たち、ことにフィヒテとシェリングの観念論から多くを学んだ。

ヘーゲルは彼の『精神現象学』によって歴史主義の頂点を極めた。この書のなかで彼は、個人の意識と人間性の最高の表現がしだいに磨かれていくありさまを説いている。「現象学」というのはまさに「現象の研究」を意味するわけだ。ヘーゲルによれば、「精神」という包括的な言葉に含まれる個人や人類の進歩は、現象を通して明らかになるという。

『精神現象学』はきわめて難解な書物だが、ヘーゲルの著作のなかでは味わいのあるものだ。冷たい厳格な概念が連なるかたわらに、詩情たっぷりの人物がひょいと出てきて、それが哲学者や芸術家たちを大いに沸かせた。なかでも独創的なのが「不幸な意識」をもった人物だ。自分の周囲の現実に違和感をもつと、外界から孤絶したように感じて、その人の意識は不幸になる。しかしもしその人が不幸をそのままにせず、周囲に溶けこむことによって克服できれば、孤立も無益ではなかったことになるのだ。

不幸な意識のドラマ

『精神現象学』は哲学の読み物としてはユニークである。この本では、個人の意識、世界精神、認識、倫理などの歴史が同時に語られる。しかもまるでおもしろいお話のようなのだ。難解な哲学用語が並んでいるのは困りものだが、そのあいだを縫ってさすらい人やその不幸なできごとが語られ、まるでジョイスばりの意識小説のような感がある。

それではヘーゲルの意識小説とはどんなものだろう。その物語は、精神が周囲の現実のなかに入りこもうとしておずおずとアプローチを試みるうちに、ついにはその現実が、鏡に映った自分の姿にほかならないことに気づくというお話だ。しかしこの話はドラマティックな古典悲劇のようでもある。錯綜したできごとの糸がしだいにほぐれ、しまいにはすべてが解けて波が収まる。

しかし現象学のなかでさらに興味深いのは自己意識についての箇所である。自己意識は意識が最初にしたような、この世界を自分とは別の外界として捉えることはしない。「不幸な意識」が頭をもたげるのはこの第二段階においてなのだ。「不幸な意識」は現象学の主たるテーマではないにしても、その意味深なシンボルではある。「不幸な意識」とは悲嘆や苦悩にまつわるもので、自己意識が理性の助けを借りて克服できないかぎり、自己意識のドラマに宿りつづける。

しかしどうして不幸の意識は自己意識の段階に、つまり自省の段階につきものなのだろうか。これは青年心理学によっても、あるいは啓蒙主義の歴史によっても説明できる。子どもは小さいうちは宗

教的な疑問に苦しんだりはしないが、青少年期に入ったとたんに不安に襲われる。自分はいったい何をするためにこの世にいるのだろうか、宗教はこんな疑問にこたえてくれるのだろうか、といったことを考えるようになるのだ。

これは青年期に特有の悩みで、ロマンティシズムはこれを、ゲーテの『若きヴェルテルの悩み』をはじめとする幾多の作品で追求してきた。この自己意識の不幸は、青年が大人になって人生の目的を見いだし、自分のなかに閉じこもるのをやめて活動しはじめるとき、そのときになってはじめて終わりを告げる。

歴史のうえでは、このような自己意識の危機は啓蒙主義に現れた。ヴォルテールなどの啓蒙主義者は、無邪気な信仰心を注意深く観察することからはじめ、やがてそれに迷信という烙印を押した。しかし、たとえ錯覚にせよ何かしら超越的なものをもたなければ、具体的な目標によって埋めあわせでもしないかぎり、人は不幸から逃れられない。啓蒙主義者にとっては、その目標がかの有名な理性の女神だった。彼らはこの女神の像を建て、生産的精神によって不幸な意識を克服することのシンボルにした。人間はむなしく自分のうちに閉じこもることをやめ、建設的人間(ホモ・ファーベル)になることができるというわけである。

根っからの楽天家

ヘーゲルの哲学は言ってみればハッピーエンドのオデュッセイアで、そのなかではどんな駒も大事

な役目を果たしている。彼のオデュッセイアは個人の意識の発展の段階と、それとならんで進展する歴史のプロセスの両方を描きだした。その結果、カントの発想が転覆の憂き目を見た。

カントは言った。われわれは認識しようとするまえに、どこまで認識できるかをたしかめなければならない。ヘーゲルはこれに反論した。そんなことは無意味だ、認識ならわれわれよりまえに人類の歴史がすでに無数の試みをしているのであり、現象学とはまさにその試みの歴史であるのだと。ヘーゲルがカントにぶつけた有名な言葉、水に飛びこまなければ泳ぎは覚えられない、という言葉の意味はこういうことだ。そして人類はもうはるかむかしから、意識という水のなかを泳いでいるのだ。

カントは意識の分析についてはきわめて悲観的で、われわれは意識という領域を離れて道徳の領域に移らなければやっていけないと考えた。ヘーゲルのほうは楽天家だったから、意識は一連の行程を進むうちに、たとえその行程がたやすいものではないにしても、しまいには完璧な域に達するのだと考えた。『現象学』が「こうしてみんなは満足して幸せに暮らしました」というハッピーエンドの意識の物語であるとすれば、そういう結末を迎えられるのは、不幸な内的ドラマを通ってこそのことなのだ。

『現象学』が意識の物語でありえるのは、意識の発達の各段階が、小説の筋と同じようにできごとを重ねながら進んでいくからだ。カントの立場はこれとは逆で、彼は精神の機能や形体は生来与えられたもので、発達などはしないと考えた。彼は感覚に悟性を重ね、悟性に理性を重ねて対置させるという具合にして、意識の理論を練りあげたのだ。ヘーゲルは反対に、感覚と悟性を対置させてしまうのは、それらを通してこそわれわれは知覚したものを認識しているのだということを、自覚していない

からだと言った。そして、この種の自覚を「自己意識」と定義した。
それでは意識の段階を克服した人は、それによって不幸からも解放されるだろうか。いや、そうらまくは運ばない。ヘーゲルに言わせれば、意識のあとには理性が待ちかまえている。理性はぼんやり休んでいるわけではないのだ。ヘーゲルは楽天家だったが、彼の楽天主義はライプニッツ好みの表面的なものだった。理性が現実を映すものなら、理性もまた苦悩しなければならないのだ。
しかしそれでは「不幸な意識」と似たようなものになってしまうではないか。そうではない、とヘーゲルは言う。理性は意識と違って現実と対立するものではない。理性は現実の様相が自分自身の様相であることを知っているから、そのなかに入りこむ。意識は自分の影におびえる人のようだが、理性のほうは、自分につきまとう影をうるさいとは思っても、自分が自分の影と寸分の違いもないことを知っている。
ヘーゲルは心理的イメージを使って説明したのだ。意識は何が自分を待ち受けているかわからないのでいつも不安を抱えているが、理性のほうは、たとえめちゃくちゃな現実でも、現実とひとつになっているからいつも落ち着いていられるのだと。理性に従う人は、快楽を追っているときでも、衝動でそうしているのではなく、自分の意志でそうしているのだ。そして快楽に失望しても自分を失うことはないが、それは信仰心のためではなく、自尊心のためなのだ。
こうして理性は意識のドラマも自分のなかに組みこみながら、それを乗り越えていく。理性と意識が合わさったものをヘーゲルは「精神」と呼んだ。フランス革命とともに広く浸透したこの言葉は、古くからある神学用語を一般化したものだ。「絶対」が神のかわりを、「精神」が魂のかわりを務める

ことになったというわけだ。ヘーゲルはこの言葉の使い方が気に入って、彼の主著のタイトルにも「精神」を取り入れた。

20 ショーペンハウアー、マルクス、ニーチェ——近代の反逆者

人生は苦しみと退屈のあいだをたえまなく揺れ動いているようなものだ。

アルトゥーア・ショーペンハウアー『意志と表象としての世界』第四巻、五七章

労働者は、生産すればするほど、自分が消費するものは減り、価値あるものを創造すればするほど、自分は価値も尊厳もないものになってしまう。

カール・マルクス『経済学・哲学手稿』二三章

神は死んだのだ。

フリードリヒ・ニーチェ『ツァラトゥストラはこう言った』ツァラトゥストラの序言、二

いかなる時代の思想も旧弊な価値観への反逆者を待ちかまえていることはまちがいない。しかし反逆にも師匠が必要だ。一九世紀後半の哲学は、二〇世紀に向かって三人の偉大な師匠を残した。ショーペンハウアー、マルクス、ニーチェ。ショーペンハウアーは苦しみと退屈しかもたらさない人生な

ど嫌悪せよと教えた。マルクスは弱者を抑圧する強者に刃向かえと教え、世界の転換を図れと説いた。ニーチェは、人生の悪は人生そのものから生まれるものではなく、道徳や宗教によって人生を押しつぶそうとする連中が仕掛けるものだと喝破した。

ショーペンハウアーの思想は、手っ取り早く言えば、人生＝苦である。喜びを少しでも味わいたくなったら、まず思いだしてほしい、と彼は言った。喜びとは不満の治療薬でしかないのだし、一方欠乏から生じる不快感は、苦しみだけでなく喜びの種にもなるのだということを。

マルクスは哲学者というより政治家で、スローガンが好きだった。彼の思想をひとことで表わせば「階級闘争」で、この言葉は彼の理論をもとにした政治的文書などによく出てくる。しかしこれと肩を並べるのが「労働疎外」という概念だ。思想史から見ればこちらのほうがむしろ意義深く、二〇世紀哲学にはひんぱんに顔を出す。

ニーチェが書いたものには秩序や統一性がなく、いろんなタイプの宣言が乱舞しているかのようだ。哲学でありながら文学を思わせるところもある。ディオニュソス的な精神とアポロン的な精神の対置もそのいい例だ。音楽と酒の神であるディオニュソスは激情の留まるところを知らない。美と秩序の神アポロンのほうは調和と中庸を尊ぶ。ギリシャ悲劇だけでなく人間の多くの葛藤がこのふたりの衝突から生じている。ニーチェはディオニュソスびいきで、彼の思想はディオニュソスのごとく奔放で、あげくには神を死なせるという冒瀆までやってのけた。

大学に失望してメイドと暮らす

ベルリン大学のヘーゲルの講義はいつも満員だった。学生はドイツだけでなくヨーロッパ各地から集まった。ほかの教授たちは、聞き手がいないと困るから、講義がヘーゲルと同じ時間にぶつからないように気をつけた。しかしひとりだけ例外がいた。ショーペンハウアーである。

ショーペンハウアーはヘーゲルの息子みたいに若かったが、ヘーゲルを心底軽蔑していた。主著である『意志と表象としての世界』で彼は、自分を良識と明晰さの旗手だと持ちあげている。ヘーゲルのほうはその反対に、当たり前のこともひっくり返し、難解な言葉遣いで人々をもてあそぶゲスだとこき下ろしている。ヘーゲルは哲学界のペテン師で、無意味な言葉をただ並べるだけのいかさま野郎だというわけだ。ショーペンハウアーは自分は巨匠ヘーゲルとくらべても見劣りしない大物だと信じて疑わなかった。しかし最初の講義では数人いた学生も、次からはひとりもいなくなった。彼は歯ぎしりし、「大学の哲学」なんて滑稽な猿芝居でしかないとぼろくそにけなした。

ショーペンハウアーは陰気な男だったが、彼の哲学も劣らず陰気な哲学だった。人生は苦でしかないと根っから信じていたから、彼の哲学はペシミズムそのものだった。うだつのあがらぬ者の常として、彼も世に出るために一通りでない苦労をした。書いたものなど読む人もなかったから、どれもみなくずかご行きだった。彼はこんな逆境に歯を食いしばって耐えた。

しかしたった一度だけ、つまらない理由で癇癪を起こしたことがあった。おしゃべり好きなお針子

が彼の家のまえで甲高い声でしゃべっていた。騒音嫌いで女嫌いのショーペンハウアーは、かっとなってその女を階段から突き落としたらしい。それから傷害罪での起訴、裁判、刑の宣告。二〇年におよぶ賠償金の支払い。お針子が死んでやっと解放されたとき、彼は思わずつぶやいたという。「あいつが死んだおかげで借金も死んだ」。しかしショーペンハウアーの取り巻きは、女は自分でころげ落ちたのだと言い張った。

ショーペンハウアーは男に対してもあまりいい気持を持たなかった。彼にとっては人間より動物のほうがましだった。プードルを一匹飼っていて、「世界精神」を意味するアトマという名をつけていた。その犬に腹を立てると「人間」と呼び、「おまえも人間でしかないのか！」と悪態をついた。彼は動物を見ると心が和み、人間に会うと心がきしんだ。「犬がいないなら死んだほうがましだ」とまで言うしまつだった。彼をいらいらさせたのは家のまえにいたお針子だけでなく、声高にしゃべる人は誰でも嫌った。

一七八八年にダンチヒに生まれたショーペンハウアーは、申し分ない教育を受けた。生家は裕福だったから、彼は終生経済的には不自由しなかった。父親は商人だったが、母親は軽薄で尻軽な作家だった。母親とのまずかった親子関係は、彼女が一五歳も年下の男のもとに走ったときに断ち切られた。それはショーペンハウアーが学位論文として貴重な第一作を書きあげたときでもあった。彼はその論文を母親に見せた。「なんの本？　薬屋の手引き？」と彼女。「ママの本がこの世に一冊もなくなっても、こっちはまだ読まれるだろうね」とショーペンハウアー。すると母親は、「誰も買わないから残るでしょうね」とやり返した。ふたりの言うことはどちらもあたった。母親は跡ひとつ残さず、息子

のほうが成功を手にしたのは、六〇歳というもはや若くはない年齢になってからだった。
大学に失望し旅行にも飽きた一八三一年、ショーペンハウアーはフランクフルトに落ち着いて、その地で死ぬまで暮らした。一緒にいたのは犬とメイドだけ。優雅に装い、パイプをくゆらし、ギターを奏でた。音楽が好きだったのは、音楽には人づきあいが必要ないからだった。
彼のしわだらけの顔を見れば、気むずかしいのが一目でわかった。人の顔を見ればその人がしてきた苦労がわかる、と彼自身も言っていた。そのあかしになるようなエピソードがある。あるときレストランで、彼のまえに座った人が彼の顔をしげしげと眺めていた。それからそばに寄ってきて言った。「あなたは何か大変なことをなさったようですね。何をなさったかは知りませんけど、あなたの顔を見ればわかります」。
ショーペンハウアーは重要な作品をふたつ書いた。ひとつめは『意志と表象としての世界』で、ふたつめは一作めに関連する『付録と補遺』である。後者は哲学としても文学としても申し分ない。書かれていることは大したことではないが、一般読者に彼の名を知らしめたのはこちらだった。彼はこの本で多様なテーマを驚くほど簡潔明快に書き、じつに魅力的な本にしている。おかげで読めない人などひとりもないほどだ。
ショーペンハウアーの書き方は文句なしにおもしろい。ペシミズムをこれほどおもしろく書いた哲学者はほかにない。彼の本を読んでいると、人は自分の不幸な運命まで喜びたくなってくる。じつのところ、彼をペシミズムに押しやったのは失望や苦い経験ではなかった。彼は「苦」を人生でただひとつたしかなものだと確信していたのだ。人生にはうれしいことだってある、などという慰めはショ

ーペンハウアーには通用しなかった。

人生は苦でしかない

人生は苦でしかないということなら、すでにプラトンが、生きるくらいなら生まれてこないほうがいい、という言葉を残している。プラトンはショーペンハウアーが手本にした哲学者のひとりだった。ふたりめはカントで、彼からは意識の理論を学んだ。三人めは仏陀で、彼の諦観には感心した。しかしこれらの哲人たちへの敬愛の念に劣らず強かったのが、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルなどのドイツ観念論者への根深い憎悪だった。ショーペンハウアーは『付録と補遺』のなかで彼らに辛辣な批判を浴びせている。「知りもしないことをさも知っているかのように、考えてもいないことをさも考えているかのように、言ってもいないことをさも言っているかのように見せかけている」と。三人のなかでもことに悪辣なのがヘーゲルで、彼は観念論的楽観主義を誇張して、世界の歴史には喜ばしい目的があるなどとぬかしている。こんなバラ色のヴィジョンは無邪気な人をたぶらかすものだとしてショーペンハウアーは、ヘーゲルの哲学は「精神をダメにする悪質な哲学もどき」だと毒づいている。

ショーペンハウアーは、楽観主義に反論するには論証など必要ない、それがペテンであることは目に見えている、と言った。現実を眺めれば気がつくはずなのだ、「最後に凱歌を挙げるのは死である」ことに。「われわれは生まれたからには死ななければならない。死はわれわれという餌食を呑みくだ

すまえに、ひとときおもちゃにしているだけなのだ」。
ショーペンハウアーのペシミズムが根深いのは、その根っこが死の恐怖だけにあるものではないからだ。彼にとって肝心なのは死ではなくて苦のほうである。不幸な出来事が起こったとき、それはひとつの例外なのだと考えたら間違いだ。実際はその逆で、人生は不幸なのが当たり前なのだ。人生の意味は苦にある。認めたくはなくても、苦は唯一、われわれのなかにじかに生まれるものだ。喜びや満足はそういうものではなく、苦や欲求からのひとときの解放でしかない。
ショーペンハウアーが『意志と表象としての世界』のなかで繰りひろげた論理は整然としている。われわれはどんなときに喜びを感じるか？　食欲、性欲、出世欲といった欲望を満足させたときだ。喜びや快楽は最初からあるものではなくて、欲求から、つまり不便さや苦痛から生まれるものなのだ。不快がなければうれしくなることもない。「おいしい料理も、呑みこんでしまえばわれわれの感覚にとってはないも同じだ。欲求はそれを満足させたとたんに、もはやわれわれには関係ないものになる。幸福というのは何かしら否定的なものでしかない。健康、若さ、自由という人生の三つの幸福に、それを持っているあいだは気がつかないのは、まさにこのためである。失ってはじめてわれわれはこれらの恵みに気がつくのだ」。
だから人生とは苦でしかない。しかし誰もがそれに気がついているわけではない。気がついている人は気がついたことをうれしいと思うどころか、むしろよけいに苦しんでいる。ショーペンハウアーのこの考えは、アリストテレスもすでに述べていた。非凡な者ほど憂鬱になるのだと。彼らは知っていたのだ。人生を支配しているのは苦しみのときであって、それと喜びのときとを釣りあわせるこ

となどできないことを。現在健康だからといって、過去の苦しみが帳消しになるわけではない。そして世界の悪が少なからず減っても、悪があることを喜べないのは変わりない。

ショーペンハウアーはまた、悩みの種は苦だけではないと言った。喜びが消えると、何もなくても退屈が襲ってくるし、それは場合によっては苦よりまだ始末が悪い。われわれの人生は苦と退屈のあいだを往来しているようなものなのだ。けれども苦や退屈を感じるのは人間で、あとはせいぜいのところ動物ぐらいなものだ。それではほかのものはどうなのか。ショーペンハウアーは憎むべきヘーゲルに引けをとりたくなかった。彼は全世界を説明できたつもりでいるのだ。そこで、はじめはみじめな人間だけに涙していたショーペンハウアーは、そのみじめさを、世界を映す鏡であることにした。つまり彼のペシミズムは、人間だけにかぎったものではなく、いわば形而上学的なペシミズムになったのだ。

ショーペンハウアーは、人間が個々の行動の動機とするものは見せかけにすぎないと考えた。実際に行動をうながすものは、彼が「生きようとする意志」と呼んだ意志より強い隠れた衝動のほうなのだ。生きようとする意志が目的とするのはただひとつ、種の保存だけである。

たしかに人は自分のもくろみを自分に言い聞かせるし、他人に伝えたりもする。しかし肝心なのはそうした「表象」ではなくて、表象をうながす意志のほうなのだ。というわけで彼は自分の主著に『意志と表象としての世界』というタイトルをつけた。人は生きようとする意志である本性からの無意識な突きあげに気づくこともある。しかし意志はふつう変装しているから、隠れた実像がつかめるのは哲学者だけだという。

ショーペンハウアーは東洋の宗教に傾倒していた。東洋の宗教によれば、われわれの周囲にあるものは見せかけだけで、真の現実はわれわれには見えない。彼はこうした東洋宗教の言葉を使って自分の思想を表現し、空間、時間、因果律を、東洋の神話上の人物に由来する「マーヤーの幻影」と呼んだ。仏教では、人々の目から謎の実態を隠すための隔壁を、「マーヤーの幻影」という言葉で表わしている。

ショーペンハウアーとヘーゲルは、容貌は似ていたがほかはすべて正反対だった。ヘーゲルは理性を持ちあげたが、ショーペンハウアーは反対に、理性は意志に従属するものだとした。彼によれば、意志は自然のなかの無機から有機までのいかなる現象のなかにもある。重力や磁力といった物理学的現象から恐怖や希望などの心理学的現象まで、あらゆることに生気を与えるのはその意志の緊張なのだ。

誰も普遍的意志に逆らうことはできない。自殺という現象はこの原則に背いている。普遍的意志は生きようとする意志であって、死のうとする意志ではないのだ。宗教によっては自殺をきわめて重い罪と見なし、未来永劫にわたってその罪は消えないと説くものもある。

ショーペンハウアーはしかし、父親は自殺していたけれど、自殺をとがめようとはしなかった。「誰でもほかの何にもまして、自分や自分の命について、疑うことのできない権利を持っている」と彼は、『付録と補遺』に書いている。しかしながら、自殺をいいとは言っていない。自殺が生きようとする意志への真の反逆であるならよしとしてもいいが、実際はそうではないので、矛盾した行為のように見える、と彼は言う。

自殺しようとする人は、生きようとする意志を意識的に拒否しているのではなくて、生きていくための条件に満足できないということなのだ。「その人は生きたいのだし、自由に生きて身体もしっかり保っていたいのだが、周囲のものごとのもつれからそれが叶わないので、そのために大変な苦痛を覚えている」と彼は『意志と表象としての世界』のなかで述べている。だから普遍的見地から見れば、自殺は無意味で間違った行為になるのだと。

苦痛と退屈しか与えない生でも生きたいという意志を、徹底的に排除できる者だけが真の自殺者の名に値する。しかしそんなことはふつうの人間にはできない。そして、もし世界を支えるものが無自覚な意志ではなくて自覚ある知性であるなら、人類はもはや存在しなくなる。普遍的意志が人類の存続を望むのは、人間が不合理にできていて、はっきりした論理を働かせることができないからなのだ。『付録と補遺』からの問いかけに応じて、生殖は無思慮な快楽によって生じるのではなく、はっきりした自覚から生まれるのだと考えてみよう。「それでもまだ人類は存在するだろうか。誰でも子孫にいたく同情するあまり、生きることの苦を進んで取り除いてやろうとか、あるいは冷酷な苦痛を与えることになる責任を逃れようとはしないだろうか」。

しかしショーペンハウアーは産児制限のために戦ったりはせずに、独り者でいることで手本を示した。じっさい自殺や出産拒否のほかにも、生きようとする意志に逆らう道はあるのだと彼は考えた。そんなことを考えたのは、彼が東洋の書物に親しんでいたからだった。

ショーペンハウアーは、自分の学説に納得する人は自殺はしないし、キャリア、財産、権力といった、人間関係につきまとう悩みに巻きこまれないように用心もする、と言った。要するに、何ひとつ

欲望を持たないで生きるということだ。彼の言うことは立派で、インドの聖者なら実行したかもしれない。しかしショーペンハウアー自身は実行など考えもしなかった。

哲学者は、言うことは筋が通っていても実生活はそうではないという人が少なくない。ショーペンハウアーもそのひとりだった。しかし彼の場合は自分の信条を守ったためか、人づきあいが悪く仲間ともうまくいかなかったから、人嫌いで有名になった。

抑圧された人々の味方

思想界でも政界のように、伝統を重んじる哲学者は「ヘーゲル右派」と呼ばれ、そのほかの人々は「左派」と呼ばれた。シュトラウス、フォイエルバッハ、マルクスといった大物が集まっていたのは左派のほうだった。彼らは啓蒙主義者のように偏見のない人たちだったが、社会にもきまじめに向きあった。たとえばシュトラウスは、イエスについて福音書が語ることは信者たちが無意識に練りあげたフィクションだと考えた。この無意識の現象をフォイエルバッハはヘーゲル流の「自己疎外」という言葉で呼び、神はわれわれの大それた欲望を投影したものにすぎないと言った。つまりたんなる心理的な現象でしかないというわけだ。

マルクスに至ってはこの問題を純粋に社会的なレベルに置き換え、かの有名な、宗教は「人民のアヘン」であるという定義を下した。つまり宗教は苦しみを和らげる麻薬で、革命への情熱も冷ましてしまうというわけだ。だから宗教は支配者にとっては都合がいい。人民があの世での幸せな日々に望

みをかければ、社会的不正を耐えることもたやすくなるからだ。
マルクスは三人の思想家のなかで、もっとも意義深い足跡を残した。彼にとって宗教はむしろ二義的な問題で、肝心なのは政治的社会的問題のほうだった。彼の理論は、歴史は常に階級闘争の歴史である、という定義に要約できる。
階級という概念はかなりあいまいだ。ヘーゲルはこれを、薬業組合、弁護士組合、軍人組合というような組合と同類と見た。マルクスのほうは階級を、本質的な経済の分野に組み入れた。そして、階級には搾取するほうと搾取されるほうの二種類があると言った。
マルクスは前者を「資本家階級」と呼んだが、それは産業が多額のお金、つまり資本を持っているものに支配されるからだ。後者は「プロレタリア」で、この言葉が示すのは、経済的資源が自分の労働力によってしか得られない気の毒な階級だ。社会学の分野では、マルクスは「資本家」より「ブルジョア」という言葉のほうを好んで使った。この言葉は、フランスで革命後に栄えた裕福な市民階級をさすのに使われたものだ。
マルクスの言う歴史は階級闘争の上に成りたっているから、社会を支える軸は、富める者と貧しい者を対立させる経済である。マルクスは哲学者というより、経済学者で政治理論家だった。彼の影響が続いた優に一五〇〇年ものあいだ、マルキシストといえば抑圧された者の味方を表わした。
マルクスが模範にしたのは要するに、プラトンがすでに説いていた共産主義で、私有財産を廃止するというものだった。私有財産がなくなれば、富者と貧者の区別はなくなる。しかし共有化された経済的資源はどうやって分けたらいいのか。各人の必要に応じて与えるのか。それとも業績に応じて与

えるのか。このジレンマには、マルクスだけでなく彼の仲間のほとんどが頭を抱えた。

マルクスは、ともかくこの考え方は優れていると思っていたから、まずプラトンの夢の実現をもくろんだ。プラトンによれば、支配するには哲学者が練りあげた理論を使うのがよくて、なかでも共産主義が役に立つ。共産主義を実践に移すにはプロレタリア階級を考えなければならない。しかしこんな大それた企ては、段階をひとつひとつ追っていっては実現できない。暴力的な革命を起こし、そのあとプロレタリアートによる独裁政権を誕生させるしかない。

マルクスは一八四八年に出した『共産党宣言』で、このたぐいの独裁政権の到来が遠くないことを予告している。この予告は文字どおりには実現しなかったが、一九一七年のロシア革命といわゆる共産主義政体の誕生から七〇年に及ぶ年月のあいだ、マルクスの原則は部分的にではあっても守られた。

マルクスの学者としての人生には活気があったが、なにしろ思想が革命的だったから、その分苦労も多かった。書いた記事は検閲に引っかかり、記事を載せた新聞も廃刊になった。ドイツから追放された彼は、パリにもブリュッセルにも安住できず、ロンドンにやっと落ち着いて、一八八三年に死ぬまでその地に留まった。

マルクスは卒業論文にエピクロスを取りあげたが、マルクスもまた友情を大事にした。ヘーゲル右派から左派に移った哲学者ブルーノ・バウアーにも友情を尽くしている。バウアーが宗教問題で大学を追われたとき、マルクスも続いて教壇を下りた。

伝説的なのはエンゲルスとの友情だ。ふたりの友情は一八四四年にパリで生まれたが、その四年あと、ふたりは連名で『共産党宣言』を出している。この本は世界中のプロレタリアへの力強いアピー

ルで結ばれ、資本家との闘争に備えて団結せよと呼びかけている。

マルクスが広めたスローガンはこれだけに留まらない。そのなかのひとつでは、世界を解釈するのはもうやめよう、世界は解釈するべきものではなくて、変えるべきものなのだ、と言っている。スローガンには哲学を敵にまわしたものまであって、抽象哲学は具体的世界にとって、セックスにとってのマスタベーションのようなものだと言ってのけた。この点でマルクスは自分の言葉を欺かなかった。この世に子どもを七人も送りだしたために、プロレタリアにふさわしい文字どおりの素寒貧になったのだ。財政的資源といったら、友達思いのエンゲルスからの差し入れくらいのものだった。

世界の歴史は階級闘争の歴史

マルクスを理解するには、彼のもうひとりの友フォイエルバッハについても考えるのがいい。彼もバウアーに劣らず過激な男で、ヘーゲルの観念論を立派な唯物論に変えてしまおうともくろんだ。はじめはマルクスも乗り気になり、ドイツ語で「火の奔流」を意味するフォイエルバッハという名前をからかって、この時代は火の奔流を渡ることによって浄化されなければならない、などと言っていた。しかし彼の熱はまもなく冷めてしまった。

フォイエルバッハは、宗教は人間にとってもっとも自発的な自己疎外だと説いた。しかしいったいどんな人間にとってなのか、とマルクスは反論した。おそらくヘーゲルの言う抽象的な人間のことなのだろうが、骨も身もある人間なら、ほんとうの自己疎外とは政治的社会的性格のものであるはずだ

と。

マルクスは、宗教的な自己疎外の概念は付随的なものだと考えた。彼はフォイエルバッハへの批判を『フォイエルバッハに関するテーゼ』にまとめたが、このためふたりは不仲になった。マルクスはこの論文のなかに書いている。「フォイエルバッハは、宗教的感情も社会的産物であること、そして、彼の言う抽象的人間もある決まった形態の社会に属していることに、気がつかないのだろうか」。

マルクスにしてみれば、具体的な個人は歴史のなかに生きていて、歴史とは階級闘争の歴史なのだ。つまり、いかなる社会でも抑圧者と非抑圧者は常に対立関係にあり、双方のあいだには多かれ少なかれ公的な闘争の歴史がある。マルクスの時代の闘争は富める経営者と貧しい賃金労働者とのそれだった。労働者は日に一二時間も働かされながら、その日暮らしを強いられていたのだ。

フォイエルバッハは、生きていることのあかしは空腹であると言った。マルクスは『資本論』のなかで、この判断はおおざっぱすぎると言っている。「空腹は空腹だ。しかし、焼いた肉をナイフとフォークで食べることによって満たされる空腹は、生肉を手と歯と爪を使って食べる空腹と同じではない」。しかしマルクスの言う空腹が、動物の感じる空腹のことだと思ったら間違いだ。人間が動物と違うのは、生きのびる手段を自分で生産しているからなのだ。人間が飢えを感じるのは、自分がつくったものを使うことが許されないときなのだ。

この理論の基礎にあるのは、生産と分配という経済的な現象である。なかでも生産という現象が、経済生活全体の軸になるとマルクスは考えた。このために彼は「弁証法的唯物論」あるいは「歴史的唯物論」の理論家であると考えられるようになった。

マルクスによれば、歴史上の闘争は観念の対立によって起こったのではなく、商品の生産と分配から生じたのだ。そのために彼の理論は唯物論という名で呼ばれたが、弁証法的なのはなぜかといえば、社会の歴史は経済的に対立する階級間の闘争の歴史であるからなのだ。このためにマルクスの弁証法的唯物論は、同時に歴史的唯物論でもあるわけだ。

人はほかの人間に対抗して自分の欲求を満たすために、働いたり戦ったりする。「ほかの人間」とはどういう人間か？　それは、働かないか、働いたとしてもわずかであり、欲求を満たすのに指一本動かす必要もなく、しかもその欲求は多くの場合、ほかならぬわがままから出たものであるような人間だ。

しかし貧者への抑圧は経済的現象であるだけではない。いわゆる「疎外」が生じるために、心理的現象にもなる。労働者の抑圧が最悪なのは、労働者がする仕事がその人のものではないので、結果として仕事が「疎外」されてしまうからなのだ。なぜそうなるかと言えば、仕事は課せられたもので、その仕事を果たしたからといって労働者にはなんの恩恵もなく、長時間労働の成果を最大限に搾取されるだけだからである。

マルクスは『経済学・哲学手稿』に書いている。「労働者は彼の対象に心血を注ぐが、その心血はもはや彼のものではなく、対象のものになる。労働者は、生産すればするほど、自分が消費するものは減り、価値あるものを創造すればするほど、自分は価値も尊厳もないものになってしまう」。

じっさいのところ、生産物は労働者のものではなく、企業家や資本家のものであり、労働者は自分が生産するもので雇い主をふとらせながら、自分のほうはますます奴隷のようになってしまう。どう

してこんなことが起こるかと言えば、企業は繁栄すればするほど労働量をふやし、雇い主が従業員を奴隷化する環境をいっそう整えてしまうからなのだ。

大衆は奴隷か

ヘーゲルは楽天家だったから、召使いと主人の関係について、のどかなヴィジョンを描いていた。彼によれば、主従という重苦しい関係が目立つのは最初のうちだけなのだ。お互いに馴れ親しむうちに、主人は召使いなしではやっていけなくなり、やがては召使いを尊重するようになる。召使いのほうは、主人が自分を頼りにしていることを知って、自分の仕事を自覚し満足感を抱くようになる。

とんでもない！　とマルクスは大声をあげた。疎外された仕事をやらされる労働者は、仕方がないからやりたくもない仕事を日がな一日続けるのだ。労働の疎外はだから経済や契約にかかわるものであるだけでなく、労働者をむしばむものでもあるのだ。「労働者が自由を感じるのは、食べたり飲んだりセックスをしたりという動物的なことをしているときだけである。獣が人間に、人間が獣になっているようなものだ」。

似たようなことは資本家の心にも起こる。資本家は自分自身を、考えたり欲したりする人間と感じるよりも、お金のかたまりのように感じる。人がそんな風になるのは、合法的な手段ではなく搾取によって儲けるからだ、とマルクスは言う。マルクスは彼の主著『資本論』で、資本の蓄積がいかにして起こるかを綿密に検証している。そのテクニックを彼は「剰余価値」と名づけた。彼によれば、資

本家は賃金労働者に、その人が生みだした利益より少ない給料を払う。そこでまさに「剰余価値」である余分な利益が生まれるわけだ。これは立派な泥棒行為だとマルクスはかみついた。

頭のいかれた哲学者

一九世紀末のもっとも有名な思想家フリードリヒ・ニーチェは、マルクスの巻き起こした嵐などは知らなかった。彼は天才であると同時に人間など眼中になかったから、これはうなずけないことではない。彼にとっては抑圧された人間などどうでもよかった。少数の卓越した人間を除けば、人間一般に興味はなかった。

ニーチェはショーペンハウアーを信奉していて、彼のペシミズムを反俗的なアナーキズムに転換させた。既存の秩序にも、道徳にも、信仰にも背を向けていたが、だからといって自分の思想がないわけではなかった。彼の思想は、死すべき一般の人間より優れた人間についてのものだった。彼はその人間に、のちに抜群に有名になった「超人」という名をつけた。

ニーチェは超人について語ったが、彼自身は気の毒なほど病弱だった。しかし頭のほうは早熟で、一八六九年には弱冠二五歳でバーゼル大学の教壇に立った。けれども健康状態がひどく悪化し、大学に留まったのは一〇年そこそこだった。彼は戦士としても超人どころではなく、普仏戦争に従軍はしたけれど、やっていたのは衛生兵だった。大学を辞したあと、彼の人生は苦難の連続だった。病身を押して次から次へと本を書き、いつか価値が認められることを願っていたが、味わうのはいつも苦い

失望ばかりだった。一八九一年になってやっと、哲学的叙事詩『ツァラトゥストラはこう言った』が世の注目を浴びた。しかしニーチェ自身はすでに精神を病んでいた。
ニーチェの狂気は伝記を飛び越えて伝説にまでなった。ライバルたちはここぞとばかりに、彼の思想ははじめからどこかおかしかったと息巻いた。しかしアヴァンギャルドな彼のファンは興奮して、狂気じみた思想を崇めまつった。
伝説によると、ニーチェの狂気はトリノの町で馬を抱きしめたときに発症したらしい。誰もがこの一件を覚えているわけではないが、ニーチェはかわいそうな馬が飼い主から打ちすえられそうなのを見て、怒りだすよりまえに、駆け寄ってその蛮行を止めようとしたという。そういう事情があるなら、馬に抱きつくなどという突拍子もない行為も、狂気のはじまりというより、最後の思慮ある行為だったと見ることもできそうだ。
ニーチェの伝記を書く際に、内容の正確さについてあまりくわしく調べない向きもあるようだから、すべてがあてにできるわけではない。運命の女性ルー・ザロメとの恋愛沙汰で落胆したことを書きたてる向きも少なくない。こっちのほうは映画を作ろうと思ったらもってこいの題材になる。
ニーチェは実際には、病気がちで精神も病んだ彼の世話をしていた母親と妹以外には、女を毛嫌いしていた。女を訪ねるときには鞭を忘れるなという警句まで発している。彼も哲学者の例に漏れず、長年女をよせつけない独り者で通していた。思想家のなかで妻を持った人や女性に親しんだ人は数少ない。カントの時代までは独り暮らしがむしろ当たり前だった。しかしひとりでいては本を売ることもむずかしい。そこで思いがけないラブストーリーが生まれたりする。

ルー・ザロメは彼をぴしゃりとはねつけて、弟子のままでいるほうを好んだ。ニーチェはほかにも、アリアドネーというミステリアスな女性や、ヴァーグナーの妻のコジマにラブレターを書いている。ラブレターを書いたのは頭に変調を来したあとの時期だから、アリアドネーがじつはコジマだったとか、ニーチェはひそかに彼女を愛していたらしいとか、推測してもはじまらない。

ニーチェの頭の変調は精神分析医をよほど刺激するらしい。原因のひとつに父親と弟が若くして死んだことがある、という説もある。彼がセックスや感情の面で未熟だったのは、母親と妹のあいだで暮らしていたためだとする説にも、ある程度はうなずける。彼女たちがニーチェを、ヴァーグナーや歴史家のブルクハルトのような当時の巨匠に近づけたのだという人もいる。しかしこれらの観察からうかがえるのは、何よりも、ニーチェは父親を慕うように彼らに近づいたのではないかということだ。けれどもこうした憶測も、彼を不幸にした不安を解くカギにはならないし、彼の天才を解明する糸口にはなおさらならない。

神には死んでもらおう

ニーチェの代表作で彼は、古代の預言者ツァラトゥストラが、新しい時代の到来を告げるために山を下りるところを描写している。人々に伝えるべき啓示は山ほどあったが、そのなかのひとつは腰を抜かしそうなことだった。神は死んだというのだ！

神の存在をどう捉えてどう証明するかについて、哲学者たちは何世紀もまえから飽きずに議論を続

けてきた。しかしどんな勇者でも、神を否定し無神論を唱えるのが関の山だった。神はしばらくは存在していたけれど、もういなくなってもいいころだ、などと考える哲人はただのひとりもいなかった。ところがニーチェは、神は死んだと宣言し、万一死んでいないなら死んでもらうのがいいとまで言ったのだ。

こんなに容赦なく放りだされなければならないとは、神はいったいどんな罪を犯したのだろうか。ニーチェは言う。神は命を燃えたたせるエネルギーを遠慮なくそいでしまう。この世界がもつ魅力を根こそぎにしてしまう。ことに有害なのは、神への信仰は、神を信じる者を善人のようにしてしまうことだ。なぜ有害かといえば、「善人のイメージを描くのに、弱者、病者、障害者、線維の最後の一本まで病んでいる者を総動員している」からなのだ。

キリスト教を毛嫌いするニーチェが神を殺すことを思いついたのは、ほかならぬキリスト教からだった。ユダヤ人はイエスを殺した民族だとして、キリスト教徒は長年ユダヤ人を憎んできた。しかしキリスト教徒は、死んだ（少なくとも復活するまで）のはイエスであって神ではないと考えていた。そこでニーチェは、何より気高い行為として神を殺すことを教えたのだ。「神を殺す者は、彼自身が詩人のなかでももっとも力強く聖なる者になるだろう」と彼は書いている。

これはいうまでもなく、冒瀆的な神学である。しかしニーチェの倫理にはなおさら肝をつぶしてしまう。彼が「神の腐敗」と呼ぶ神の死から、善は悪であり悪は善であるという、逆転した道徳が生まれるというのだ。悪徳が美徳に、美徳が悪徳に入れ替わるというわけだ。この逆転をニーチェは「価値の転換」と呼んでいる。

しかしだからといって、ニーチェは犯罪を奨励しているわけではない。彼より前の一八世紀末に、サド侯爵という文学者がそれをやっている。ニーチェのほうは、同情は人間の弱さだとして嘲笑しただけで、悪事を勧めることまではしなかった。サドは他人に苦痛を与えることが快楽を生むと説いたが、ニーチェがそんな説にうなずいたとは思えない。

ニーチェはサドとは違ったし、それどころか人生を愛し、伝統的な道徳は人生への愛をさまたげるものだと考えた。また慣習的な道徳は「奴隷の道徳」であるとして、強く高貴であれという彼の道徳とは相容れないものだと言った。謙遜、清純、幸福の断念といったキリスト教特有の道徳を冷笑し、そのかわりに、勇猛さ、喜び、生への意欲といった美徳を身につけよと説いた。

しかし彼の言う強者の高貴な道徳は、若くて健康で幸福な人のための道徳なのだ。ニーチェの頭には超人という傑物しかいなかっただろうと考えれば、ニーチェ自身がそれを認めていたとしてもおかしくはない。ではそのほかの人々のことは？　彼はショーペンハウアーを信奉していたのだから、極めつきのペシミストではなかったのか？

ところがそうではなかったのだ。ニーチェは師に倣って運命を呪えと教えるどころか、運命を愛せとまで言った。むろん諦観からではない。あきらめは憎むべきキリスト教の十八番で、奴隷の道徳なのだ。強者は運命と闘うなどという無意味なことはしない。人生を愛し、愛しながら、人生を統べる法則を愛する。「人間の偉大さを私が表わす言葉は『運命愛』である。必要なことは、運命をただ耐えることではなく、ましてや無関心でいることでもなく、愛することなのだ」。

21　ラッセルとヴィトゲンシュタイン――論理学の革命

いかなる論理的パラドックスのなかにも、一種の自己言及的な言葉がある。これにはクレームをつけなければならない。

バートランド・ラッセル『私の哲学の発展』第七章

語ることのできないことについては、黙っていなければならない。

ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン『論理哲学論考』七

二〇世紀は論理学の世紀だった。論理学が二〇世紀に生まれたというわけではないが、それまでになく成長させたのは二〇世紀の思想家たちだった。二〇世紀論理学のふたりの巨匠は、バートランド・ラッセルと、彼の弟子でライバルでもあったルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインである。

二〇世紀の論理学は支配者の道を歩んだとはいえ、地雷原を渡るようなものだった。なぜならハイデガーをはじめとする実存主義者たちが、合理的思考に拒否反応を示したからだ。こうした外敵もさることながら、二〇世紀論理学は、自分の内部に矛盾や背反が起こらないように注意しなければなら

なかった。それらは恐るべき癌になって存在を脅かしかねないからだ。そのために学者たちは、自分の発する言葉を禁止形にすることが少なくなかった。外敵の攻撃から身を守るためにも、自分の学説そのもののなかにはびこるウイルスを警戒するためにも、それが必要だったのだ。

ラッセルは終生、自分の論理的思考に矛盾が生じないように注意を怠らなかった。古い時代には有名な嘘つきのパラドックスがある。嘘つきは、「私は嘘をついている」と自分から言うことによって、彼の言うことが真実か偽りか判断しようとする者の気持を迷わせてしまう。ラッセルはこれを防ぐために、いかなる論理的命題にも、それ自身を語らせることを避けた。「いかなる断言もそれ自体には言及できない」という考え方は、彼の思想の基本的原則になった。思想上のウイルスの発見もそのワクチンの発見も、ともにラッセルを有名にしたが、そのために彼はいわゆる「タイプ理論」を打ちたてる必要に迫られた。この理論はいまだに論議を呼んでいる。

ラッセルの理論に劣らずくせ者なのは、ヴィトゲンシュタインの「語ることのできないことについては、黙っていなければならない」というタブーである。この言葉ほどよく引きあいに出される言葉も珍しく、こちらのほうがむしろ有名なくらいだ。けれどもヴィトゲンシュタインは、この言葉によって重要な人物になったのではない。これは論理的思考のひとつの結果でしかなく、その思考もいまだに論議の渦中にあるのだ。

老いを知らない哲学者

二〇世紀イギリス最大の哲学者バートランド・ラッセルは、思想界ではもっとも長生きの部類に入る。彼は長生きしたおかげで、二〇世紀の主なできごとのいくつかに自分もかかわった。生まれは一八七二年。ニーチェの『ツァラトゥストラはこう言った』が出たときには一九歳になっていたから、反キリスト教思想に共感できる年齢だった。四二歳で第一次世界大戦が勃発すると、さっそく反戦の側にまわった。六〇年代の紛争のさなかに戦犯国際法廷を設立したときには、早くも九四歳になっていた。一九七〇年、九八歳で他界。

ラッセルは長生きでも記録破りだったが、多才なことでも抜きんでていた。マルチタレントぶりは大したもので、数学や論理学から理論的政治学や闘争的政治学、日常の倫理学から文学まで、数々の分野で信じがたいほど奔放に活躍した。自著の普及にも熱心で、彼の本は世界中で読者を獲得した。彼がとりわけ秀でていたのは論理学と数学だった。主著のひとつで一九一〇年から一三年にかけてホワイトヘッドとともに出した全三巻の『数学原理』もこの分野に入る。一九五〇年にはノーベル文学賞も受賞している。

しかし大学教授としてのキャリアは平坦ではなかった。第一次大戦のあいだはケンブリッジ大学で哲学を教えていたが、反戦思想のために大学を追われた。良心的反戦運動にも共感し、のちには核兵器廃絶運動に参加している。アメリカ軍に毒舌を浴びせたときには六カ月の刑をくらった。お上にた

てつく癖は八九歳になってもまだ抜けなかった。一九六一年には飽きもせずに市民に不服従を教唆した廉で、刑務所病院に一週間ぶちこまれた。

ラッセルは精力抜群の男だった。航空機の事故でおぼれかけたときには、七八歳という年齢に負けずに泳ぎきり、イギリスじゅうを驚かせた。彼は人生を愛し女を愛し、離婚を繰り返して四人の妻を持った。当時の学校が気に食わず、子どもたちを通わせたくなかったから、自分で学校をつくろうとした。しかし彼のやることはおおむね陽気で、人生に対してショーペンハウアーのような恨みは持たず、ニーチェのような突拍子もない思いも抱かなかった。存在の不可解について悩んだりはしなかったが、論理学では苦労しながら、論理学の謎解きは物理学の実験と同じようだと考えた。

ラッセルのパラドックス

プラトン派とアリストテレス派は何世紀にもわたってお互いに溶けあわなかった。両派が融合しなかったのは、プラトン派は数に重きをおき、アリストテレス派は論理に重きをおいていたからだ。科学にはこのふたつとも必要だが、一見したところでは両者は違うもののように見える。2＋2＝4はたしかなことで、「ソクラテスは死んだ、ソクラテスは生きていない」もそれに劣らずたしかなことだ。しかし両方ともたしかではあっても、住んでいる世界は別のように思える。

ところが一九世紀も末になったころ、このふたつがやっと溶けあいはじめた。その仕掛け人の代表格がラッセルである。この融合は現代の科学史のなかでも重要な一章を占めている。その章のなかで

もひときわ目立つのが、いわゆる「ラッセルのパラドックス」の発見である。先に述べた嘘つきのパラドックスとは違って、ラッセルのパラドックスはパラドックスとしては出色のできではない。しかしこのパラドックスは、ラッセルが新しい数理論理学の学説を打ちたてるきっかけになった。

このパラドックスは、ラッセルにとっては輝かしい発見になったが、ドイツの著名な数学者で論理学者であったゴットロープ・フレーゲにとっては、自説に対する苦々しい反証になってしまった。フレーゲはラッセルのおかげで大敗を喫したことを悟るとすっかり落ちこんでしまい、一九〇二年の秋には、それまでの科学者が誰も書いたことのないほどうちひしがれた告白を書いた。

一般の読者にことの顛末を説明するのはたやすいことではない。けれど、論理学者は頭のおかしい連中なのだと思われることを覚悟して、試してみようか。ことのはじまりは、哲学者を常に悩ませてきた「数とは何か?」という疑問だった。数を使うことはむずかしくない。近所の家の番地が知りたければ、数えてみればわかる。しかし数がものごとを形容するやり方となると、ほかの形容詞のそれとは違ってくるのだ。

「マルコはブラックとプルートという二匹の大きな犬を飼っている」と言えば、ブラックは大きくてプルートも大きいということだ。しかしブラックは二匹でプルートも二匹だということにはならない。それなら二という数は何を意味しているのだろうか。一般的に、数とは何を意味するのだろうか。フレーゲはこたえた、というより、ラッセルに反論されるまでは考えていた。数はものごとの集合である。ネクタイを一二本持っていると言ったら、ネクタイの集合が、数えてみたら一二という数に達したということだ。

しかしそのネクタイだけなら私のものだが、一二という数の集合なら無数にある。一二人の弟子、一二の音階と半音階、一二階の私のマンション、等々。これらの集合の集合がまた集合を形成する。一二の構成要素を持つすべての集合の集まりだ。

同様にして、二というのは、目や手や足など、構成要素が二個だけのものすべてを集めたものの集合だ。そこでフレーゲは定義した。ひとつの数は、同じ数の構成要素を持つあらゆる集合の集まりである。フレーゲはラッセルから手紙をもらうまでは、これですっかり片づいたつもりでいた。

しかしラッセルは奇妙なことに気がついた。引きだしのなかに並んでいるスプーンを眺めてみると、「スプーンの集合」が見える。しかしこの集合は一本のスプーンではない。一方「スプーンではないものの集合」は、まさに一本のスプーンではないものだ。それでは、とラッセルは驚きの声をあげた。集合にはまったく別のふたつのタイプがあるわけか！　「スプーンの集合」のような、集合が要素そのもの（一本のスプーン）ではないものと、集合が要素そのものでもあるものと。たとえば概念の集合はそれなりにひとつの概念だから、「集合が要素そのものでもある」集合の部類に入る。

ここで、集合が要素そのものではない「スプーンの集合」のような集合を、「通常の集合」と呼んでみよう。なぜ通常かと言えば、こっちの場合のほうが圧倒的に多いからだ。たとえば人間の集合はひとりの人間ではないし、ソファの集合もひとつのソファではない。

一方、集合が要素そのものでもある集合のほうを「変則的な集合」と呼ぼう。いま挙げた概念の集合などがそうだ。

それではあらゆる「通常の集合の集合」、つまり「集合がもとの集合そのものではない集合」はど

うなるだろうか。これも「通常の集合」に入るのだろうか。それともこちらは「変則的な集合」に入るのだろうか。つまりその集合はもとの集合と同じではないのだろうか、それとももとの集合と同じなのだろうか。

ここで有名な「ラッセルのパラドックス」が登場する。例のどっちに転んでも矛盾するというものだ。たとえば、それ（通常の集合の集合）は「通常の集合」だとこたえたとする。しかし定義によれば、通常であるということは、集合が要素そのものではないということだ。それでは「通常の集合の集合」は、変則的にならら、その通常性を証せるのだろうか。でもそれでは、「通常の集合の集合」は、スプーンや人間やソファの集合は要素そのものではないという原則にそむくことになってしまう。これでは、黒い集合の集合は白い集合である、と言うようなものだ。

それなら「通常の集合の集合」は「変則的だ」、つまり、もとの集合と同じである、とこたえたとしよう。するとその集合の集合は（もとの集合が通常だから）通常であることになり、言いかえれば、もとの集合と同じではないということになる。これではまさに変則的であることの逆であり、変則的であると言いながら、変則的であることを否定していることになる。

フレーゲはラッセルの手紙を読んで自殺を考えたと言われているが、真偽のほどはつかめない。フレーゲは気の毒に、それまでの人生をすべてその問題に懸けてきたのに、長年の苦労のたまものが一瞬にして消えてしまったのだ。フレーゲは、数とは集合にほかならないことを発見したとき、算術を論理学で解くという彼の企ては間違っていなかったと考えた。彼はもともと、集合は足し算や平方根と違って算数の概念ではなく、分離や共有といった論理学の概念であると思っていた。しかし数と集

合との同一化は「ラッセルのパラドックス」を生むから矛盾しているというのなら、数理論理学という、論理学的に表現された数学も成りたたないのだ。

しかしフレーゲは自殺しないで正解だった。ラッセルのパラドックスが植えつけたウイルスはフレーゲの数理論理学を危うくしたが、命を奪いはしなかった。ラッセル自身がワクチンを見つけたからだ。彼は「タイプ理論」という名で知られるようになったもうひとつの理論によって、毒をみごとに消してしまった。

数理論理学にはくさくさした

ラッセルはパラドックスを発表したあと、このパラドックスは避けられないものではないと言った。これを避けるには、予備的な命令を守って正確に表現すればいいのだと。その命令とは「対象に述語をつけるときには厳密に階級を守れ」というものだった。

基本になる原理は次のようだ。はじめ、対象はどれも同じ平面上にある。なぜならまだ述語がついていなくて、性格づけがされていないからだ。椅子、人間、思考、といったものは、まだお互いに区別されていない。こうした状態の対象をタイプ0と呼ぶ。これらを認識するために述語をつけようとする。これはマルコです、これはパオロです、という風に。このような、タイプ0につけることのできる述語をタイプ1と呼ぶ。一方「マルコは賢い」と言うときの賢いはタイプ2である。なぜならタイプ0の対象につけることはできなくて、タイプ1の述語によって性格づけられた対象だけにつけら

れるからだ。「賢さは美徳である」と言った場合には、述語はタイプ3になる。なぜならタイプ2である「賢さ」についているからだ。

というわけでラッセルの命令は、「すぐ下のタイプでない対象に述語をつけるのは妥当でない」と表わすことができる。たとえば「アルキビアデス」はタイプ1だからだ。けれども「アルキビアデスはソクラテスだ」とは言えない。なぜならどちらもタイプ1で、ある対象の述語は常に対象より数の大きいタイプでなければならないからだ。同様にして「ソクラテスは賢い」とは言える。なぜなら「賢い」はタイプ2で、「ソクラテス」はタイプ1だからだ。しかし「ソクラテスは美徳である」とは言えない。なぜなら「美徳」はタイプ3で、「ソクラテス」はタイプ1だからだ。2を飛び越しているからこれは許されない。

数理論理学の発達にとって、ラッセルの発見は深い意味をもつものだった。しかし一般読者には、こういうことはなじみが薄いかもしれない。それはもっともなことなのだ。なにしろラッセル自身が、こんなに陳腐でおもしろくもないことに長年かかずらっているなんて嫌気がさす、と言っているのだから。彼いわく、「どこから見てもおもしろみなどこれっぽっちもない……ひどくつまらない問題で、私から見れば本質的価値もまったくないものに集中力を注がなければならないなんて、考えただけでくさくさしてしまった」。

ヴィトゲンシュタインは人間嫌い

ラッセルの弟子のひとりルートヴィッヒ・ヴィトゲンシュタインは、天才的ではあったが、頭が救いようがないほどいかれていた。ふたりの出会いはどちらにとっても電気ショックのようだった。ウィーン生まれのヴィトゲンシュタインは、二二歳になった一九一一年、当時並ぶ者のない名声を誇っていたラッセルに会いたい一心でケンブリッジに向かった。出会ったあとのふたりの毎日はまさに嵐だった。ヴィトゲンシュタインは論理学だけでなく死や自殺についても論じたいと、昼夜の別なくラッセルを訪れた。ラッセルは彼の卓越した才能に惚れこんでいたから、イギリス紳士の節度も忘れていつ何時でも喜んで迎え入れた。しかしこのふたりほど互いに異質な人間も珍しかった。ラッセルは穏やかで人づきあいがよく、ヴィトゲンシュタインは神経質で人嫌いだった。ふたりの友人関係はじつに奇妙なものだった。ラッセルは友の居場所も知らず生死も不明なことが少なくなかった。ヴィトゲンシュタインが文字どおり影ひとつ残さずに消えてしまうことも珍しくなかった。

ヴィトゲンシュタインはウィーンの裕福なユダヤ系実業家の家庭に生まれた。工学部を卒業したあと、オーストリア上流社会で人気のあった建築士になるはずだった。ところが財産や建築業には目もくれずに、まっしぐらに数理論理学の世界に飛びこんでしまった。そして三二歳という若さで、主著となった『論理哲学論考』を書きあげた。この本が国際的な評判を得たおかげで、そのまますんなり大学教師になれるところだった。しかしそれから数年後に出会ったトルストイのユートピア的小品が

彼の運命を変えた。彼は大学もキャリアも捨てて、オーストリアの小村にある尼寺の庭師になることにしたのだ。しかし尼寺でののどかな暮らしは三年と持たず、一九二九年にはケンブリッジに戻って、そこで哲学を教えることになった。

ヴィトゲンシュタインの大学での講義は、口に出すのもためらわれるほどめちゃくちゃだった。彼は教室のなかで長時間頭を抱えたまま動かなかったから、学生はそのあいだ静かにしているために、それぞれがデッキチェアを持ちこんだ。機嫌が悪いときには学生を口汚くののしり、そのあとたちまちしょげてしまった。こんなことでは、ほかの人だったらただちにクビになったことだろう。しかしヴィトゲンシュタインにはふたつの強力なバックがあった。人を惹きつけてやまない才能と、ラッセルというたぐいまれなパトロンである。

ラッセルがヴィトゲンシュタインの狂気に歯止めをかけようとしたことは一再ならずあったが効き目はなかった。ノルウェーに隠れ住んだときもそうで、ヴィトゲンシュタインは自分で造った小屋で二年を過ごすのだと言って出かけた。ラッセルは、「そんなことは無茶でばかげたことだと言い、そこは暗闇の世界だと言ったが、日光は嫌いだと彼は返した。そこで君は狂ってると言うと、神が思慮深く創ってくれなくてさいわいだったと返事をした」と語っている。ラッセルはそれにつけたして、神が彼の願いを叶えてやったことはまちがいない、と皮肉を込めて言っている。

しかしヴィトゲンシュタインの変人ぶりに魅了される人は少なくなかった。彼と個人的につきあっていた若い数学者は、ノルウェーまで彼を追いかけた。ふたりめは有名な哲学者のジョージ・ムーアで、彼は氷と闇のノルウェーまでヴィトゲンシュタインを追い、彼の最新の論理学理論を持ち帰った。

ヴィトゲンシュタインは一九三九年にイギリスに帰ると、大学でムーアの後を引き継いだ。しかし自分の理論の成功を誇ってやまないどころか、さっさとゴミ箱に投げこんだ。代表作である『論考』にも背を向けて、まったく方向違いの哲学を説きはじめた。大学を逃げだしてロンドンやニューカッスルの病院で働いたことも一度や二度ではなかった。そして一九四七年ついに、長いあいだ嫌っていた大学教師の職をせいせいと捨てた。

ヴィトゲンシュタインは何かに満足したためしがなく、そのための不機嫌から、職業を転々と変えるはめになった。小学校の教師までやったが、大学であげた成果など小学校であげられるはずがなく、それどころか父母たちが、クビにせよと大合唱をした。

彼はどこから見ても精神病質で、精神分析を受けたほうがよかったのだ。けれども彼は精神分析医を毛嫌いしていた。天才だった分だけ癇癪持ちでもあった。目の前の問題の解決をたえず迫られ、そのため常にいらいらと苦しんでいた。まさに居心地の悪い時代の落とし子だった。

語れないことは口にするな

それまでの大方の哲学者とは違って、ヴィトゲンシュタインは哲学に何かの発明や発見ができるとは考えなかった。彼の課題はただひとつ、自分の思想をはっきりさせることだった。彼は『論考』に、「哲学が考えるべきは哲学的命題の案出ではなく、命題の解明である」と書いている。

つまり哲学の仕事はこんがらかった頭のなかを整理することだというわけだ。整理が終わったら哲

学は消えてしまってかまわない。そのおもな整理係が論理学であることは、彼の有名な著書のタイトルからわかる。その本は論理学の範囲内での哲学の本なのだ。そして論理学も哲学と同様、その使命を終えたら消えてしまわなければならない。ヴィトゲンシュタインはこれを、建物のてっぺんに上るときに使うはしごにたとえている。上り終えたら、はしごははずしてしまってかまわないのだ。

哲学をはずしてしまっても、論理学の役目を大きくすれば一部はまかなえる。論理学のほうが哲学より重いと考えられたことはすでに過去にもあった。人間の思考法には論理的構造があることを疑うより、哲学に可能なことを疑うほうがたやすいからだ。現実を認識するには論理学的法則を使うのがいい、とアリストテレスも言っている。アリストテレスはしかし、論理学と同時に言語のほうにも目を向けた。ヴィトゲンシュタインはまさにこの言語に注目することによって、哲学への疑問は抱きながらも、思想の価値を高めようとした。

ヴィトゲンシュタインが出るまでは、認識には言語がものを言うとは考えられていなかった。アリストテレスが言った言語による認識は、真実という観点だけから出たものだった。つまり、ある命題が真実であるのは、語られる現実にそれがぴったり合う場合だけである、ということだ。「犬は骨をかむ」ということが真実なのは、それを断言するのが、犬が骨をかんでいるところを見た人である場合だというわけだ。ヴィトゲンシュタインも同じように考えたが、言語によって可能なのは、知覚したものにかぶせる論理的イメージの認識である、という断りを入れた。

ヴィトゲンシュタインの『論考』は体系的にすっきり書かれているのではなく、混乱してはいるが魅力的なアフォリズムが勝手気ままに並んでいるという感じである。言っていることには深い意味が

あるのに書き方が頼りないから、読者はまごついてしまう。出だしは世界についてである。世界とは何か？「世界とは起こることのすべてである」。それでは起こることとは何か？「起こるのは事実である」。われわれの思考はこの事実を、論理的イメージを形成しながらつかんでいく。

こんな神託めいた言葉が続いたあとで、やっと具体的な話になる。われわれの思考のイメージとは、世界の地図である。地図とそれが表現する地域とのあいだにある関係は、われわれの思考と世界とのあいだにある関係に等しい。しかしこのふたつが等しくなるためには、ある共通した形式がなければならない。ヴィトゲンシュタインはそれを「論理的形式」と呼ぶ。もし現にある事実の、あるかぎりの表現が集まったら、世界についての完全なイメージが、つまりは世界地図が得られるだろう。「世界の事実」という言葉でヴィトゲンシュタインが何を言おうとしたかを解釈することは、「表現」という言葉が何を意味するかを解釈するのと同じで、たやすいことではない。まず手はじめに、単純な事実と、彼が「ものごとの状態」と呼ぶ複合的な事実を区別しなければならないのだ。「雨が降る」というのは単純な事実だが、「雨が降って寒い」となると状況は複合的になり、まさにひとつの状態になる。

しかしここである疑問が芽を出す。ひとつの命題を発するとき、それは常に現実にあてはまるものであるか？　もちろんそんなことはない。その理由はふたつある。そのうちのひとつめは「間違い」だ。誰かがこちらにやってくる、と言っても誰も来ない場合。しかしもうひとつ、哲学から見ればおもしろい理由もある。たとえば「美徳は最大の善である」と言ったとする。ヴィトゲンシュタインからすれば、はじめの命題は間違いだが、こっちの命題には意味がない。意味がないのはなぜかといえ

ば、現実はその命題が表わす事実をひとつも見せてはくれないからだ。

哲学者は無意味な命題を発してはならない。ヴィトゲンシュタインはこの禁止を、「語ることのできないことについては、黙っていなければならない」という気の利いた文句で表わして、弟子たちをうならせた。この警句はカントが形而上学に対してぶつけた非難を思いださせる。しかしこの言葉をまともに受けとったら、倫理も美学も宗教もまったく無意味になってしまう。あげくには夕焼けを美しいと感じることも、慈愛から出た行為を立派だと思うことも、すべて無意味なことになってしまいそうだ。けれどもヴィトゲンシュタインが考えていたのはそんなばかげたことではなかった。彼はある種の言語的表現を哲学から排除したかったのだ。

ヴィトゲンシュタイン自身は、哲学の領域を一歩出ると神秘主義的傾向が強かったので、彼の論理学に傾倒する人々は少なからず落胆した。彼は実際には、論理家と神秘家の中間くらいのところにいたのだ。彼はこのふたつの傾向を調和させようとして、彼の警句に引っかかるから口にはできないことも、ともかく「示す」ことはできると言った。たとえば大声で祈りをあげる人は、現実の表現になることは何ひとつ言わなくても、信心深い態度を示している。そこでヴィトゲンシュタインは、宗教はきわめて実際的な性格を持つひとつの事象であると考えた。

ヴィトゲンシュタインは形而上学的命題を禁じた自分の言葉にたいそう満足していた。彼は自著の序文で、「語れることはすべてはっきり語れる。語ることのできないことについては、黙っているべきである」という言葉にこの本の神髄がある、とまで書いている。これを書いた一九二二年当時ヴィトゲンシュタインは、これは疑うことのできない真実だから、「不可侵で決定的な」真理としていつ

までも尊重されるだろうと考えた。しかしこれは大ハズレだった。この言葉に最初に背いたのは彼自身で、一〇年も経たないうちに気が変わり、不可侵だなど冗談じゃないと言ったのだ。
　彼のこの急激な心変わりは、信用を失墜させるどころか福の神になった。ここから生まれた新たな理論が、それまでの成果に劣らぬ実をつけたのだ。

学派嫌いが学派を生んだ

　多くの哲学者と違って、ヴィトゲンシュタインは自分の学派をつくることを嫌った。しかし運命の皮肉か、彼の思想から学派がふたつも生まれでた。一方は『論考』から生まれた学派で「新論理実証主義」と呼ばれた。「新」という接頭辞がついたのは、すでに一九世紀に、抽象的な形而上学に対抗して、「実証主義」と呼ばれる哲学の一派が生まれていたからだ。
　しかしヴィトゲンシュタインの著作から生まれた学派は実証的であるだけでは満足できず、常に学問的裏づけが必要だとして、それを与える唯一のものが論理学であると考えた。ヴィトゲンシュタインは自身で厳格な学問用語の集大成をつくり、命題には論理の正確さが大切であることを説いた。新論理実証主義を説いた哲学者はモーリッツ・シュリックだった。彼の学派はウィーンでヴィトゲンシュタインとかわした一連の会話から生まれたので、「ウィーン・サークル」という名でも呼ばれた。『論考』にくらべた場合のこの学派の画期的な新しさは、禁止文句を肯定的な言葉に変えたことにあった。なぜあることが禁止命題になるべきかを考えるかわりに、なぜ、どうやったら肯定的命題

になるかを考えたのだ。シュリックによれば、命題自体のなかに実証の可能性があれば、その命題は妥当と言える。一方、経験によって実証できない形而上学的な命題は、ヴィトゲンシュタイン自身が言ったように、無意味なわけだ。

この原理は科学の分野では役に立つ。しかし日常の言語の場合、実証できないことだって世間では話題になるのだ。たとえば、あいつは死ぬ前いったい何を考えていただろう、とか。しかし科学を職業にしている人なら、遠い時代にガリレオが言ったように、断言したことは実証できなければならない。こんなことは当たり前みたいだが、実際には容易なことではない。

シュリックの時代には、月面の地形を観察するための道具はまだなかった。一方、自転と公転の周期のおかげで、月面全体を肉眼で見ることもむずかしかった。だからシュリックの原理を文字どおりあてはめたら、天文学者は月には山脈があることはおろか、月についてのいかなることも断言できなくなってしまう。なぜなら断言しても実証しようがないからだ。いまではもうこの問題はなくなっているが、まだ解決できない問題ならいくらもある。

ヴィトゲンシュタインの思想から生まれたもうひとつの学派にはこれといった名前はない。しかし大きな思潮の底を流れているので、「分析哲学」という、より一般的な名称をもらった。これを生んだのはヴィトゲンシュタインの「言語ゲーム」という理論だった。この理論は彼の著書『哲学探究』とそのほかのメモのなかに出てくるが、どちらも死後に発表されている。

ニュートンはリンゴの実が木から落ちるのを見て重力の法則を発見したという。同じように、ヴィトゲンシュタインからふたつの学派が生まれたときにも、エピソードがいくつかあった。現実を表現

するものとしての言語の理論が生まれたのは、第一次大戦のさなかに塹壕のなかでたまたま読んだ裁判についての記事がきっかけだった。ヴィトゲンシュタインが読んだのは、自動車事故にまつわる刑事事件の裁判記事だった。当事者たちはその事故の模様を表現するのに、衝突した車のかわりにマッチとタバコの箱を使っていた。世界の事実について語るとはどういうことかこれでわかった、われわれはマッチ箱のかわりに言葉を使っているわけだ！

ヴィトゲンシュタインの第二の理論のほうは、第一の理論への疑問から生まれた。現実に起こることすべてを言語で表現することは、はたして可能なのだろうか？　こんな疑問が生まれたのも偶然のできごとからだった。そのとき彼は仲間の経済学者と電車の旅をしていた。その学者は彼に、よくナポリ人がするエッチなしぐさを言葉で正確に表現したらどうなるのか、ととんでもない質問をした。そんな赤面しそうな質問のおかげで、言葉による表現と現実とのあいだにある落差が浮かびあがった。日常の世界には、たとえば「窓を開けて」とか「パーティーに行く？」とか、学問になるどころではない雑多なことがごろごろあったのだ。

いずれにしても、三〇年代のはじめにヴィトゲンシュタインは、論理学の厳格な言語によって世界の事実を再現できると、『論考』で語った確信を崩してしまった。彼は、世界の事実とはほかでもない、多様きわまりない日常生活のありさまなので、それを論理学の図式に収めるなんて無理であることに気づいたのだ。日々の暮らしには、ある都市の旧市街のような、気まぐれにつくられていていまでは想像しがたいような世界も含まれている。そこは、『論考』の論理的秩序に収まるような周辺部の整備された新市街とは、くらべることもできない世界なのだ。しかもその旧市街は新市街に劣らず

活気があるので、なおざりにすることもできない。

こういう地域も含めて再現するためにヴィトゲンシュタインは、厳格な論理学の手法は使わずに、ゲームの手法を使うことにした。ゲームにも、科学的ではなくてもそれぞれのルールがある。数人が意思を伝えあうのに、言葉が三つか四つあれば足りるゲームもある。たとえばポーカーもそのひとつだ。ポーカーでは、プレイヤーは通常、ほんの数語しか言葉を使わない。こうしたゲーム構造は、遊びとはまったく別の分野にも見られる。たとえば政党同士が国会で繰りひろげる、議席獲得競争などもその例だ。

ヴィトゲンシュタインから発した分析哲学というこの第二の流れは、まずオックスフォードで多くの支持者を得、それからとりわけアメリカで大きな広がりを見せた。この学派は新論理実証主義が得意とした学問的言語の分析に対抗して、通常言語の分析を基礎にした。しかしどちらの派も形而上学に背を向けた点では変わりなかった。基本的な違いは次のようなところにあった。新実証主義は、経験、実験、論理学的および認識形而上学的確認という、学問的な実証に重きを置いた。一方分析哲学は、確認のための手段として、話し言葉が好ましいと考えた。話し言葉はたとえば、思想史の世界に長年君臨している「ある」という言葉の、使い時や使い方を教えてくれるのだ。

22　フロイトとフッサール——無意識と意識の闘い

夢にはなんらかの意味がある。じっさい、夢は願望の実現なのだ。

ジグムント・フロイト『夢判断』第二章

研究への衝動は諸哲学からではなく、ものごとや諸問題から生じなければならない。

エドムント・フッサール『厳密な学としての哲学』

二〇世紀の初め、思想家の空想力からもうあらゆる理論が出尽くしてしまっただろうと思われるころ、新ピカの学派がふたつも生まれた。精神分析学と現象学である。このふたつの学派の意図するところはまったく反対だった。医学療法として生まれた精神分析学は、意識は天井裏にしまって無意識という闇の領域に目を向けよ、と言って、一躍世の注目を浴びた。現象学はこれに対抗して、意識にこそ目を向けよと声高に唱えた。意識がなければ知り得ないものごとの本質を、意識はわれわれにつかませてくれるのだと。

このふたつの思潮の創始者たちはまったく別の道をたどった。精神分析学を興したジグムント・フロイトはたちまち二〇世紀文化の輝ける星になった。ことに医学の分野で名をあげたが、彼の理論が哲学に及ぼした影響も大きかった。彼が出るまでは、意識の光の届かない精神の領域は、一般人だけでなく哲学者にとっても近づきがたい領域だったのだ。

フロイトは夢の解釈という、それまで誰も考えたことのなかったゲートを発見した。そのうえ、夢はシンボルを通して現実と結びついていることも明らかにした。シンボルはフロイトにとって、無意識の言葉そのものだった。その言葉を習得すれば夢の内容が読めるのだ。フロイトはまた、夢には何よりも性的な特質があると言って世間を驚かせた。彼によれば、われわれは夢によって無意識の願望を満たしているのだ。

一方フッサールは、人生を支えるのは意識であると考えた。意識はわれわれが認識するものごとと密接に結びついている。意識がなければものごとについて語ることもできない。こうした驚くべき相関関係を、フッサールは「志向性」という言葉で表現した。意識の現象であるからには、ものごとは現象学という新しい学問のなかで研究されなければならない。さらに言えば、ものごとの本質が研究されなければならないのだ。そこで現象学者のあいだでは「もの自体へ！」という文句が合言葉になった。

無意識が哲学を揺さぶった

一九世紀の末、「精神分析」という新語が学問の分野に加わった。意味は文字どおり精神の分析だが、当時の医学界では、これは神経症の新しい療法だった。しかしこの言葉をはじめて使ったジグムント・フロイトの頭にあったのは、ただに精神障害の治療だけではなかった。その結果彼は、哲学の世界に揺さぶりをかけることになった。フロイトは患者を治療しているうちに、無意識の領域という、未知の広大な領域があることに気がついた。そして意識のその暗い領域に、病的行動からふだんの行動、はては芸術活動に至るまで、人間の多くの行動の原因が隠れているような気がした。

彼のこの発見は物議をかもした。自分も知らない心のなかの何かに押されて行動しているなんて、誰にも容易には信じられなかったのだ。疑う人もいれば、にわかモラリストになる人もいたし、冗談だろうと笑う人もいた。しかしフロイトは医者としても理論家としても、思うところを頑固に通した。こうして一九〇〇年、かの有名な著書『夢判断』が誕生した。

フロイトが言わんとすることは簡単だった。夢は願望を満たすものである。フロイトはこれを、多くの症例と日常の経験によって裏づけた。夢のなかには多くの人が見る夢がある。それは、実際はまだ眠っているのに、仕事へ行くためにもうベッドを出たつもりでいる夢だ。フロイトは語っている。「若いころは私もこの夢のような都合のいい夢をよく見たものだ。夢のなかではベッドから起きあがって洗面所のそばまで行くのだが、しばらくすると、ほんとうはまだベッドにいることをごまかして

はいられなくなる。しかしそのしばらくのあいだは、ともかく眠っていられるのだ」。

フロイトには成功者になる条件がそろっていた。好男子で、教養人で、インテリで、そのうえ人づきあいがいい。この理論を発表したとき彼はもう四〇代で、幸福な結婚をして社会的にも高い評価を受けていた。しかしはじめから医者になりたかったわけではない。それどころか、若いころは医者になるつもりなどさらさらなかったと言ってはばからなかった。医学生になったのは、ゲーテが自然主義について語った講演に心を動かされたからだという。しかし大学を卒業して四年めの一八八五年には、早くも大学教官の資格をとっていた。

フロイトが、当時有名だったフランスの神経病学者シャルコーに出会わなかったら、精神分析学は生まれていなかっただろう。シャルコーは催眠術に長けていたが、それを療法に使っているうちに、ある種のヒステリーを治すには、原因になったトラウマに注目するのがいいことに気がついた。フロイトは催眠術には疎かったが、シャルコーの経験はカギになると思った。そして、神経症の治療には生理学的な方法だけでなく、心理学的な方法も取り入れるべきだと確信した。この確信が精神分析学の発端になったのだ。

さあこれで道が開けた。錠剤や注射は使わずに、心理的経験を分析しよう。フロイトは自分自身がその実験台になりたいと思った。そこで神経障害に苦しんでいた四五歳のとき、のちに「自己分析」と名がついたプロセスによって、自分の心理的前歴を分析してみることにした。これには夢の解釈も含まれていたが、ともかく実験は大成功だった。

当時フロイトは門下生たちに、神経症を治すには無意識という、人がまだほとんど手をつけていな

い部分を探るのがいいと教えていた。その不可解な部分に、トラウマの原因になる過酷な記憶がつまっているのだと。意識はそれを無視しようとするか、あるいは、心理学用語で言えば、「抑圧し」てしまおうとする。それがうまくいかないと神経症を発症する。

これをカギにしてフロイトは、心理的障害に迫ろうとした。障害は内的葛藤や周囲との軋轢を克服することができないときに生じる。トラウマを引き起こした過去の記憶をぬぐえなかったり、さらに悪いときには、そういう記憶に気づきさえしなかったりすると、その記憶は夢やそのほかの形になってあふれ出てくる。

この説ははげしい攻撃に遭った。しかし、あるパイオニア的グループはこの理論に惚れこんで、一九〇二年に水曜精神分析会なるものを立ちあげた。彼らは水曜日になるとウィーンのフロイトの家に集まった。治療法などいろんなことが話題に上ったが、なかでも人気があったのは、いわゆる「カウチ」の療法だった。

この療法では、患者はカウチ（寝椅子）に横になり、分析医は患者のうしろに座る。医者は患者に、大きな声で思うところを話せと、躊躇せずにうながす。患者はもちろんはじめは怖じ気づいている。いちばん言いたくないことを赤の他人に打ち明けなければならないのだ。このためらったり迷ったりは何カ月も何年も続くことがある（ことに患者が金持ちの場合は長くなりがちだ）。調子が出ると患者はすっかりその気になり、進んでどんどん話をする。しまいには医者を恋人扱いしてしまうことさえある。この情熱が医者に乗り移ったらエライことになる。もう治療どころの話ではない。こうなったらもう分析医を替えるしかない。さもなかったら、自分まで恋人気分になってしまった分析医が、こん

どは仲間に分析してもらうハメになる。

夢は無意識の願望の充足

夢のなかである願望が満たされないときわれわれは、自分では気がつかない別の願望を満たしている、とフロイトは言う。たとえばある女性患者の場合、彼女は夢のなかで、ディナー・パーティーをしたいと思った。けれども準備がじゅうぶんでなかったので、買いものに出かけた。でも日曜日だったから店はどこも閉まっていた。電話をしようとしたが、電話機も壊れていた。そこでディナー・パーティーはあきらめることにした。

これではフロイトの理論もお手あげだ。けれども彼は失望せずに、夢を見た前の日のことをできるだけくわしく話すようにと患者をうながした。するとこんどは肉屋をしている小太りの夫が出てきた。彼女は夫にまだホの字だった。夫はダイエットをして体重を減らしたいと漏らしていた。だから彼女はそんな夢を見たのだろうか？　いやそうではない。彼女は小太りのままの夫で満足だった。ほかに話すことはないですか？　もっと話してくれませんか！　ああ、そうそう。彼女はある友達を思いだした。夫はその友達にたびたび色目を使っていた。さいわいなことに友達は細身だった。夫は妻のような豊満な女が好みなのだ。「もう少し太らなきゃ」。友達は彼女にそう言っていた。これで謎が解けた！　夢のなかで妻は考えていたのだ。「あたしったら何してんだろ！　あの人が太ってあたしから夫を奪えるように、あの人をディナーに招こうとしていたんだわ！　とんでもない、ディナー・パーテ

ィーなんかやめにするわ」。

この患者の夢もきわどいが、まだそれほど手強いものではない。フロイトが集めた夢のなかにはやっかいなのが目白押しだった。そこで彼は考えた。夢に現れる無意識の願望には性的なものがかなり多い。それは、その願望がはしたないものであることを恥じて、意識がそれを無意識のなかに追い払ってしまうからなのだろう。それなら夢のなかでセックスがのさばっても不思議ではない。

セックスを理論の中核に据えようなどとは、当時まで誰ひとり考えなかった。セックスは、エピクロスから唯物論者のラ・メトリに至るまで、快楽論のなかにかいま見える程度だった。しかし無意識の領域が白日にさらされると、自我の分析においてセックスは市民権を獲得した。こうしてフロイトは、それまでは社会通念によって隠されていた自我の正体を明かしたのだ。彼によれば、性的願望が起こす現象は幼年期にすでにはじまっている。その種の現象は生後数カ月ですでに芽を出し、それから一生われわれについてまわる。なぜなら、精神の発達の過程できっぱりと克服できる願望などひとつとしてないからである。

こんなわけで、夢の解釈ではシンボルの説明がしばしば利用された。夢に現れるシンボルは、望ましくない現実を「より受けいれやすくした」ものにほかならない。しかしあるシンボルに性的性格があるかどうかは、どう見分けたらいいのだろうか。

フロイトがしばしばコケたのはここだった。彼はイメージにやたらに性的解釈を与えようとしたから、ライバルたちはここぞとばかりにはげしく攻撃した。患者の夢に錠と鍵が出てくると、フロイトはすかさずそこに卑猥な意味を見つけた。錠と鍵ならまだわかる。しかし階段を昇ったり高いところ

から飛んだりすることも性的行為のシンボルだと言われたら、誰でも首を傾げたくなる。飛ぶ夢に一種の不安がともなっていればなおさらだ。しかしフロイトからすれば、その不安こそ性衝動につきものの兆候なのだ。

フロイトはこんな拡大解釈を飽きずにしていたから、ただでさえ良識などには縁のないヴィトゲンシュタインまでが腹を立てた。フロイトにたてついたあげく、ほかならぬ彼までが、モラリストという名前をもらったほどだ。きっかけは、彼の姉がある絵を解釈してもらおうと、フロイトを訪れたことだった。フロイトの説明を聞いて姉は赤面し、それを知ったヴィトゲンシュタインはフロイトをけっして赦そうとしなかった。

意識にこそ目を向けよ

運命の皮肉か、人気絶頂の精神分析家たちの無意識に意識で揺さぶりをかけたのは、フロイトと同時代に同じ地に生まれた哲学者、エドムント・フッサールだった。フロイトの生まれは一八五六年。フッサールはその三年後に生まれている。死んだのはフロイトが一九三九年、フッサールはその一年前である。ふたりともユダヤ人で、ふたりとも現在チェコ共和国に属するモラヴィアの出身だ。そしてふたりともナチの迫害を受けた。フッサールは大学から追放され、フロイトのほうは一九三三年、ベルリンの広場で焚書に遭った。

しかし哲学史という観点から見ると、ふたりは出身だけでなくいろんなことでよく似ている。ふた

りとも、ソクラテスの「汝自身を知れ」の新ヴァージョンみたいなものだ。彼がはるかむかしに説いた自己省察を、ふたりはそれぞれ反対の方向で体現したと言っていい。無意識を探って汝自身を知れ、とフロイトは説いた。意識を覗いて汝自身を知れ、とフッサールは反論した。

フッサールは控えめで謹厳な男で、カントのように世間にはほとんど出ようとしなかった。そのためかどうか、彼にとってカントは、デカルトの次に好きな哲学者だった。しかし、考えたり夢見たりすることの好きだった彼がもともとやりたかったのは数学だった。だから、哲学者フランツ・ブレンターノとの出会いは衝撃的だった。もし彼と出会わなかったら哲学について書くことなどけっしてなかっただろう、と彼はのちに語っている。

フッサールはブレンターノから、「意識の志向性」という、核になる概念を引きだした。この「志向する」という言葉には、哲学の場合、一般の意味とは異なる意味がある。すなわち、思考あるいは行動がねらう(向かう)対象は、ねらうこと自体と分離しては存在しないという意味だ。たとえばある人が認識したテーブルは、その人がその色を見たり硬さを感じたりするかぎりにおいて、その人の認識の対象として存在する。志向的姿勢はしたがって、たんにあるものを認識することとは違う。なぜなら向かう対象が前提としてすでにあるからだ。

だからフッサールにとっては、認識について語ることなど無意味だったし、また一方では、お互いに関係しあおうとする対象について語ることも無意味だった。われわれが「対象」と言うときには、常に意識の対象をさしていて、「意識」と言うときには常に何かについての意識をさしている。それならフロイトがしたような、精神が意識しない中身について語ることなど、不可能ではないか。精神

のなかにすでに何かがあるなら、たとえわずかだったり混乱したりしていても、それについての意識がすでになければならないはずなのだ。

フッサールの人生で特記すべきは、彼の結婚生活でも、出世の遅れでも、キリスト教への転向でもない。ダントツなのは伝説にまでなった書き物の量である。出版されたのは二千ページに満たない。けれどもそれはごまんとある手稿のほんの一部でしかなかった。彼が死んだとき、残されたページはなんと四万ページに上った。フッサールは毎日少なくとも八時間をかけて、綿密な分析を繰り返していたのだ。概念の価値はいかなる程度の分析をしたかにかかっている。彼はそう信じて疑わなかった。

フロイトが精神分析学の父であるとすれば、フッサールは「現象学」と呼ばれる思潮の父だった。フッサールはカントのように、現象とは出現するものごとの現象であると考えた。しかしカントにとっては、現象は認識する主体の産物でしかなかった。カントにとっては見かけでしかなかった現象を、フッサールは本質そのものと受けとったのだ。

たとえばヴァイオリンの音を考えてみよう。カントは、それは空気の振動をわれわれの聴覚が捉えるときの現象だが、実際には空気の振動でしかないのだから、その現象はただの見かけにすぎないと考えた。フッサールのほうは、その音こそ本質であり音楽のモチーフであると考えた。なぜならその同じモチーフをほかの楽器で表わすことだってできるのだからと。

われわれの知覚は本質の直観であるとするこの理論は、フッサールの偉大なる発見だった。この理論を実証するために彼は、本質を見つけるためのテクニック、現象学的メソッドを考えだした。それは冷たい哲学ではなくて、「もの自体へ！」という熱き呼びかけだった。

「もの自体へ！」という熱き呼びかけ

フッサールははじめ、心理主義の誘惑に乗ろうとした。けれどもそれから気が変わった。心理学は個人の行動の偶然性に左右される経験的学問に見えたから、厳格な概念を表現するには向かないと判断したのだ。かといって、論理主義の誘いに乗ったわけでもなかった。彼は心理的現象と論理的原則のあいだの道を行き、それによって本質についての理論を練りあげようとした。

この新しい道をたどりながらフッサールは、それまでの図式を打破したかった。本質をつかむには論理学はあまりにも抽象的だ。フッサールは、長いこと他人が描写することで満足してきた人が、自分の目で確かめようとするようなふるまい方をした。本質を見てみたい人のようにして。

本質をつかむには、意識は偶然もささいな点も度外視しなければならない。ある教師が黒板に円のようなものを描いて、生徒たちにこれは何だと訊いたら、彼らはそれは円だとこたえるだろう。黒板に描かれたものがたとえ不完全な円であっても、生徒たちは円の幾何学的な本質を把握するのだ。本質を直観するとはこういうことなのだ。

本質の直観は、だから、ほとんど機械的に行われる。それなら現象学のメソッドはいったい何に役立つのだろうか。それはこうした直観の発生の仕方を説明してくれるし、したがって、さまざまなことを直観する際の手助けをしてくれる。フッサールが生徒たちと試したことは、植物学者がいたるところで草や木を集めるように、本質をあちこちで集めようとしたことのあかしでもあるのだ。

新しい説を立てると懐疑論者がかならず疑いの目を向ける。フッサールもたちまち弱点をつかまれた。本質とはどんなもので、どれだけあるのか？　本質はいたるところにあるというなら、どんなものにも本質があるということか？　木にもバスの切符にも？

こんな言葉に現象学者の誰もがたじろいだわけではなかった。それどころか彼らは、会議をしているあいだにも、ワイングラスの本質や、棚の置物の本質を見つけようとしていたらしい。フッサールはしかし、そんな彼らの応援はしなかった。それどころか、そんなことに精を出すのは、「挿絵つき現象学」に貢献することだと冷やかした。彼がそうしたことに背を向けたのは、彼のほうはまったく本質的な方法で本質を把握していたからだ。

フッサールの弟子たちが犯していた誤りは、いってみれば、プラトンのイデアの世界でイデアを数えあげようとした人々のそれに似ていた。しかし一方で弟子たちは、解決のむずかしい問題も明るみに出した。本質が数多くあってそれぞれがみな異なっていたら、大混乱が起きないだろうか？　フッサールはこの問題を、ものごとをさまざまな分野に分けることによって解決しようとした。たとえば、音楽の音の本質は天体の本質とは別の部類に入る、というように。

しかし最大の難問は別にあった。人々が街なかで周囲を見わたしたとき、見えるのは本質ごとに区分けされた一枚の地図ではない。周囲は地図のように見えるのではなく、ものごとの雑多な寄せ集めのように見えるのだ。フッサールはそれを承知していて、哲学者でいたければ常識には背を向けよ、としゃあしゃあと言っている。

彼はそのために、「判断中止」という変わった文句を考えついた。現象学者でいたければ、ちまた

の人々の世界など存在しようとしまいと気にかけるなというわけだ。真に大事なのは本質という宝なのだ。われわれが世界に意味を見いだせるとしたら、それは本質のおかげであり、意識はまさに、ものごとに意味を与えるために、重要な役目を果たしているのだ。

23　ハイデガー、サルトル、ブロッホ——実存主義からユートピアへ

死とはたんにまだ実現していないあることではないし、極小にまで縮まった最後の間隙でもない。死は何よりも、そこまで来た差し迫りなのだ。

マルティン・ハイデガー『存在と時間』第五〇節

人間存在は、何よりもまず、まったくの無なのだ。

ジャン＝ポール・サルトル『存在と無』第一部、第二章

あるものは真実ではありえない。

エルンスト・ブロッホ『哲学の根本問題』

哲学にもホラーめいたものはある。二〇世紀には、ホラー小説やゾンビの映画と同じように、哲学的ホラーにも人気があった。その担い手は実存主義という、人間存在を危うくする哲学だった。主役は創始者のハイデガーと、実存主義を一種のブームにまでしたサルトルである。

読者が落ちこまないように願いながら、実存主義に一章を割いてみよう。ここまでですでに、常識はずれならわんさと出てきているので、読者にはもう免疫ができているかもしれない。けれども念のために、消化剤になる哲学も最後に紹介することにしよう。そのメッセンジャーは、希望とユートピアを説く比類なき楽天家、ブロッホである。

ハイデガーが哲学界に躍りでたのはもう七〇年も前のことだが、彼の人気はいまだに衰えていない。しかしそれは驚くにあたらない。なにしろ彼は、哲学的な諸問題を根本的に見直すことにしたのだ。哲学に日常のあれこれを導入することによって、それらが抽象概念に劣らず大切であることを教えようとした。

そのうえ彼は、苦悩や死のような、存在そのものを脅かしそうな現象まで、魅力的な問題として取りあげた。しかし惜しいかな、彼が眺める世界はどこも暗黒で、愛や友情のあることを知らないかのようだった。彼の口から出るのは、死刑宣告のような言葉ばかりだったのだ。彼のサポーターは頭を抱え、ライバルたちは彼の言葉を不信や物笑いの種にした。

ハイデガーは苦悩を通して、存在は無であることを明かしたかった。ところが彼のライバルであるサルトルにとっては、人間は無ではなかった。サルトルの著作のなかでは、無はわがもの顔でのさばっている。それをまえにして人間は無防備で、彼のベストセラーが示すように、吐き気をもよおすことしかできない。一九五〇年代、彼の実存的不快感は、哲学者だけでなく、文学者、劇作家、俳優など、いろんな人々に伝染した。

大ぼら吹きか大哲学者か

実存主義を打ちたてたマルティン・ハイデガーの出現は、二〇世紀哲学のひとつの事件と言ってもいいほどだ。その理由の第一は彼の言葉遣いである。彼の言葉は斬新であるうえに出所も豊富だったから、ファンたちは奇蹟だと驚き、ライバルたちはペテン師だと悪たれを吐いた。理由の第二は論議を呼んだナチズムとの妥協である。彼ほど判断がまっぷたつに割れた哲学者もめずらしい。支持者はべたほめし、哲学に新たな道を開いた傑物だと賛美した。反対派のほうは、彼は偉ぶった口はきくが哲人らしい厳格さなどこれっぽっちもなく、おまけに政治的にも信用できないほら吹きだ、とくそみそにけなした。

しかしハイデガーとナチズムとの縁はそれほど深くはなかったし、長続きもしなかった。彼はナチの政権下でフライブルク大学の総長になったが、政権にたてつくふたりの同僚を大学から遠ざけることに反対したため、一年もしないうちに総長のポストを取りあげられた。このエピソードには「その後」もある。このときを境にして本の出版がむずかしくなり、授業中には官憲が数人、教室のなかをうろつくようになったのだ。いずれにしても、ナチが彼を敬遠していたことはまちがいない。彼はニヒリスト兼危険分子であると目されていた。おまけに終戦後は、ナチとのつながりが災いして、早めに年金生活に追いこまれるはめになった。

ハイデガーの本は、あるときは巧妙に、あるときは生き生きと書かれている。けれどもそうしたト

ーンの下にかいま見えるのは、変わらぬ暗い陰気なメッセージである。まるでかの黒い森に暗示されたような内容だが、じっさい彼が生まれたのも、一九七六年に八七歳で没したのも、どちらもその地方でのことだった。彼の哲学は無と死の哲学なのだ。学生のころから彼は、のちに自分が葬られることになる墓地を毎日歩いていた。彼が陰気なものを書くようになったのはそのためかもしれない。

ハイデガーの使う言葉はじつにユニークだ。むずかしい専門用語と日常用語が自由自在に入りまじる。信じがたいことだが、人間分析の書として一九二七年に出た彼の主著『存在と時間』には、「人間」という言葉はまるっきり出てこない。なぜかと言えば、「現存在」という彼特有の言葉遣いが人間を表わしているからなのだ。現存在とは世界に生きている存在ということだ。もうひとつ特記すべきは、彼は日常のごくありふれた言葉まで使ったということだ。おしゃべりやあら探しにまで注意を怠らなかった哲学者など、それまではひとりもいなかった。

ハイデガーが哲学の道を見つけたのは一八歳のときだった。大学に通いはじめたころ彼は、カトリック神学の講義を聴いていた。そのころひとりの聖職者が、彼にブレンターノの本をくれた。ブレンターノは例の、教皇の権威に疑問をもって、司祭職も大学教授の地位も捨てた人だ。その本はアリストテレスの形而上学についての本だった。こんなわけでブレンターノは、ふたりもの哲学者の運命を決めることになった。フッサールは彼から志向性を学び、ハイデガーは存在という古来のテーマを思いだした。このときからハイデガーは、哲学にむかしからたびたび登場する「存在」という言葉について考えはじめた。

ハイデガーは存在の意味を考えながら、大学のキャリアのほうもなおざりにはしなかった。運命の

第一歩は、一九一九年にフッサールの助手になったことだった。ドイツでは古くからのしきたりで、助手が恩師の後を継ぐことになっている。こうして一九二八年、彼はフッサールの後釜に座り、それを機に、形而上学の意味についての有名になった講義をした。

存在とはいったい何？

『存在と時間』が世に出たとき、哲学者たちの反応はむしろ冷ややかだった。明晰と良識を好むイギリス人は、世界に名のとどろく哲学雑誌『マインド』に酷評を載せた。彼らを震えあがらせたのは、ハイデガーの常識はずれの言葉遣いと、勝手気ままに言葉をつくって筋道も考えずに論を進めるやり方だった。

しかしドイツ人もイギリス人に負けずに眉をひそめた。彼らには、ハイデガーが師のフッサールを裏切っているように思えたのだ。ハイデガーが嫌ったのは、フッサールの論理が抽象的であることだった。彼の目には、師の思想は現実に根ざしたものではなく、ただ思想の形骸にすぎないように映った。ハイデガーは、フッサールは彼の抽象概念の唯一の生き残りである意識を過大評価していると考えた。ハイデガーはそこで、そのほかのものをよみがえらせようと考えたのだ。意識の持ち主である人間と、意識の対象の総体である世界とを。

しかし現象学的方法を生かすには、意識にかかわるものだけでなく、存在するものすべてに目を向けて、実存主義的な捉え方をしなければならない。そういう事情があったのにハイデガーは、一種の

裏切りになるかもしれないとは知りながら、フッサールに自著を献呈した。フッサールはその苦い毒を飲もうとせず、弟子との仲を断ち切った。

当初は冷ややかだったハイデガーの著作への評判は、まもなくフルスピードで上昇しはじめ、今日彼は、二〇世紀最大の哲学者として仰がれるまでになっている。伝統主義者ははじめから温かい目を向けていた。なぜならハイデガーは、哲学史のなかでも長い歴史を誇る、存在とは何か、という問題にふたたび光をあてたからだ。

はるかむかしにはパルメニデスが現実を「存在」と呼び、彼より科学的だったアリストテレスの不信を招いた。アリストテレスは『形而上学』のなかで、「存在についてはさまざまな言い方がある」と注意深く述べている。その状況はいまでも変わらない。「人である」「満足している」「小さな存在」など、表わし方はいろいろある。しかし「ある」はそれだけで何かを意味できるだろうか。「空は青い」「あの人は独り者である」とは言うけれど、「空はである」とは言わない。それならほかの述語をつけないで「ある」だけ取りあげても意味がないのだろうか?

ハイデガーはそうは考えなかった。彼は言う。存在については誰でもうわべだけは知っているが、その意味を本気で探ろうとする人はいない。しかしわれわれはどんなことについても、意味は考えずに浅く知ることもできるし、意味がわかるほど深く知ることもできるのだ。この区別が重要なのは、対象が生物の場合である。石なら、それは鉱物だ、でおしまいにすることもできる。しかし相手が動物になると、それは犬だとか猫だとかでおしまいにする人ばかりではない。彼らが存在するのは人間の友としてなのだろうかと、深い意味を問う人もいる。

犬は四つ足動物だと言う人は犬を知っている。しかし犬は人間の最良の友である、と言う人は、多かれ少なかれ犬を理解しているのだ。ハイデガーは知るだけでなく理解もしたかった。知ることは科学の仕事であり、理解することは哲学の仕事であると考えていたからだ。理解するために人間に求められる最大の努力とは、ほかならぬ存在の意味を見いだそうとすることなのだ。

さて人間だが、こういう問題を考えるのは人間だ。ハイデガーはミステリーでも解くつもりになってか、考えた。存在の意味を探りたかったら、まず人間からはじめるべきではないか。人間であるということには、どんな意味があるだろう。この問題が解ければ、存在一般についても、もっと深く知ることができるだろう。

そういうわけで、人間とは何かという振りだしに戻った。ハイデガーが出るまでは、人間をほかの動物と区別して、「理性ある動物」と定義されることが多かった。ほかの存在と区別するために、たとえばデカルトは、人間を非物質的な精神を備えたものだと考えた。フッサールはこの形而上学的概念を、志向性意識という心理学的概念に置き換えた。しかし人間存在とは人間をかこむ環境のなかにある、ということを疑う人はいなかった。

これにはじめて疑問を抱いたのがハイデガーで、彼は人間を、世界を土台にして、つまり生まれるまえからある環境を土台にして定義しようとした。魚にとって水のなかで生きることが不可欠であるように、人間にとっては世界のなかに存在することが欠かせないのだ。したがって人間存在は「世界内存在」であると言える。ハイデガーはこのことを、彼独特の言葉を使って、「現存在」と表現した。

生きることに意味はない

人間は世界に結びついているかぎり、どうしても世界によって条件づけられる。それと同時に、世界に生きるどんなものにも影響される。魚がプランクトンを栄養にしながら、ほかの魚と一緒に泳いだり暮らしたりするのと変わりない。ここに現象学についての彼の考え方がある。人間はものごとを道具として使いながらほかの人間とかかわりを持つ、という考え方だ。つまり、人間の行動は偶然的なものではなく、構造的なものだというわけだ。われわれはものごとやほかの人間への気遣いなしにはやっていけない。

しかし注意してほしいが、ハイデガーが他者への気遣いを語るときには、社会的なこと、あるいは経済的なことを言っているのではないし、愛情面に言及しているわけでもない。日常の事柄を語るときにも、彼は気遣いという言葉を、もっぱら哲学的な意味で使っている。「気遣い」という言葉は彼の思想の中核になっているのだ。

気遣いは、人間の状況を理解するのに大事なことだ。それは特権ではないし自慢の種になるものでもない。それどころかそれは、われわれひとりひとりの人生から離れることのない悲劇的特質なのだ。それに気がつかない場合もあるが、しかしいつもなんとなく不安なのはわかる。気苦労はひとつが消えればたちまち次のが現れるからだ。

人は死ぬまで不安に、つまり深く根を張った気遣いに捕らわれている。しかしそのことに、いつ気

づくのだろうか。死ぬまで気がつかない人もいる。せいぜいのところ運が悪いと感じる程度で、いやなことばかり起こるのは運が悪いからだと考えたりする。しかしなかには、深く考えたあげく、生きることにはどんな意味があるのだろうと自問する人もある。ここまで来た人は、突然目覚めたような気持になる。

その人を目覚めさせたのは、意識の声なのだ。この声は奇妙な声だ。目に見えない毒ガスのようにしめやかで、何も言わないし、言うべきことを持ってもいない。それならどうしてその人はその声に気づくのだろうか。ここでわれわれは度肝を抜かれてしまう。なんと、その声でその人に呼びかけているのは、その人自身なのだ！　この世に放りこまれた不条理に気づいたとたんに、その呼び声がその人自身のなかから聞こえてくる。「世界の無のなかに放りこまれた当惑から生まれた現存在に、いったい言うべき何を持つことができようか」とハイデガーは書いている。

そこでわれわれは苦悩しはじめる。苦悩とは気遣いの真の顔であり、もっともすなおな人間の感情なのだ。なぜならそれはわれわれが放りこまれた無のあかしであるからだ。われわれを苦悩させるのは、存在することとそのものであり、死ぬためだけに存在しなければならない世界にいることなのだ。ドイツ人らしい几帳面さでハイデガーは、苦悩を死への恐怖と混同させないように用心している。死ぬためだけに存在していると悟ることは、たんなる死への恐怖とは違うのだ。

死への恐怖の解毒剤になるものを、エピクロスのような多くの哲学者がすでに考えてきた。しかし死をひとつのできごとと考えるのは間違いで、死はわれわれの日々の歩みにぴったり寄りそっている。古代ローマ人が言ったように、われわれは実際には毎日死んでいるのだ。ある人が「生きることを止

めた」というのは皮相的な捉え方で、ある人が死去するということは、その存在がすでにひとつの死になっているときだけにあてはまることなのだ。苦悩とはこれを理解することだ。

それではいったいどうしたらいいのだろう？　打つべき手などひとつもない。ハイデガーもショーペンハウアーのように、自殺はつじつまの合わないことだと考えた。人は自殺することによって消え去るだろうが死ぬわけではない。死はその人が生まれたときからはじまっているからだ。

しかしハイデガーは、パラドックスめいてはいるが、苦悩の淵からの脱出法を考えだした。彼は言う。もし人が自分の本性を見きわめて、日常の雑事に気をそらされずに、勇気を持ってそれとまともに向きあえるなら、理解することができるだろう。自分に合ったいちばんの道は死ぬことであって、死を運命として受けいれれば、苦悩から解放されるのだということを。

しかしこれは苦悩の悪夢から逃れる道であって、苦悩そのものをなくす方法ではない。そこでハイデガーはまた対処法を考えた。もしおぼれそうになったら、何がなんでも助かろうとはしないで、エドガー・アラン・ポーのホラーよろしく、底に引きこもうとする渦に身を委せるといい。でもそうしたら結末はどうなってしまうのか？　そのことの意味を見いだせなくてもいいのか？　ここまでくるとハイデガーは、あたかも語れることばかりじゃないと言ったヴィトゲンシュタインの声が聞こえたかのように、黙ってしまった。

ハイデガーは、人間存在の意味については黙っているどころかじつに雄弁に語った。無のこだまは主著のいたるところで響いている。ところが人間存在の無が存在一般の意味まで明かすかどうかという点になると、ひとことも発しなかった。それはこれから書く後半部で話すと言ったけれど、後半部

は結局書かれなかった。

古代ローマ人の言葉に、無からは何も生まれない、というのがある。しかし二〇世紀の実存主義はこの言葉を覆した。ハイデガー流の無のなかから、重さにおいて引けをとらない、ジャン＝ポール・サルトルの同じたぐいの理論が誕生したのだ。その主著のタイトルはほかでもない『存在と無』。サルトルにとって、無の根源は世界に放りこまれたことにあるのではなく、特徴的な変身にあった。現実にある堅固なものごとも、意識の対象に変身するたびに、まるで日光にさらされたロウのように、溶けては消えてしまう。

世界についてのこのヴィジョンは、ハイデガーのそれに劣らず痛ましい。しかしサルトルはハイデガーのように陰気ではなかった。彼の気性は思想のなかにも現れている。

流行になった実存主義

サルトルは文学では大あたりだった。哲学だけで成功するのはむずかしい。しかし小説や戯曲では、彼の場合、拒みさえしなければノーベル賞まで獲得するところだった。小説『嘔吐』や『壁』は信じられないほどの部数が印刷された。これらの小説にサルトルは、陳腐でむなしい人生と落ちぶれた英雄たちを登場させた。こうして彼は、世間的に成功する一方で、哲学方面の著述にも大まじめに取り組んだ。大学ではフッサールの講義を聴き、一九四三年に出た主著『存在と無』で、フッサールやハイデガーの理論をさらに進めた。

サルトルはハイデガーから、存在のような哲学の抽象的概念は、存在のドラマの種としても使えることを教わった。ハイデガーは『存在と時間』のなかで、哲学の概念を利用して、人生とは死を待つことでしかないのだから、人間は生きていてもしょうがないと説いているのだ。存在と時間というふたつの概念は、サルトルの作品のなかでも重要な位置を占めている。しかしサルトルの見方は逆だった。存在は、むなしい世界をまえにしたときの精神のあり方ではない。人間は無ではなく、だからこそ人間を取り巻くものにしがみつこうとむなしい努力をしているのだ。

サルトルは周囲の羨望が災いして、大学教員の選考ではいつもハズレだった。ずっと臨時の「出向教員」みたいだったから、哲学は中学で教えなければならなかった。しかし戦後のフランスでは、イギリスのラッセルに並ぶ名声を享受した。彼もラッセルに劣らず勇敢で、極左翼の新聞を守るためにド・ゴール政権に反抗した。いつも筋を通したわけではなかったが、政治的には常に左翼だった。妥協嫌いの良識嫌いで、良識派のモラルなどクソ食らえとののしった。彼らは反逆者には焼きごてをあて、名誉回復など考えもしないのだと。

人間は無ではない

フッサールの名がとどろきはじめたころ、サルトルは彼の講義を聴こうとベルリンに駆けつけた。申し分ない講義に感激した彼は、自分も意識を思考の中心におくことにした。そんなわけで彼の初期の作品は、現象学がテーマになった。けれどもこれは長くは続かなかった。意識とはほんとうにフッ

サールが言うような宝箱であるのかを確認してみたくなったのだ。
その結果手にした発見は恐るべきものだった。意識とは強力な無化装置で、世界のものごとを呑みこんでは無にしてしまうブラックホールのようなものだったのだ。たとえば私がいま親友のピエトロの前にいるとする。しかしそれを意識したときには、ピエトロはもう生身の人間ではなくなって、私のイメージになり、思考が生みだした心象でしかなくなっている。物質的にはもはや無であるわけだ。
フッサールは、意識は知覚するものすべてを貯めこむすばらしいものだと言った。意識の底には思考やイメージや感情が蓄積されていて、われわれは好きなようにそれらを汲みあげることができるのだと。
サルトルの考えはこれとはまったく逆だった。ものごとを知るとは、それを心象の集まる貯蔵庫に収めることだ。しかし意識の貯蔵庫を開けたとき、そこに見いだすのは、フッサールが言うようなすばらしいものではない。収めたはずのものはもう蒸発してしまっているからだ。そんなにみごとに消去してしまう犯人は、意識という、あるいは想像力というたくましい奴だ。そいつは日ごろから、ものごとをたんなるイメージにせっせと変えてしまう。意識は人間存在を支えるどころか、愚かしいいたずらで崩壊させてしまうのだ。
主著でサルトルは、無について多くのページを割いている。しかし無という「ないもの」について語ることは、矛盾していないだろうか。サルトルはそのむずかしさを承知していた。それでも彼は、思想の冒険家のひとりとして、無について語るという究極のチャレンジをあえてした。
無について語ることはばかげたことではない、とサルトルは言う。そんなことは会話をしながら毎

日やっていることなのだ。「誰もいない」とか「何も知らない」とかしょっちゅう言っているではないか。「ない」という言葉は、われわれが最初に覚える言葉のひとつなのだ。しかし無がなければこの言葉も存在しようがない。

サルトルは、意識という無化装置はリンゴに巣くう虫のようなものだと考えた。はじめは仲良くしているが、そのうちにリンゴはかじられてしまう。たしかにいろいろなものごとの現実は、意識のなかではじめて意味を得る。しかしそれは、意識に変わってしまったとたんに、安定したものではなくなって、そのうちに消え去るはかないものになってしまう。

サルトルは、意識と流れる時間の関係についても、それまでの考え方を覆した。アウグスティヌスは時間を魂の延長だと考えた。サルトルは反対に、意識は過去現在未来という時間の次元の、しだいに消えていく流れだと解釈した。したがって無はただたんに意識の活動から生まれるものではなくて、意識そのものであるわけだ。本質だけを考えてみれば、意識は無ではないのだし、人間の本質は意識であるとすれば、人間も無ではなくなる。

サルトルによれば、このパラドックスめいた考察は難解な哲学をいじくりまわして出てきたものではなく、誰の頭にも浮かぶものだ。『嘔吐』のなかに彼のその思いが現れている。物語の主人公は地方の小さな町へ引っ越すのだが、そこで彼は、自分の意識の虜になる。意識は、美術館も、日曜日も、内気な知人のたわいない打ち明け話も、何もかも含めた周囲の現実のすべてを無意味にしてしまう。彼ははじめ、ある歴史研究を果たそうという意図を持っていた。しかし何もかも無であるという意識のために、自分の存在さえ嫌悪するようになる。そこで研究はあきらめ、本を書くことにして、その

なかで自分の症状を冷ややかに分析する。五〇年代には、ロカンタンという名のこのみじめな歴史家が、当時ブームになった実存主義の哲学者のあいだで、一種のシンボルにまでなった。

これを土台にして、自由についてのサルトルの理論が生まれた。ルソーは、人間の自由は一種の失われた楽園であると考えた。人間は生まれたときは自由だったのに、やがて奴隷になってしまったと。サルトルはこれを否定して、問題はそういうことではないと言った。今日われわれは何でも自由に選べる。しかしこれは特権だろうか？　それどころか刑罰みたいなものではないだろうか？　自由であるということは選べるということにはちがいない。しかし選ぶということは、いくつかの楽園のなかからひとつを選ぶことではなく、地獄のなかからひとつを選ぶということなのだ。

サルトルは六〇年代のはじめにマルキシズムに傾いたとき、この根深いペシミズムを捨てて社会問題に目を移した。しかしそうなるまで、他人の存在は彼の目には、個人の存在を脅かすものとして映っていた。われわれひとりひとりにとって、他人はわれわれのなかの無に映る物体なのだ。

これについてサルトルはうまい説明をしている。鍵穴から覗いたとき、覗いている私は見ている対象とひとつになってはいない。しかしながら、私が覗いているあいだに誰かが私を覗いているかもしれない。したがって覗いている私は主体だが、他人から見られているからにはひとつの物体でしかない。人間関係とはこんなものだ。相手を無化するまなざしの投げあいなのだ。意識のまなざしはギリシャ神話のメドゥーサのまなざしに似て、見るもののすべてを石に変えてしまう。

一九六〇年、実存主義を離れてマルキシズムに移ろうとしたときサルトルは、それまでのペシミズムとは正反対のユートピア思想についてもっとよく考えるべきだった。彼は実存主義に染まりすぎて

いたのだ。そのため、よりよき社会の到来を信じる真のユートピア哲学には、どうしてもなじむことができなかった。そんななかで、サルトルが転向する前の年一九五九年には、現代ユートピア思想を担うマルキシスト、エルンスト・ブロッホの記念すべき著作『希望の原理』が世に出ていた。

創造的な楽天家

ハイデガーと同世代の哲学者エルンスト・ブロッホは東ドイツに生まれた。当時の東ドイツは西側とは対照的に、生粋のマルキシズムで埋まっていた。そのうえブロッホは二〇世紀マルキシズム哲学を代表するルカーチとも友情を結んだ。ユダヤ系であったため、アメリカに亡命したり、下積みの暮らしを強いられたりした。その日暮らしの時代には皿洗いまで経験した。戦後はライプツィッヒに戻り、マルキシズム一色の雑誌を創刊した。しかし当時はもはや正統的なイデオロギーだけではやっていけなかった。ブロッホは修正主義を糾弾され、雑誌も発刊禁止の憂き目を見た。

そんなわけでブロッホは年金暮らしを強いられたが、ベルリンの壁ができてからは、たまたま西側にいたために、ライプツィッヒには戻らなかった。幸運は重なり、チュービンゲン大学に招かれて教授のポストを提供された。

ブロッホは本質についてのフッサールの理論にはうなずけなかった。フッサールは本質は変わらないという。ブロッホはそんなことはないと考えた。たとえば社会観念は人間関係の骨格だが、その本質がギリシャ時代から今日まで変わっていないと思ったら間違いだ。社会は人間関係の核なのだから、

その本質であることはたしかだが、社会の発展はまだ終わっているわけではないのだし、それどころか発展が終わることはありえない。だから社会を研究するということは、まだ終わっていないものを研究するということなのだ。

ブロッホはまた、本質についてのハイデガーの悲観的な分析にも首を傾げた。ハイデガーの言うニヒリズムとは、現実を解釈することではなくて、現実への解釈を放棄するということだ。ニヒリストはまだ戦わないうちから戦いを放棄しようというわけだ。ブロッホはそれは間違っていると言った。世界とは救済の可能性を試してみるところであり、できるかできないかやってみようとするところなのだ。まだ何もしていないうちから白旗をあげるなんて、そんなことがどうしてできようか。

人間の中枢には意識があることはブロッホも否定しなかった。しかしそれはフッサールが言うような変わらない本質の隠れ家でも、ハイデガーの言う苦悩でもない。われわれは、まだすべてが起こってしまったわけではないこと、したがっていまの現実はまだ部分的な真実でしかないことを認識しなければならない。彼の『哲学の根本問題』にある、「あるものは真実ではありえない」という言葉の意味はそういうことだ。こういう彼の立場は、実存主義者でもニヒリストでもなく、根っからの未来思想家としての立場だった。これってユートピア？　たしかにそうだが、ブロッホのユートピアは創造的知性への刺激になることをめざしていた。

ユートピア思想は活力のもと

ハイデガーもサルトルも、自分は人間とは何かを知っていると信じていた。ブロッホも彼らに倣って、人間とは何かを考えた。出た結論は、人間とは完成されたものではなくて、いま成りつつあるものだということだった。人間はどこから見ても未完成だ。ただの一世紀も同じではなく、しかも変化のスピードはますます高まっている。だから、人間とは生まれつき悪くできているとか、利益を追求するようにできているとか、決めつけてしまってはまずいのだ。生まれてから死ぬまでだって、変わらないなどと誰に言えようか。

ブロッホはしかしこんな考えを練り直して、人間とは問題であり、謎であると考えるようになった。目を突いた一眼巨人のポリュペモスにおまえは誰かと訊かれて、オデュッセウスは「私は誰でもないという者だ」とこたえる。このオデュッセウスが言ったことが、少なくともはじめは、誰でも自分自身について言える。ブロッホはそう考えた。すでにヘーゲルが言ったように、存在するものは、絶え間なく変化しているかぎりにおいて存在できるのだ。

ヘーゲルは、事実はおのずから矛盾している、と教えた。彼は著書『精神現象学』に、「夜の時間は、その場で記録されても、その真実は翌日の昼にはもう気が抜けてしまっている」と書いている。常識からすれば事実ほど明らかなものはないが、しかしその事実そのものが、自身の矛盾に気づいていない。もしそうなら、ドイツの理想主義者たちが言うように、「事実にとっては災難だ！」という

ことになる。これが、「あるものは真実ではありえない」という、ブロッホのパラドックスめいた言葉の真意なのだ。

しかし未来を説く近代の哲学者ヘーゲルも、ブロッホからすれば論理が一貫してはいなかった。なぜならヘーゲルの言う生成の途上にある現実は、全体から見れば、結局のところ安定した形に落ち着くからである。ブロッホは言う。過去の歴史を学ぶことは現在と将来の理解につながる、というヘーゲルの考えは錯覚でしかない。過去が未来の理解への助けになるのではなく、未来が過去に光をあてるのだ。ユートピアを信じるということはまさにこういうことなのだ。

ブロッホにとってユートピアとは、希望に燃える人が眺める地平線だった。その地平線は、社会に内在する可能性そのもののなかにある。ブロッホは彼の記念碑的な大作『希望の原理』のなかで、文化と社会の全史を通したヴィジョンを述べ、——砂上の楼閣を築くに等しいほど無邪気に見えなくもないけれど——文化や社会のなかにユートピア的緊張があると明言している。思想でも音楽でも宗教的預言でも、飛びぬけた現象を起こすのはまさにそうした緊張なのだと。

そんなわけでブロッホは、実存主義のペシミズムとはまさに裏腹の理論を説いた。実存主義者が世界の不合理を見いだしたところに、ブロッホは希望のサインを見いだしたのだ。ここ数十年の哲学の大勢は、この両極のあいだを揺れ動いている。いうまでもなく、現代思想のすべてがこの両極の緊張に収まるわけではない。しかしこの緊張が底流になっていることは否定できない。

おしまいに

哲学者の名言をたどるうちに、思想のなかでもとりわけ優れたもののリストができあがった。最近の言葉のほうがむかしの言葉より取っつきやすい、というわけではない。思想も絵画と同じように、古くなることがないからだ。

ゲーテの『ファウスト』に出てくるメフィストフェレスは、若者をうまくそそのかし、じつに巧妙な手口で哲学の世界に誘い入れようとする。彼は耳打ちする。哲学は奇蹟を起こしてくれる。ある問題をまえにしてどうしたらいいかわからなくなると、哲学がひょいと現れて、短い言葉をささやいてくれる。それを使えば問題を難なく避けることができるし、それで解決したつもりにもなれると。しかし、もしメフィストフェレスの言うことがほんとうなら、哲学は遊びみたいなものでしかないし、そのうえ大しておもしろい遊びでもない。

哲学者の寸言は問題を避けるための逃げ道ではなく、その反対に、多様な解決法への道を開いてくれるものなのだ。プラトンのイデアを思いだしてみよう。「美」は美しいもの以前にある、とプラトンは言った。これを聞いたからと言って、あるものが美しいかどうかを判断するためのカギを握ったわけではない。しかし判断へ向かう道筋はできたのだ。

いうまでもなく、究極の言葉や卓越した箴言があるわけではない。この本を最後まで読んだら問題

の解決になる言葉が見つかるだろうと、そう期待していたなら、失望したにちがいない。哲学者は神さまではないのだから、そんな言葉はないし、これからだって出てこないだろう。しかしここに集めた哲学者たちの言葉に魅了された人は、それらの言葉を手放すことなく、何か問題にぶつかるたびに、解決の糸口になりそうな言葉を探そうとするかもしれない。

哲学的箴言は、二〇世紀の終わりとともに出尽くしたわけではない。五〇年前を出発点にしてこのような本を書くこともできるだろう。箴言のニューフェイスならいますぐにでも頭に浮かぶ。世紀末を彩るピカイチは、頭はコンピューターである、というものだ。いま活躍している哲学の巨人たちは、人工頭脳が人間の頭脳にどこまで迫れるかについて、白熱の議論をかわしている。

自分の考えを短い言葉で表わしたいという衝動は、人間が生まれつき持っているものだ。これに気づいたのはアリストテレスで、われわれのあらゆる思考の根底には、主部と動詞と述部を持った基本的表現がある、と彼は言った。基本となる言葉がなければ哲学者だって道に迷ってしまうだろうし、方向もなくあちこちにひっぱりまわされる読者のほうはなおさらである。この本に登場した哲学者の多くの言葉のなかから、ガイドになるものがひとつでも見つかることを願っている。

訳者あとがき

この本は大まじめでも不まじめでもない、小まじめな哲学史である。各章の冒頭に、哲学者の思想をひとことで表現した寸言がある。これをカギにして私たちは、哲学の深遠な森に分け入るのだが、その足どりはなんとも軽やかだ。

この本には、「人間としての」哲学者が、豊富なエピソードをまじえてじつに身近に描かれている。哲学者と聞いたら、さぞかし気むずかしくいかめしい人だろうと考えたくなるが、じっさいは大方が子どもみたいだから、子どものやらかすようなヘマがあとからあとから出てきて、つい笑ってしまう。どの人も、まるで近所のちょっととぼけたおじさんみたいなのだ。そんなふうに感じるのは、書き方に、たっぷりのユーモアというスパイスが利いているからかもしれない。

純粋哲学をこれほどおもしろいと感じたのは、私の場合ははじめてだけれど、なにしろ哲学者は変人揃いなので、その人間を描いたら、おもしろいものにならないほうが不思議なのかもしれない。油桶を風呂がわりにしてさんざ使ったあげく、その桶を売って儲けたというアリストテレス。樽を住まいにして極楽気分で暮らしていたというキニク学派のディオゲネス。道でいきなり馬に抱きついたというニーチェ。

しかし、驚くほど天才的な思想がダントツの変人から生まれるとはかぎらないし、突拍子もない変

人が比類なき天才だともかぎらない。哲学者はメシの種になどどう考えたってなりそうもないことを、毎日このうえなく真剣に考え、世の中の動きなどには風馬牛だという（今日もそうかどうかは知らないけれど）。ライプニッツが哲学よりレンズ磨きでお金を稼いだという話には、さもあろうと納得してしまう。しかし変人で鳴らす哲学者がひとりでも身近にいたらたまったものではないだろう。じっさい家族や友人知人まで、ときにはとんでもない騒ぎに巻きこまれてしまうことも珍しくなかったらしい。

変人といえば、女性にも変人はけっこういるのに、この本には女性の哲学者がひとりも出てこない。まるで逆はかならずしも真ならずの証明みたいだ。ついでに言えば、哲学者には女嫌いが少なくないそうで、そのためか本書にも色っぽい話はほとんど出てこない。哲学者にはまともな恋愛はできなくて、ニーチェの女性関係のように、少なからずピントがはずれていたということだろうか。

しかし哲学の思想を発明するにも、芸術の創作に劣らぬ空想力は必要なはずだ。論理的能力とともに想像力や空想力にも恵まれていなければ、哲学は生まれてこないだろう。優れた思想には豊かな空想力がつきものなのだ。物理学者のポール・ディラックは、理論は美しくなければ真理ではありえないと言ったそうだが、これなどは哲学者が同時に芸術家でもあることのあかしではないだろうか。それならどうして恋愛経験が乏しいの？　と、ちょっと首を傾げたくなる。もしかしたら、変人ぶりに閉口して、女性がさっさと逃げだしてしまうからなのかもしれない。

この本には驚くことがいっぱい出てくるが、何十人という哲学者の頭を去来した思想を読んでいるうちに、人間はこれほど多様な考え方ができるのかと、つくづく感心してしまった。数学者としての

イメージが強かったピタゴラスが、それとは正反対の神秘主義者でもあったとは、人間とはなんと神秘的な生き物であることだろう。

それから、哲学者のなかではもっともまっとうで恵まれた一生を送ったあのプラトンでさえ、「生きるくらいなら生まれてこないほうがいい」などと言っているのにも驚いた。だから彼は死後の世界や天上の世界のことばかり考えていたのだろうか。

プラトンといえば、彼はけっこうハンサムで、ロバート・レッドフォード並み（?）だったらしい。哲学者は言うことがかっこよければいいようなものだけれど、容姿もやっぱり気になって、ソクラテスよりはヴィトゲンシュタインあたりにささやいてもらうほうが、言うことに納得してしまいそうだ。

しかしソクラテスの「汝自身を知れ」は、むかしからいままで変わらぬテーマとして生きのびていることを思うと、これが哲学の基本なのだと、改めて教えられたような気がする。

哲学の本はちまたにあふれているけれど、これほど読みやすく書かれた西洋哲学の通史は、それほど多くはないと思う。著者のピエトロ・エマヌエーレは、一九四八年パレルモの生まれ。イタリア南部メッシーナの大学で哲学を教えながら、数多くの専門書を執筆してきた。最近は哲学の普及を図るために、一般向けの平易な本に力を入れはじめたそうだ。

翻訳にあたっては、日本の読者ができるだけ気軽に楽しく読めるように、内容の三分の一ほどを割愛した。各章の冒頭にある寸言も、原文よりかなり短くなっている。哲学者を選ぶに際しては、なるべく知名度の高い人、人間的におもしろい人に焦点をあてた。寸言のほうも、読みやすいもの、わかりやすいものに、いくらか入れ替えている。こうした操作の過程で、著者からは、多くの助言と協力

をいただいた。

著者は最後に、哲学者の数多くの言葉のなかからガイドになるものが見つかるといい、と書いている。私はさらに欲張って、読者の方々が、ひいきの哲学者、相性のいい哲学者をひとりでも見つけて、その人をいっそう深く知ろうとしてくださったらうれしい。そうしたら、心の友がひとりふえたような、豊かな気持になれると思う。

最後に、本書の編集にあたって、心底楽しみながらお仕事をしてくださった、中央公論新社の山本春秋さんに、心からお礼を申しあげます。

二〇〇五年初秋

泉　典子

装幀　南　伸坊

ピエトロ・エマヌエーレ（Pietro Emanuele）
1948年、イタリアのパレルモに生まれる。現在はメッシーナ大学正教授。長年哲学の研究と教育に携わってきたが、この10年ほどは哲学の普及にも力を注いでいる。代表的な専門書としては『哲学の歴史』（1989）、『分析の神話——アリストテレスからローティまで』（1993）などがあり、一般向けの代表作には『哲学というすばらしい世界』（1996）、『カントの百ターレル』（2003）などがある（いずれも未邦訳）。

泉 典子（いずみ・のりこ）
東京外国語大学大学院修士課程修了。訳書にフランチェスコ・アルベローニ『エロティシズム』、ピーノ・アプリーレ『ヘマな奴ほど名を残す』などがある。

この哲学者を見よ
——名言でたどる西洋哲学史

二〇〇五年一〇月一〇日　初版発行

著者　ピエトロ・エマヌエーレ
訳者　泉　典子
発行者　早川準一
発行所　中央公論新社
〒一〇四-八三二〇
東京都中央区京橋二-八-七
電話　販売部　〇三-三五六三-一四三一
　　　編集部　〇三-三五六三-三六六四
URL http://www.chuko.co.jp/

印刷　三晃印刷（本文）
　　　大熊整美堂（カバー・表紙・扉）
製本　大口製本印刷

Published by CHUOKORON-SHINSHA, INC.
Printed in Japan　ISBN4-12-003675-8 C0010
定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。